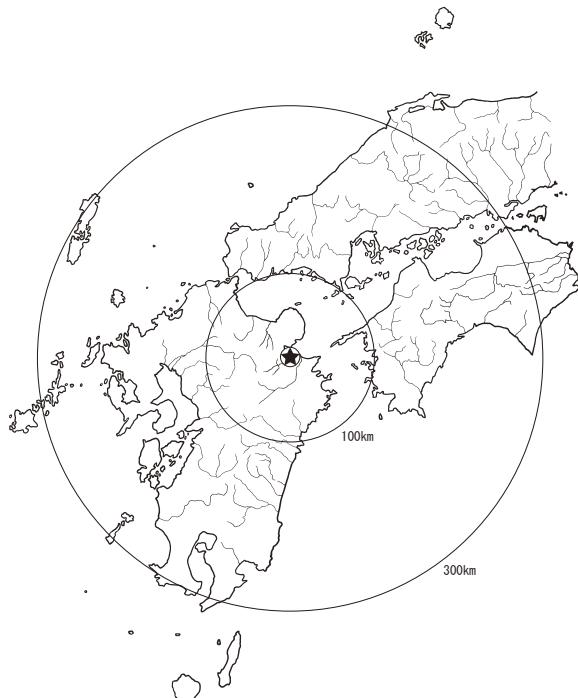


府内城・城下町跡 5

第 16 次調査報告書

大分市保健所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査



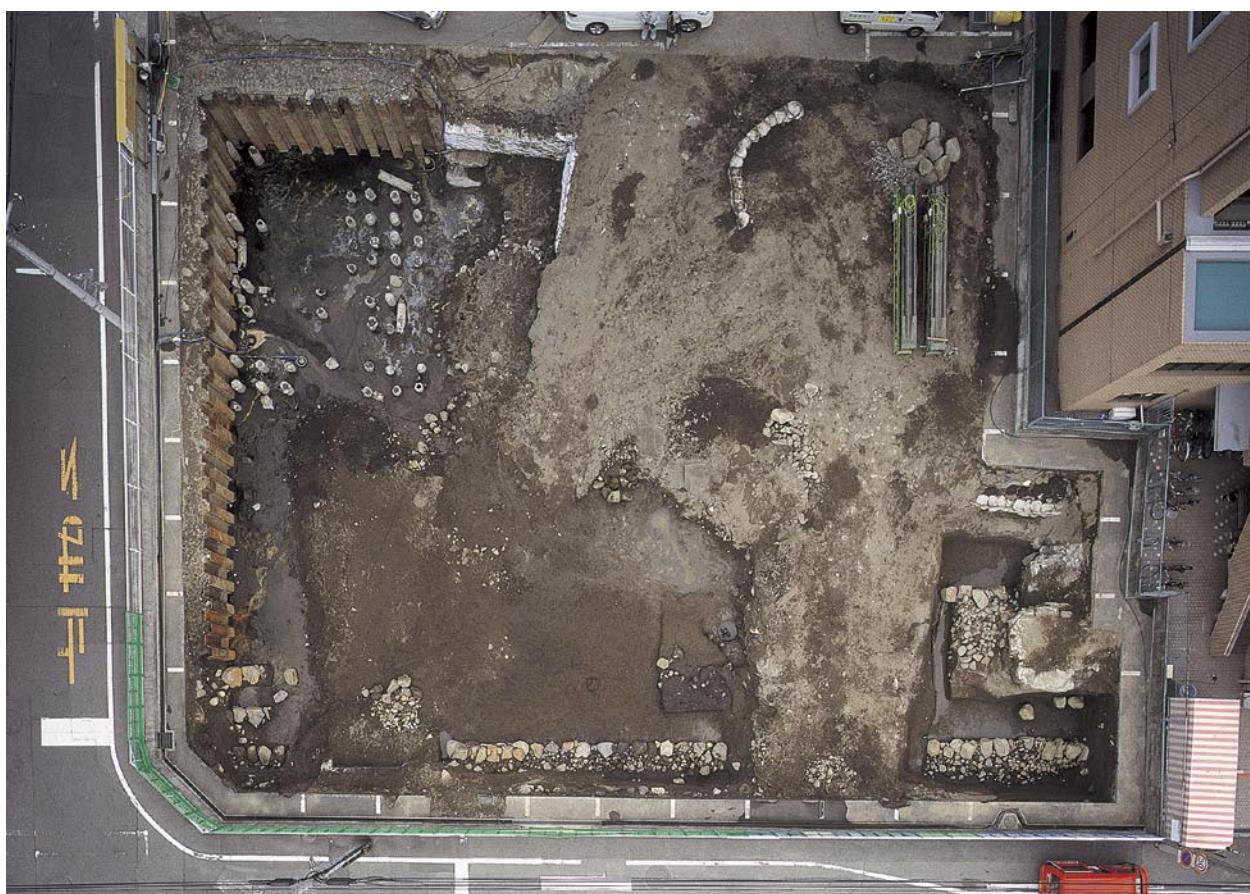
2008

大分市教育委員会

巻頭写真図版 1



府内城・城下町跡遠景空中写真(撮影:2006年2月18日)



府内城・城下町跡第16次調査区全景空中写真(撮影:2006年3月8日)

発掘調査がほぼ完了した時点。近世絵図に描かれたものよりも古い段階の石垣群が検出されている。

巻頭写真図版 2



SV104 全景 (北東から)



SV112 全景 (北から)

序 文

本書は、大分市保健所を建設に伴って実施した府内城・城下町跡第16次調査の報告書です。

当該調査区は、昭和62年に刊行された大分市史付図「府内城下の復原図」によると、府内城北丸跡にあたり、調査の結果、想定どおり北丸の石垣や堀、北丸内部の井戸などが発見されました。しかしながら、「復原図」の元となった絵図が描かれる以前の、府内城築城当初のものと思われる古い石垣が発見され、これまで知られていなかつた府内城の姿を垣間見ることもできました。現在も城址公園として市民の皆様に親しまれている府内城が意外な変遷をたどっていたことをあとづける、貴重な資料になると思われます。

本書が、広く市民の皆様に活用され、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となれば、望外の喜びであります。

最後になりましたが、ご指導いただきました諸先生方、ご協力いただいた諸機関各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

大分市教育委員会
教育長 足立一馬

例言・凡例

1 本書は、大分市教育委員会が大分市保健所建設整備事業に伴って平成 17 年度に実施した府内城・城下町跡第 16 次発掘調査の正式報告書である。

2 本書に使用した遺構実測図、遺構写真は以下に示す担当者が作成・撮影したものである。

高畠豊（大分市教育委員会）、佐藤孝則・森岡晃司（大分市教育委員会嘱託）、植田高夫（大分市教育委員会臨時職員）

3 石垣の実測図については、以下のように作成した。

SV101・102・105・109（平面・立面）、SV104（平面）：有限会社九州埋蔵文化財リサーチに委託し実測。

SV104（立面）：株式会社九州航空に委託し、写真測量図化。

SV101・104（解体時平面）、SV110・111（立面）、SV112・113（平面・立面）：大分市遺跡測量システムを使用し、工藤慎吾（大分市臨時職員）及び高畠が作成。

SV110・111（平面）：国際航業株式会社が RC ヘリコプターで撮影した測量用空中写真を使用して、株式会社九州航空が平成 18 年度に図化した。

4 空中写真撮影については下記のように委託して 2 回実施した。1 回目は記録撮影、2 回目は写真測量用の写真撮影である。

1 回目（平成 18 年 2 月 18 日）株式会社九州航空

2 回目（平成 18 年 3 月 9 日）国際航業株式会社

5 調査の際には平面直角座標 2 系（世界測地系）の座標値を実測・測量の基準として使用した。

6 本書で使用する方位は全て座標北（G.N.）である。

7 本書作成に至るまでの遺物整理作業（遺物の注記・復元・実測）および遺物・遺構図版作成作業（トレース・版組等）は担当職員のほか、次に記す大分市教育委員会嘱託職員並びに大分市・大分市教育委員会臨時職員により実施されたものである。（順不同）

井口あけみ、古田陽、上原翔平（以上大分市教育委員会嘱託職員）

野地川賢次、中山光歩、日野広、佐田智子、工藤慎吾、河野裕子、宮本博子、森香奈、田崎由美子、平島直子、姫野久恵、神田陽子、田畠里美

（以上大分市・大分市教育委員会臨時職員）

8 石垣石材の鑑定については、京都大学理学部付属地球物理学研究センター 竹村恵二助教授に依頼した。また、野田雅之氏からは有益なご教示をいただいた。

9 出土遺物の写真撮影は、有限会社フォトワーク大分に委託した。

10 出土遺物および調査の記録・資料は大分市教育委員会文化財資料室に保管している。

11 本書の執筆は高畠が行った。

12 本書の編集・構成は、上原の補佐に拠りながら、高畠が行った。

13 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SD：堀、SE：井戸跡、SV：石垣・石組、SF：石列、SX：性格不明遺構を表す。

府内城・城下町跡報告書の書名について

大分市教育委員会で発掘調査を実施した府内城・城下町跡の報告書については、今後も公共事業ないし民間開発に伴う発掘調査が実施され、継続的に報告書が刊行される見通しであるため、本書以降は報告書名を遺跡名 + 刊行順番号とする。

これに伴い、平成 18 年度までに既刊の報告書 4 冊には下記のように刊行順番号を振るものとし、本書の書名は「府内城・城下町跡 5」とする。

府内城・城下町跡 1…大分市教育委員会 2000 『府内城・城下町跡第 13 次調査概報』

府内城・城下町跡 2…大分市教育委員会 2003 『府内城・城下町跡 - 第 14 次調査報告書 -』

府内城・城下町跡 3…大分市教育委員会 2003 『府内城・城下町跡 第 12 次調査報告書』

府内城・城下町跡 4…大分市教育委員会 2004 『府内城・城下町遺跡 - 第 15 次調査報告書 -』

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	5
第3章 調査の経過	11
第4章 調査の成果	15
第1節 調査の概要	15
第2節 府内城北丸に伴う外郭遺構と出土遺物	16
堀 (SD)	16
SD100	16
石垣 (SV)	26
SV101	26
SV102	30
SV109	32
第3節 府内城北丸内部の遺構と出土遺物	32
石列 (SF)	32
SF001 および周辺整地層	32
井戸 (SE)	36
SE108	36
大甕埋設遺構 (SX) および関連遺構	37
SX010・SK053・SK054	37
土坑 (SK)	41
SK021・SK024	41
SK026	42
SK028	44
SK031・SK045・SK029	46
SK036	50
SK037	50
SK039	54
SK052	55
SK015	55

SK019・SK020	55
SK022	56
SK025	56
SK030	57
SK041	58
SK044	58
SK038	58
その他の主要出土遺物	59
SO05 出土遺物	60

第4節 府内城築城直後の石垣および関連遺構と出土遺物	61
SV104	61
SV111	69
SV110	70
SV112	73
SV113	74
SV105・SV107	77
第5章 まとめ	82

遺物観察表

写真図版

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (1/300000)	5
第2図 周辺遺跡位置図 (1/40000)	6
第3図 府内藩及び他藩領領域図	7
第4図 伝慶長絵図 (部分)	8
第5図 正保絵図 (部分)	8
第6図 府内城・城下町復原図及び調査地点位置図 (1/8000)	8
第7図 調査対象地区位置図 (1/2500)	11
第8図 府内城における調査対象地区の位置 (1/2500)	11
第9図 確認調査・予備調査位置図 (1/500)	12
第10図 確認調査 1T	12
第11図 確認調査 3T	12
第12図 予備調査時石垣・旧建物基礎検出状況	12

第13図 予備調査時調査区南東端の状況	12
第14図 本調査進捗状況図（1/600）	13
第15図 第1次本調査調査状況	13
第16図 旧建物基礎撤去工事	13
第17図 第2次本調査時堀調査状況	13
第18図 第2次本調査石垣検出状況	13
第19図 調査区内土層模式図	16
第20図 府内城・城下町跡第16次調査検出遺構配置図（1/100）	17・18
第21図 SD100・SV101 平面・立面・土層立面図（1/80）	19・20
第22図 SD100 出土遺物1（1/4）	22
第23図 SD100 出土遺物2（1/4）	23
第24図 SD100 出土遺物3（1/4）	24
第25図 SD100 出土木製品（1/4）	25
第26図 SV101 築石の重なり・石材構成（1/80）	27・28
第27図 SV101 出土遺物1（1/4・1/6）	29
第28図 SV101 出土遺物2（1/6）	30
第29図 SV102 平面・立面・土層断面図（1/40）	31
第30図 SV102 出土遺物（1/4）	31
第31図 SV109 平面・断面図（1/40）	32
第32図 SV109 出土遺物（1/4）	32
第33図 北丸内部の遺構配置図（1/100）	33
第34図 SF001 平面・断面図（1/40）	34
第35図 SF001 東壁面土層図（1/60）	34
第36図 SO04 出土遺物（1/4）	35
第37図 SO14 出土遺物（1/4、1/6）	36
第38図 SE108 平面・断面図（1/40）	36
第39図 SE108 出土遺物（1/4）	37
第40図 SX010・SK053・SK054 平面・土層断面図（1/40）	37
第41図 SX010 下層遺物出土状況図（1/40）	38
第42図 SX010 出土遺物1（1/4）	39
第43図 SX010 出土遺物2（1/4・1/6）	40
第44図 SX010 下層・SX052 出土遺物（1/4）	41
第45図 SK021・SK024 平面・断面図（1/40）	41
第46図 SK026 平面・断面図（1/40）	41
第47図 SK021・SK024 出土遺物（1/4）	42
第48図 SK026 出土遺物1（1/4）	43
第49図 SK026 出土遺物2（1/4・1/8）	44
第50図 SK028 平面・断面図（1/40）	44
第51図 SK028 出土遺物1（1/4）	45

第 52 図 SK028 出土遺物 2 (1/4)	46
第 53 図 SK031・SK029・SK045 平面・断面・土層断面図 (1/40)	47
第 54 図 SK031 出土遺物 1 (1/4)	48
第 55 図 SK031 出土遺物 2 (1/4)	49
第 56 図 SK045・SK029 出土遺物 (1/4)	49
第 57 図 SK036 平面・断面・土層断面図 (1/40)	50
第 58 図 SK036 平面・断面・土層断面図 (1/40)	50
第 59 図 SK036 出土遺物 (1/4)	51
第 60 図 SK037 出土遺物 1 (1/4)	52
第 61 図 SK037 出土遺物 2 (1/4)	53
第 62 図 SK039 平面・断面図 (1/40)	54
第 63 図 SK039 出土遺物 (1/4)	54
第 64 図 SK052 平面・断面図 (1/40)	55
第 65 図 SK015 平面・断面図 (1/30)	55
第 66 図 SK019・SK020 平面・断面図 (1/40)	55
第 67 図 SK019・SK020・SK022 出土遺物 (1/4)	56
第 68 図 SK022 平面・断面図 (1/30)	56
第 69 図 SK025 平面・断面図 (1/40)	57
第 70 図 SK025 出土遺物 (1/4)	57
第 71 図 SK030 平面・断面図 (1/30)	58
第 72 図 SK041 平面・断面図 (1/30)	58
第 73 図 SK044 平面・断面図 (1/30)	58
第 74 図 SK030・SK041・SK044 出土遺物 (1/4)	59
第 75 図 SK038 出土遺物 (1/4)	59
第 76 図 その他近世遺構主要出土遺物 (1/4)	60
第 77 図 S005 出土遺物 (1/4)	61
第 78 図 SV104 平面・立面・土層断面図および南側整地層土層断面図 (1/60)	62
第 79 図 北丸内部遺構群完掘時の状況 (東から)	63
第 80 図 SV104 検出時の状況 (北東から)	63
第 81 図 SV104 北側整地層を掘下げた状況 (北東から)	63
第 82 図 SV104 全体検出状況 (北から)	63
第 83 図 SV104 の築石の重なり・石材 (1/60)	63
第 84 図 SV104 出土遺物 1 (1/4)	65
第 85 図 SV104 出土遺物 2 (1/4・1/6)	66
第 86 図 SV104 出土遺物 3 (1/6)	67
第 87 図 SV104 南整地層出土遺物 (1/4)	68
第 88 図 SV111 平面・立面・土層断面図 (1/40)	69
第 89 図 SV111 石垣崩落状況 (北東から)	70
第 90 図 SV111 出土遺物 (1/6)	70

第91図 SV110 平面・立面・土層断面図（1／60）	71
第92図 第1次本調査時石組み確認状況（北から）	71
第93図 SV110 崩落状況（西から）	71
第94図 SV110 出土遺物（1/4）・（1/6）	72
第95図 SV112 検出状況（北から）	73
第96図 SV112 平面・断面図（1/60）	73
第97図 SV112 出土遺物（1/4）	74
第98図 SV113 平面・断面図（1/40）	74
第99図 SV113 出土遺物（1/4）・（1/6）	74
第100図 SV110・112・113 平面・立面図（1/80）	75・76
第101図 SV104・111 平面・立面図（1/80）	75・76
第102図 SV105・SV107 検出状況（北から）	77
第103図 SV105・107 平面・断面図（1/60）	78
第104図 SV105 北石垣想定図（1/60）	79
第105図 SV104 北整地層出土遺物（1/4・1/6）	80
第106図 京都公家町出土の胡麻煎り陶器（1/4）	80
第107図 遺構変遷図1（1/400）	82
第108図 遺構変遷図2（1/400）	83
第109図 遊焉館絵図	84
第110図 第3次・第16次位置関係図（1/1000）	85
第111図 「府内城下の復原図」における調査地点の位置図（1/1000）	86
第112図 第1段階の推定縄張り（1/2000）	87
第113図 第2段階の推定縄張り（1/2000）	87
第114図 第3段階の推定縄張り（1/2000）	87
第115図 第4段階の推定縄張り（1/2000）	88
第116図 織豊系城郭の編年	88

表目次

第1表 府内城・城下町跡調査一覧表	9
-------------------	---

写真図版目次

巻頭写真図版1 府内城・城下町跡遠景空中写真（撮影：2006年2月18日） 府内城・城下町跡第16次調査区全景空中写真 (撮影：2006年3月8日)	巻頭写真図版2 SV104 全景（北東から） SV112 全景（北から） 写真図版1 調査区空中写真 府内城・城下町跡全景空中写真
---	---

(撮影：2006年2月18日)

第16次調査区全景空中写真

(撮影：2006年2月18日)

写真図版2

壠SD100および石垣SV101（北から）

SD100およびSV101,SV104,SV105（北西から）

写真図版3

SV101 全景（南西から）

SV101 北端部（西から）

SV101 南端部（北西から）

SV101 築石解体状況（撮影：2006年2月24日）

SV101 築石1段目撤去後

写真図版4

SV104-SV101 東西断面（第21図に対応）

SD100 掘下げ状況

SD100 漆器蓋（25-64）出土状況

SD100 漆器椀（25-66）出土状況

SD100 漆器椀（25-68）出土状況

SD100 漆器椀（25-69）出土状況

SD100 肥前陶器（22-6）出土状況

SD100 焼塩壺（22-20）出土状況

SD100 鬼瓦（23-42）出土状況

SD100 下駄（25-74）出土状況

SD100 曲物（25-73）出土状況

SD100 独楽（25-71）出土状況

SD100 アワビ出土状況

SD100 イノシシ頭骨出土状況

写真図版5

SV102（北から）

SV102 上面（西から）

SV109(左)とSV102基底部(右)

SV102(左)とSV109(右)（西上方から）

SF001（北から）

調査区南東隅整地検出状況（北から）

調査区南東隅整地（S014）掘下げ状況

SE108（東から）

写真図版6

SX010 検出状況（南から）

SX010 囊内完掘状況（北から）

SX010 下層遺物出土状況（南から）

SX010 下層硯出土状況（南西から）

SX010 完掘状況（南から）

SK054 完掘状況（東から）

SK021 遺物出土状況（南西から）

写真図版7

SK024 遺物出土状況（南から）

SK026 遺物出土状況（南から）

SK028 遺物出土状況（北から）

廃棄土坑群掘下げ状況（東から）

SK031 検出状況（東から）

SK031 土層断面（北から）

SK031 遺物出土状況（東から）

SK031 完掘状況（東から）

写真図版8

SK036 土層断面（東から）

SK036 完掘状況（北から）

SK037 土層断面（東から）

SK037 遺物出土状況（北から）

SK037 完掘状況（西から）

SK045 完掘状況（東から）

SK039 完掘状況（南から）

SK039 土層断面（西から）

写真図版9

SK019 周辺遺構検出状況（北から）

SK022 完掘状況（南東から）

SK025 内石出土状況（東から）

SK052 完掘状況（東から）

SK044 完掘状況（西から）

SK044 焼塩壺出土状況

廃棄土坑群完掘状況（南から）

基礎解体工事中に検出されたSV101築石北端部（西から）

写真図版 10

- SV104 (北から)
- SV104 検出前 (北西から)
- SV104 検出作業中 (北西から)
- SV104 北整地層の掘下げ (北西から)
- SV104 検出状況 (北西から)

写真図版 11

- SV104 3段目解体後 (北から)
- SV104 1段目 (北から)
- SV104 土層断面 (第 78 図: 西から)
- SV104 南整地土層断面 (第 78 図: 北から)
- SV104 近景 (北東から)

写真図版 12

- SV110(上), SV111(下) 空中写真 (上が南)
- SV111 (北から)

写真図版 13

- SV111 検出作業 (南西から)
- SV111 検出作業 (北東から)
- SV111 築石崩落状況 (北から)
- SV111 検出状況 (北から)
- SV111 断面 (第 88 図: 西から)

写真図版 14

- SV110 (北西から)
- SV110 (西から)
- SV110 検出作業 (西から)
- SV110 東側壁面土層 (第 35 図・第 91 図: 西から)

写真図版 15

- SV112 近景 (北西から)
- SV112 と SV113 (北東から)
- SV112 と SV113 (東から)
- SV104 南整地の機械掘削 (北東から)
- SV112 検出状況 (北東から)
- SV113 (北東から)
- SV113-SV109 間の土層 (第 31 図: 東から)

写真図版 16

- SV105・107 検出状況 (北から)
- SV105 (東から)
- SV107 検出状況 (東から)
- SV107 完掘状況 (北から)
- SV107 完掘状況 (東から)

写真図版 17 出土遺物写真 1

- SD100 出土青磁皿 22-2
- SD100 出土肥前陶器 22-5 ~ 11
- SD100 出土志野 22-4
- SD100 出土志野 22-4
- SD100 出土染付鉢 22-12
- 焼継痕 22-12
- SD100 出土焼塙壺 22-19・20
- SD100 出土鬼瓦 23-41・42

写真図版 18 出土遺物写真 2

- SD100 出土漆器皿 25-58
- SD100 出土漆器皿 25-59
- SD100 出土漆器皿 25-60
- SD100 出土漆器皿 25-61
- SD100 出土漆器蓋 25-64
- 25-64 内面
- SD100 出土漆器蓋 25-62
- SD100 出土漆器椀 25-65

写真図版 19 出土遺物写真 3

- SD100 出土漆器椀 25-66
- SD100 出土漆器椀 25-67
- SD100 出土漆器椀 25-68
- SD100 出土漆器椀 25-69
- SD100 出土漆器椀 25-70
- SD100 出土木製品 25-72・71
- SD100 出土曲物 25-73
- SD100 出土下駄 25-74

写真図版 20 出土遺物写真 4

- SV101 出土石塔 28-14
- SV102 出土遺物 30
- SV102 出土胡麻煎 30-4・5
- S004 出土石塔 36-8
- S014 出土鰯瓦 37-6
- S014 出土軒平瓦 37-8
- S014 出土 37-7
- SE108 出土遺物 39

写真図版 24 出土遺物写真 8

- SK030 出土遺物 74-1～7
- SK044 出土遺物 74-9～12
- SK038 出土遺物 75
- S012・013・016 出土焼塩壺 76
- S013 出土土人形 外面・内面 76-3
- 近代カクラン出土珉平焼 76-7
- SV104 南整地層出土中国産陶器壺 87-3
- SV104 北整地層出土中国産陶器壺 105-5

写真図版 21 出土遺物写真 5

- SX010 出土遺物 42
- SX010 出土土師質大甕 43-20
- SX010 下層・SX052 出土遺物 44
- SK021 出土遺物 47-1～7
- SK024 出土遺物 47-8～16
- SK026 出土陶磁器 48-1～4
- SK026 出土肥前陶器鉢 48-5
- SK026 出土土師質大甕 49-10

写真図版 22 出土遺物写真 6

- SK028 出土遺物 51-1～4, 7～10
- SK028 出土肥前陶器鉢 51-5・6
- SK031 出土磁器 54
- SK031 出土地絵青磁蓋 54-18
- SK031 出土陶器 54
- SK031 出土焼塩壺・土師器 54-23～28
- SK031 出土土師器皿 55-29～35
- SK045・SK029 出土遺物 56

写真図版 23 出土遺物写真 7

- SK036 出土遺物 59
- SK037 出土遺物 1 60
- SK037 出土遺物 2 60
- SK037 出土陶器擂鉢 52-13
- SK039 出土遺物 63
- SK019・SK020 出土遺物 67
- SK019 出土土師質焜爐 67-3
- SK025 出土遺物 70

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

大分市は平成9年度から中核市に移行したことに伴い、これまで大分県の所管であった保健所が大分市の管轄となった。大分市長浜町にある現在の大分市保健所は、狭隘で老朽化が著しい上、本市に移管後は建物を所有する大分県から借りる形となり、県に対し施設使用料の支払い義務が生じていた。このため21世紀の市民保健行政の中心たるにふさわしい機能を有する本市独自の新しい施設を建設・整備することが急務となっていた。

そこで、大分市では建設検討委員会を設置して新たな大分市保健所の整備計画を検討してきたが、新保健所を市役所近隣の旧大分医師会館跡地に建設することが最終的に決定された。新大分市保健所は、地域保健法に基づく保健所機能（食品衛生、環境衛生、救急医療、感染症、エイズ対策等）と市町村保健センター機能（老人保健、母子保健、栄養改善等）を併せもつ施設として、また、市役所に隣接することから、不測の事態や緊急時にも、より迅速で効果的な健康危機管理体制を構築できる施設として位置づけられた。さらに、平成17年度には、指名型プロポーザル方式により設計委託者の決定を行い、平成18年度に着工し平成20年4月にオープンすることが最終的に決定されるに至った。

このような建設計画の急速な進捗に伴い、平成16年度には建設予定地である旧大分医師会館跡地（平成14年度から市役所北駐車場として使用中）における埋蔵文化財の所在状況について大分市保健所保健総務課から文化財課に照会がなされた。文化財課では建設予定地が、周知の埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町跡」の範囲内であり、江戸時代の絵図に基づく復原図により、府内城北丸に比定される場所であることから、事前に確認調査を実施して、遺構の遺存状態について調査することが必要であると判断した。

確認調査は、平成17年1月31日および2月1日に行われた。トレーニング3箇所を設ける調査により、当該地は旧医師会館の建設と解体が行われたことによって著しい搅乱が認められるものの、一部においては府内城北丸西辺の堀に面した石垣が残存していることが確認できた。この結果を受け、文化財課は保健総務課及び建設課と協議を行ったが、敷地が狭小であることから約1100m²の敷地のほぼ全面にわたって新保健所の建物が建設されることは動かしがたく、建設に先立って発掘調査を実施して遺構の記録保存を行うことに決定された。

確認調査により、遺構が一部において残存していることが確認されたが、同時に旧医師会館による搅乱が著しいことも確認されており、どの程度の範囲に遺構が残っているかについての情報を得るには調査が不十分であったため、本調査に先立ち、大規模な確認調査を行うこととした（予備調査）。

平成17年5月28日より、試掘調査で遺構が残っていることが確認されていた旧医師会館南棟部分約250m²を対象として予備調査を行った。その結果、旧医師会館南棟の中央部分を中心として土坑等の遺構が残っていること、さらに旧医師会館南棟の基礎に隣接して北丸西側の石垣基底部が残っており、基礎の下には北丸西側の堀が残存していることが判明した。この結果を受け、文化財課は保健総務課及び建築課と協議を行った結果、①旧



現在の大分市保健所



完成間近の新大分市保健所（平成20年2月）

医師会館南棟中央部分を中心として発掘調査を実施する ②遺構の記録保存の障害となる建物基礎の撤去工事
③基礎撤去工事後に石垣及び堀等の発掘調査を実施することを決定した。

中央部分の本調査は平成 17 年 8 月 1 日から表土剥ぎを実施し、9 月末までの日程で行われ、著しく切り合った 18 世紀代の廃棄土坑群を中心とする遺構を検出した。

基礎撤去工事は道路建設課による設計・発注を待って平成 17 年 11 月 20 日から開始し、12 月 20 日に概ね終了した。

これを受け、平成 17 年 12 月 24 日より発掘調査を再開し、北丸西辺石垣及び堀の調査を実施した。さらに、8 ~ 9 月の調査時に十分な確認ができなかった土坑群下層について再度調査を実施した結果、より古い段階の石垣が 6 箇所に残存していることが確認された。当初想定していなかった多数の石垣を発掘し、記録することとなつたため調査日程は非常に厳しくなってしまい、埋め戻しまで含めた年度内の終了が危ぶまれたが、空中写真測量の導入等、記録作業の迅速化を図ることにより、平成 18 年 3 月 11 日をもって終了することができた。

発掘調査を実施した面積は、機械掘削面積が 649 m²、遺構が検出され精査した部分の面積は約 450 m²である。

なお、大分市保健所は予定地の発掘調査と並行して平成 17 年 11 月 14 日に指名型プロポーザル方式により設計案が決定され、翌平成 18 年 10 月 16 日に安全祈願祭を行って工事に着工し、平成 20 年 2 月完成、4 月オープンの予定である。

第 2 節 調査組織

平成 16 年度（確認調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

事務局 大分市教育委員会

文化財課 課長 足立昌人

参事 玉永光洋

管理係 管理係長 久多羅岐明

主査 平野勝敏

指導主事 姫野公徳

主任 桑原治 安倍一成

主事 三浦亜紀 加藤キヌ

文化財係 課長補佐兼文化財係長 讀岐和夫

専門員 塔鼻光司 坪根伸也

指導主事 後藤典幸

主任技師 池邊千太郎 塩地潤一 河野史郎 高畠豊

技師 中西武尚

主事 永松正大 佐藤道文 五十川雄也

事務員 古川匠

嘱託 井口あけみ 岩尾美保子 上野 淳也 梅木信宏 梅田昭宏 江藤亮介

大野 瑞恵 萩 幸二 奥村 義貴 小住武史 莺谷史穂 佐藤孝則

秦 さとみ 羽田野達郎 羽田野裕之 服部真和 松尾 聰 松竹智之

水町 裕子 宮田 剛 森岡 晃司 山本哲也

平成 17 年度（本調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦政博
事務局 大分市教育委員会
文化財課 課長 佐藤 功
参事 玉永光洋
管理係 管理係長 安東 時男
主査 平野勝敏
指導主事 姫野公徳
主任 任 桑原治 安倍一成 加藤キヌ
文化財係 課長補佐兼管理係長 讀岐和夫
専門員 塔鼻光司 坪根伸也
指導主事 後藤典幸
主任技師 池邊千太郎 塩地潤一 河野史郎
高畠豊（整理作業）
技師 中西武尚
主事 永松正大 佐藤道文 五十川雄也
事務員 古川匠
嘱託 井口あけみ 萩 幸二 宮田 剛 奥村 義貴 莺谷史穂
羽田野達郎 梅木信宏 梅田昭宏 佐藤孝則 松竹智之
松尾 聰 羽田野裕之 小住武史 水町裕子 山本哲也
服部真和 森岡晃司 江藤亮介 仲矢咲紀 吉田 陽
姫野久恵
発掘作業員
河野威洋 雨川悦子 吉武美也子 萱島伸幸 猪原敏文 佐藤正記
足立征士 高山紀彦 阿部暢夫 本田重子 島田栄子 相原祐志
安部いつよ 橋本弘 井野和歌子 三浦 孝子

平成 18 年度（整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦政博
事務局 大分市教育委員会
文化財課 課長 佐藤 功（～平成 18 年 9 月 30 日）
玉永光洋（平成 18 年 10 月 1 日～）
参事 玉永光洋（～平成 18 年 9 月 30 日）
管理係 管理係長 安東時男
主査 幸俊昭
指導主事 姫野公徳 植木和美
主任 任 桑原治 栗田博之 加藤キヌ
主事 加悦真理
文化財係 文化財係長 塔鼻光司
専門員 坪根伸也

主任技師 池邊千太郎 塩地潤一 河野史郎 中西武尚
高畠豊（整理作業）
主 事 永松正大 佐藤道文 五十川雄也 古川匠
事務員 長直信
嘱 託 井口あけみ 萩 幸二 宮田 剛 稔田智美 奥村義貴
羽田野達郎 佐藤孝則 羽田野裕之 水町裕子 山本哲也
山下朋紀 五十川慎也 山下桂
仲矢咲紀 古田 陽 姫野久恵

平成 19 年度（整理・報告書作成）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 秦 政博 足立一馬（平成 19 年 5 月 14 日～）
事務局 大分市教育委員会
文化財課 課長 玉永光洋
参 事 渋谷建治
管理係 管理係長 安東時男
主 査 幸 俊昭 桑原 治
指導主事 姫野公徳 植木和美
主 任 栗田博之 加藤キヌ 加藤真理
文化財係 文化財係長 塔鼻光司
専門員 坪根伸也 池邊千太郎
主任技師 塩地潤一 河野史郎 高畠豊 中西武尚
主 任 永松正大
主 事 佐藤道文 五十川雄也 古川 匠 長 直信
嘱 託 井口あけみ 稔田智美 奥村義貴 羽田野達郎
佐藤孝則 羽田野裕之 山本哲也 山下朋紀
五十川慎也 上原翔平 三嶋桂司

第2章 遺跡の立地と環境

大分川は、その源を大分県大分郡湯布院町由布岳（標高 1,584m）に発し、阿蘇野川、芹川、賀来川、七瀬川を合わせて大分市において別府湾に注ぐ一級河川である。大分平野東部は大分川河口部に形成された微高地と、海岸に形成された浜堤、及び後背湿地から構成される。

16世紀末から17世紀初めに府内城およびその城下町がつくられた場所は大分川河口部左岸の標高約3～5mの微高地上である。この地域は古代に、豊後国の大分城がおかれて政治的中心となり、中世にも引き続いて守護・守護大名である大友氏の本拠として発展した。近世には豊後国が小藩分立とされて府内藩は小藩となったものの城下町は豊後随一の規模を有していた。明治以降は大分県の県庁所在地として今に至っている。このような歴史を反映して、古代以降の遺跡が多く残されている地域であるが、古代から中世・戦国時代、近世とそれぞれの時代において残された遺跡の地理的位置が概ね南から北へ移動していることが特色として挙げられる。このため、豊後国を中心とした地域であり続けたにもかかわらず、各時代の遺構がさほど重複することなく、比較的純粋な形で残されている地域である。



第1図 遺跡の位置 (1/300000)

前史

古代の遺跡としては、上野丘陵上の遺跡群が注目される。台地東端部の竜王畑地区では平成9年度に行われた発掘調査により9世紀代を中心とし、10世紀前半に至るまでの掘立柱建物跡や築地塀跡などが多数検出されており国司館等、豊後国衙関連の施設であると推定された⁽¹⁾。また、台地の西端部付近では8世紀～9世紀に築造された版築基壇と礎石建物跡を伴う古代寺院跡が検出されている⁽²⁾。

豊後国衙推定地としては、これらの遺跡よりも南側に所在する古国府地区が推定されてきたが、これまでの発掘調査では国衙関連遺構は発見されておらず、上野遺跡群の中に国衙が比定される蓋然性は高まってきたと言える。

また、最近、上野丘陵北側の微高地上に位置する大道遺跡群において、多数の掘立柱建物群が検出され、奈良三彩や綠釉陶器、転用硯も出土するなど、官衙的様相を強く持つ遺跡が発見されており、地理的に近い豊後国衙と関連を有する官衙の一つではないかとも想定される⁽³⁾。

中世の当該地域には、豊後守護大友氏の守護所がおかれて、戦国時代には中世都市「府内町」として発展した。「中世府内町」については戦国時代末期の様子を描いたと推定される絵図「府内古図」に基づき、1987年の大分市史編纂の際に現地比定が試みられ、「戦国時代の府内復元想定図」が作成されている。この結果絵図に描写された府内町は南北2.2km東西0.8kmにわたって広がっていることが推定され、この範囲が「中世大友城下町跡」の名称で周知されるに至っている。1996年に始まった「中世府内町」の発掘調査、さらに1998年に始まった大友氏館の発掘調査、2003年に始まった万寿寺跡の発掘調査により、この復元想定図により比定された府内古図の記述についてはかなり信頼性が高いことが考古学的に次第に確かめられつつある。

平成19年度までで90次にも及ぶ全国的にも希な規模の発掘調査が行われており、最近は報告書も相次いで刊行されている。これにより、建物や道路跡から推定される都市の景観や出土貿易陶磁器等にみられる都市経済、キリスト教関連の遺構・遺物などにみられる特色ある文化などが明らかになりつつある。

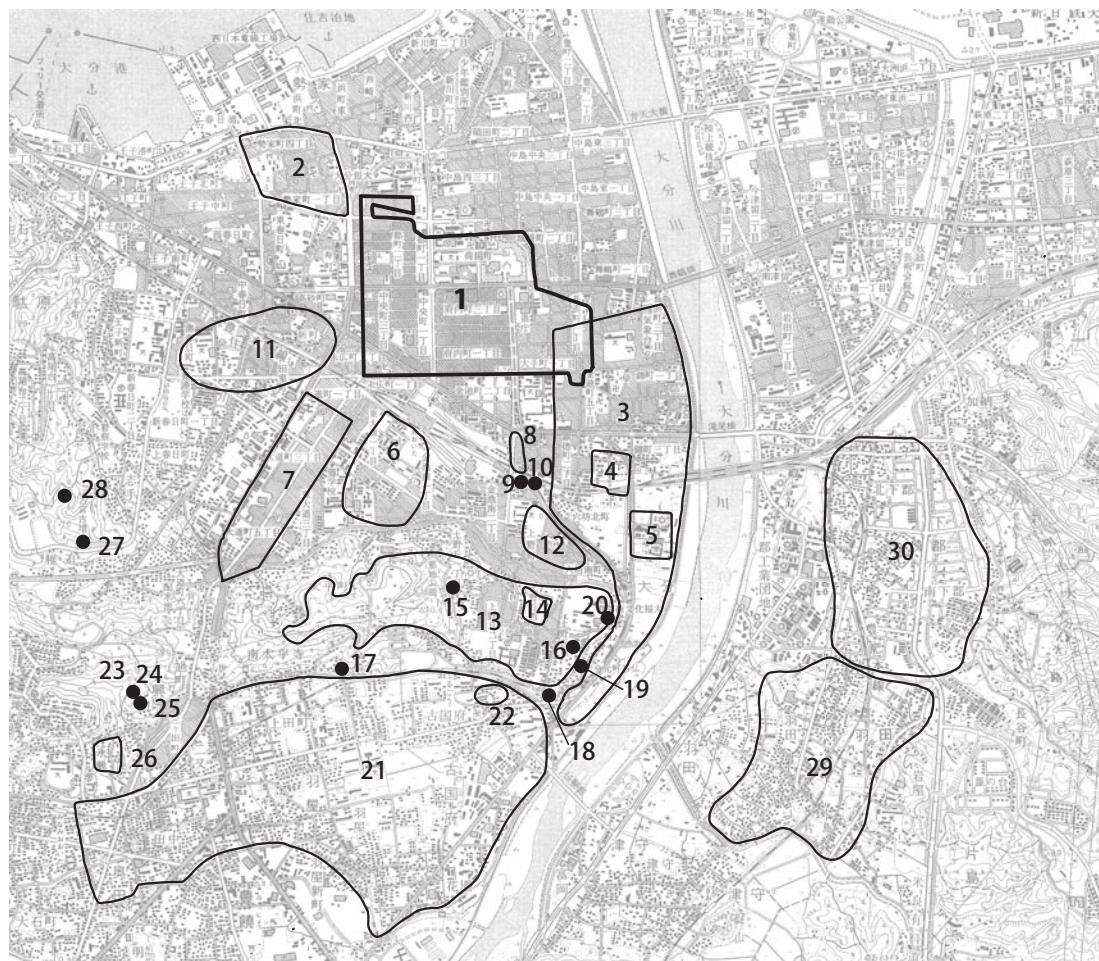
中世「府内町」については、概ね15世紀代から遺構がつくられはじめ、16世紀中葉から末にかけて最盛期を迎える。

16世紀末に急速に終息していることが早くから指摘されており、1586年～1587年の島津侵攻に伴う大規模な破壊後、十分に復興がされなかつたものと思われてきた。しかし、最近の調査では一部において石組みの道路側溝等が島津侵攻後に整備されており、最末期の府内町の様相が次第に解明されてきている。

府内城建設と府内藩の成立

文禄二年（1593）、大友吉統（義統）が朝鮮出兵での失態を理由として除国され、鎌倉時代中期以来続いた大友氏による豊後国支配は終わった。豊後国は豊臣秀吉の直轄地（蔵入地）となって、文禄三年（1594）には府内には文禄の役では高麗舟奉行を勤めた早川長敏が取り立てられ、六万石で入部した。

慶長二年（1597）、早川長敏は杵築に転封され、替わって豊後臼杵から石田三成の妹婿である福原直高が大分郡及び速見郡等計十二万石で入封した。直高は中世府内町の北方、別府湾に面する「荷落」と称されていた地を



1	府内城・城下町跡	11	東田室遺跡	21	古国府遺跡群
2	勢家遺跡	12	若宮八幡宮遺跡	22	岩屋寺遺跡
3	中世大友城下町跡	13	上野遺跡群	23	城南遺跡
4	大友氏館跡	14	上野大友館跡（上原館跡）	24	千人塚古墳
5	万寿寺跡	15	上野廢寺	25	弘法穴古墳
6	大道遺跡群	16	上野竜王畑遺跡	26	永興遺跡
7	大道条里跡	17	元町石仏	27	古宮古墳
8	南金池遺跡	18	岩屋寺石仏	28	亀甲古墳
9	上野町遺跡	19	伽藍石仏	29	羽田遺跡
10	顕徳寺遺跡	20	大臣塚古墳	30	下郡遺跡群

第2図 周辺遺跡位置図 (1/40000)

選地し、築城に着手した。

慶長四年（1599）には二ノ曲輪三重櫓や三ノ曲輪家臣屋敷が完成し、地名を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と称した。なお、新城の場所は、先述した「府内古図」においては「同慈寺」及びその周辺の町屋が描かれている場所に相当する。

しかし直高は、豊臣秀吉死後の政治情勢の中で慶長四年（1599）改易され、早川長敏が再入封する。

慶長五年（1600）、関ヶ原合戦により、西軍方についた早川長敏は滅ぼし、豊後高田から竹中重利が三万五千石で入封した。

竹中氏は徳川家康の許可を得て築城事業を再開し、慶長七年（1602）には四重天守等の城郭中心部が完成し、町割りを実施して大友時代の「府内町」を移転させた。慶長十年（1605）には城下町がほぼ完成、城下町を囲繞する外濠を築き、城名を「府内城」、城下町を「府内」と改めた。さらに、慶長十二年（1607）、城下の東に塩九升口、西に笠和口、北に堀川口を設け、翌年には船入「京泊」が造られ、城下町は完成した。

竹中氏は、寛永十一年（1634）、二代重義が長崎奉行在任中の不正を理由として江戸で切腹を命じられ、替わって下野国壬生から日根野吉明が二万石で入封した。日根野氏は初瀬井路をはじめとする用水路の整備を行い、新田開発を進めるなど積極的な領国経営を行う。ところが明暦二年（1656）、日根野氏は吉明1代で断絶した。日根野氏断絶後、府内城は一旦幕府の管理下に置かれ、2年間近隣の杵築藩、日出藩、臼杵藩が順番で城番を勤めたが、明暦4年（1658）2月高松（大分市）にいた松平忠昭が新藩主となり、二万二千石で入封して大給松平氏の府内藩が成立した。以後、明治に至るまで、府内藩は大給松平氏の治下となる。

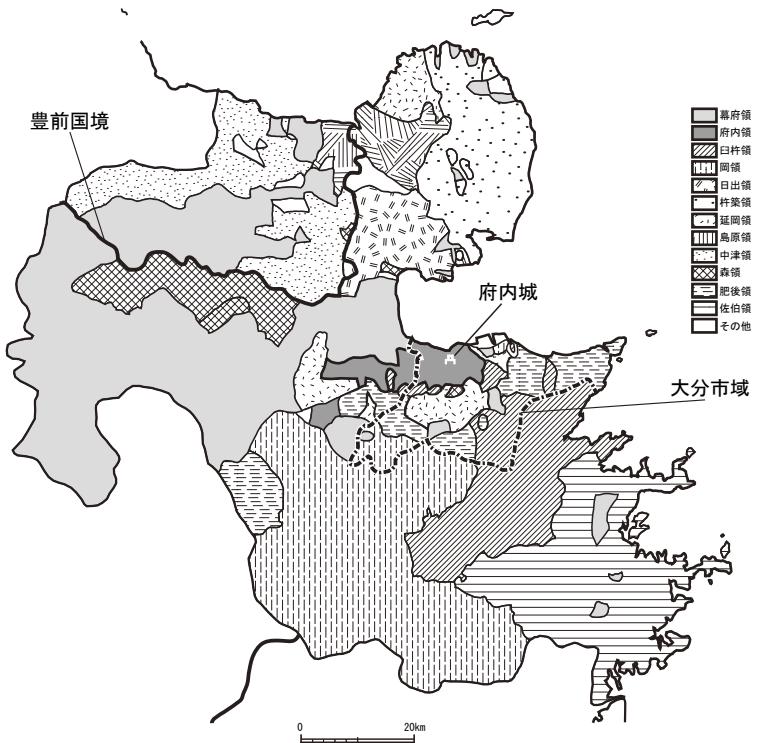
府内城・城下町

府内城及び城下町は、南北約1km、東西約1.2kmの規模を有し、現在の大分市中心都市街地の基礎になっており、全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「府内城・城下町跡」とされているほか、中心部については県の史跡として指定されている。

近世の豊後国は、「七藩八領」と称される小藩分立の状態におかれており、府内藩は大給松平氏の時代で二万二千石に過ぎない小藩であった（第3図⁽⁴⁾）。しかし、城下町の規模は藩の規模と不釣り合いな大規模なものであり、豊後国内で随一の規模を誇る。これは、福原直高が十二万石の石高にふさわしい規模の城郭として築城を開始したらしいことや、大友氏時代の「府内町」を引き継いだためである。

府内城とその城下町については、近世の絵図が多く残されている。このうち「府内絵図」（第4図⁽⁵⁾）は「慶長拾年十一月府内絵図」との付箋がつけられたもので（以下「伝慶長絵図」と呼称する）、府内城と城下町の状況が極めて精緻に描かれ、なおかつ最古の絵図として評価されていた。

1987年の大分市史編纂時には「伝慶長絵図」に詳細に記されている城下各部の寸法と明治時代の地籍図など

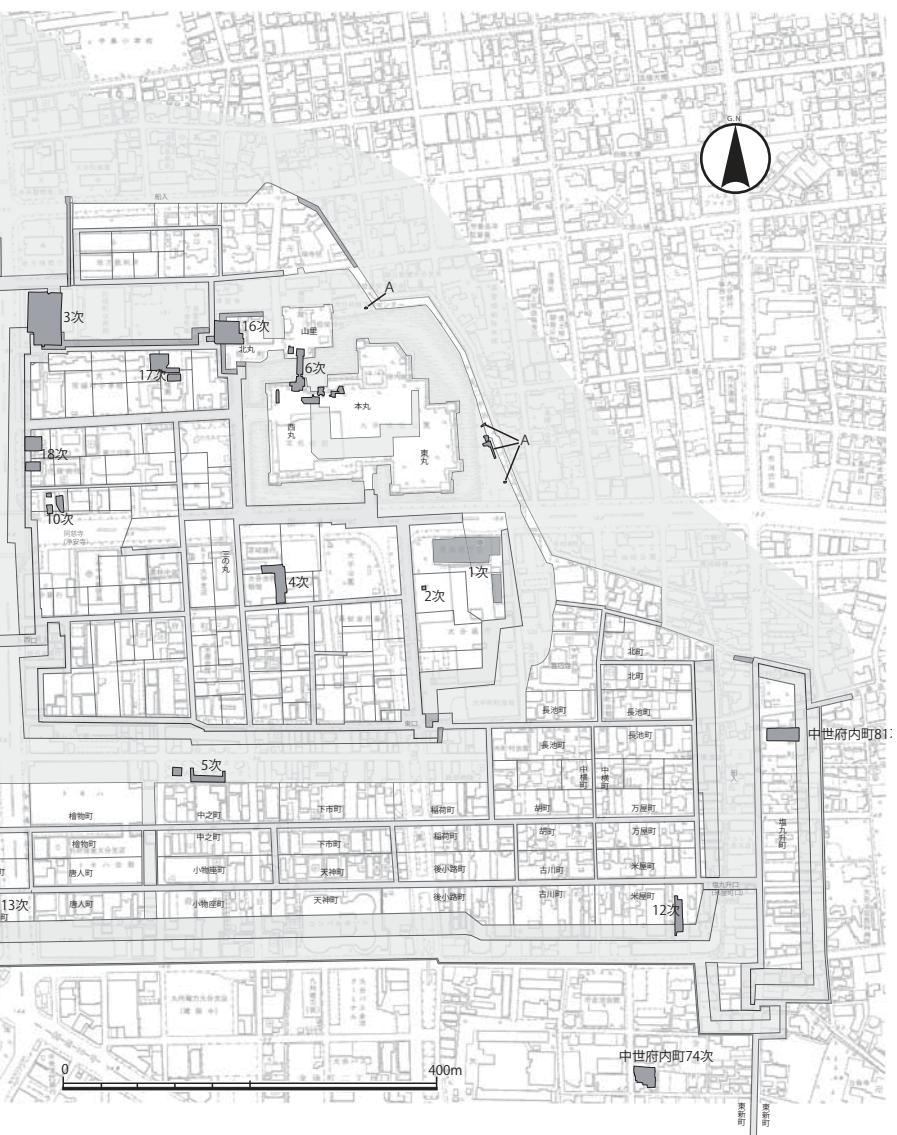


第3図 府内藩及び他藩領領域図

第4図 伝慶長絵図（部分）



第5図 正保絵図（部分）



第6図 府内城・城下町復原図及び調査地点位置図 (1/8000)

を元に現地比定作業が実施され、「府内城下の復原図」(第6図⁽⁶⁾)が作成された。これ以降、府内城・城下町跡において実施される考古学的な調査では「府内城下の復原図」を基本資料として参照しており、発掘調査の結果

第1表 府内城・城下町跡調査一覧表

調査次	幕末における比定地	調査期間	面積 (m ²)	調査主体	調査原因	調査概要	文献
第1次*	三ノ丸武家屋敷(木村家)および福寿院	19910401～19910630	2,120	県	県庁舎建設	「木村」の焼継文字を有する陶磁器から府内藩家老木村家の屋敷地であることが考古学的に証明された。寛保の大火(寛保3年:1743年)に比定される火災処理一括資料が出土。慶長間に三の丸が造成されたことを傍証する資料も出土。	文献1
第2次	三の丸武家屋敷(木戸家)	19930719～19930803	45	県	モニュメント建設	「口入 孫九郎様」の焼継文字を有する資料が出土し、府内藩家老木村孫九郎の屋敷跡であることが証明された。15世紀代の土坑も出土した。	文献2
第3次	三の丸北口 堀	19941011～19941227	1,800	県	警察署建設	三の丸北口土橋および石垣と堀、北口櫓門の櫓台が出土。櫓門の変遷が推定された。	文献3
第4次	三の丸武家屋敷	199304～199305	600	市	民間開発	17世紀初頭に遡る石組み倉庫の遺構、17世紀後半ないし18世紀後半～19世紀初頭の長方形大形土坑を検出。	文献4
第5次	中堀	199307	500	市	公園整備	中堀の調査で、多数の木製品出土。調査地点近くに比定される「中ノ町」の焼継文字を有する資料も出土。	文献5
第6次	廊下橋及び周辺	19950517～19950928	590	市	公園整備	西ノ丸と山里丸を結ぶ廊下橋の基部と冠木門の礎石を確認、また西ノ丸と本丸を結ぶ土橋および西ノ丸内部の建物跡等を確認した。	文献6
第7次	寺町／塗師町	19950509～19960132	866	市	公園整備	町屋に伴う多数の井戸・火災処理土坑・地下式土坑など、また寺町と塗師町の境界と思われる狭い空閑地も検出された。下層からは11世紀後半に遡る井戸等の遺構も検出された。	文献7
第8次	西町／西上市町 道路	19961024～19970519	1,101	市	公園整備	幅8mの道路遺構と町屋に伴う極めて多数の廃棄土坑・井戸・地下倉および火災処理土坑が検出され、城下町建設時の埋納遺構も検出された。「西町」の焼継文字を有する資料が出土。	文献8
第9次	府内城外西新町	19970707～19970930	1,200	市	民間開発	西新町の町屋に伴う多数の土坑・井戸とともに西新町西限と思われる溝を検出。「西新町」の焼継文字資料や明治時代初めのワインボトルも出土。12～13世紀の瓦器を伴う遺構も検出された。	文献9
第10次	室町	19971113～19971213	44	市	民間開発	町屋内の礎石建物跡・井戸・火災処理を含む土坑群を検出。16世紀末～17世紀初めの整地層が認められ、慶長年間における城下町建設が推測された。	文献10
第11次	三ノ丸武家屋敷 (森下家) および浄安寺	19980728～19991031	250	市	民間開発	府内城築城時の整地層を挟み上下で遺構が検出され、下層からは戦国時代の溝などが出土。また、浄安寺との境界の石列を検出。幕末の屋敷主である森下氏を示す「森下」の焼継文字を有する陶磁器出土。	文献11
第12次	米屋町 土壘	19990702～19990915	298	市	民間開発	府内城外曲輪上土壘の基底部を検出。焼継文字を有するものを多数含む土坑一括資料を検出。光西寺の焼継文字を有する禁裏御用品出土。府内城築城時の整地層より下から戦国時代の溝が検出された。	文献12
第13次	名号小路町	19991004～19991118	84	市	民間開発	町屋内の井戸・土坑・火災処理土坑などを検出。17世紀前半に比定される多量の瓦を伴う廃棄土坑が認められる。	文献13
第14次	竹町	20000807～20001009	330	市	民間開発	寛保の大火をはじめ、18世紀後半から19世紀前半にかけての5回の火災に対応する火災処理一括資料を検出。竹町と笠和町の町割線を検出しその変遷も把握された。	文献14
第15次	堀川町および道路	20021007～20030320	216	市	民間開発	幅4mと推定される道路遺構と礎石跡、土坑等が検出された。享保13年の刻畫を有する硯を含む火災処理一括資料は享保19年の火災資料と推定され、多数の茶道具や中国青花を含む特筆すべき資料である。	文献15
第16次	北丸および堀	20050801～20060311	649	市	保健所建設	「府内絵図」に描かれた北の丸西側の石垣及び堀が検出され、さらにこれより古い府内城築城時に遡る石垣群も検出されて初期の府内城の変遷が推定された。18世紀に限定される廃棄土坑群も出土。本書で報告。	文献16
第17次	三ノ丸武家屋敷	20070511～20060328	455	市	公共駐車場建設	近世後半期を中心とした3つの整地面があり、18世紀前半代の火災処理土坑等が検出され、その下層より、和泉型瓦器を多量に含む中世の遺物包含層を確認した。	文献17
第18次	三ノ丸武家屋敷 道路	20070702～20070827	404	市	民間開発	第1面からは17世紀代～19世紀代の遺構が、整地層を除去した第2面(砂層)からは近世の掘立柱建物、古代の井戸等が確認されている。	*2
帶曲輪確認調査	帶曲輪 堀	19980217～19980227	110	市	公園整備	一部で府内城下復原圖(大分市史中巻付図IV)における帶曲輪の位置と実際の位置が異なることが判明。	文献18
中世府内町74次	城外東新町の西側	20061002～20061130	395	市	民間開発	府内城の外であるが、17世紀初頭に廃絶した井戸・土坑・溝を検出。17世紀初めにおける城下町建設と町屋移転との関連が想定される。このほか古代の土取跡も出土した。	文献19
中世府内町81次	塙九升町 土壘	20070618～20070822	400	市	民間開発	府内城に伴う土壘基底部及び近世塙九升町の町屋に伴う廃棄土坑等の遺構群が検出された。土壘よりも下層からは、16世紀～17世紀初頭の建物跡・土壘墓・溝状遺構等が検出されている。	*3

【文献】

- 文献1 大分県教育委員会1993『府内城三ノ丸遺跡一大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 文献2 大分県教育委員会1994『府内城三ノ丸遺跡II一大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 文献3 大分市教育委員会1994『府内城三の丸北口跡-大分中央警察署本部別館前広場新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 文献4 大分市教育委員会1994「12府内城・城下町遺跡(大分合同新聞社屋建設予定地)」『大分市埋蔵文化財調査年報5』
 文献5 大分市教育委員会1994「11府内城・城下町遺跡(竹公園)」『大分市埋蔵文化財調査年報5』
 文献6 大分市教育委員会1994「府内城・城下町跡第6次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度
 文献7 大分市教育委員会1996「府内城・城下町跡第7次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度
 文献8 大分市教育委員会1997「府内城・城下町跡第8次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
 文献9 大分市教育委員会1998「府内城・城下町跡第9次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.9 1997年
 文献10 大分市教育委員会1998「府内城・城下町跡第10次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.9 1997年
 文献11 大分市教育委員会1999「府内城・城下町跡第11次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度
 文献12 大分市教育委員会2003『府内城・城下町跡第12次調査報告書』
 文献13 大分市教育委員会2000『府内城・城下町跡第13次調査概報』
 文献14 大分市教育委員会2003『府内城・城下町跡-第14次調査報告書』
 文献15 大分市教育委員会2004『府内城・城下町跡-第15次調査報告書』-
 文献16 大分市教育委員会2006『府内城・城下町跡第16次調査』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.16 2005年度
 文献17 大分市教育委員会2007「府内城・城下町跡第17次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.17 2006年度
 文献18 大分市教育委員会1998「府内城帶曲輪石垣確認調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.9 1997年度
 文献19 大分市教育委員会2007『大友府内11 中世大友府内町跡第74次調査報告書』

*1:文献1によれば大分県共同庁舎建設時に行われた発掘調査を第1次・第2次調査としているが、文献6・7で大分市教育委員会の実施した発掘調査において初めて調査次数が割り振られた際、文献1における調査を第1次、文献2における調査を第2次として数えてしまったため齟齬が生じた。しかし、ここでは、文献6以来大分市教委によって呼称されている次数をそのまま踏襲する。

*2:調査者の佐藤道文氏からご教示いただいた。

*3:調査者の古川匠氏からご教示いただいた。

とも概ね一致する結果となっている。

ところが、「伝慶長絵図」に描写・記載された内容には慶長 10 年以降の事象もあることが分かっており、1995 年には大分市歴史資料館木村幾多郎・武富雅宣氏により詳細に考証が行われた結果、「伝慶長絵図」の成立は寛文 7 年（1667 年）以降に下ることが指摘されたのである⁽⁷⁾。これにより、現在のところ府内城に関する最古の絵図は、正保元年（1644 年）に描かれたもので内閣文庫所蔵の「豊後府内城之図（正保城絵図）」（第 5 図⁽⁸⁾：以下「正保絵図」と呼称する）ということになる。しかしながら、府内城下を最も精緻に描いた絵図であるとの評価は動くものでなく、これを基にした「府内城下の復原図」についても依然として資料価値が高いということができる。

これまでの調査と今回の調査地点について

府内城・城下町跡の発掘調査は、平成 3 年に県庁舎建設に伴って大分県教育委員会が初めて実施して以来、平成 19 年度末までに 18 次に及ぶ。また、中世府内町 81 次調査地点は府内城下東端の馬出状の曲輪である塩九升町にあたるため、これを加えると本調査のみで 19 次を数え、さらに帶曲輪の確認調査も実施されている。これまでの各調査地点の位置は第 6 図中に示し、それらの概要は第 1 表に示すとおりである。

本書で報告する第 16 次調査地点は、「府内城下の復原図」によれば、府内城北丸に比定される位置にあたる。北丸は、山里丸（現在の松栄神社）と三の丸との間に位置する曲輪であり、三の丸からは南側の外升形より入り、東に直角に折れて山里丸へ至る通路が通っている。山里丸からみると三の丸側に設けられた橋頭墜であり、逆に山里丸への通路を防御する機能を有していると考えられる。また、北丸西側には、中堀を渡って北側に位置する中嶋から三の丸に向かう土橋があり、外升形を形成する門（中嶋口）があるが、この門と土橋を側面から防御する機能も合わせて有していたものと考えられる。

なお、北丸については、「伝慶長絵図」では「北丸」と記載されているが、先述のように、現時点で最古の絵図と考えられている「正保絵図」においては「北ノ小丸」と記載されている。

このほか、近世に描かれた各種の絵図においても「伝慶長絵図」の山里丸を「北丸」として記載したものも認められ、混乱がみられる。

本報告書においては、「府内城下の復原図」に基づく現地比定をふまえて発掘調査を行っていることから、「復原図」の記述に従い、「北丸」との呼称により、報告を行いたい。

【註】

- (1) 高橋信武「上野遺跡群竜王畠遺跡の発掘調査—豊後国府関連遺跡の発見—」『大分県地方史』第 173 号 大分県地方史研究会 1999 年
- (2) 讃岐和夫「上野遺跡群（上野廃寺跡）」『大分市埋蔵文化財調査年報』vo1.10 大分市教育委員会 1999 年
- (3) 平成 19 年度に大分市教育委員会が発掘調査を実施したものであるが奈良三彩等は、隣接する第 5 次調査地点（平成 15 年度調査）で出土していたものである。
- (4) 「大分県行政区画変遷要図」『角川日本地名大辞典 44 大分県』角川書店 1980 年を改変して作成
- (5) 大分大学所蔵 大分市史中巻付図より転載
- (6) 「府内城下の復原図」『大分市史』中巻付図 IV 大分市史編纂委員会 1987 年を再トレースして作成し、調査地点を加えたものである。
- (7) 木村幾多郎・武富雅宣「豊後府内城」第 14 回特別展「城のある風景」図録 大分市歴史資料館 1995 年
- (8) 内閣文庫所蔵資料 坪井清足他監修『復元体系日本の城 8 九州沖縄』ぎょうせい 1992 年より転載

【参考文献】

- 大分市史編纂審議会 1955 『大分市史』上巻（旧版）
大分市史編纂委員会 1987 『大分市史』上巻、中巻
大分市教育委員会・中世都市研究会 2001 『南蛮都市・豊後府内都市と交易』
大野康弘 2001 「府内城・城下町の曲輪間段差とその意義について」『大分・大友土器研究会論集』

第3章 調査の経過

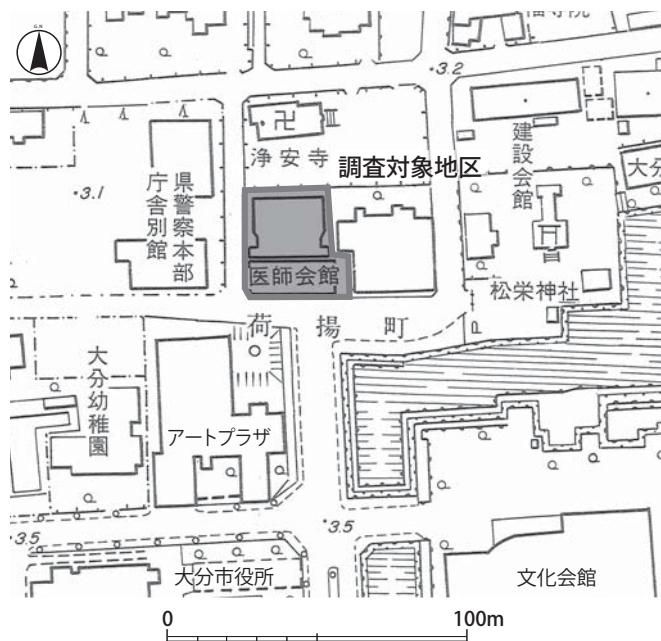
今回の調査は、「府内城下の復原図」（大分市史中巻付図IV）により府内城北丸に比定された地点を対象とするものである。このため、確認調査の時点から、この位置比定を前提として慎重に調査を行ってきた。調査対象地は、平成17年1月現在、市役所北駐車場として利用されていたが、当地には昭和35年と昭和45年に鉄筋コンクリート製建物である大分医師会館2棟が建設されており、これらはいずれも地下深くまで掘削して基礎工事を行ったり、地下室を設けるなど、相当部分の遺構が破壊されていることが予想された。実際の確認調査～本調査時にもこれら基礎による破壊が著しかったため、精査対象地から除外したり、旧建物基礎の構造を考慮してあらかじめ調査の対象としなかった範囲も生じている。また、建物基礎の一部については本調査前に撤去工事も行っている。このように発掘調査が複雑な経過をたどることになったため、ここでは調査経過とその位置や範囲についてやや詳しく説明しておく。

確認調査

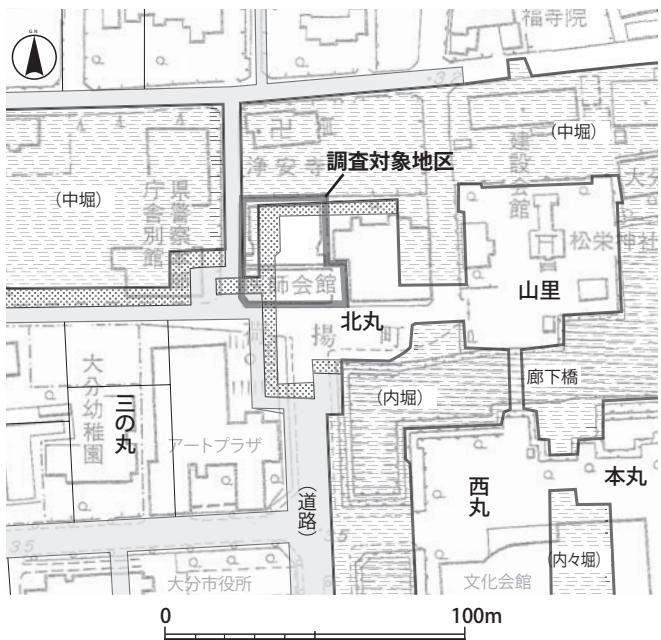
確認調査は、平成17年1月31日および2月1日に実施された。調査方法は、トレント3箇所を設け、重機により掘削する方法で行った。調査にあたっては、あらかじめ、大分市建築課を通じて、旧大分県医師会館の基礎伏せ図等の図面を入手し、現地にあった旧建物基礎の位置を把握しておいた。

確認調査により、第1トレントでは、北丸西側の堀が検出された。第3トレントでは大型の築石を使用した石垣が検出され、北丸西辺の石垣と判断された。一方、対象地区北端付近に設けられた第2トレントでは、地表下2.8mまで掘り下げたが、建物基礎撤去後の埋め戻し土のみ認められ、遺構は昭和45年の医師会館北棟建物建設時に破壊されたと考えられた。

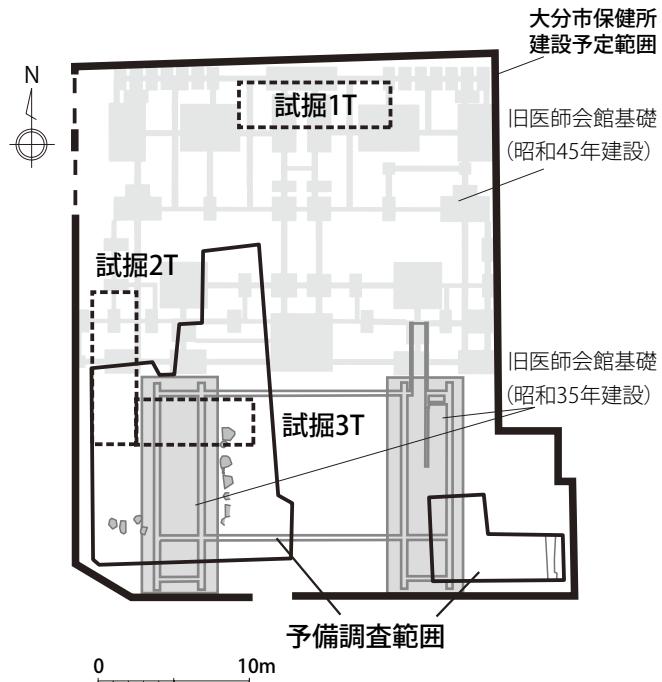
このように、確認調査では対象地区の南半部、すなわち昭和35年建設の医師会館南棟跡地において府内城北丸関連の遺構が残存していることが確認された。しかし対象地区の北半部、すなわち昭和45年に建設された北側棟の範囲、とりわけその北半部については、破壊が著しいことが判明した。図面上でもこの部分に地下3mに及ぶ機械室等が設けられていたことが確認されたため、この部分にはすでに遺構が存在しないものと判断し、以後、調査対象範囲から除外することとした。



第7図 調査対象地区位置図 (1/2500)



第8図 府内城における調査対象地区的位置 (1/2500)



第9図 確認調査・予備調査位置図 (1/500)



第10図 確認調査1T



第11図 確認調査3T



第12図 予備調査時石垣・旧建物基礎検出状況



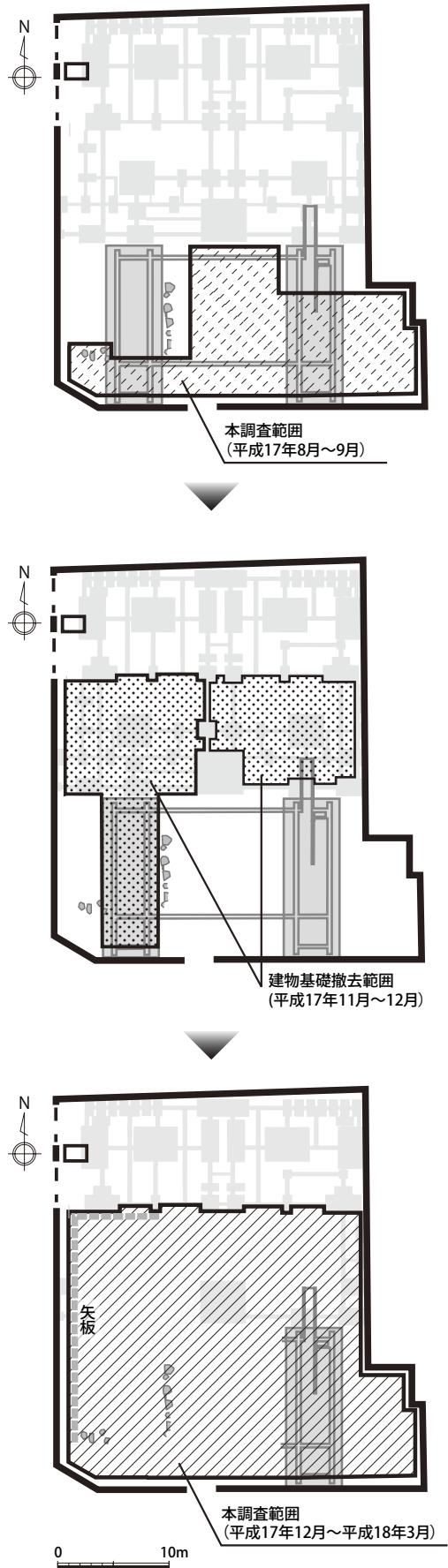
第13図 予備調査時調査区南東端の状況

予備調査

確認調査により、調査対象地区の一部では遺構が残存していることが確認されたが、同時に旧医師会館建設・撤去による破壊・搅乱が著しいことも確認されており、本調査の範囲と調査方法や工程を決定するために必要な遺構残存状況についての情報を得るには調査が全く不十分と考えられた。このため、大分市教育委員会文化財課では本調査に先立ち、一定面積を対象として大規模な確認調査を行うこととした（予備調査）。

予備調査は、平成17年5月14日から6月4日にかけて、試掘調査で遺構が残っていることが確認されていた対象地区南半部を中心に約250m²を対象として実施された。

予備調査開始直後には、余りにも搅乱が激しく、確認調査第1・第3トレンチ付近を除く全面が搅乱を受けているかのような印象であったため、調査担当者は、遺構はほとんど残っていないのではないかとの疑念さえ持つに至った。そのためもあって、機械掘削時には確認調査第3トレンチ付近の石垣築石を一部破壊してしまうミスも発生した。しかしその後、医師会館南棟跡地のうち基礎が設置されていなかった中央部分を中心として土坑等の遺構が



第14図 本調査進捗状況図 (1/600)



第15図 第1次本調査調査状況



第16図 旧建物基礎撤去工事



第17図 第2次本調査時堀調査状況



第18図 第2次本調査石垣検出状況

残っていること、さらに南棟の基礎からわずか数十センチの間隔をもって北丸西辺の石垣が2段程度のみ辛うじて残っており、基礎の下には北丸西側の堀が残存していることが判明した。これにより石垣についても基礎の撤去さえできれば遺構の記録保存が可能であると判断された。この結果を受け、文化財課は保健所建設を所管する保健総務課及び建築課と協議を行った結果、①まず旧医師会館南棟部分の発掘調査を実施する。②次に付近に石垣遺構の残存する旧医師会館南棟西側基礎および遺構が存在する可能性がある旧医師会館北側棟の南部について基礎撤去工事を実施する。基礎撤去工事の設計・発注は道路建設課が行う③基礎撤去工事後に北丸石垣及び堀を中心とする発掘調査を実施することが決定された。

第1次本調査

第1次本調査は平成17年8月1日から表土剥ぎを実施し、9月末までの日程で行った。当初は著しい搅乱や近代以降の整地層に妨げられ、近世の遺構が十分認識できなかつたが、9月4日に残存していた近代の整地層を重機で除去する事も実施し、著しく切り合つた18世紀代の廃棄土坑群を中心として一部は17世紀代に遡る土坑群等が検出された。これらの遺構を完掘した後、一見自然堆積層とみられた遺構床面などの砂層中に円礫群が存在することが一部で認められ、下層に何らかの遺構がある可能性も考えられたため、確認が必要と考えられたが、当初の予定通り9月30日に一旦終了した。下層遺構の調査については基礎撤去工事後の第2次本調査で実施することにした。第1次本調査の調査面積は約160m²である。

基礎撤去工事

基礎撤去工事は平成17年11月から開始され、12月20日に終了した。撤去工事に伴つて北丸西側の堀に面する部分には、壁面崩落を防止するため総延長28mにわたつて矢板が設置され、これ以降調査終了まで維持された。撤去工事は、すでに検出されている石垣を動かさないよう注意を業者に喚起した結果、基礎のみを撤去することに成功した。また、撤去工事中に北丸西辺の石垣の一部が新たに発見されたため慎重に現状保存し、本調査に備えた。

第2次本調査

平成17年12月24日より発掘調査を再開し、北丸西辺石垣及び堀の発掘調査を実施した。さらに、第1次本調査時に十分な確認ができなかつた廃棄土坑群下層等についても改めて断ち割り調査を実施した。その結果、第1次本調査時に廃棄土坑の基盤層とみられ、自然堆積と判断していた砂層が実際には人為的な整地層であり、この層の下層において新たな石垣が発見された。これは北丸西辺石垣や堀のように17世紀前半の「正保絵図」をはじめとする近世の絵図に描かれているものよりも明らかに古い段階の石垣と判断され、基底部1~3段のみ残存していることが確認されたものである。このようなより古いと考えられる石垣は6箇所において確認され、全て記録保存することができた。ただ、当初想定していなかつた多数の石垣を発掘し、記録しなければならなくなつたため調査日程は非常に厳しくなり、埋め戻しまで含めた年度内の終了が危ぶまれたが、空中写真測量の導入等、記録作業の迅速化を図ることにより、平成18年3月11日をもつて終了することができた。

発掘調査を実施した面積は、機械掘削面積が649m²、遺構が検出され精査した部分の面積は約450m²である。

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要

前章で経過を説明したが、今回の調査では、発掘調査と記録作業の障害となる旧医師会館基礎の撤去工事を挟んで、2回にわたって本調査を実施した。

調査にあたっては、まず調査対象地区に世界測地系（第2座標系）の基準座標を使用して4mメッシュを組み、測量の基準点網とした。

調査は重機による機械掘削により、表土および旧医師会館解体後の盛土、さらに近代以降と認められる整地土を除去した後、人力掘削により実施した。なお、石垣SV111並びにSV112を検出する際には、これらを覆っている整地層の掘り下げについて、調査期間の関係でやむを得ず重機を使用して行った。また、記録については上記の基準点網を使用して実測を行ったが、遺構の一部については以下のようにして図化を行った。

SV104（立面図）：写真測量図化。

SV101・104（解体時平面図）、SV112・113（平面図）：大分市遺跡測量システムを使用して実測。

SV110・111（平面図）：空中写真測量により図化

本調査の結果、以下の遺構群が検出された。（第20図）

①府内城北丸に伴う石垣・堀

「正保絵図」「慶長絵図」段階以降の石垣・堀で府内城北丸西辺の堀（SD100）とこれに面する石垣（SV101・SV102・SV109）で、近世初めの「正保絵図」「慶長絵図」に描かれているものに比定される堀及び石垣である。ただし、SV102は18世紀後半以降に積み替えられた可能性が高く、絵図の段階の石垣はSV109であった可能性が高いと思われる。

②北丸内部の遺構群

北丸内部に作られたと考えられる、井戸跡（SE108）および土坑群、埋甕遺構（SX010）である。

これらは、一部に17世紀代の可能性があるもの（SK052）19世紀代に廃絶した可能性があるもの（SE108）を除き、全て18世紀代と推定される。

③府内城築城直後の石垣・堀

絵図に描かれる以前と考えられる石垣群（SV104・SV110・SV111・SV112・SV113）および石垣裏込めと考えられる遺構（SV105・SV107）である。これらのうち、最も古いと考えられるSV110・SV112・SV113は府内城築城当初のものである可能性がある。

基本層序（第19図）

調査区内には旧医師会館建設・撤去に伴う攪乱をはじめ、近代以降の建物建設による攪乱が広く認められたが、それを除く基本的な層序関係については第19図のように把握された。

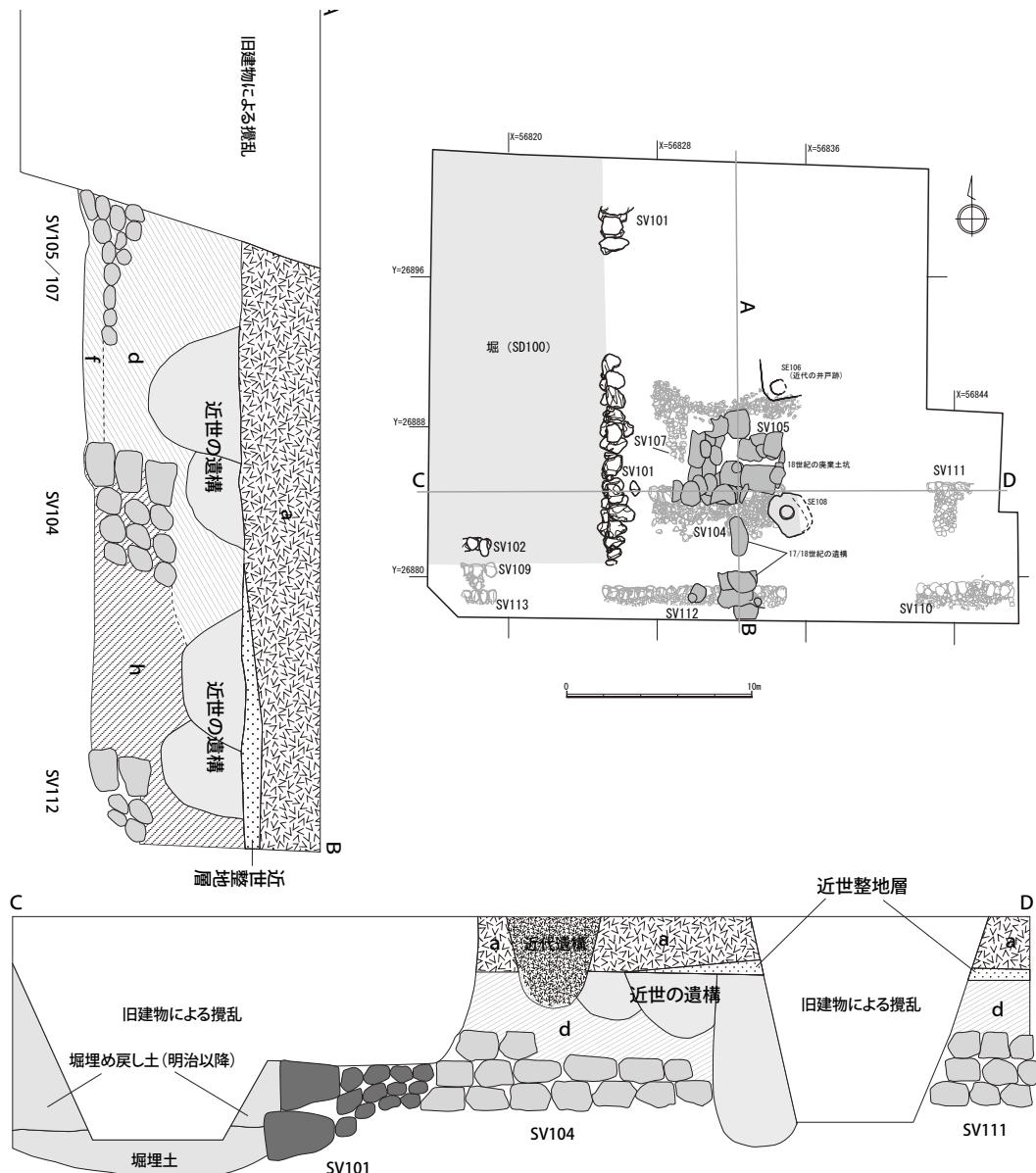
新しい方からは下記の順になると考えられる。

a:近代の整地層 明治以降、昭和35年旧医師会館南棟建設以前の整地層である。大部分を機械掘削で除去したが、一部については人力で掘削し、出土遺物はS005として取り上げをおこなった。また、この土層上から掘り込んだ近代の土坑（S016・S018）も認められる。

b:北丸内部の遺構群 a層の直下もしくは一部にみられる近世整地層の下で検出される。d層ないしh層上に掘り込まれたものである。

c:北丸西辺の石垣（SV101）およびその裏込め

- d : SV104・SV111北面および上面を埋めている砂を主体とする整地層。
- e : SV105・107 d層の下部に築かれている。d、f層と一体で施工されたと考えられる。
- f : SV104北面を埋めている砂を主体とする整地層下部。
- g : SV104・SV111
- h : SV110・SV112を埋めている整地層およびSV104・SV111の裏込め
- i : SV110・SV112



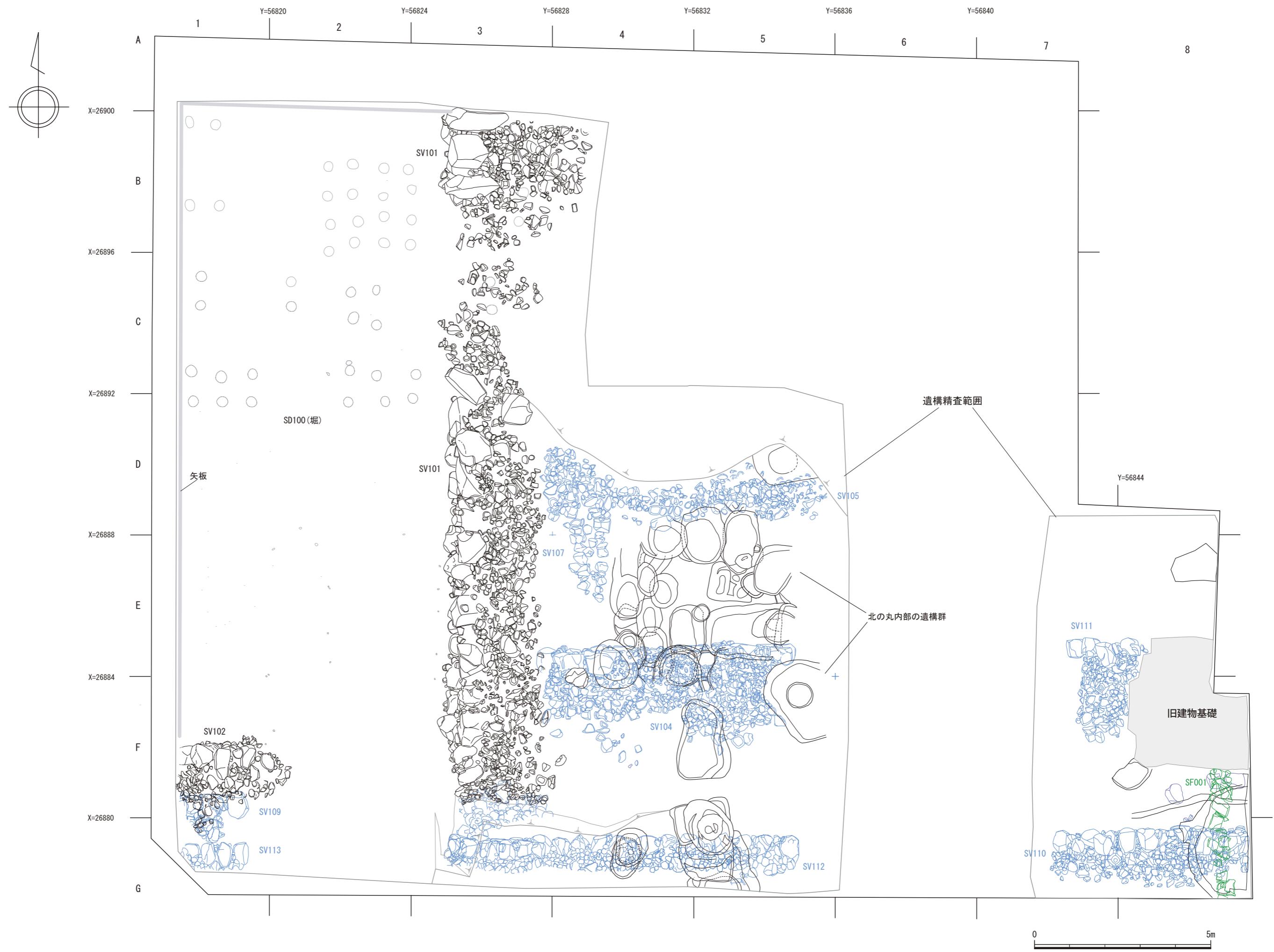
第19図 調査区内土層模式図

第2節 府内城北丸に伴う外郭遺構と出土遺物

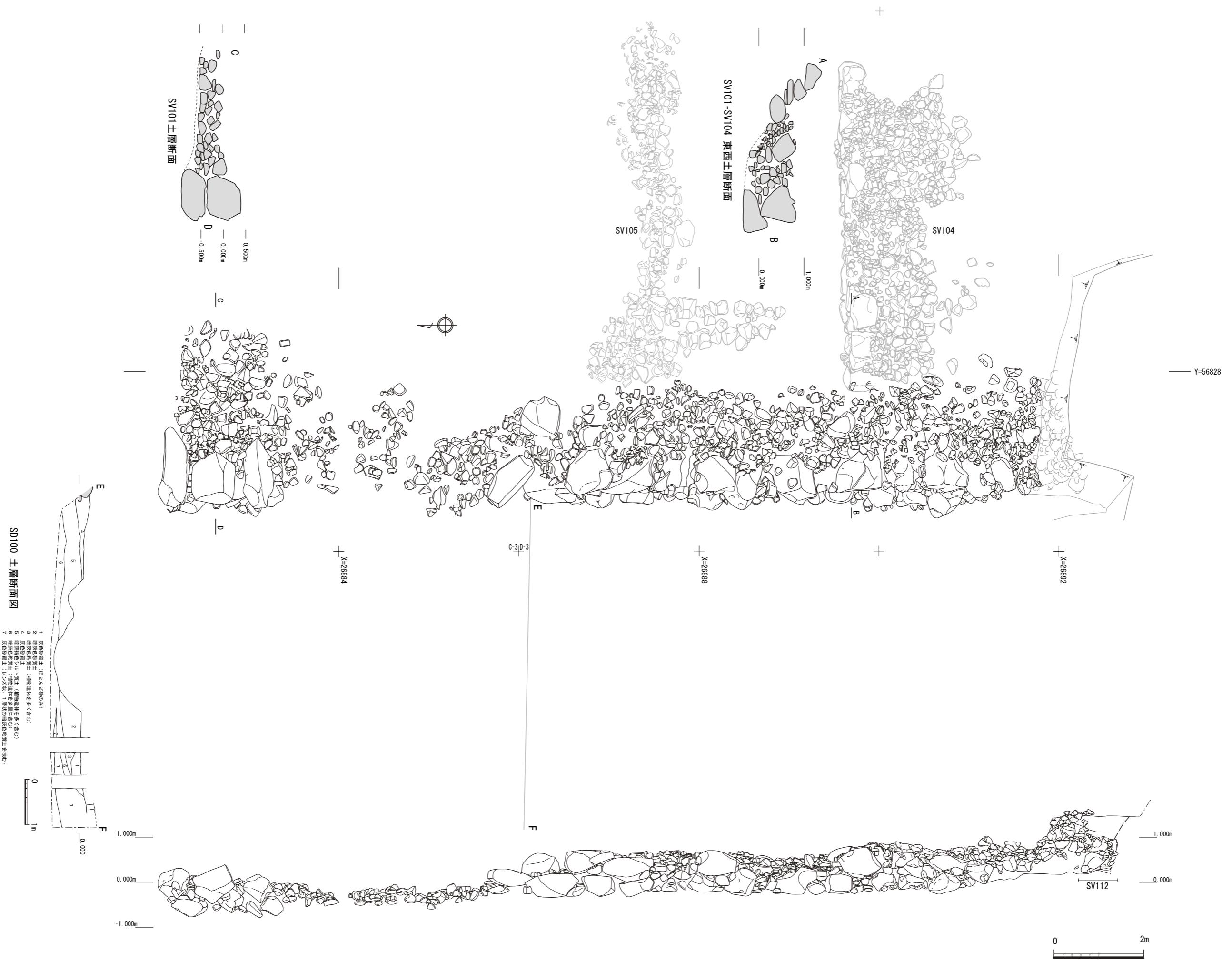
堀 (SD)

SD100 (第21図)

府内城中堀から北丸西側に短冊形に入り込んだ堀の一部に比定できるもので（第6図、第8図）、東西幅約7.5m、南北の長さ約18mにわたって検出された。この南北の長さは東西方向の石垣SV102までの長さであるが、後述



第20図 府内城・城下町跡第16次調査検出遺構平面図(1/100)



第21図 SD100・SV101平面・立面・土層断面図(1/80)

するように、より古い石垣であるSV109までと見なした場合には約19.5mとなる。

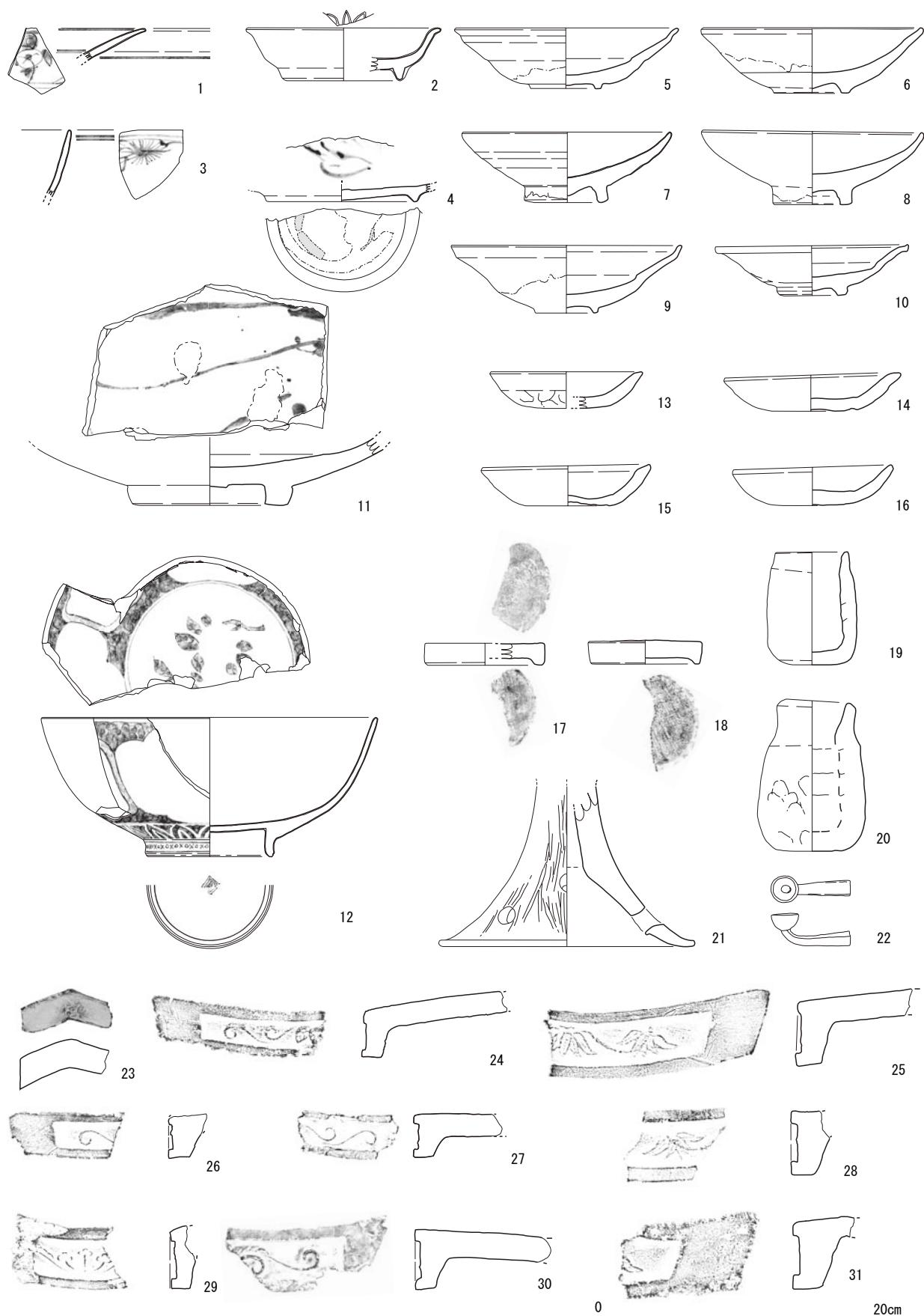
堀が検出された地点は、旧医師会館の基礎工事により掘削されて攪乱が著しく、堀内部の堆積土がプライマリーな状態で残っている部分は、石垣沿いの部分及び、調査区西端の一部に限られていた。また、調査の際、断ち割りを行うため東西方向のトレンチを複数設けて掘削する予定であったが、1箇所トレンチを掘削したところ、標高-0.5m以下に掘り下げるとき石垣SV101下面から激しい湧水が発生し、石垣基底部の土砂が急速に流出して石垣が崩壊するおそれがあるとして危険になったため、トレンチを直ちに埋め戻し、以後トレンチ掘削を断念せざるを得なかった。

堀埋土からは、1層を中心に漆器や木製品が多量に出土した。他に松の毬果（いわゆるマツカサ）も多く認められ、周辺に松の木が植栽されていたことを示している。さらにイノシシ骨やアワビ貝殻等食物残滓も出土した。特に埋土下層から胎土目段階の肥前陶器皿が出土しており、堀を掘削した時期との関連で注目されるが、湧水による危険のため、堀全体を完掘できずおらず、十分明らかにできなかった。

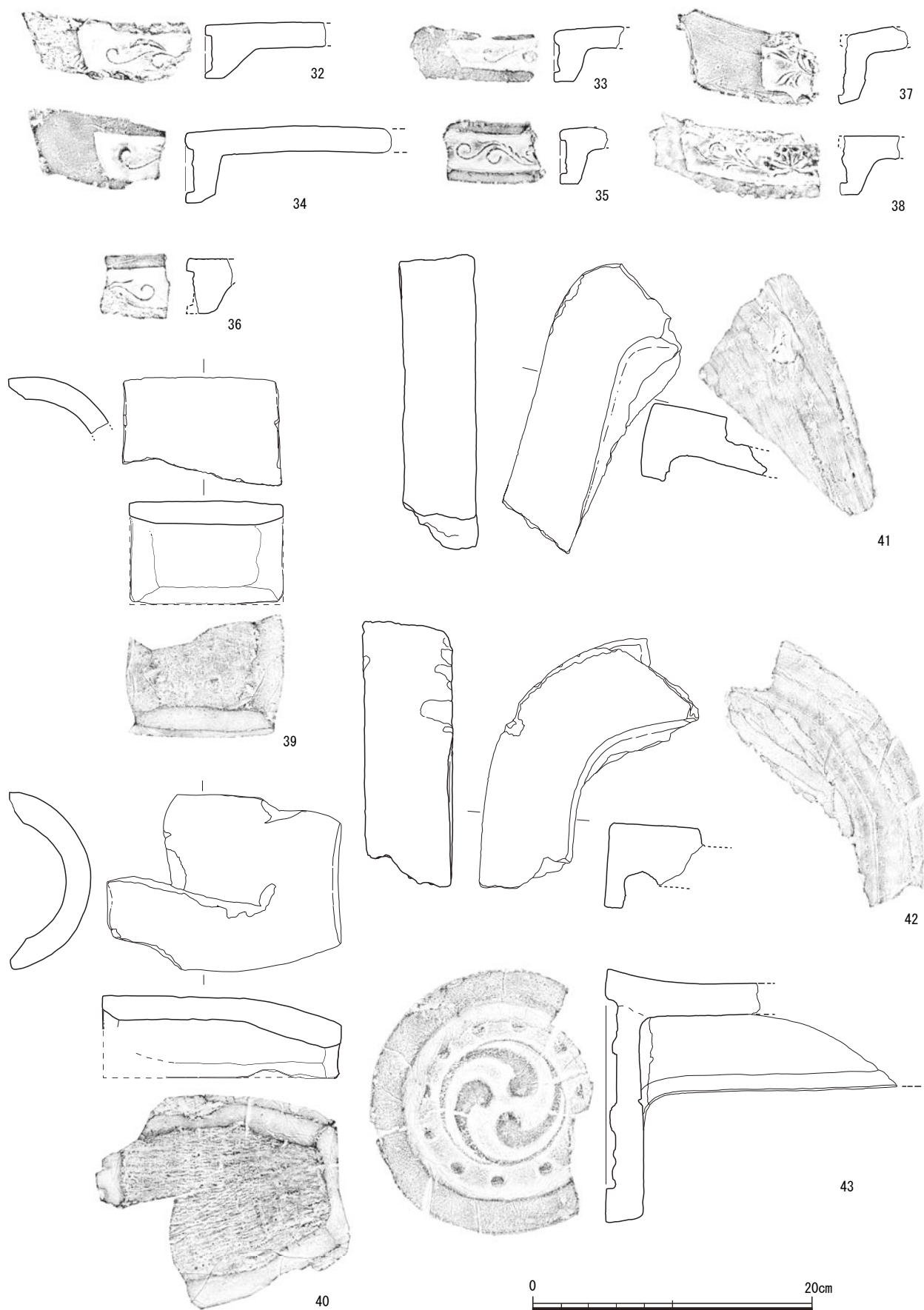
堀内部の堆積土は、自然堆積とみられる植物遺体を多く含む砂質土層と粘質土層の互層（5～7層）上に最も厚いところで40cm程度であった。中央部に攪乱があり、また、すぐに埋め戻さねばならなかったため、調査が十分ではないが、堀の中央部分は、石垣沿いよりも40cm程度深くなっていたよう、浚渫が行われたことも考えられる。

SD100 出土遺物（第22図～第24図）

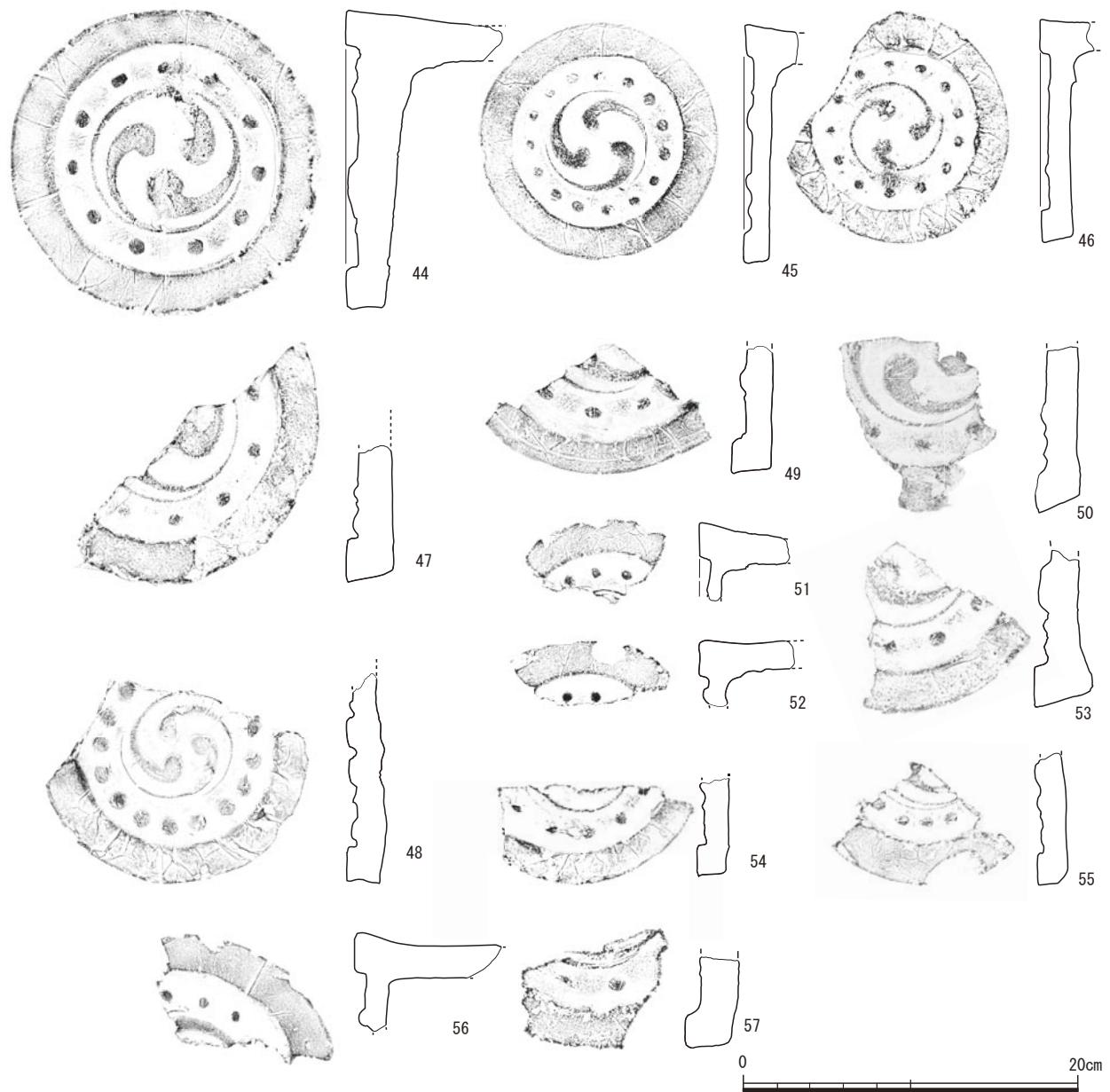
1は青花皿で、口縁部が屈曲し外方に開くF群である。2は龍泉窯系の青磁皿で、13～14世紀ごろのものとみられる。見込みにはヘラ描きで花状の文様が描かれている。漆継ぎの痕跡が認められ、骨董として伝世されていたものとみられる。3は初期の肥前染付碗、いわゆる初期伊万里で、1630年～40年代のものと推定される。4は志野向付で見込み中央に意匠不明な鉄絵が描かれている。高台内には窯道具の跡がみられる。5～9は胎土目積み段階の肥前陶器皿である。6は口縁端部のみに鉄釉が塗られている。10は砂目積みの肥前陶器皿で、いわゆる溝縁皿である。11は鉄絵を有する肥前陶器鉢、いわゆる絵唐津で、見込みには胎土目の跡が2箇所認められる。12は肥前染付鉢で、体部内外面は窓状に区画されており、色絵素地と考えられる。見込みには花卉文が描かれ、花の部分が色絵で上絵付されることを前提としているようである。17世紀末～18世紀前半頃に生産されたものと考えられるが、破損面には焼継ぎの痕跡が認められる。府内城・城下町跡では19世紀の前半以降に焼継ぎが行われているので、100年以上伝世されて焼継ぎが行われた後廃棄されることになる。残念ながら焼継ぎ文字は認められない。13～16は京都系土師器皿で、16世紀後半～17世紀初頭のものである。17・18は焼塩壺の蓋で内面に布目がみられ、17は上面に板状圧痕が確認できる。板づくりのII類に伴うものとみられ、17世紀末～18世紀中頃にかけてのものである⁽¹⁾。19・20は焼塩壺であるが、輪積み成形のI類で、17世紀前半台の製品と推定される。21は古墳時代前期の土師器高杯の脚部である。円形の透かしが2箇所確認できる。ローリングを受けてはいないが、府内城が築城された微高地の基盤層である砂層中か、整地層中に包含されていたものと思われる。22は青銅製のキセルで、鍍金されている。18世紀後半に位置づけられるものである⁽²⁾。23は桟瓦で、「宮」の刻印を有し、19世紀台に位置づけられる可能性がある⁽³⁾。24は三葉の桐葉を中心飾りとする軒平瓦で、17世紀前半台に位置づけられ、26・27も同じものである可能性がある。25は五葉の桐葉を3単位用いる軒平瓦で、17世紀前半台に位置づけられ、28・31も同じものと考えられる。29・30はいわゆる「府内城系列」の軒平瓦で、18世紀代のものである。32・35・36も同種の軒平瓦と考えられる。37は府内城三の丸でG-2類、G-3類に分類された軒平瓦に類似し、19世紀代に位置づけられるものである。38は中心飾りは「府内城系列」瓦にやや類似するが唐草文が細線彫りで形態も異なるもので、これまでに出土していないタイプのものである。39・40は面戸瓦である。41・42は鬼瓦であるが、残念ながら瓦当が欠失している。43～57は巴文の軒丸瓦である。43・44は瓦当径は約18cm、珠文の数は11個である。45は瓦当径約14cm、珠文15。46は瓦当径



第22図 SD100出土遺物1 (1/4)



第23図 SD100出土遺物2(1/4)



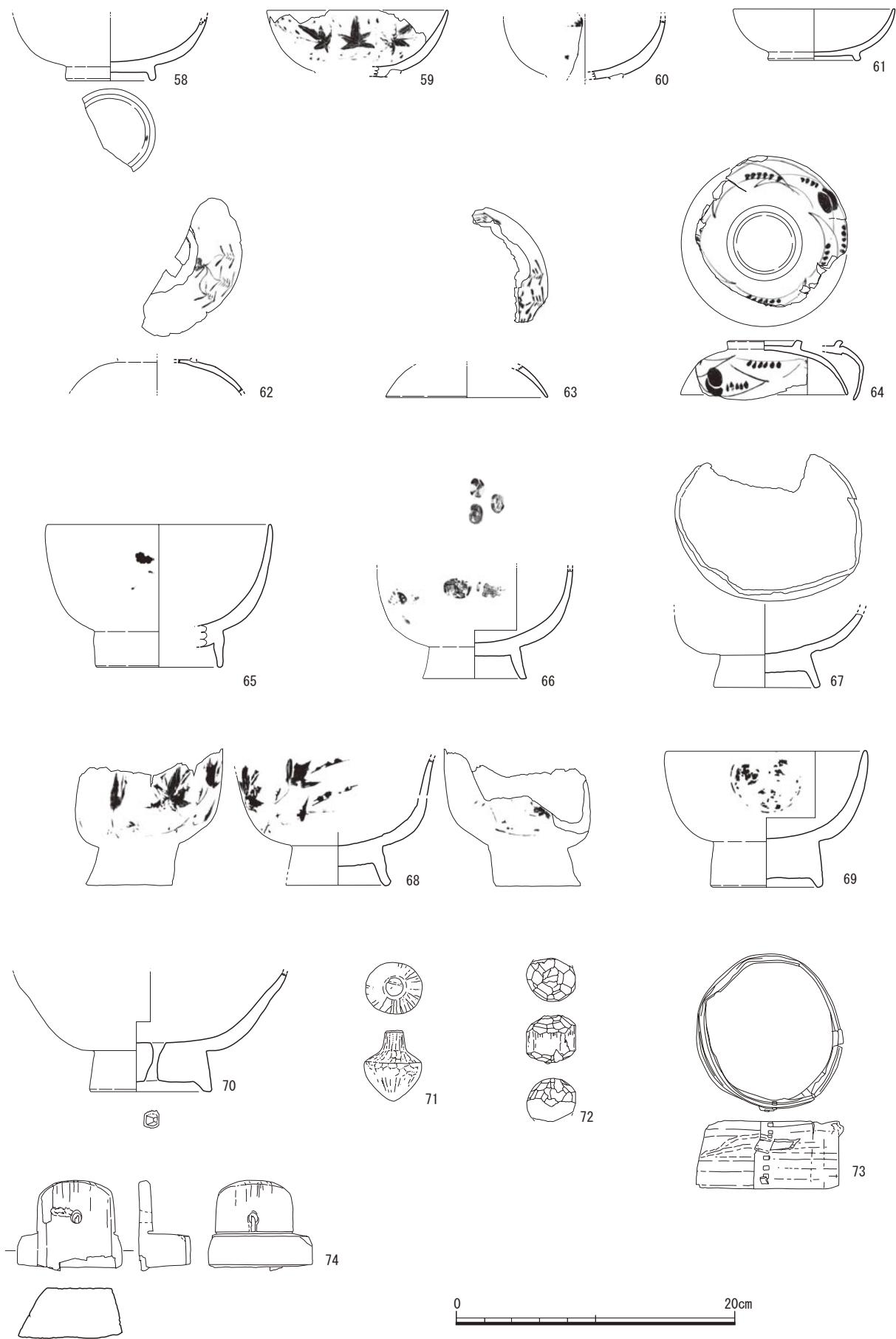
第24図 SD100出土遺物3(1/4)

約13.5cm、珠文13。48は瓦当径約15.5cm、珠文は16に復元される。

木製品（第25図）

堀埋土からは多数の木製品が出土しているが、その一部のみを図化できた、他に箸や札状の木製品、建築部材の一部等が出土している。

58～61は漆器皿である。いずれも黒漆が塗られているもので59・60は朱漆による文様が描かれている。58は高台内に朱漆が点状に付着しているが、文様を意図したものかどうか不明である。62～64は漆器蓋で、椀の蓋と思われる。いずれも外面は黒漆、内面は朱漆が塗られており、外面には朱漆により文様が描かれている。65～69は漆器椀である。67・68は土圧によるゆがみが著しい。69は他に比べて高台の削りが浅く、底部が著しく厚くなっている。いずれも内外面に黒漆が塗られており、67のみ確認できないが他は外面に朱漆により文様が描かれている。70は漆器椀で、底部に穿孔されており、何かに転用されたものと思われる。高台の削り



第25図 SD100出土木製品 (1/4)

は浅く底部は厚い。土圧によるゆがみが著しい。71は木製の独楽である。72は木を削りだして球状に加工したものである。73は曲物で、直径約11cmの小型の製品である。74は木製の下駄である。

石垣 (SV)

SV101 (第21図)

調査区西部A-3グリッドからF-3グリッドにかけて検出された石垣遺構で、南北方向に長さ19.6mにわたって検出された。西側の堀(S100)に面して築かれている。遺存高は最大で1.2m(築石2段)で最高点は標高1.5mである。B-3グリッド南半からC-3グリッドにかけては近代以降の攢乱、おそらくは旧大分県医師会館の建設に伴って築石が除去されており、裏込めも乱れている。

基底部の標高は、D-3～E-3グリッドでは-0.4mであるのに対し、南端部では約0.0mと一段高く、一方北端部では-0.7mと一段低くなっている。B-3グリッド南半からC-3グリッド付近が攢乱を受けているため明らかにできないが、この付近が後述する東西方向の石垣裏込めSV105(79ページ:第104図)との接続点付近であることから、この付近に隅角部があった段階が想定され、ここから北側が一段低く築かれていた可能性を考えられる。

築石は高崎山系の角閃石安山岩の大形の石材が主体である。最大のもので長辺1.6mにおよび、長辺1mを越えるものが多い。南端部付近にのみ凝灰角礫岩や安山岩が使用されているがこれらは長辺1m未満で比較的小形である。間詰めは高崎山系の石材と凝灰角礫岩・安山岩のいずれもみられる。築石の石材は全て自然石の角礫もしくは亜角礫・亜円礫であり、矢穴を有する等、人為的に割った痕跡のある石材は全く認められない。また、府内城三の丸北口跡では、墨書を有する石材が確認されているが、今回の調査では発見されなかった。

石積みは石材の長辺を東西に置いた小口積みによっており、横積みされたものはみられない。最下段の石(根石)は2段目に対して20～50cm前面に突き出しているものが多く認められる。

裏込めは、2段目以上の築石の東側に幅約2m認められるが、礫が主体であり、意図的に粘質土等を混入するなどの痕跡は認められなかった。裏込めの石材は長辺20cm程度かそれ以下の円礫からなる。凝灰角礫岩・安山岩・礫岩などが主体であり、高崎山系の石は少ない。

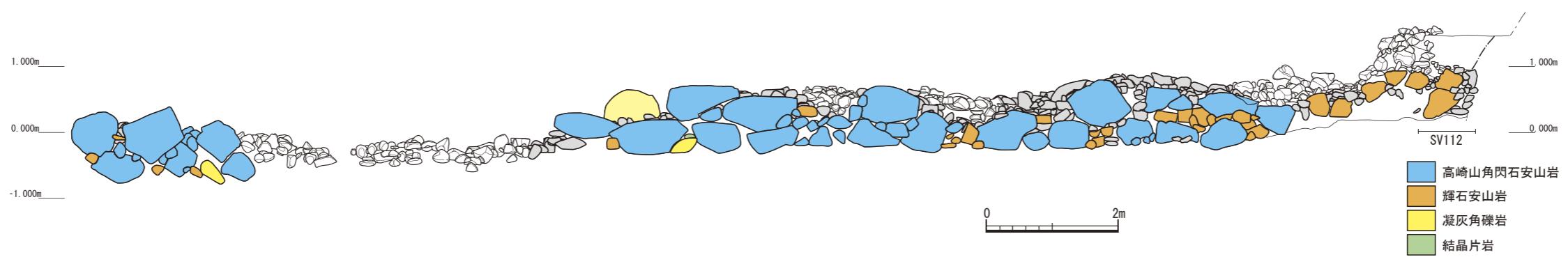
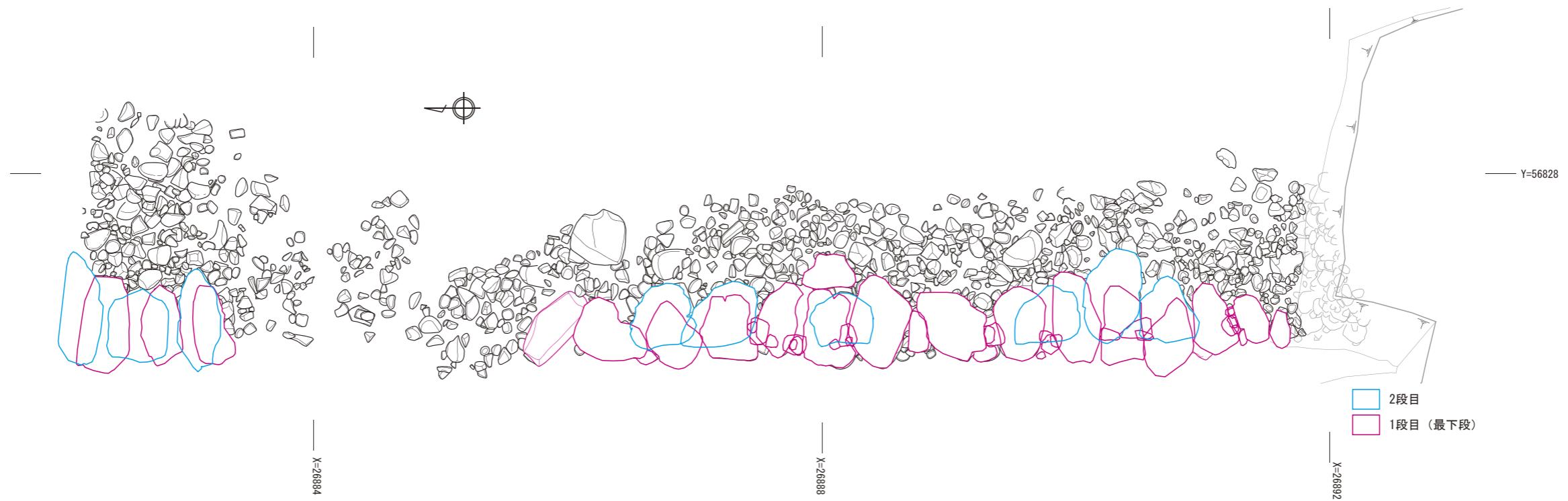
平面図を作成後、空中写真撮影を実施した後に重機を使用して、築石にワイヤーをかけてつり上げ、石垣を解体し、石垣1段目と基底部の調査を実施した。その結果、自然堆積の砂層を掘り込み、直接最下段の築石を置いており、胴木等の下部構造は認められなかった。

裏込め中から出土した遺物は17世紀初頭のものが主体である。

SV101出土遺物(第27図・第28図)

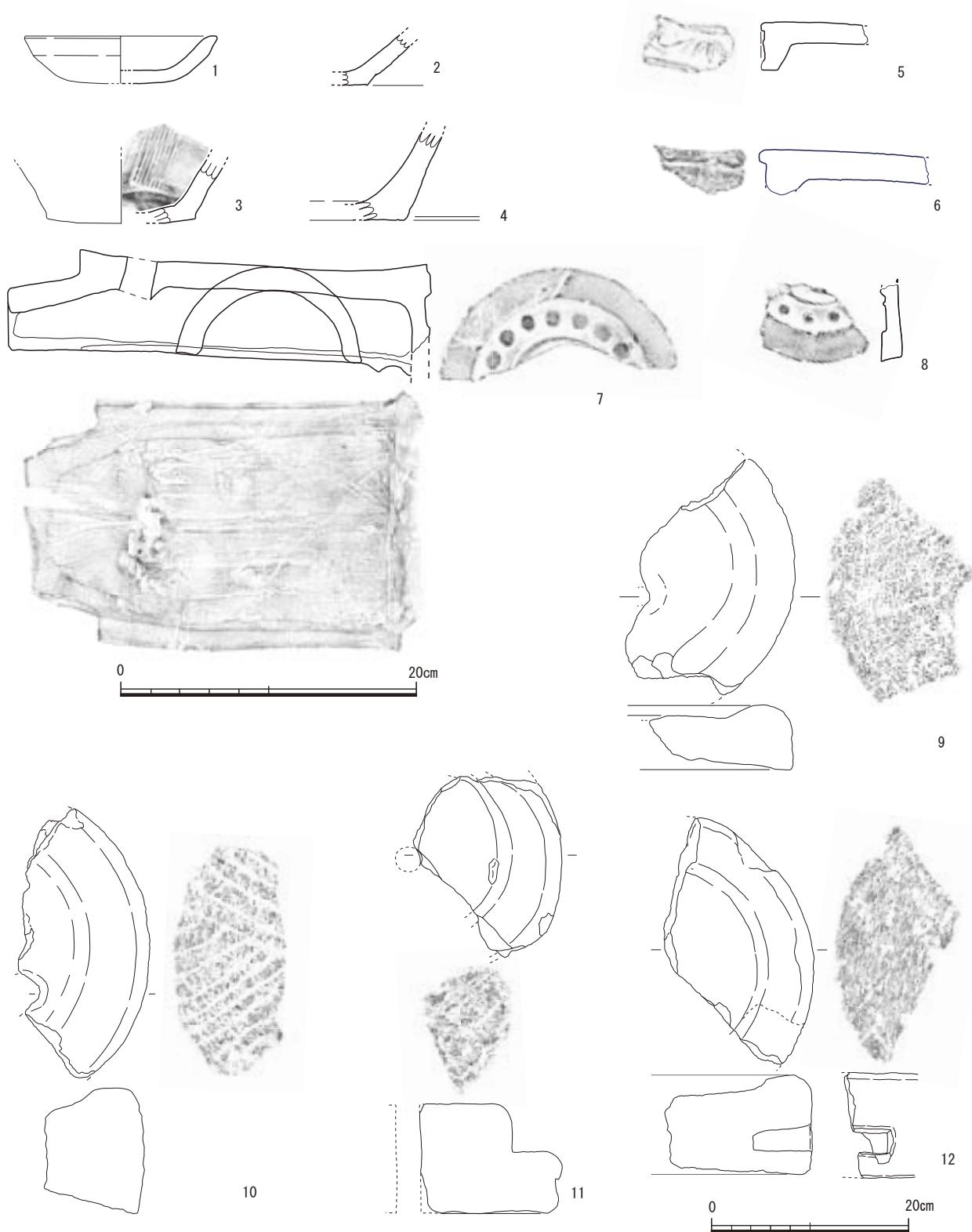
裏込めから出土した遺物である。

1は京都系土師器皿で、器厚が厚く16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。2～4は備前焼で、2は鉢、3は擂鉢、4は甕の底部である。5は三葉の桐葉を中心飾りとし、2単位の唐草を有する軒平瓦で、17世紀前半に製作されたものである。6は軒平瓦であるが、瓦当の文様は確認できない。7・8は巴文の軒丸瓦で、7は瓦当径約16cm、珠文17に復元できる。9～13は安山岩系の石材を使用した石臼で、裏込めに転用されていたものである。14は高崎山系の角閃石安山岩を使用した五輪塔の水輪で、底部には鑿跡が残る。裏込めに転用されていた。

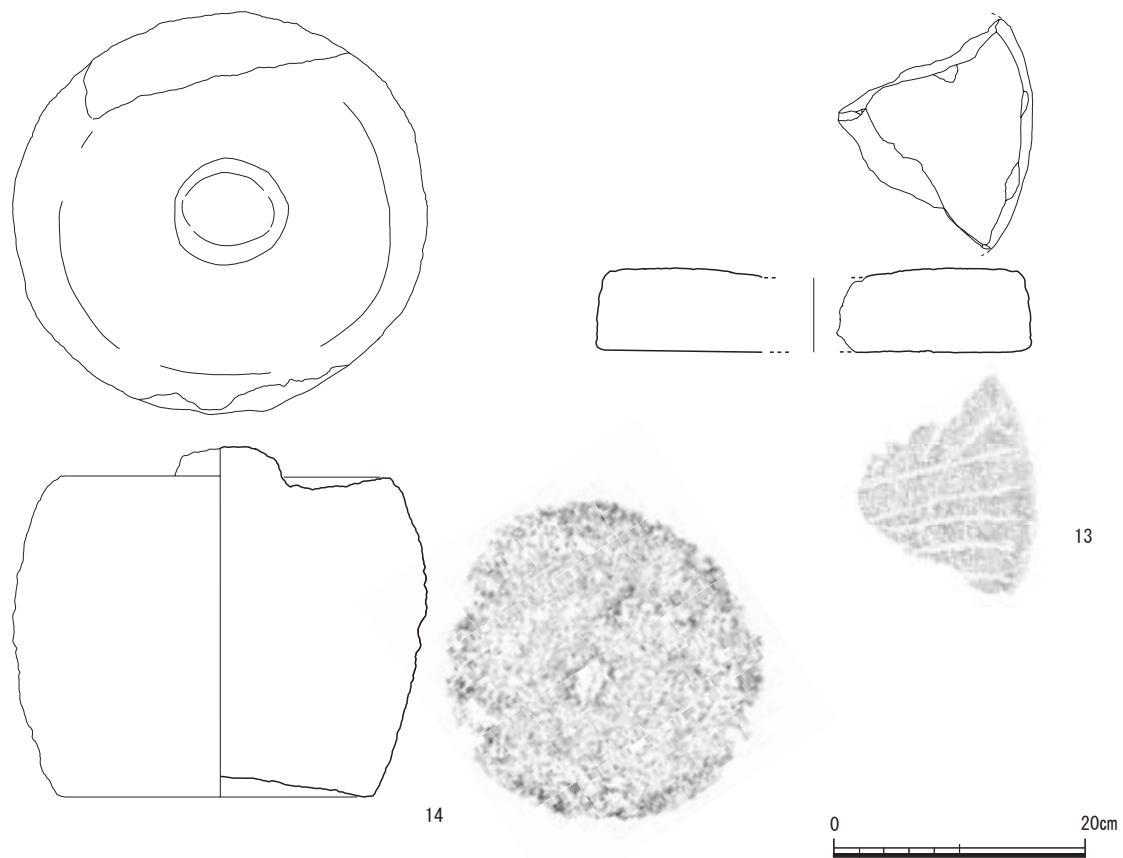


SV101全景写真(西から:合成)

第26図 SV101築石の重なり・石材構成(1/80)



第27図 SV101出土遺物1 (1/4・1/6)



第28図 SV101出土遺物2(1/6)

SV102(第29図)

調査区西端F-1グリッドで検出された石垣遺構で、東西方向に長さ1.7mにわたって検出された。北側の堀(S100)に面して築かれている。遺存高は最大で0.9m(築石2段)で最高点は標高1.1mである。本来はF-2グリッドからF-3グリッドにかけて東西方向に築かれ、SV101に接続していたものと考えられるが、大分県医師会館の建設に伴い、撤去されたと考えられる。石垣基底部の標高は、0.2~0.3mである。

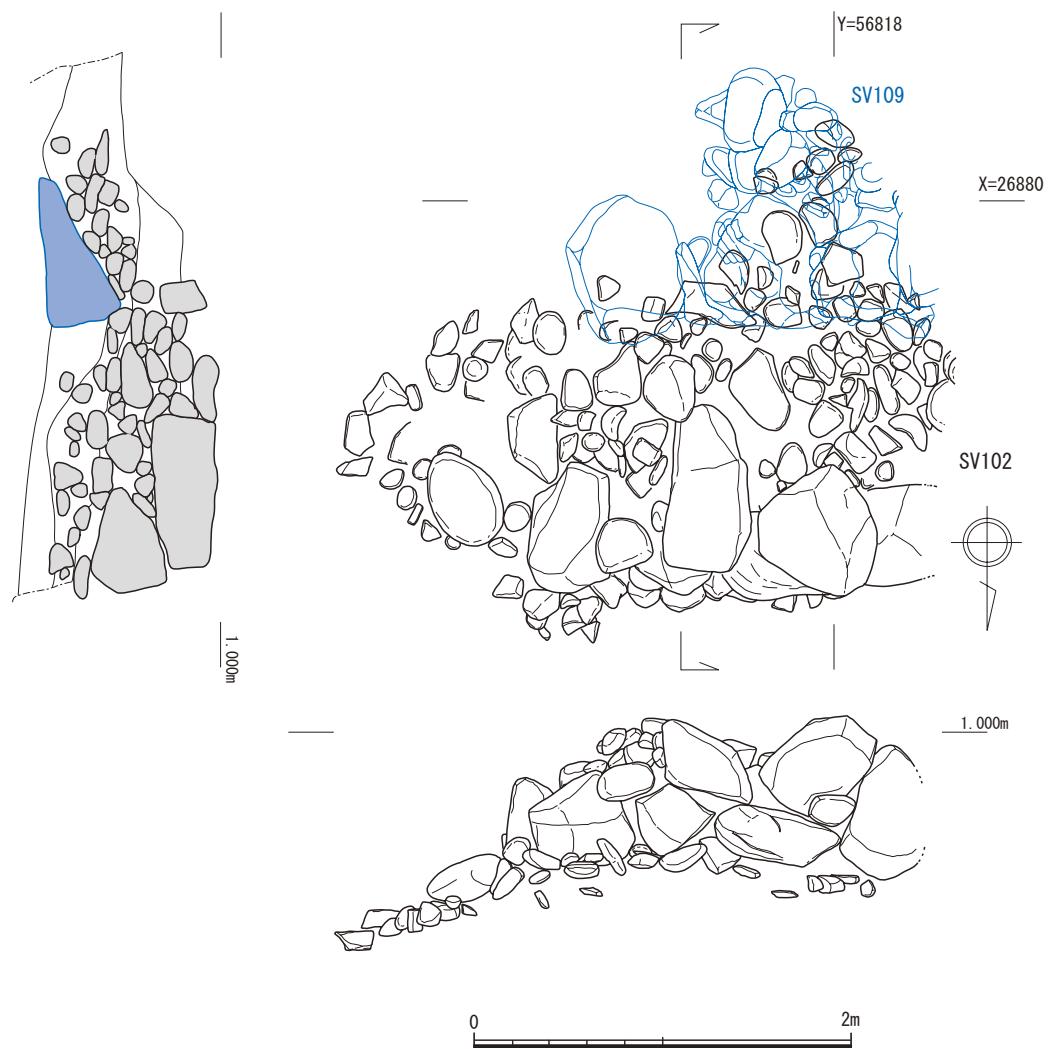
築石は最大のものでも長辺0.8mで、凝灰角礫岩もしくは安山岩が使用されている。これらの石材は全て自然石の角礫である。

石積みは横積みされたものや縦方向に積まれたものがみられ、明らかに17世紀初頭の他の石垣とは異なる積み方である。南北断面でみると、SV102の南側で検出されたより古い段階の石垣SV109の基底部よりも10~20cm高い位置に基底部があり、堀に堆積した砂層の上に若干の栗石を敷き、その上に石を積んでいることが分かる。裏込めは、築石の南側に幅約0.8m認められる。SV109の築石上にも裏込め石がみられるが、これはSV102に伴う裏込めではなくSV109解体・埋め戻しに伴うものと考えられる。裏込めは長径30cm程度のものを最大とする円礫を主体とし、砂質土を交えたものであるが粘質土等を意図的に混入するなどの痕跡は認められない。

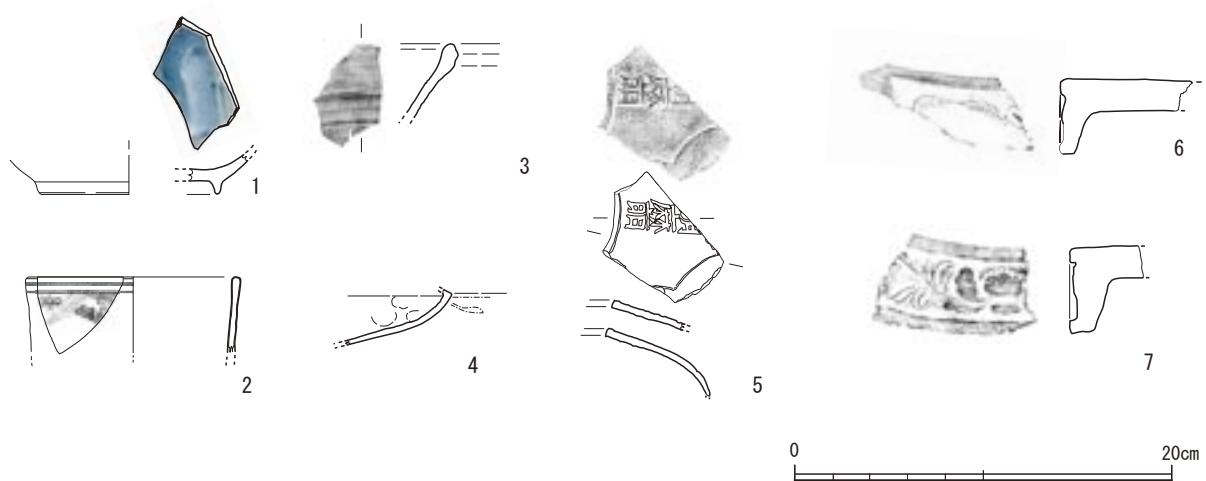
裏込め中から出土した遺物は18世紀後半~末以降のものが認められ、当該期以降に堀の堆積土上に積み直された石垣であると判断できる。

SV102出土遺物(第30図)

裏込めから出土した遺物である。1は肥前染付皿である。2は肥前陶胎染付香炉である。3は陶器擂鉢で、口クロ成形で薄い鉄釉が掛かる。福岡産と思われる。4・5は関西系陶器と思われるもので、合わせ型により成形



第29図 SV102 平面・立面・土層断面図 (1/40)



第30図 SV102 出土遺物 (1/4)

された胡麻煎りである⁽⁴⁾。5の外面には黄褐色の透明釉が掛かる。「□（胡カ）麻萌」と陽刻されている。4は底部で無釉である。6・7は軒平瓦で、7は6葉の花卉文を中心飾りとする府内城三の丸におけるG類で、19世紀代に位置づけられる。

SV109 (第 31 図)

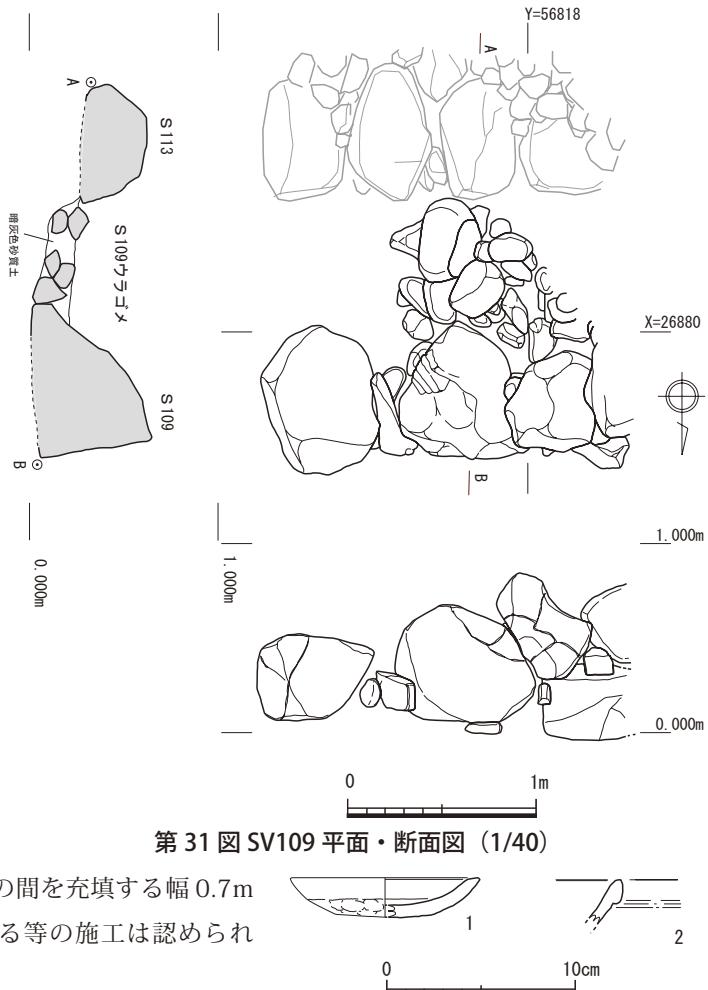
SV102 の南側に位置する東西方向の石垣遺構で、SV102 裏込めの下層で長さ約 2.0m にわたって検出された。北側の堀 (SD100) に面して築かれている。遺存高は最大で 0.8m (築石 2 段) で最高点は標高 0.85m である。おそらく SV102 と同様に SV101 に接続していたものと考えられる。基底部の標高はほぼ 0.0m であり、SV102 の基底面より 20~30cm 低い。また、南側で検出されたより古い段階の石垣 SV113 の基底部よりも 10~20cm 低く、SV112 前面の自然堆積層を掘り下げて直接石を積んでいることが観察された。一方、SV101 南端部の基底部標高と比較した場合、ほぼ一致していることから、同時期に築造された可能性が考えられる。

築石は最大のもので長辺 0.8m で、凝灰角礫岩もしくは安山岩が使用されており、石材は全て自然石の角礫である。石積みは小口積みがされていることが観察できる。裏込めは SV113 との間を充填する幅 0.7m 程度の範囲で検出されている。粘質土を混入する等の施工は認められない。

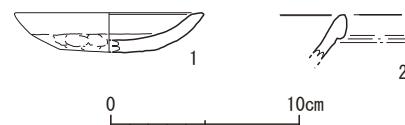
SV109 出土遺物 (第 32 図)

裏込めから出土した遺物である。

1 は京都系土師器皿で、16 世紀後半~末頃に位置づけられる。2 は口縁部が玉縁となる白磁碗で 12 世紀後半代の所産である。



第 31 図 SV109 平面・断面図 (1/40)



第 32 図 SV109 出土遺物 (1/4)

第 3 節 府内城北丸内部の遺構と出土遺物

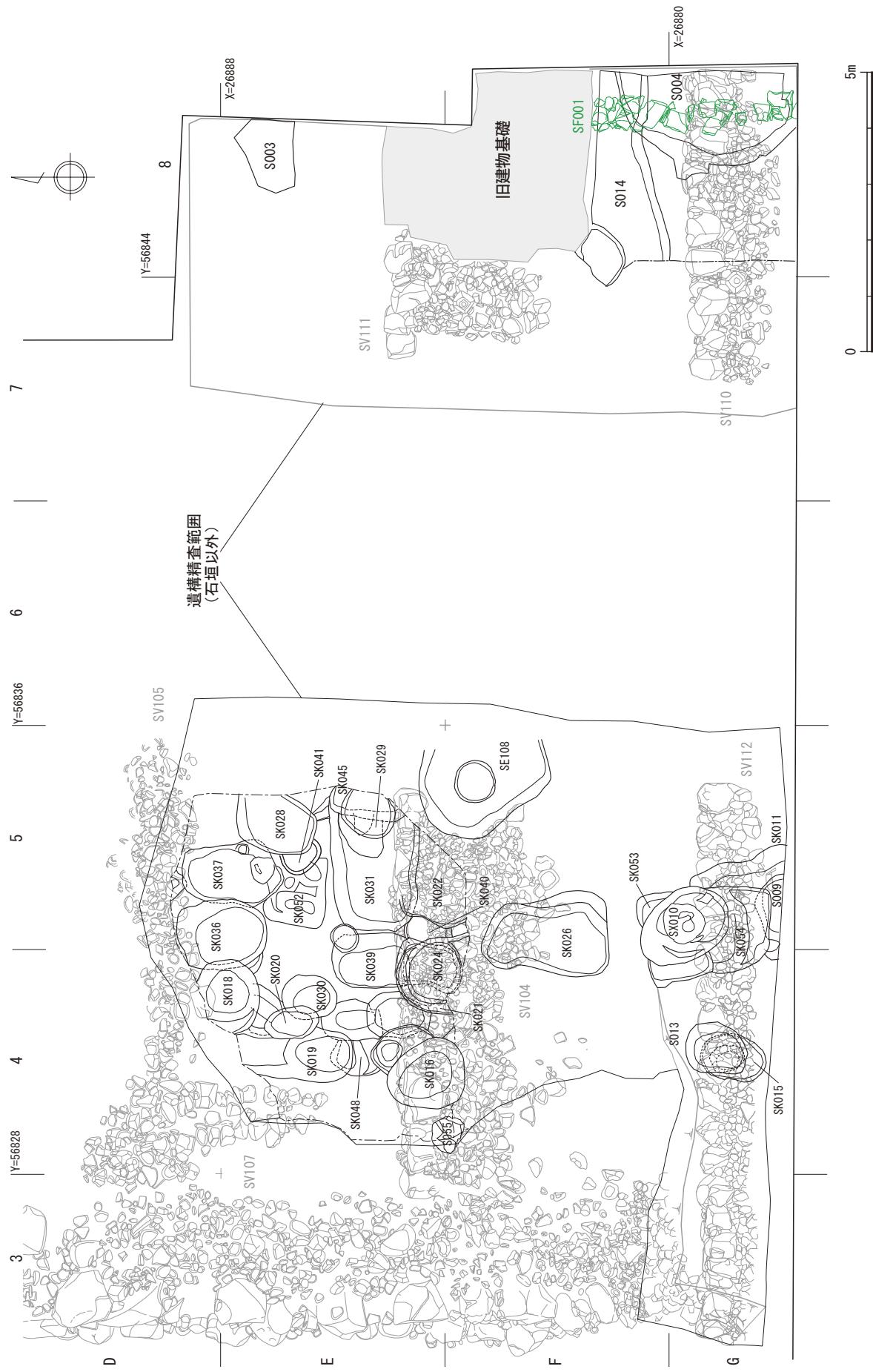
府内城北丸内部に比定される位置で検出された遺構群で、第 1 次の本調査において SV101 東側に位置する調査区中央部および調査区南東端で検出された (第 33 図)。調査区中央部では廃棄土坑や井戸跡が検出されたが、調査区南東端では、石列が検出された。これらの遺構群は近代の整地層直下で検出されたが、一部は近代の整地層直下に薄い近世の整地層 (S008) があり、この直下で検出されたものである。これらは砂層もしくは砂を主体とする砂質土を基盤面として掘り込まれていたが、遺構の調査中にはこれを自然堆積による地盤であると判断していた。しかし、この土層は第 4 節で説明するように、府内城築城直後に遡る整地層であることが第 2 次本調査で明らかとなった。なお、調査区南東端部では石列の他には明確な遺構は検出されなかった。

石列 (SF)

SF001 および周辺整地層 (第 34 図、土層図 : 第 35 図)

調査区南東端で検出された石組み遺構で、阿蘇溶結凝灰岩の板状の割石が、並べて埋置されたものである。南北方向に長さ 3.6m にわたって検出された。石上面の標高は約 2.2m で、SV110 東壁の土層観察によれば 8 層：

第33図 北丸内部の遺構配置図（1/100）



暗褐色シルト層中に位置づけられる。遺物が出土していないため年代の推定が困難であるが、整地層中の土層の1単位と考えられるS014出土遺物からは18世紀後半以降に比定される。

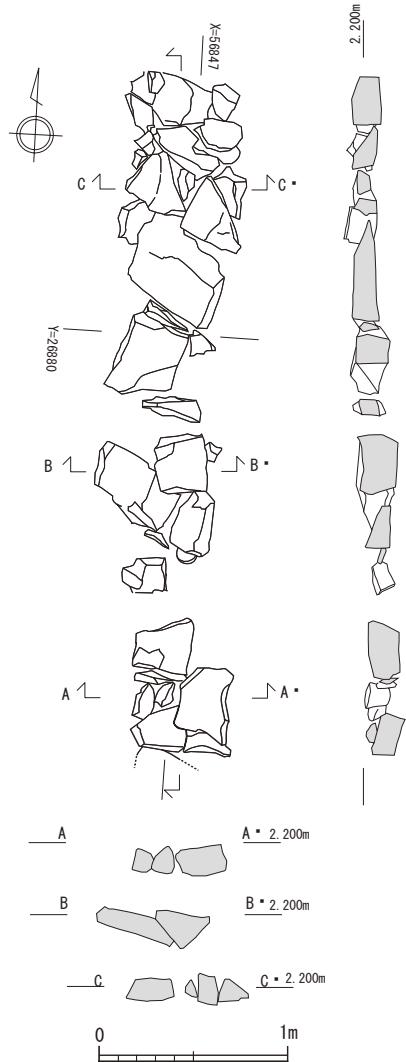
なお、SF001を撤去した後に遺構検出を繰り返しながら掘り下げを行った結果、浅い落ち込みと見られる遺構S004およびS008が検出されたため遺構として掘り下げを行ったが、壁面の土層観察の結果、近世に行われた部分的な整地の1単位と考えられると判断された。第4節で後述するが、SV110を基底部を残して撤去した後に、土砂が投入されて埋め立てられた土層（第15層～第26層）の上に、18世紀以降に薄く整地が行われた際の土層と推定される。明確な掘り込みを有する遺構は検出されなかった。なお、遺構プランと認識した部分以外から出土した遺物についてはS004として取り上げている。

整地層S004出土遺物（第36図）

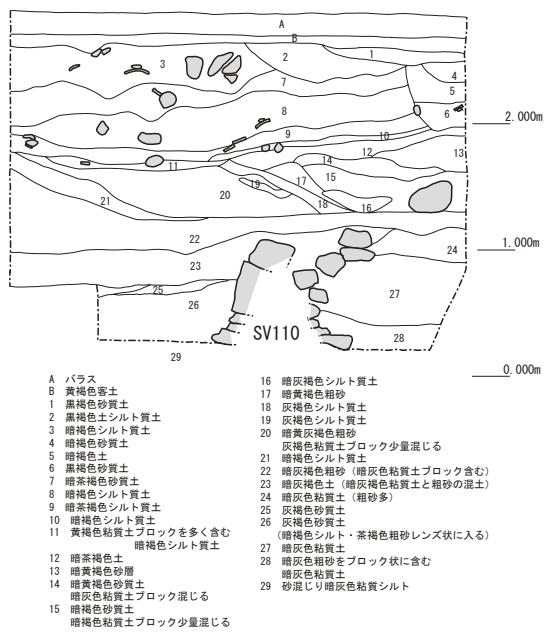
1は肥前陶器である。焼成が不良で貫入の著しい釉が掛かる。2には胎土目を有する肥前陶器で目跡が認められる。3は焼締陶器もしくは施釉陶器の無釉部と考えられ、鉢もしくは香炉と思われる。4、5は土師器で、いずれも口クロ成形のものである。6は焼塙壺の蓋である。7は備前焼もしくは堺産焼締陶器擂鉢である。8は安山岩製の石塔片で、相輪である。9は土製の人形で布袋像である。10は平瓦で小口面に「惣左」⁽⁵⁾の刻印が認められ、17世紀末～18世紀初頭のものと推定される。11は中心飾りが3葉の桐葉文の軒平瓦で、17世紀初頭の所産である。12は5葉の桐葉文3単位を瓦当とする軒平瓦で、17世紀前半のものか。15・16は丸瓦で、いずれも鉄線引き（コビキB）⁽⁶⁾により製作されたものである。

整地層S014出土遺物（第37図）

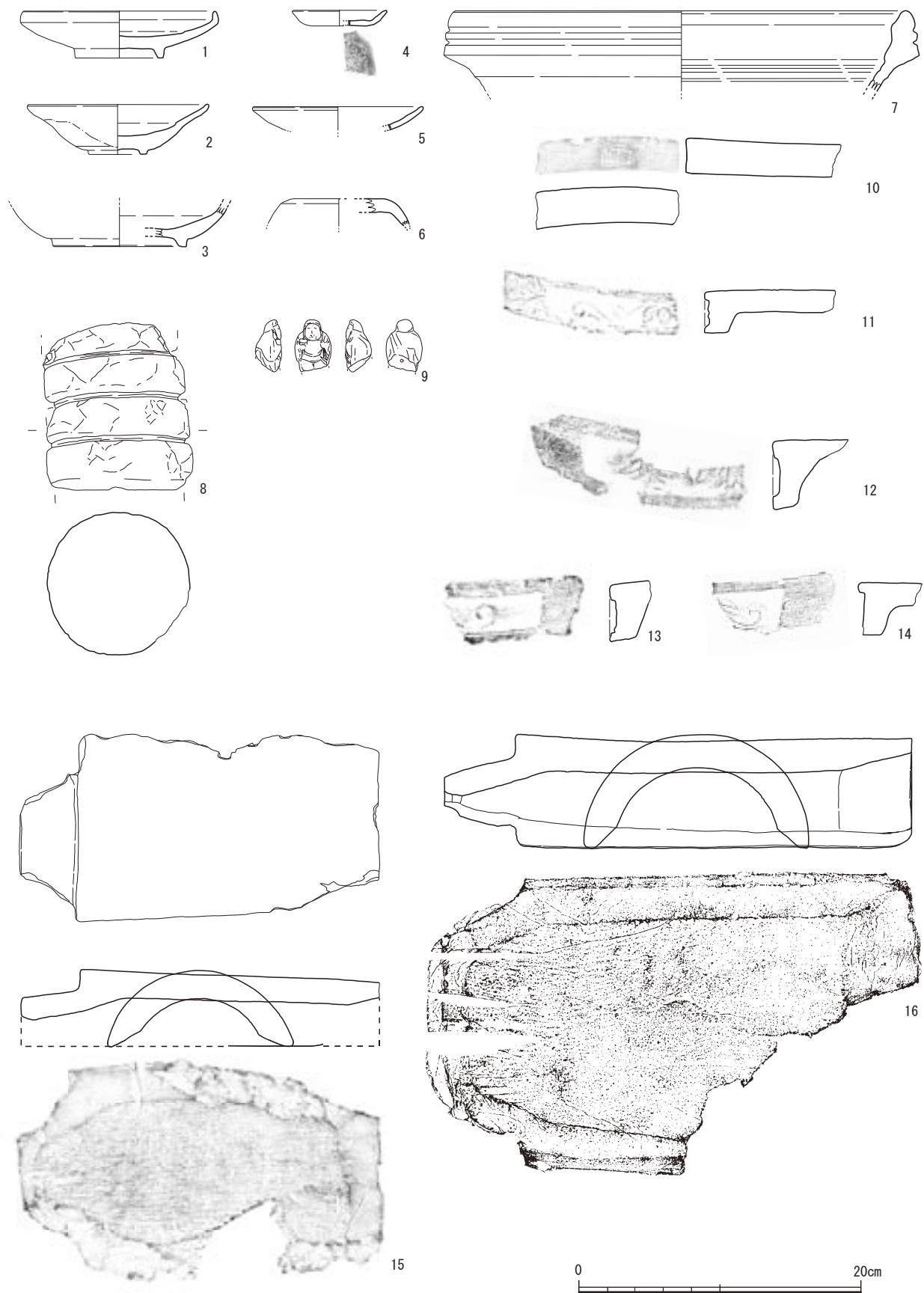
1は染付碗で、17世紀後半代に比定されるものと思われる。2は志野向付片で、厚く貫入の著しい白濁した釉が掛かる。見込みに1箇所の目跡が残る。3は肥前陶器皿で僅かに鉄絵が見られる。目跡は全体に焼成が不良で、釉は白泥状となっている。目跡は認められない。17世紀前半代と推定される。4は16世紀後半の手づくね成形土師器小皿である。5は内野山系の陶器皿で、見込を蛇目釉剥ぎし、青緑色と褐色の釉を掛け分ける。6は鰐瓦片で弧線をスタンプして鱗が表現されているものである。7は備前焼大甕口縁部で、肩部外面には「一石入 吉」と刻書されている。16世紀末～17世紀初頭頃のものと推定される。8は軒平瓦で、瓦当文様は丸みの強い唐草文で、中心飾りは不明である。瓦当の接合部分が厚く、中世瓦と推定される。9は中心飾りに花文様を有するいわゆる「府内城系列」の軒平瓦であり、18世紀代に比定される。



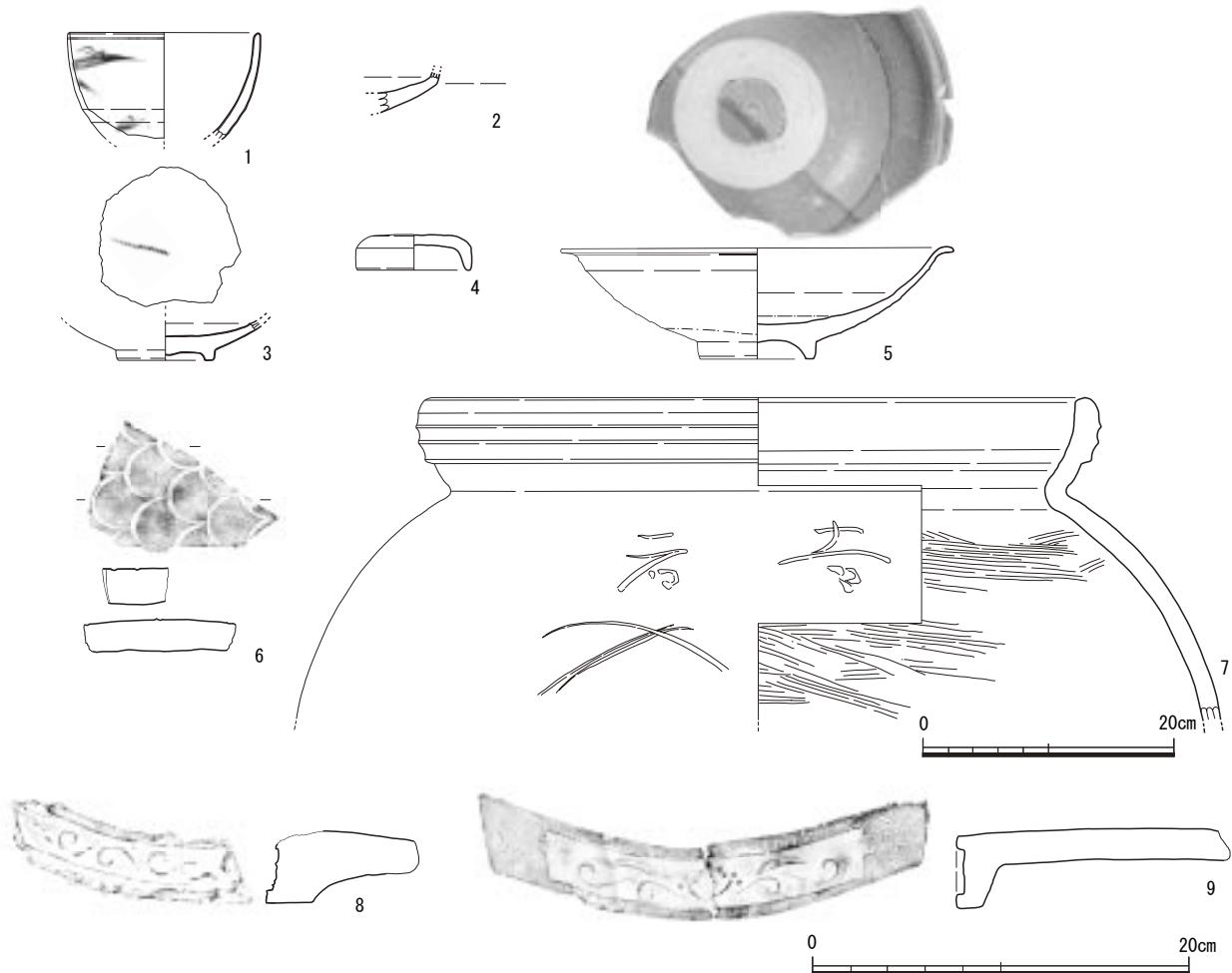
第34図 SF001 平面・断面図 (1/40)



第35図 SF001 東壁面土層図 (1/60)



第36図 S004出土遺物 (1/4)



第37図 S014 出土遺物 (1/4・1/6)

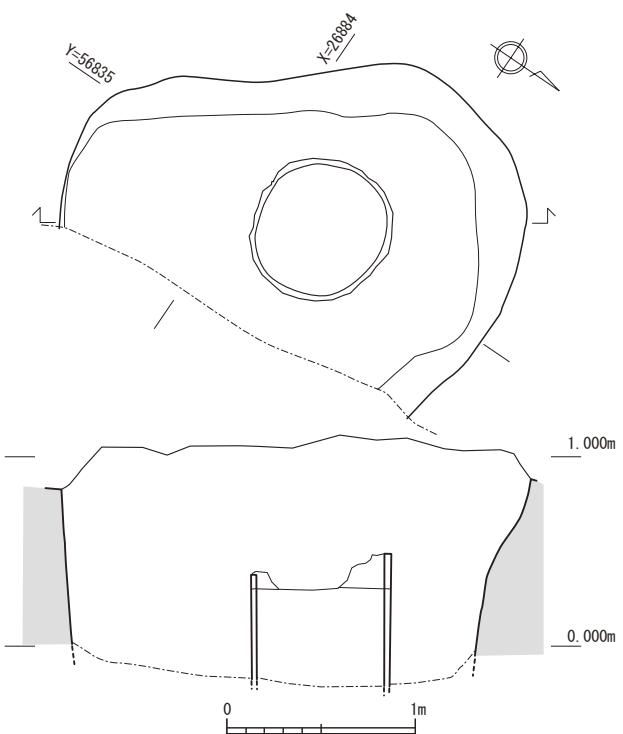
井戸 (SE)

SE108 (第38図)

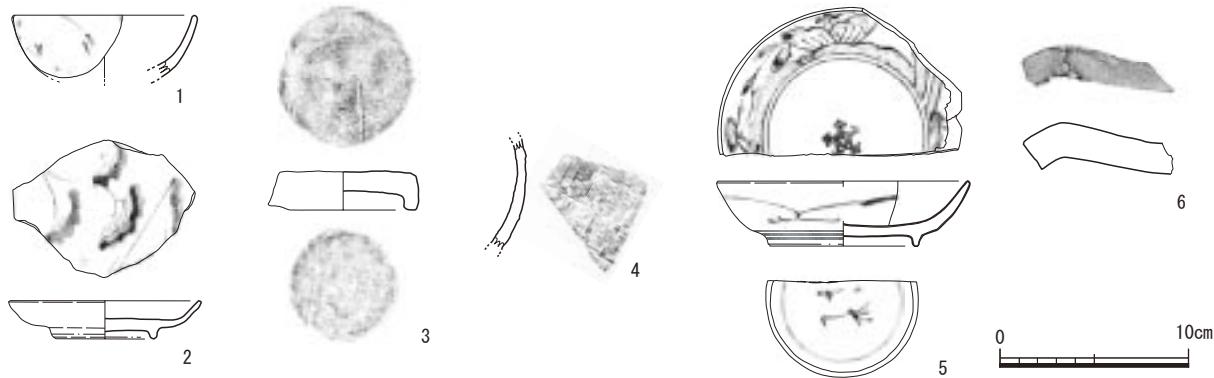
SV104 の裏込め部分を切って掘り込まれている遺構で、長軸 2.5m、短軸 1.9m (+ α) の楕円形状の掘り込みに直径 0.7m の瓦質の井筒を埋設したものである。井筒は標高 -0.2m 以下にまで及んでいるが、SV104 が崩落する危険が増したため、掘り下げを断念した。井筒内には竹筒が立てた状態で埋められており、井戸廃絶時の儀礼と考えられる。井筒内から出土した遺物のうち最も新しいものは、19世紀中葉に下る可能性があり、廃絶時期がこの時期以降になる可能性が示唆される。

SE108 出土遺物 (第39図)

1～4 はウラゴメから出土したものである。1 は染付碗、2 は染付皿で 18 世紀前半代のものである。3 は焼塩壺蓋で、内面側には布目跡がみられる。4 は型押し成型による松葉文を有する瓦質土器羽釜と思われる。5・6 は井筒内から出土したものである。5 は染付皿で、見



第38図 SE108 平面・断面図 (1/40)



第39図 SE108出土遺物 (1/4)

込みにコンニャク印判の五弁花が押されており、高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。18世紀中頃～後半と思われる。6は棟瓦の平瓦で、「宮」字の刻印を有する。19世紀中葉に位置づけられる可能性がある。

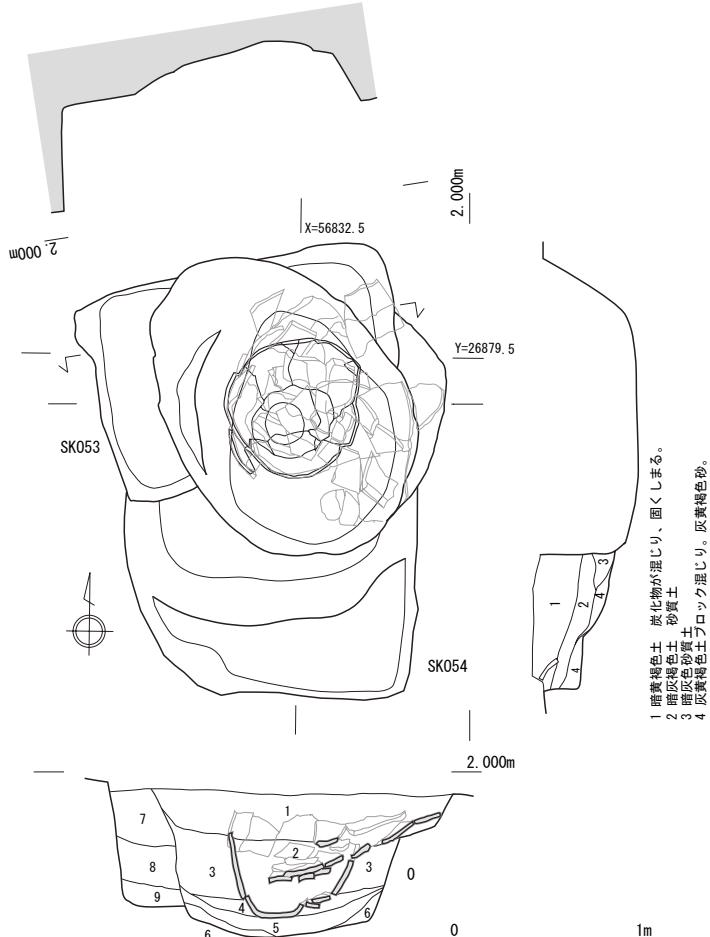
大甕埋設遺構 (SX) および関連遺構

SX010・SK053・SK054 (第40図)

F-5グリッドで検出された土師質土器大甕を埋設した遺構である。長軸約1.7m、短軸約1.2m、深さ約0.8mの橢円形状の掘り込みの中に土師質大甕を埋設している。検出時には、破損した大甕上半部が大甕内部に崩落した状態であったが、ほぼ1個体分の破片が遺存しており、遺構廃絶時に破碎されて埋められた可能性が考えられる。しかし、これ以外に底を抜く等の行為は行われていなかったようである。

大甕を撤去して、甕が埋設されていた土坑をさらに掘り下げたところ、最下層から焼塩壺や陶磁器、硯等の遺物が出土した。(第41図)これらの遺物は、大甕直下の5層から出土したもので、最も新しいもので1640年代に位置づけられるものである。大甕内部あるいは3層以上から出土した遺物は18世紀代に下るものであり、下層の遺物とは年代的な開きがある。このため、下層出土遺物はSX010に先行する遺構SK053・SK054に帰属する可能性が高いものと考えられる。

SK053・SK054はSX010に切られている方形の土坑で、SK054→SK053の順に掘り込まれたものである。SX010最下層から出土した遺物群がこれらの土坑に帰属していたとした場



第40図 SX010・SK053・SK054平面・土層断面図 (1/40)

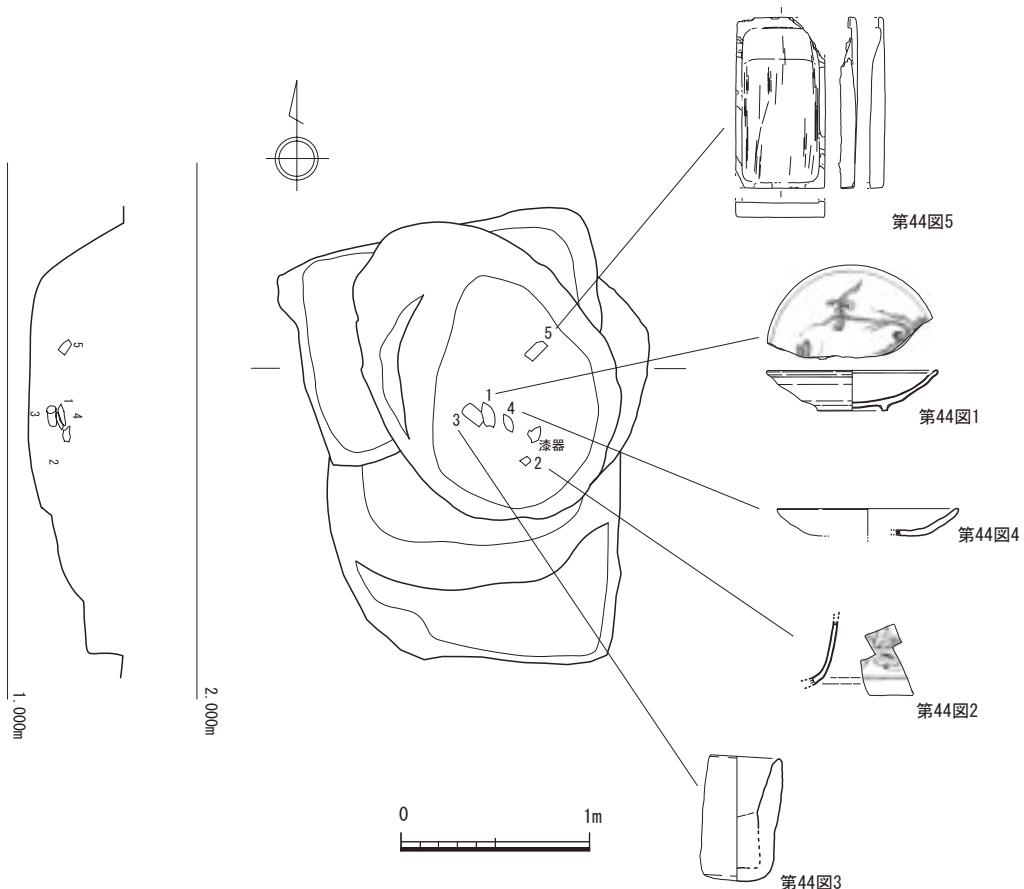
合、遺構の年代は 17 世紀中葉頃に位置づけられる可能性がある。

SX010 出土遺物（第 42 図～第 43 図）

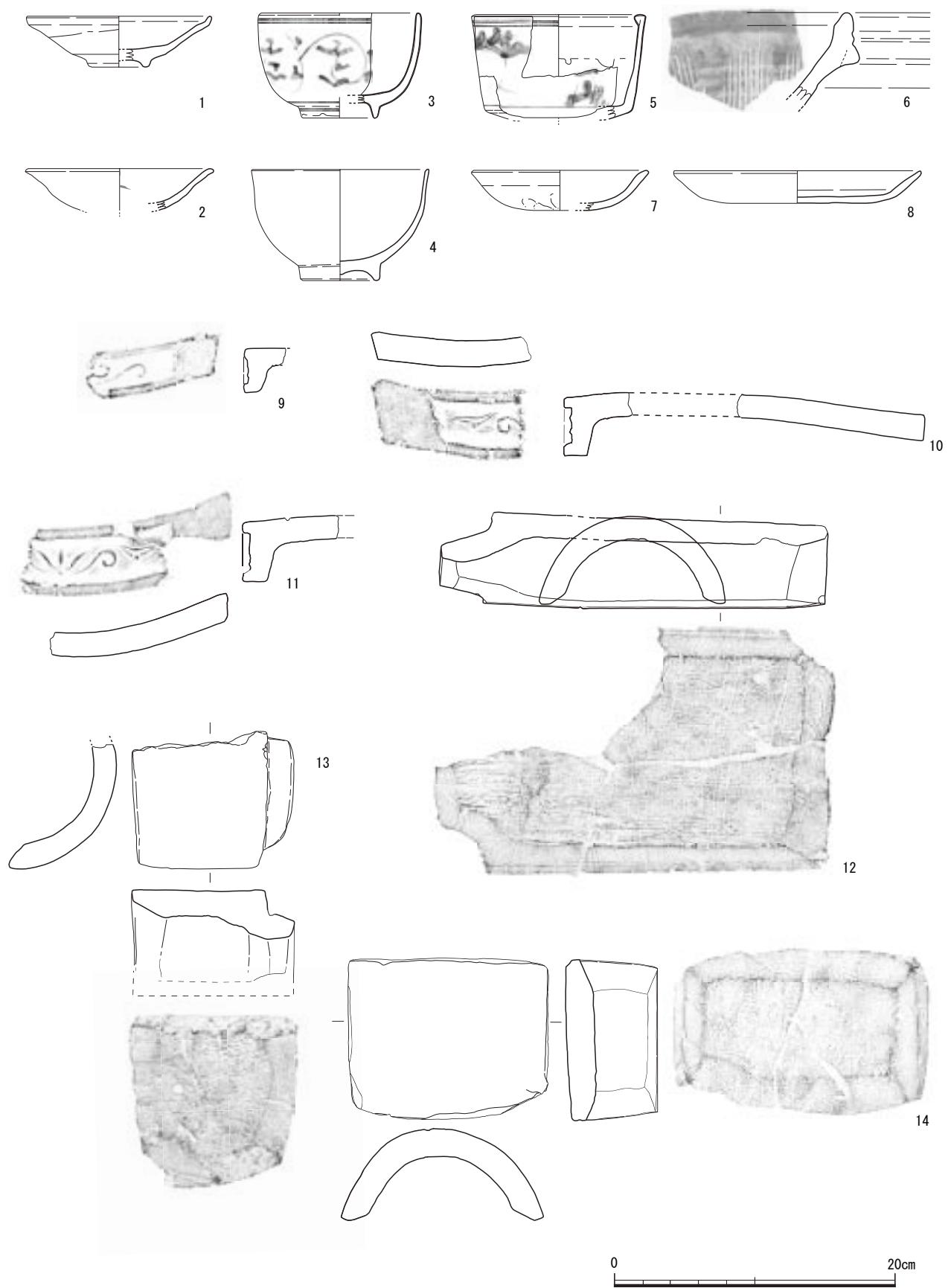
1 は砂目積みの肥前陶器皿で、見込みに 1 箇所目跡が残る。灰色の釉が掛かる。2 は肥前陶器皿で、わずかに鉄絵が認められ、いわゆる絵唐津と思われる。4 は黄白色を呈する肥前陶器碗で高台はアーチ形で砂目跡が 3 箇所認められる。17 世紀前半に位置づけられる。3・5 は陶胎染付で、3 は碗、5 は香炉である。18 世紀前半代に位置づけられる。6 は備前もしくは堺産の擂鉢である。7・8 は手づくり成形の京都系土師器皿で、16 世紀中頃に比定されるもので、遺構の基盤となる SV104 廃絶後の整地層に含まれていたものであろう。8 は口径 17 cm に復元される大型のものである。9～11 は軒平瓦である。10・11 は 1 単位の唐草に飛唐草を加えたもので、17 世紀代に位置づけられる可能性がある。12 は丸瓦で、内面には鉄線引き痕が認められる。13～19 は全長が短く、小型の面戸瓦である。斜めに切られたもの（13・15）も認められる。20 は SX010 に埋設されていた土師質土器大甕である。口径 70 cm、高さ 95 cm に復元される大型のものである。

SX010 下層・SK052 出土遺物（第 44 図）

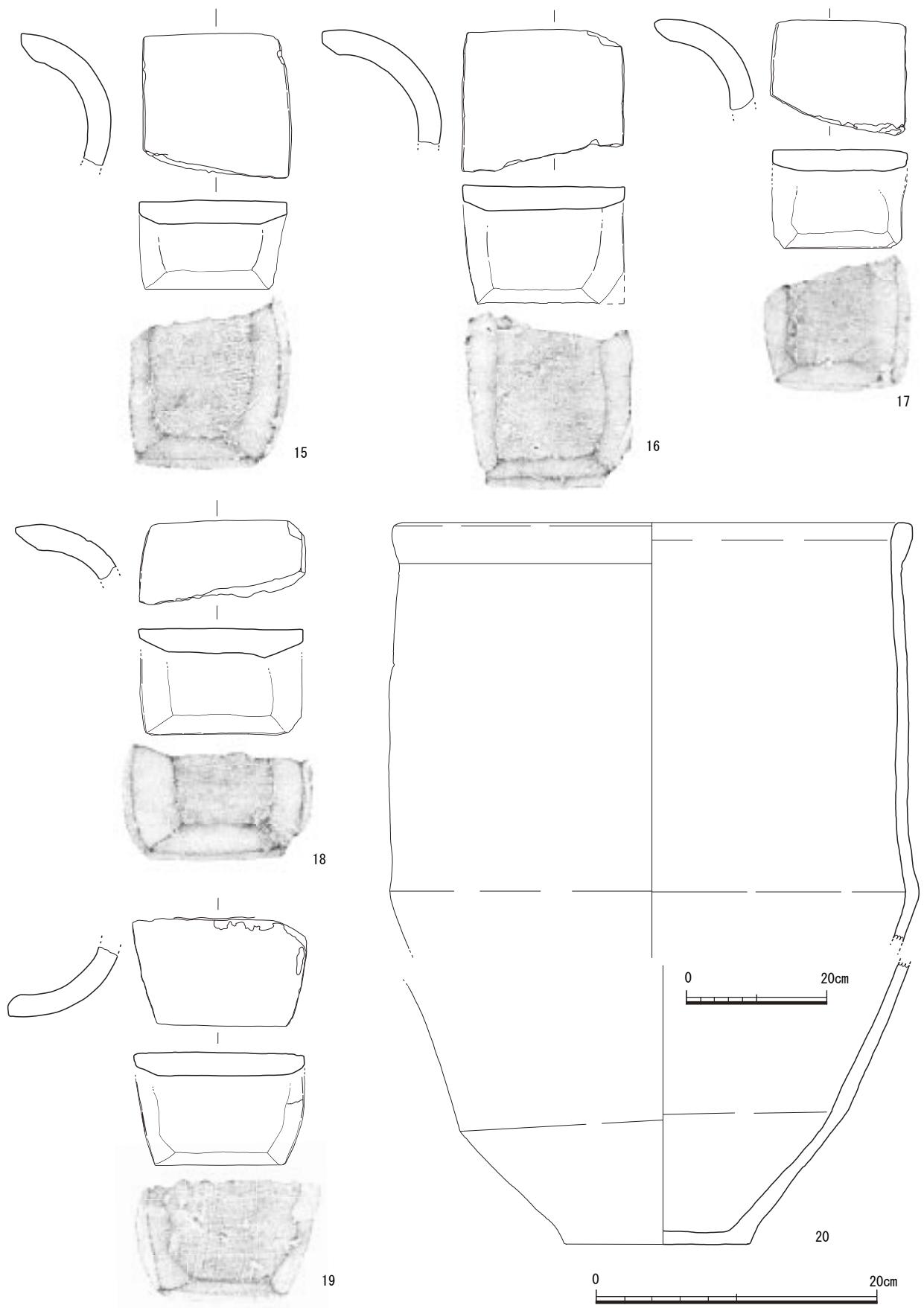
1 は古相の肥前染付、いわゆる初期伊万里と考えられる皿で、やや陶器質の胎土に厚い透明釉が掛かる。高台には砂が付着する。見込には草花と昆虫（トンボ）が描かれている。1640～50 年代に位置づけられる。2 は初期伊万里の碗である。1630～40 年代に比定される。3 は焼塩壺で、輪積み成形による I 類で形態から 17 世紀中葉のものと推定される。2 次被熱のためか器表面の剥落が著しく、刻印は確認できない。4 は手づくり成形の土師器皿である。2 次被熱による器表面の剥落が著しくみられる。口縁端部をつまみ上げる点や、底部外面の指押さえがみられない点で中世豊後府内における京都系土師器と異なっており、別の系譜のものと思われる。5 は暗緑灰色を呈する頁岩系の石材を使用した硯である。陸の部分に墨の付着がみられる。6 は SK052 から出土した肥前染付皿である。1 と同じものであるが同一個体ではない。



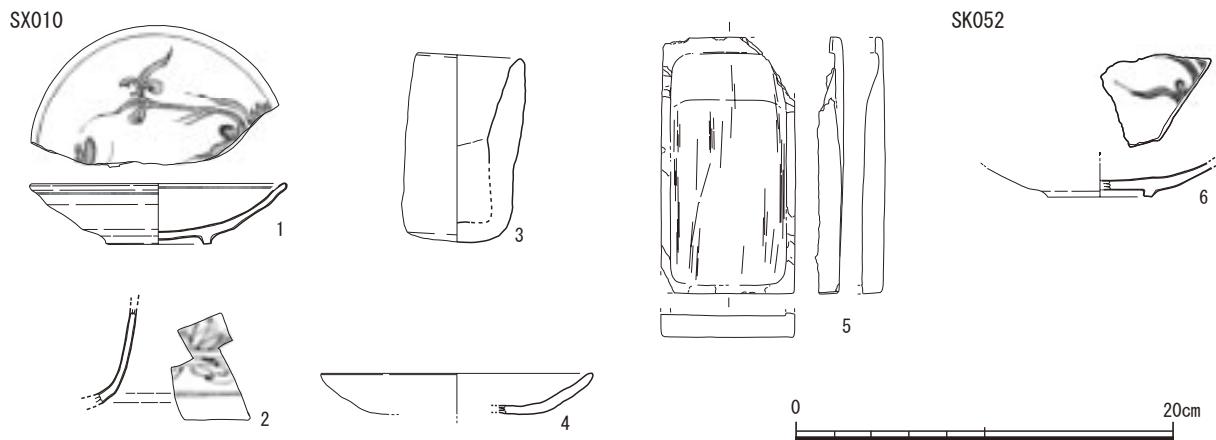
第 41 図 SX010 下層遺物出土状況図（1/40）



第42図 SX010出土遺物1 (1/4)



第43図 SX010出土遺物2(1/4・1/6)



第44図 SX010下層・SX052出土遺物（1/4）

土坑（SK）

SK021・SK024（第45図）

E-4 グリッドで検出された廃棄土坑と考えられる遺構である。

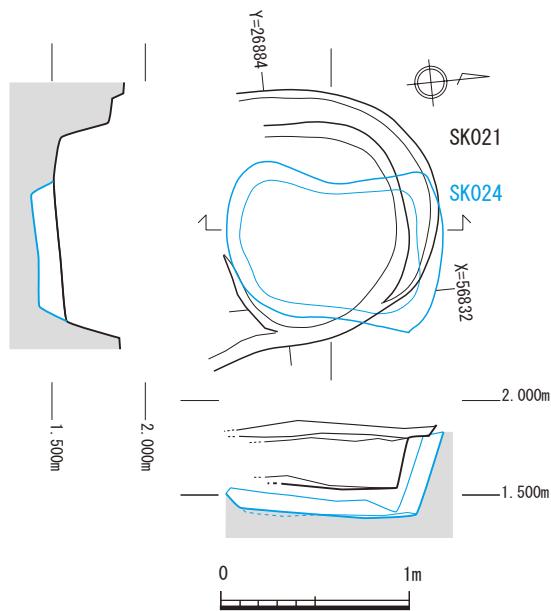
SK021 は東西約 1.3 m 南北約 1.0 m で、南半分は後世の攪乱のため削平されている。検出面からの最大深は 0.5 m である。

SK024 は SK021 に切られている土坑で、SK021 よりも深く、SK021 の床面で全体のプランが検出できたものである。

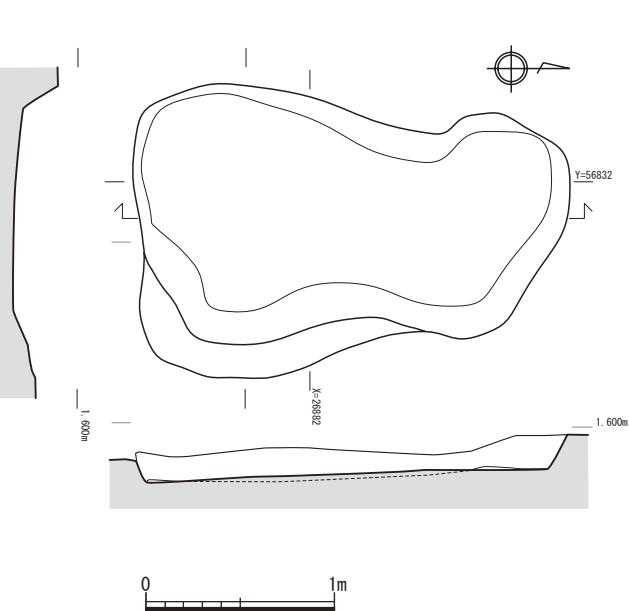
いずれも、暗褐色砂質土を基調とする埋土により埋積している。出土遺物から、18世紀前半代に埋積したものと思われる。

SK021 出土遺物（第47図1～7）

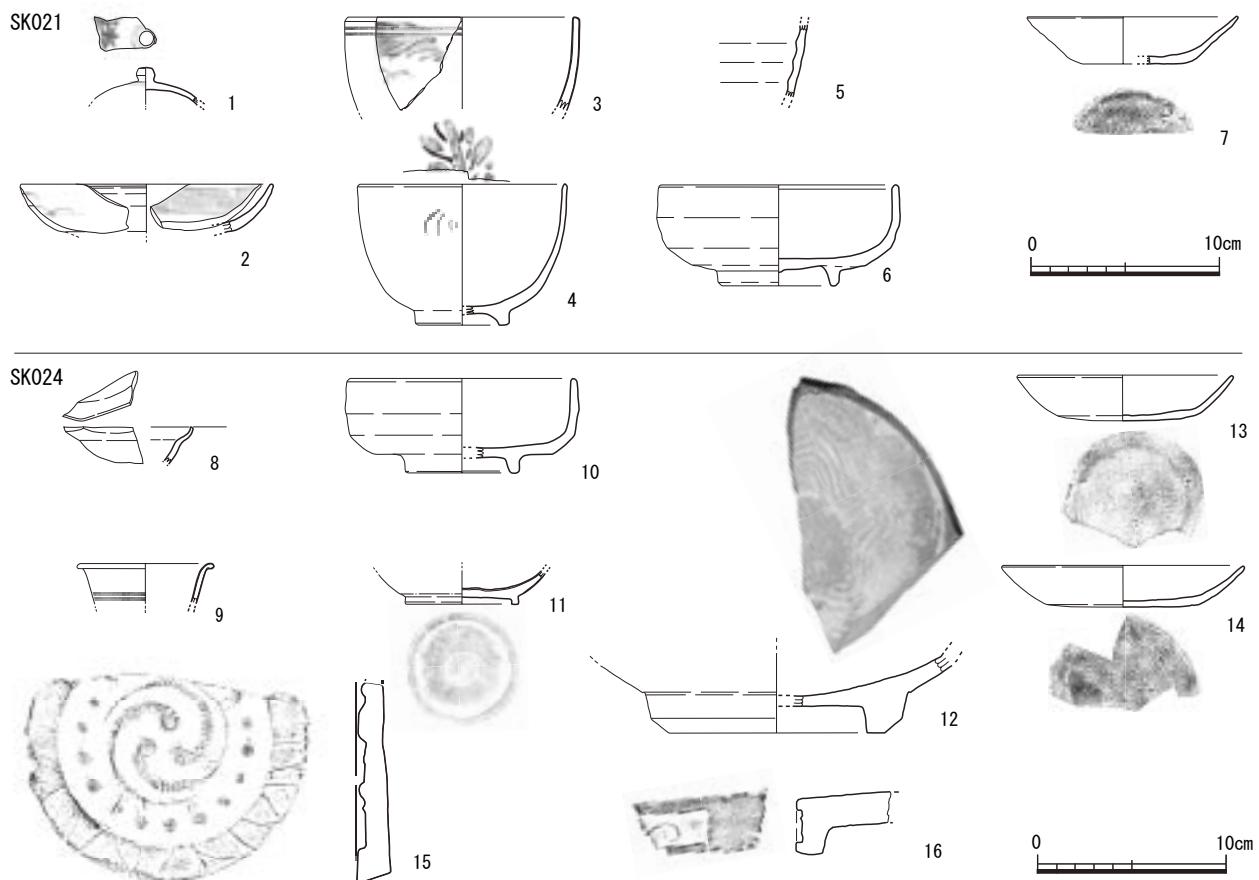
1 は肥前染付で、小形の蓋物の蓋と思われる。文様はコンニャク印判による。2 は肥前染付皿で、内面の文様は墨弾き技法による。3 は肥前陶胎染付碗、4 は京信楽系陶器碗で見込みと外面に上絵付けにより文様が描かれている。5 はベトナム陶器長胴瓶の可能性がある胴部破片である。6 は、瀬戸・美濃産陶器鉢で全面に鉄釉が掛かる。7 は口クロ成形の土師器皿である。



第45図 SK021・SK024 平面・断面図（1/40）



第46図 SK026 平面・断面図（1/40）



第47図 SK021・SK024出土遺物（1/4）

SK024 出土遺物（第47図8～16）

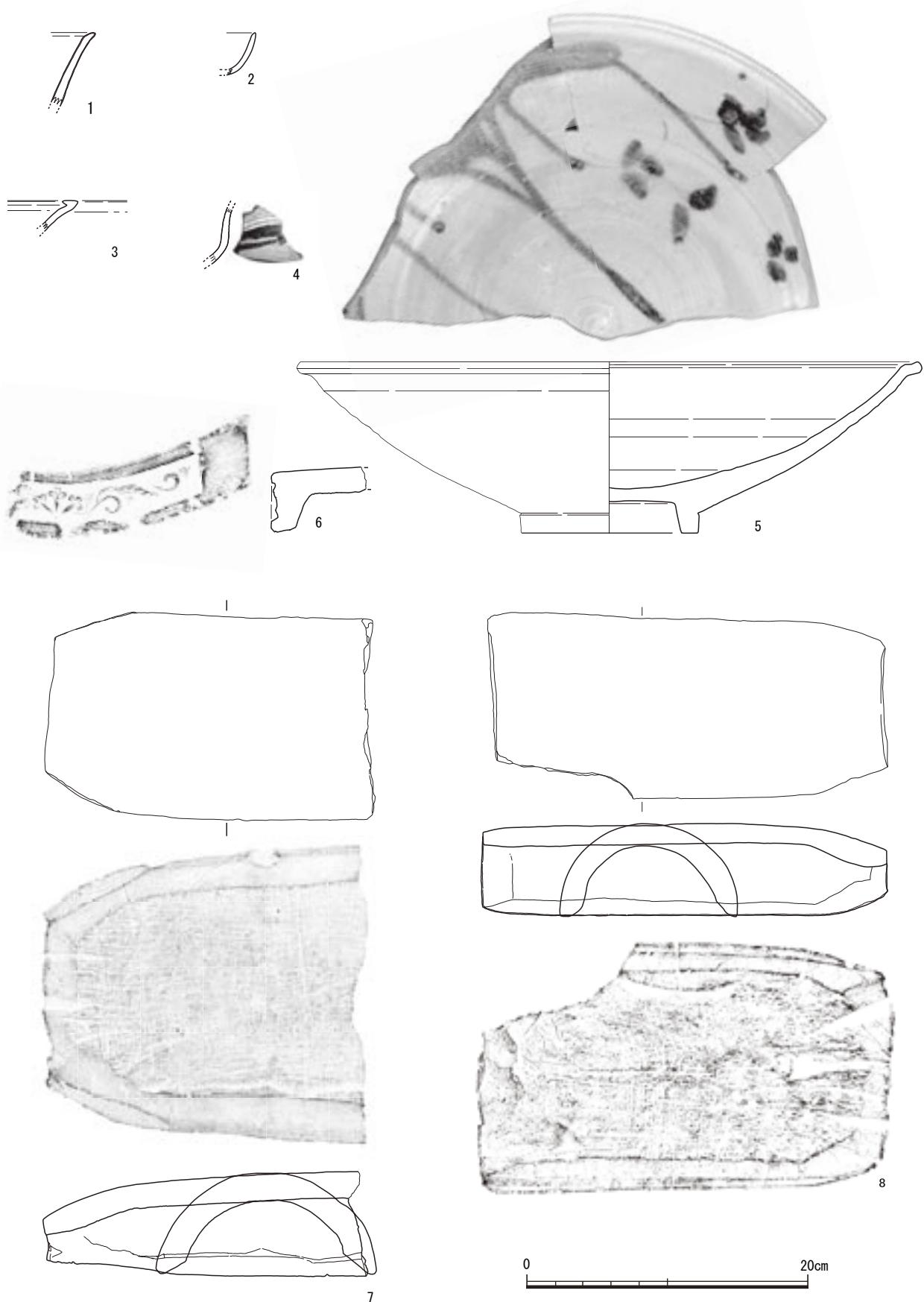
8は肥前白磁鉢で、口縁部には口銚が施される。SK037から出土した第60図6と同種のものであるが、別個体である。17世紀末～18世紀前半の製品であろう。9は肥前染付碗で外面に2本の圈線のみ施文される。10は6と同種の瀬戸・美濃産陶器鉢で、全面に鉄釉が掛かるものである。11は、京信楽系陶器碗で、外面は透明釉、内面には厚い鉄釉が掛かる。底部に刻印があり、「御菩薩」と読める。12は刷毛目が施文された肥前陶器鉢で、見込みに砂目跡がみられる。高台は面取りされている。13・14は口クロ成形の土師器皿である。15は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当径約15cm、珠文は19個と推定される。16は軒平瓦である。

SK026（第46図）

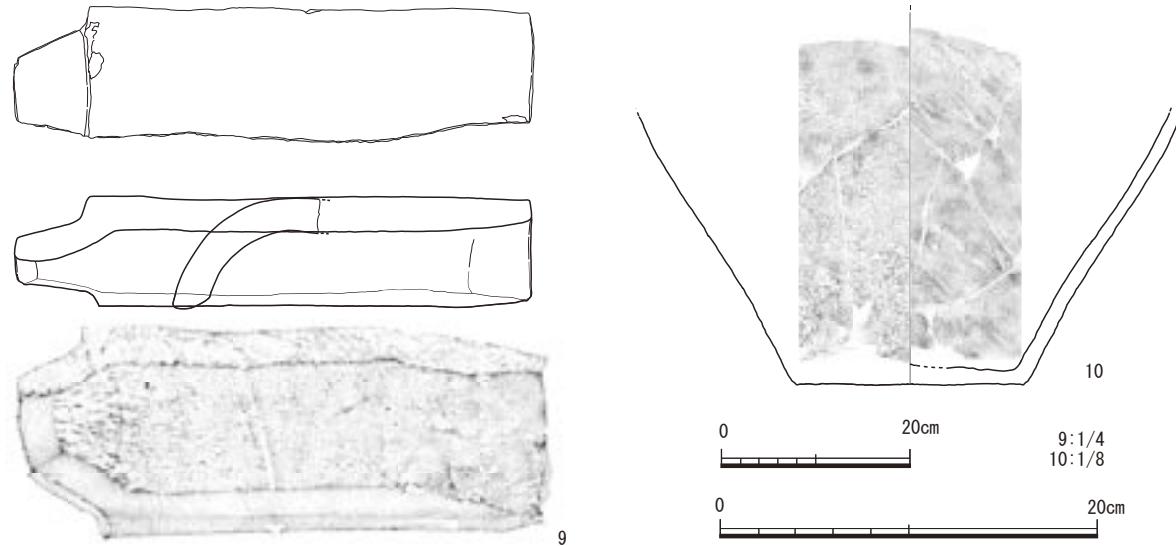
E-4区で検出された廃棄土坑で、長軸約2.3m短軸約1.5mの不整楕円形状を呈する。この付近には大規模な後世の攪乱があったため削平が著しく、遺構検出面の標高は約1.55mで、遺構の最大深は20cm程度であった。元々の深さが深かったこの遺構以外の遺構は削平されてしまったものとみられる。炭化物を含む暗褐色砂層で埋積しており、瓦片を多く含む遺物が廃棄されていた。完掘時、遺構床面には直径5～10cm程度の小礫が見えており、SV104の裏込めの礫であることが後に判明した。

出土遺物（第48図～第49図）

1は藁灰釉の掛けた陶器鉢で、福岡産と思われる。2は肥前白磁皿であるが、小破片であることから染付の無文部の可能性もある。3は内外に鉄釉の掛けた陶器で鉢もしくは香炉と考えられる。4は肥前陶器香炉で、外面に刷毛目による文様が施文される。5は肥前陶器鉢である。全体に化粧土をかけた後、銅緑釉と透明釉を掛け、銅緑釉により文様効果を出している。口縁部短く屈曲し、凹線状となる。高台は面取りされていない。17世紀



第48図 SK026出土遺物1 (1/4)



第49図 SK026出土遺物2(1/4・1/8)

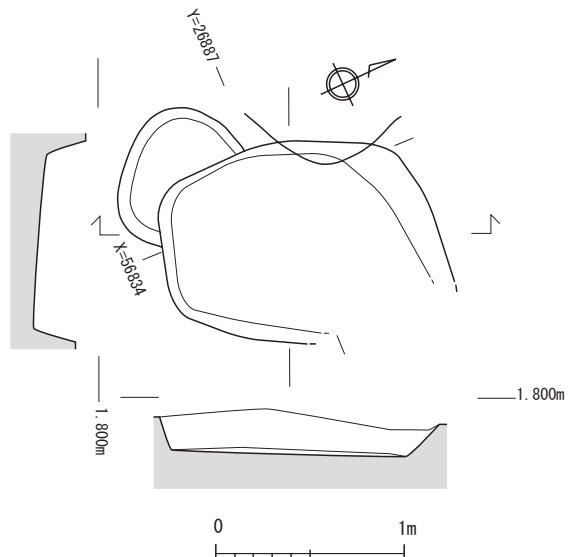
前半代の製品である。6は「府内城系列」の軒平瓦で18世紀前半代の製品と考えられる。7～9は丸瓦で、いずれも鉄線引き(コビキB)により製作されたものである。基部の境界が不明瞭な形態である。10は土師質土器大甕の底部破片であり底部のみ復元でき、口縁部は出土していない。

SK028(第50図)

D-5～E-5グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.8m短軸1.2mの不整橢円形状を呈し、検出面からの最大深は約50cmである。SK036とSK028に切られている。埋土の最上部は炭化物の比較的少ない砂質土であったが、埋土の中・下部は炭化物を多く含み暗色の砂質土(1・2層)であり、食物残滓と考えられる動物骨片が認められた。出土遺物から18世紀前半代と推定される。

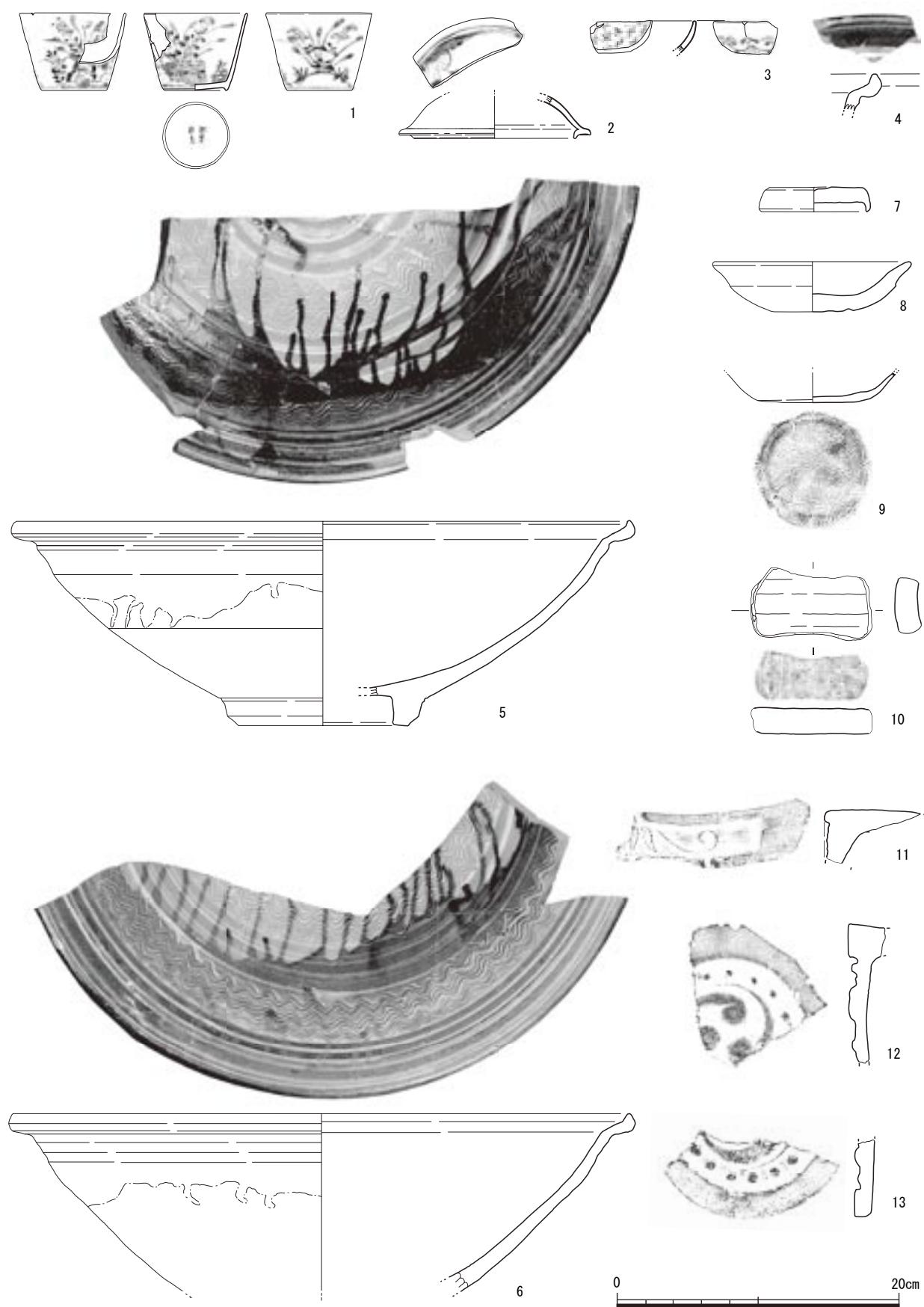
出土遺物(第51図～第52図)

1は肥前染付の猪口で、外面には草花文を三方に描いている。高台内には「長命富貴」銘が書かれる。17世紀末～18世紀前半代の製品である。2は肥前染付蓋で、口径から壺の

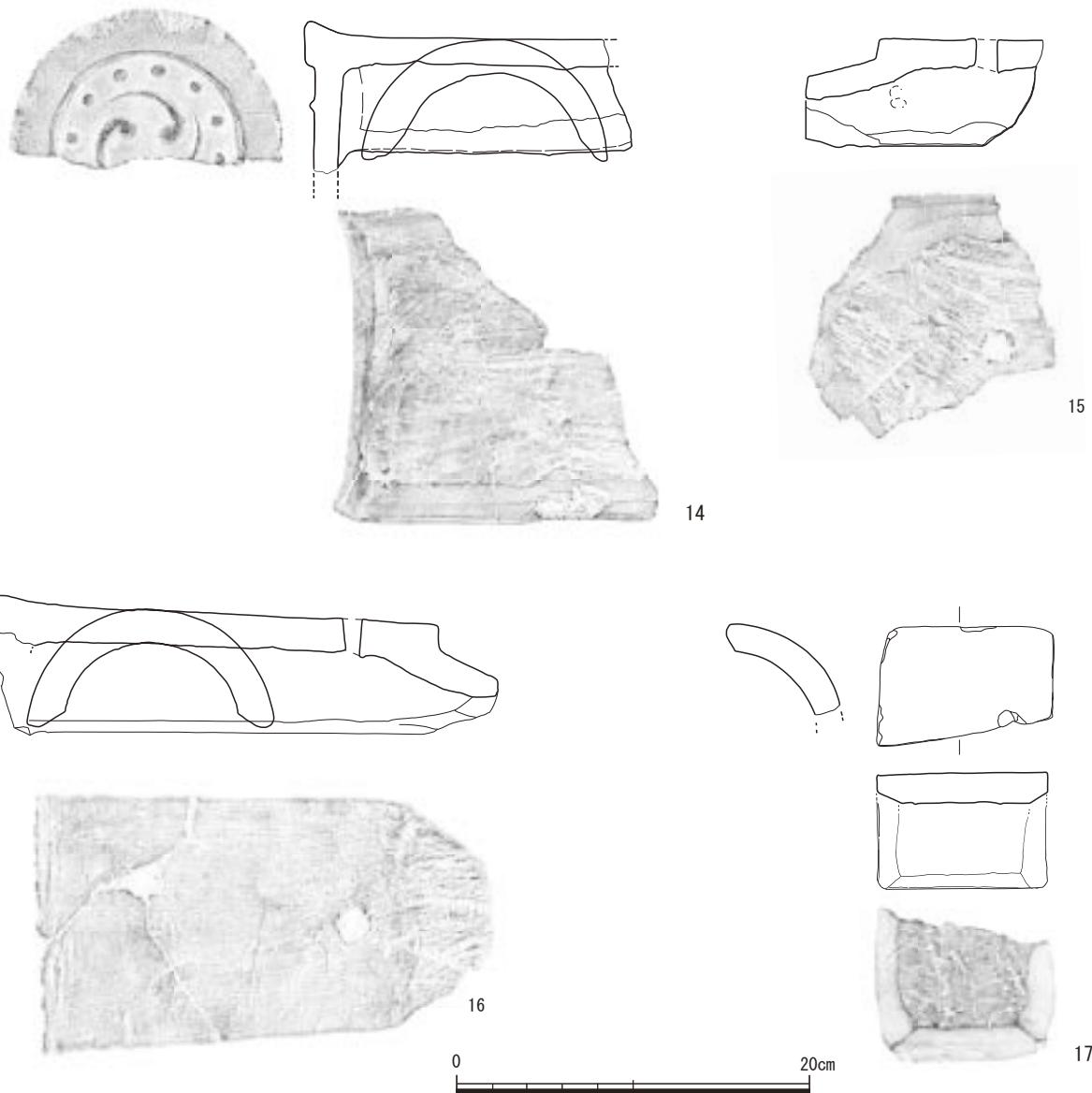


第50図 SK028平面・断面図(1/40)

蓋と思われる。3は型打ちの肥前染付皿で内面には型紙摺による菱形文が、外面には手描きの唐草文が施される。17世紀末から18世紀前半代の製品である。4～6は刷毛目で文様を描いた肥前陶器鉢で、いわゆる二彩手である。5は高台が残っているものであるが、面取りされている。18世紀前半代に位置づけられる。7は焼塩壺蓋である。8は京都系土師器皿で、16世紀末頃の形態であり、整地層中からの混入と思われる。9は口クロ成形の土師器皿で、SK031等で出土しているものと同様のものである。10は瓦片再加工品で丸瓦片の周囲を打ち欠き研磨して、分銅状の形態を作り出している。11は三葉の桐葉を中心飾りとする軒平瓦で、唐草文は1単位のみである。府内城北口跡で確認されており、17世紀代でも比較的新しいものと推定される。12～14は巴文を瓦当とする軒丸瓦である。14は瓦当径約15cm、珠文14個に復元される。16は軒丸瓦であるが、瓦当が失われている。17は面戸瓦である。



第51図 SK028出土遺物1(1/4)



第 52 図 SK028 出土遺物 2 (1/4)

SK031・SK045・SK029（第 53 図）

これらは E-5 グリッドで検出された廃棄土坑である。いずれも東端部は近現代の攪乱により失われている。切り合いは SK031 → SK045 → SK029 の順である。

SK031 は長軸 2.6m+ α 、短軸 1.6m、検出面からの最大深約 50cm の隅丸長方形状を呈する大形の廃棄土坑である。埋土は炭化物を含む暗灰色砂質土を基調とするものであるが、遺構の東半部においてはより多くの炭化物を含みより暗色の土層が観察でき（1・2 層）、掘り返しが行われたとも解釈できる。埋土中には炭片のほか、マダイの骨や鶏と推定される鳥骨も多く含まれており、食物残滓を含む廃棄物が捨てられていたことを示唆している。

SK045 は SK031 を切って掘り込まれている廃棄土坑で、SK031 よりも深くまで掘削されている。東側が攪乱によりほとんど失われているが、同様の大形廃棄土坑であったことが考えられる。埋土は炭化物を多く含む暗灰色砂質土である。

SK029 は直径約 1m の円形の深い土坑で、炭化物の少ない暗褐色砂質土を基調とする埋土である。

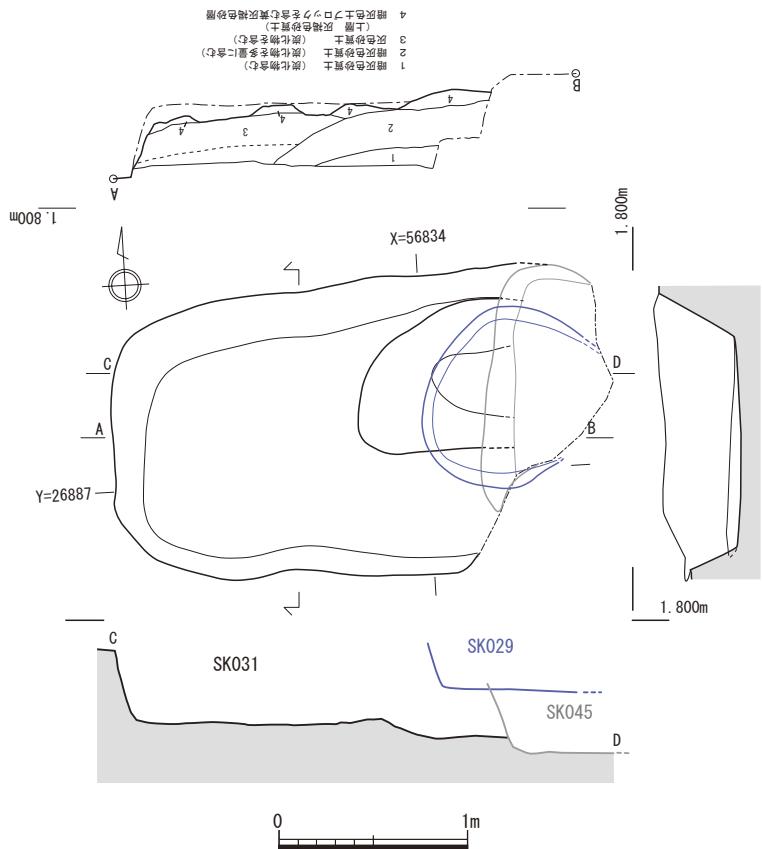
出土遺物から、これらの遺構は概ね 18
世紀前半～中葉頃に比定される。

SK031 出土遺物（第 54 図～第 55 図）

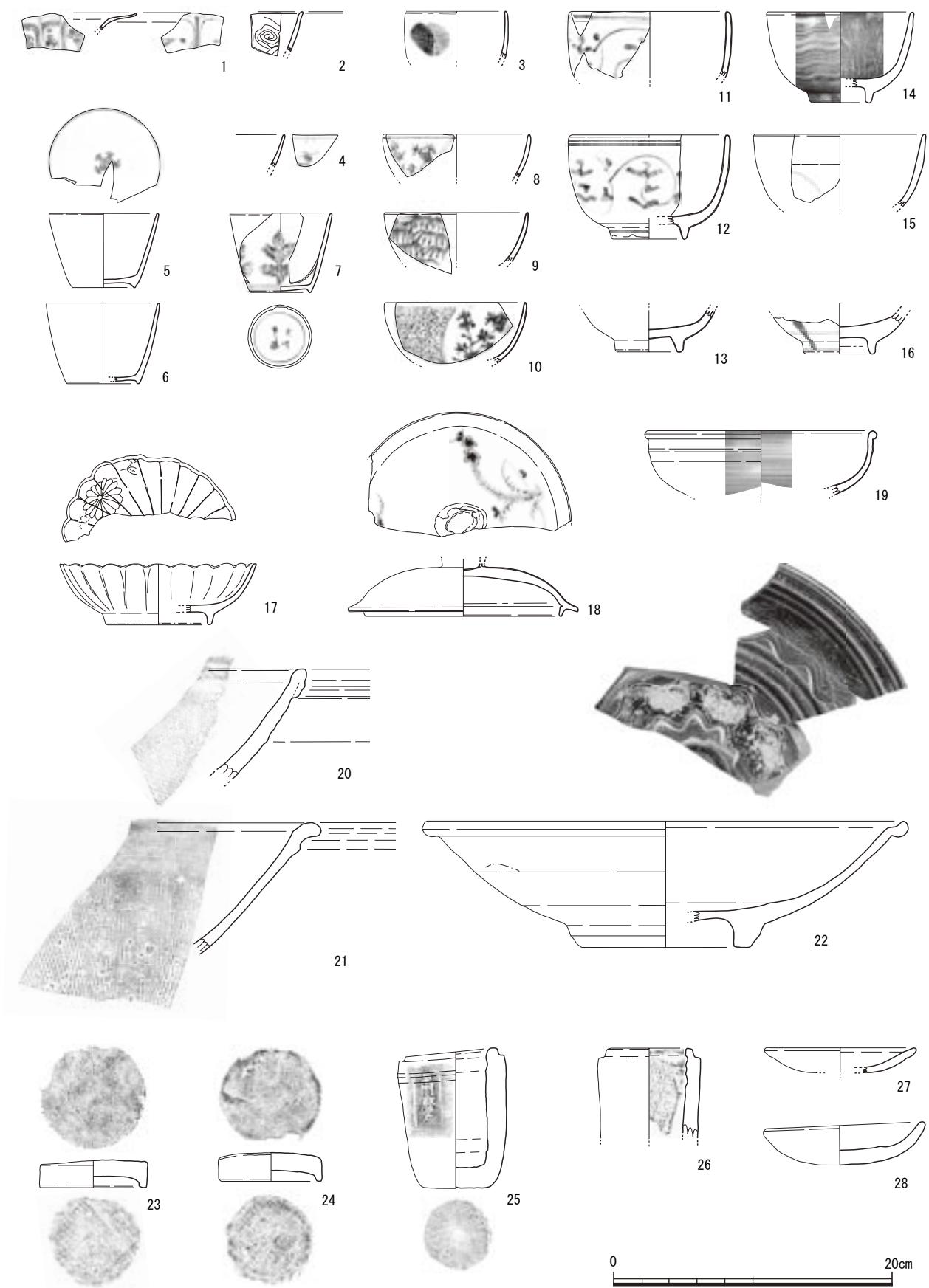
1 は景德鎮窯製の青花鉢口縁部で、芙蓉手の文様を有するものである。型作りにより極めて薄くつくられたもので、17 世紀初頭に比定される。2 は白磁碗で、渦巻き状の文様が陰刻されている。肥前系の白磁と思われ、17 世紀後半から 18 世紀前半に位置づけられると思われる。1・2 は整地層からの混入かもしれない。3 は肥前染付丸碗で、18 世紀前半代の製品である。5 は青磁染付のそば猪口で、見込みにコンニャク印判を有する。1750～70 年代に位置づけられるものである。6 は肥前白磁の猪口で、口縁部には口銹を施す。7 は肥前染付の猪口で、外面にはコンニャク印判による若松文、高台内には圈線と「大明年製」銘が施されている。18 世紀前半代の製作と思われる。8～10 は肥前染付碗で 18 世紀前半代の製品である。11・12 は肥前陶胎染付碗、13 は肥前陶器碗、14 は刷毛目唐津碗で、18 世紀前半代に位置づけられる。15 は京信楽系陶器碗で、朱により上絵付けされた文様がわずかに認められる。16 は肥前陶胎染付の碗である。17 は型打ち成形された肥前白磁菊皿で、菊花文が型により陽刻される。色絵素地とも思われるもので、17 世紀末から 18 世紀前半代に位置づけられる。18 は肥前色絵青磁蓋で、つまみ部分は欠失している。口縁部の受け部には鉄が塗られ、茶褐色を呈する。草花文が上絵付されているが、朱描きされた花は明確に残存しているものの、茎や葉は他の色で描かれていたようで、おそらくは被熱によりほとんど失われてしまい、痕跡を残すのみである。17 世紀後半から末頃のものと思われる。19 は刷毛目唐津の鉢である。20 は産地不明の焼締陶器擂鉢で、SK037 出土の 13 と類似するものである。21 は肥前陶器擂鉢で、全面に鉄釉が掛かる。22 は肥前陶器鉢で、いわゆる刷毛目唐津である。見込みに砂目跡が 3 箇所認められる。高台を面取りしており、17 世紀末～18 世紀前半代に位置づけられる。23・24 は焼塩壺蓋で、内面には布目痕がみられる。25 は焼塩壺で、板づくりのⅡ類に分類されるものである。完形のため採拓できないが、内面には内型の布目痕が認められる。口縁部の立ち上がりは、断面方形で明瞭である。「泉州磨生」の刻印が認められ、18 世紀前半に比定されるものである。26 も 25 と類似した焼塩壺で、内面には布目が認められる。27 は京都系土師器皿で 16 世紀代に位置づけられ、整地層から混入したものであろう。28 は手づくね成形の土師器皿であるが、中世豊後の京都系土師器皿とは異なっており、系譜は不明である。29～35 はロクロ成形の土師器皿である。口径が約 10cm のもの（29）と、12cm 前後のもの（30～35）がある。36 は土師質土器の鉢である。37～39 は瓦で、37 は面戸瓦、38・39 は軒丸瓦である。

SK029・SK045 出土遺物（第 56 図）

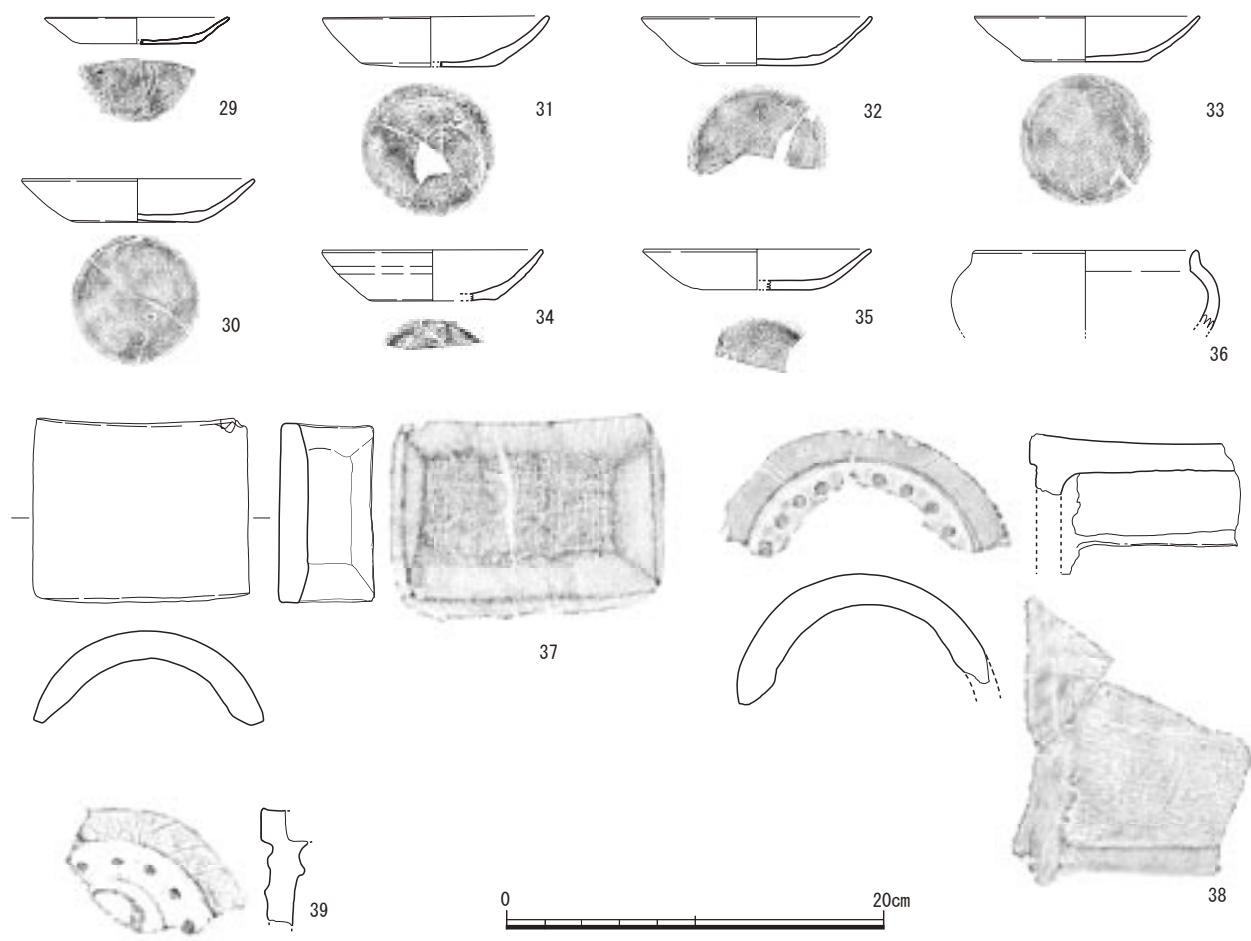
1～3 は肥前染付碗で、1・2 はいわゆるくらわんか碗である。高台内には圈線と崩れた「大明年製」銘を描



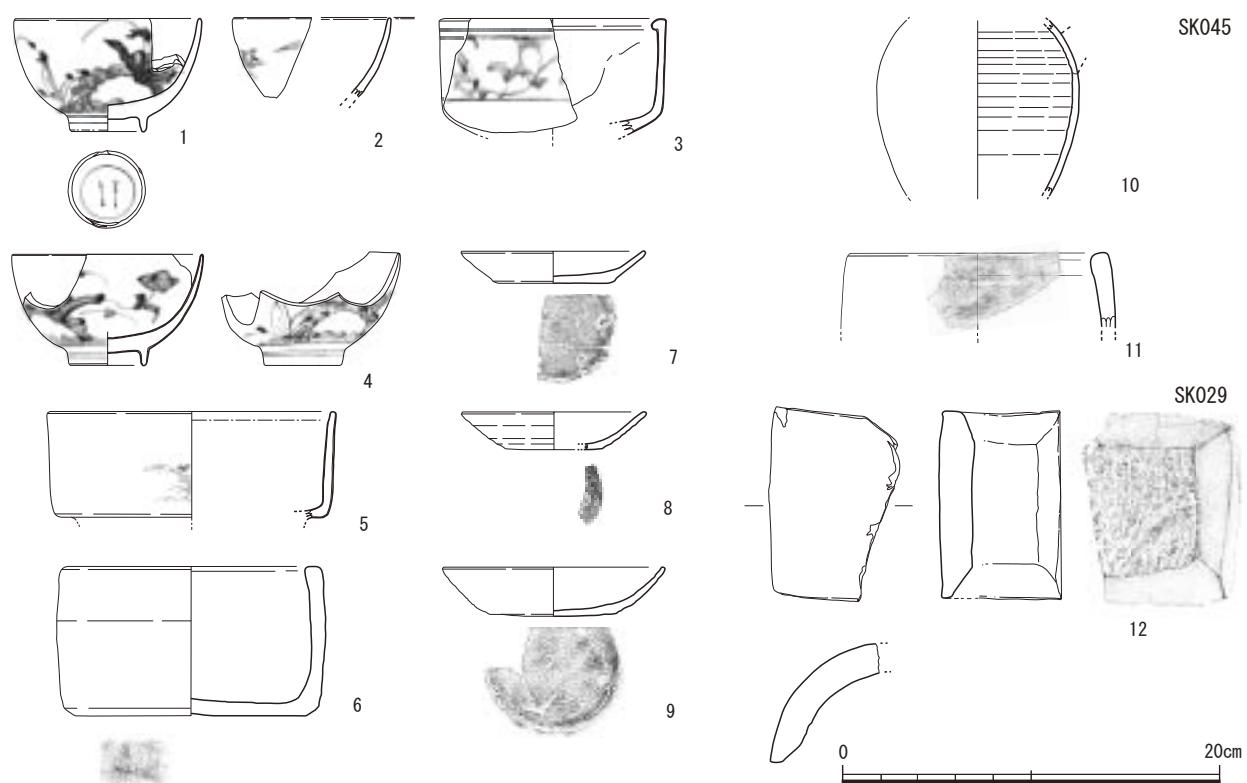
第 53 図 SK031・SK029・SK045 平面・断面・土層断面図 (1/40)



第54図 SK031出土遺物1 (1/4)



第55図 SK031出土遺物2(1/4)



第56図 SK045・SK029出土遺物(1/4)

く。18世紀前半～中頃に比定される。4は陶胎染付香炉で、18世紀前半の所産である。5は肥前色絵青磁蓋物で、第54図18と組になるものと思われる。体部には草花文が描かれているが、蓋と同じく朱書きの花文のみが残り、茎・葉の部分は痕跡のみである。口縁端部には鉄が塗られている。6は備前焼の鉢で、底部には扇形の刻印が認められる。7～9はロクロ成形土師器である。SK031出土品と同じく口径約10cmのもの(7・8)と、約12cmのもの(9)がある。10は関西系陶器で、水注と考えられる器形である。11は瓦質土器の火鉢であろう。12は面戸瓦である。

SK036（第57図）

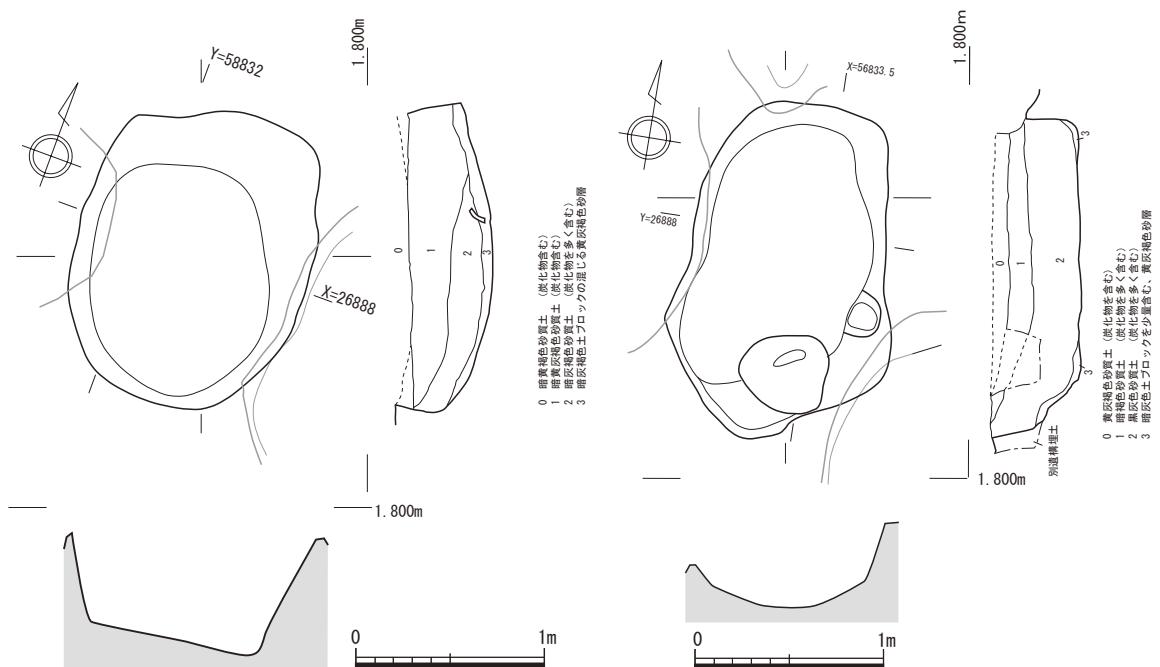
D-4～E-5グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.6m短軸1.2mの不整橿円形状を呈し、検出面からの最大深は約60cmである。炭化物を含む灰褐色砂質土を基調とする埋土で埋積しており、下層に特に多く炭化物を含有する土層(2層)がみられる。この土層からはマダイの骨及び、鶏と考えられる鳥骨が確認されている。出土遺物から18世紀前半代と推定される。

出土遺物（第59図）

1は肥前染付猪口もしくは碗である。麦の穂のような文様が描かれている。2は肥前陶胎染付碗、3は肥前陶器鉢、いわゆる刷毛目唐津で、いずれも18世紀前半代のものである。4は土師器皿で、口径約13cmに復原される。5は焼塩壺蓋で、内面に布目、上面に板状圧痕がある。6～9は巴文の瓦当を有する軒丸瓦である。瓦当径は15～16cm、珠文数は19～20程度と推定される。10・11は軒平瓦で、いわゆる「府内城系列」のものと考えられる。12は丸瓦である。

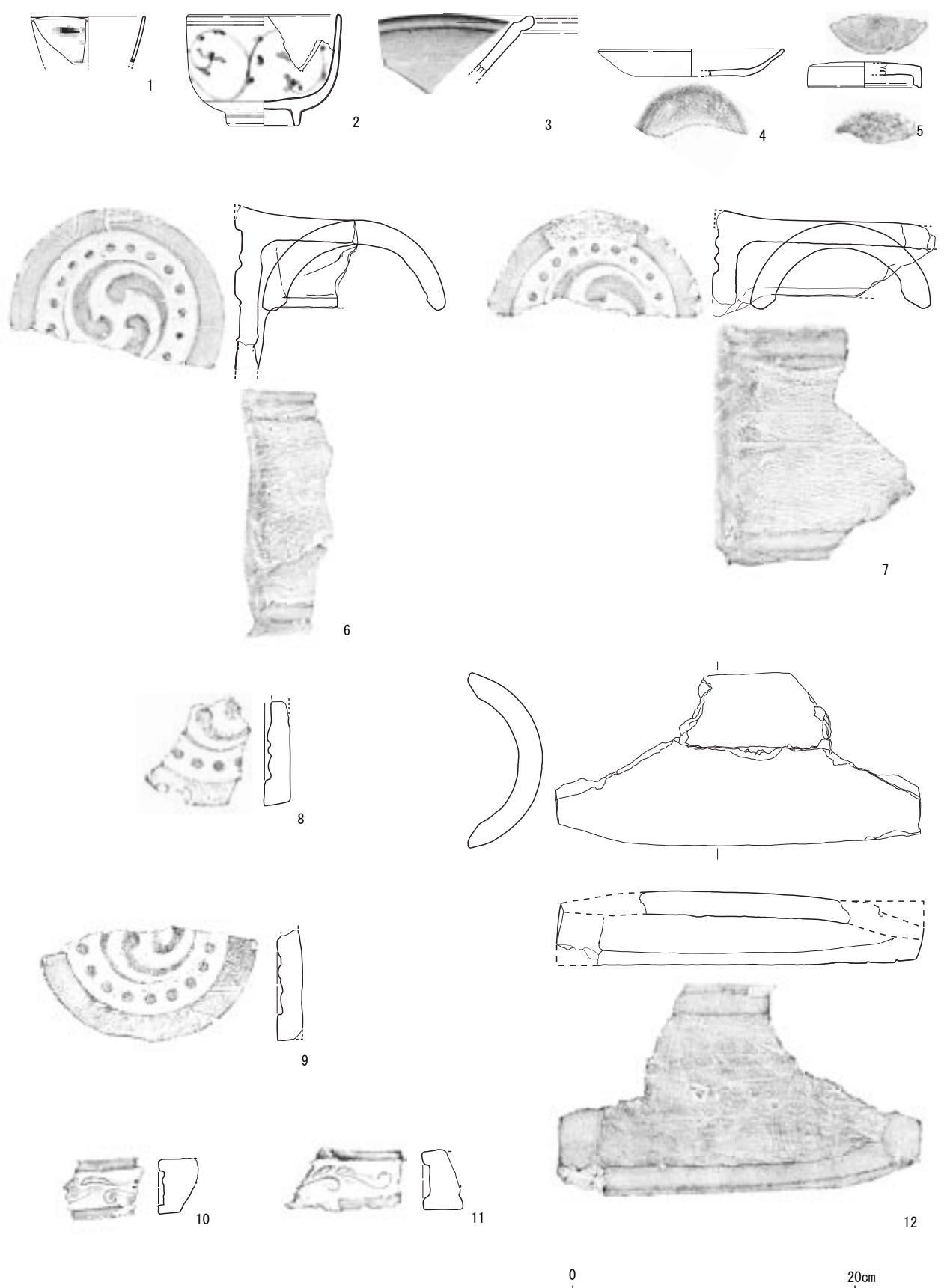
SK037（第58図）

D-5～E-5グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.8m短軸1.2mの不整橿円形状を呈し、検出面からの最大深は約45cmである。SK036に切られている。最上層は炭化物が少ない黄灰褐色砂質土であったが、中・下層は多く炭化物を含有する土層(1・2層)からなる。下層からは食物残滓と推定される動物骨片が認められた。出土遺物から18世紀前半代と推定される。

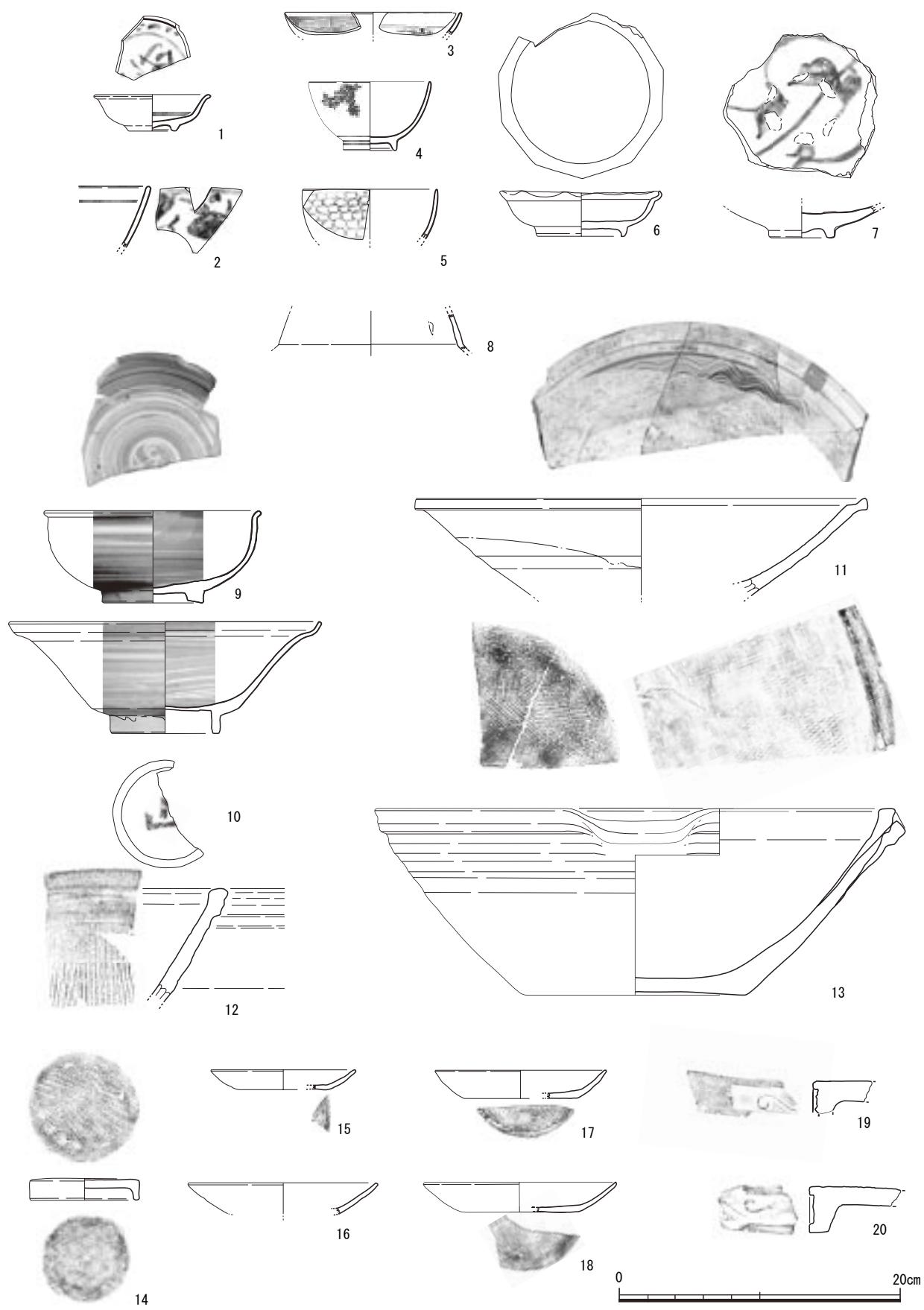


第57図 SK036 平面・断面・土層断面図 (1/40)

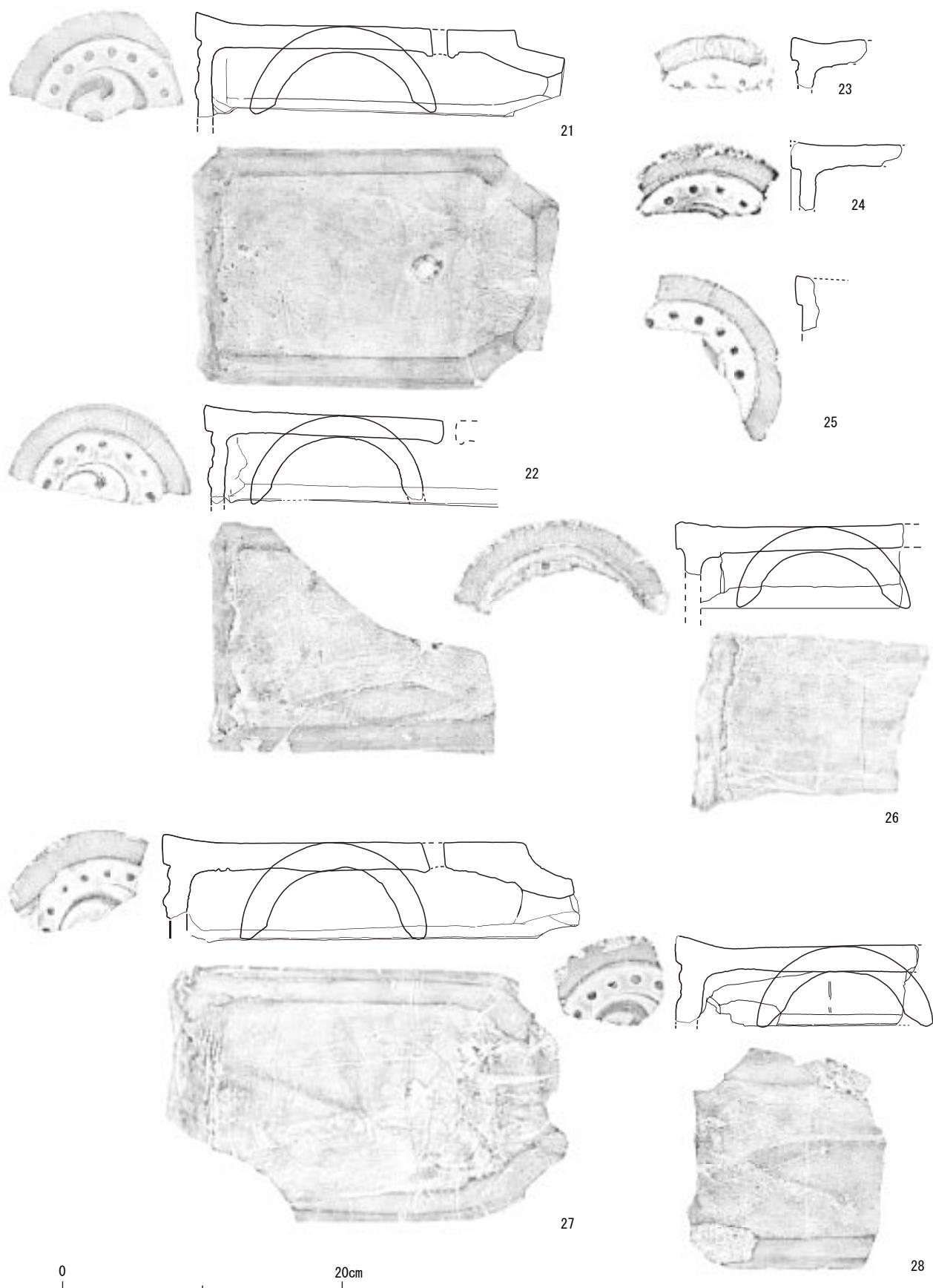
第58図 SK037 平面・断面・土層断面図 (1/40)



第59図 SK036 出土遺物 (1/4)



第 60 図 SK037 出土遺物 1 (1/4)



第 61 図 SK037 出土遺物 2 (1/4)

出土遺物（第60図、第61図）

1は肥前陶器で17世紀前半のいわゆる初期伊万里である。高台には砂の付着が認められる。2は16世紀代の青花碗である。3は肥前染付皿で、内面の文様は墨弾き技法による。17世紀末から18世紀前半のものと思われる。4・5は18世紀前半の肥前染付碗である。4はコンニヤク印判により、紅葉文が施文されており、5は手描きにより亀甲状の文様が外面全体に施文されている。6は白磁の十角皿で、口縁部には口銹を施す。型打ちの製品で、17世紀後半～末に位置づけられる。7は肥前陶器皿で、いわゆる絵唐津である。見込みには胎土目痕が6箇所認められる。8は陶器壺と考えられる製品で、外面には鉄釉が掛かる。9～11は刷毛目が施文された肥前陶器鉢で、11はいわゆる二彩と思われるが、二次被熱のため器面が荒れ、釉色が失われている。12・13は産地が不明な焼締陶器擂鉢である。胎土には白色粒子を多く含むのが特徴である。14は焼塩壺蓋で内面には布目、上面には板状の圧痕が認められる。15～18は土師器皿である。SK031出土品と同様に10cm前後のものの（15）と12cm前後のもの（17）があるが、これに加え、13.5cm前後に復原できるもの（16・18）がある。19・20は軒平瓦である。唐草文を有するものであるが、詳細は不明である。21～28は巴文の瓦当を有する軒丸瓦である。いずれも鉄線引き（コビキB）で製作されたものである。

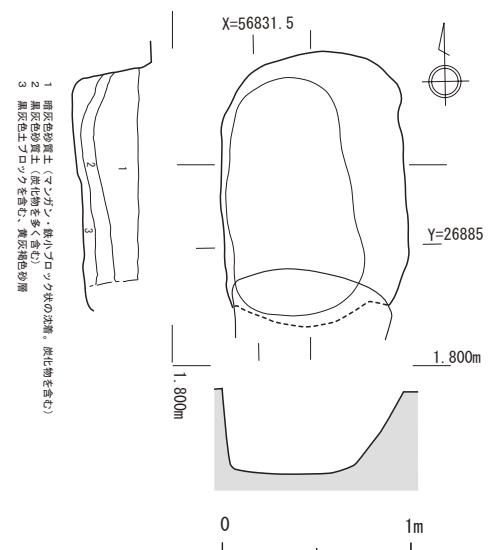
SK039（第62図）

E-4～E-5グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.4m短軸1.0mの橢円形状を呈し、検出面からの最大深は約40cmである。SK021・SK024に切られている。上層は炭化物が少ない暗灰色砂質土であったが、下層には多く炭化物を含有する黒灰色土層（2層）が認められる。

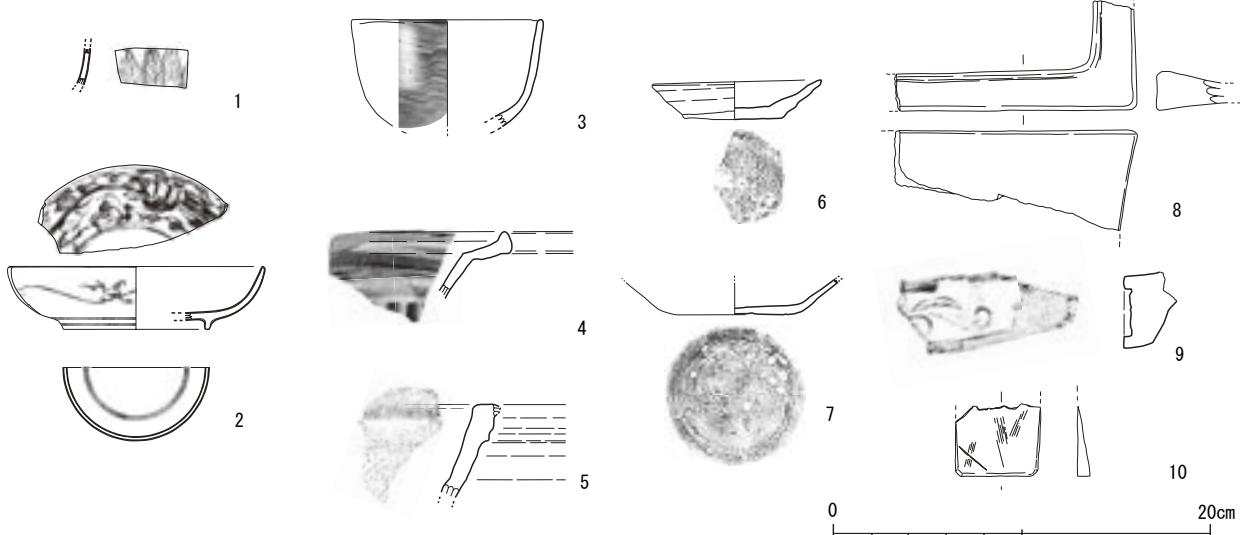
出土遺物から18世紀前半と推定される。

出土遺物（第63図）

1は青花碗で外面下間に芭蕉文が描かれている。16世紀の所産で、整地層からの混入と思われる。2は肥前染付皿である。3は肥前陶器碗で刷毛目唐津、4は刷毛目唐津二彩手鉢で、17世紀末～18世紀前半。5は産地不明の焼締陶器擂鉢で、SK037出土第60図13と類似する。6・7はロクロ成形の土師器皿である。8は瓦質土器火



第62図 SK039 平面・断面図 (1/40)



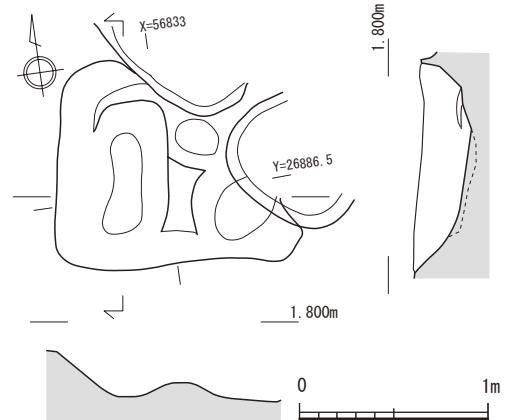
第63図 SK039 出土遺物 (1/4)

鉢で、方形の製品である。9は軒平瓦である。10は頁岩製の砥石と考えられる。

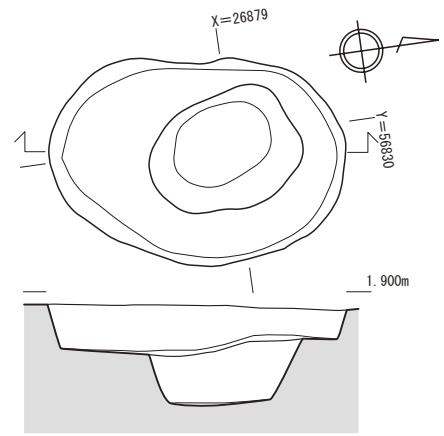
SK052（第64図）

E-5グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.3m、短軸1.1mの長方形形状を呈し、検出面からの最大深は約30cmである。SK037・SK041に切られている。埋土は炭化物を含む暗灰色砂質土を基調とする。床面には著しい凹凸が認められ、確認できていないが複数の遺構が切り合っていた可能性もある。

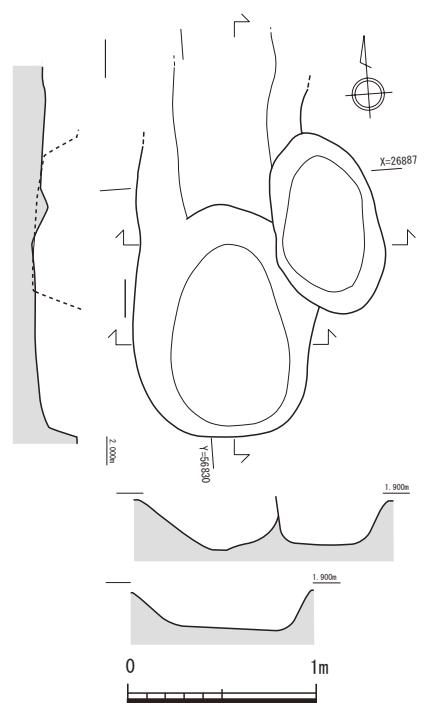
出土遺物は僅少で、また陶磁器や土器の小破片のみであるため図示できるものがないが、18世紀前半代と推定される。



第64図 SK052 平面・断面図 (1/40)



第65図 SK015 平面・断面図 (1/30)



第66図 SK019・SK020 平面・断面図 (1/40)

SK015（第65図）

G-4グリッドで検出された土坑で、長軸1.2m、短軸0.8mの橢円形状を呈し、検出面からの最大深は約40cmである。SK013に切られている。床面の中央部が1段深く掘り込まれているが、埋土中から土師質土器大甕の胴部破片が出土していることから、SX010のような大甕を埋設した遺構の基底部とも考えられる。他に帰属時期を特定できる遺物がないため、遺構の時期は不明である。

SK019・SK020（第66図）

SK020はE-4グリッドで検出された土坑で、長軸2.0m+ α 、短軸1.0mの長橢円形状を呈する。埋土は多量の焼土ブロックを含む砂質土であるが、炭化物は少量しか含まれていない。また、出土遺物は僅少で被熱した遺物等は認められず、火災処理とは考えがたい遺構である。

SK019はSK020を切って掘り込まれた長軸1.0m、短軸0.6mの小土坑で、暗褐色砂質土を基調とする土で埋積している。

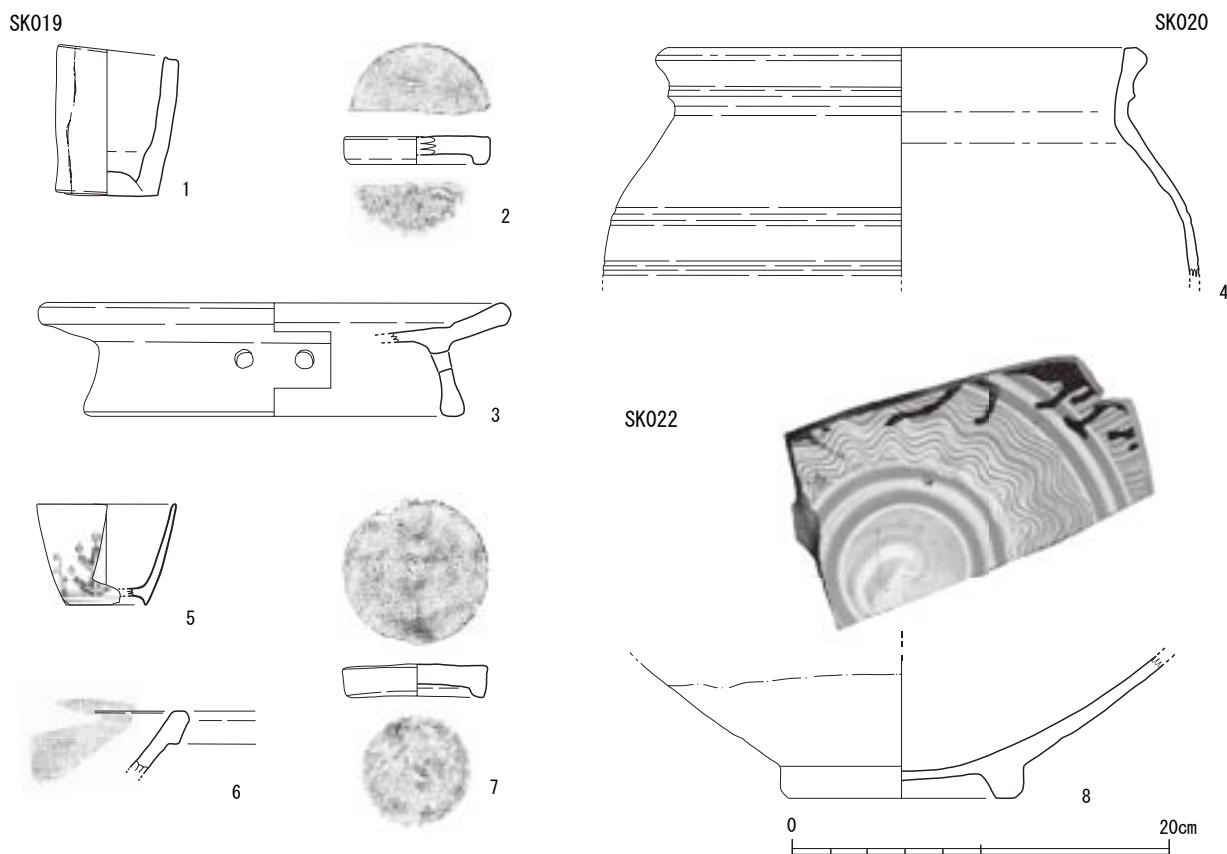
これらは、出土遺物から18世紀中頃～後半と考えられる。

SK019出土遺物（第67図1～3）

1は焼塩壺で、板づくりのII類である。内面には粗い布目が認められる。口縁部の立ち上がりはわずかしか残存しておらず、刻印もみられない。18世紀中頃から後半にかけてのものと推定される。2は焼塩壺蓋で、内面には布目、上面には板状圧痕がみられる。3は土師質土器の焜炉底部で、底部と体部の接合部で剥離したものと思われる。

SK020出土遺物（第67図4）

4は肥前陶器甕である。焼成不良のため釉は灰茶色を呈し、十分に融解していない。内面はタタキ痕をナデ消している。



第67図 SK019・SK020・SK022出土遺物（1/4）

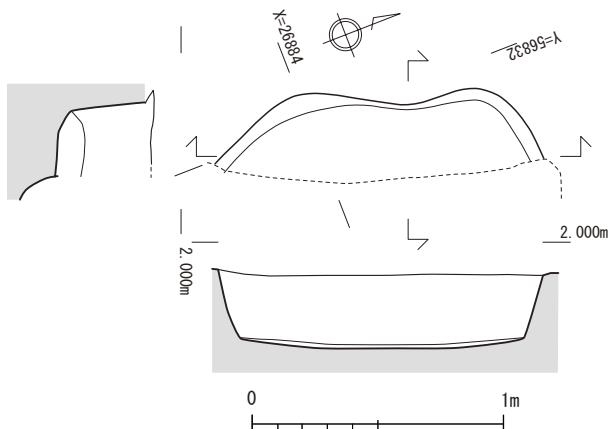
SK022（第68図）

E-5～E-6 グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸 1.3m 短軸 0.35m、検出面からの最大深は約 30cm である。E-4～E-5 グリッドに分布する厚さ約 10cm の整地層の上から掘り込まれている遺構である。東側は近現代の攪乱により失われているため、全体の形状は不明である。埋土は炭化物を含む暗灰褐色砂質土を基調とする。

出土遺物から 18世紀前半～中頃と推定される。

出土遺物（第67図5～8）

5 は肥前染付猪口で、外面には若松文を描く。18世紀前半の製品である。6 は産地不明の焼締陶器擂鉢で、SK037 出土の第60図 13 と類似するものである。7 は焼塩壺蓋で、内面には布目、上面には板状圧痕がみられる。8 は肥前陶器鉢で、いわゆる刷毛目二彩手である。高台は面取りされる。



第68図 SK022平面・断面図（1/30）

SK025（第69図）

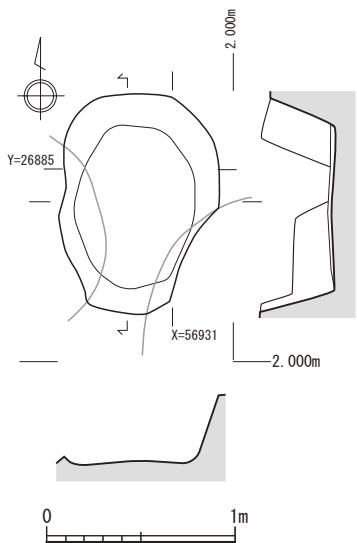
E-4 グリッドで検出された土坑で、長軸約 1.2m 短軸約 0.8m、検出面からの最大深は 0.4m である。

SK021 と近代以降の土坑である SK023 に切られている。埋土は暗褐色砂質土を基調とする。

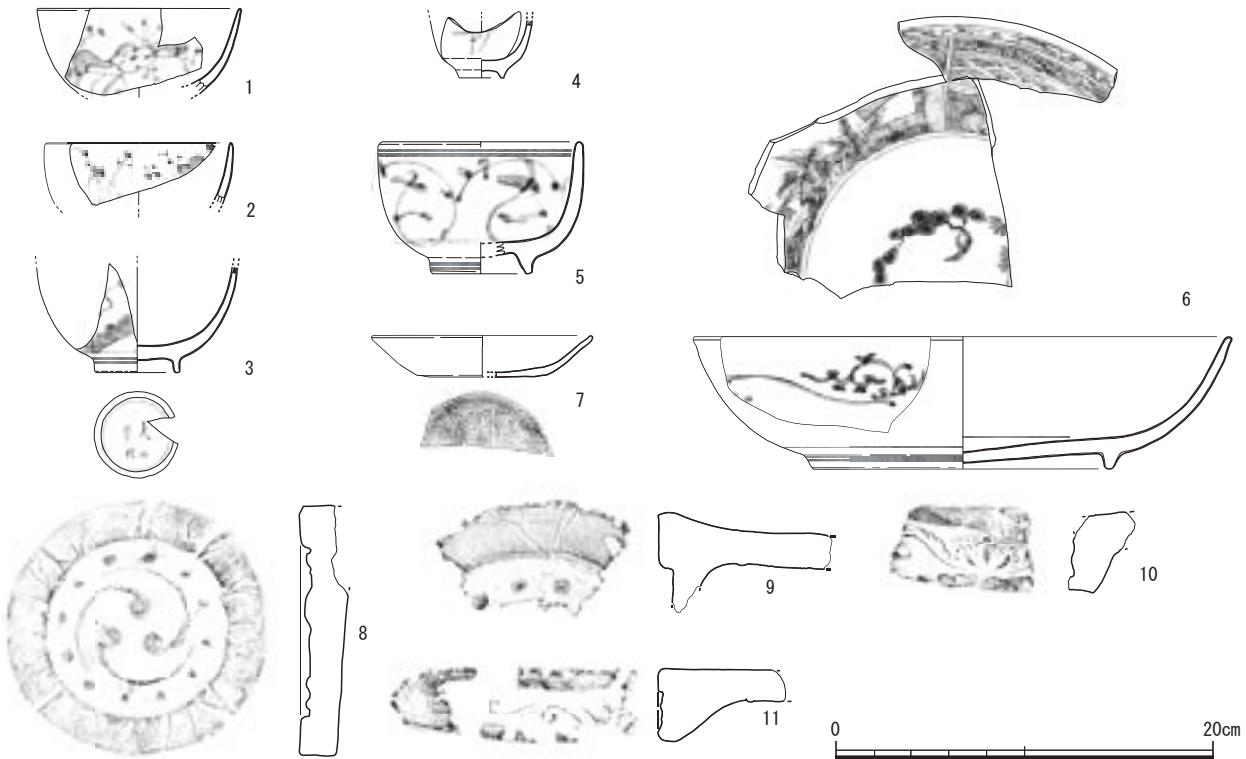
出土遺物から、18世紀中頃～後半に位置づけられる。

出土遺物（第 70 図 12～22）

12～14 は肥前染付碗いわゆる「くらわんか碗」で、14 では高台内に崩れた「大明年製」銘を有する。18 世紀前半に位置づけられるものである。15 は肥前染付小壺で、1630～40 年代に比定されるものであろう。16 は肥前陶胎染付碗である。17 は肥前染付鉢で、口径約 28cm に復元される大形のものである。見込みには松竹梅を環状に描き、内面は線で区切って、青海波文や植物を描き分けている。口縁内面は波濤文を連続して描いている。外面は唐草文である。18 世紀前半代に位置づけられる。18 は口クロ成形の土師器皿で口径は 11.8cm に復元される。19・20 は巴文の瓦当を有する軒丸瓦で、19 は瓦当径 13.5cm、珠文 12 個の小形のものである。21・22 は軒平瓦である。21 は「府内城系列」の瓦で 18 世紀代、22 は中心飾りが三葉のもので、17 世紀前半代のものと推定される。



第 69 図 SK025 平面・断面図(1/40)



第 70 図 SK025 出土遺物(1/4)

SK030（第 71 図）

E-4 グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸 1.0m 短軸 0.8m の楕円形を呈し、検出面からの最大深は約 40cm である。SK020 に切られている。埋土は炭化物を含む暗褐色砂質土を基調とする。

出土遺物から 18 世紀前半代と推定される。

出土遺物（第 74 図 1～7）

1 は肥前染付の碗で、18 世紀前半～中頃。2 は色絵で、帆掛舟のような文様が上絵付されているが、釉が白化しており、元の色調は窺えない。18 世紀前半のものと思われる。3 は型打ち成形の肥前染付皿で、口縁部は輪花となる。見込みには芭蕉文が描かれ、外側にも葉が 1 枚のみ描かれる。口縁部内面には繋ぎ文が描かれている。

高台内には福字が落款状に書かれる。18世紀前半のものか。4は磁器水注の注口部である。5は刷毛目の施文された肥前陶器碗で18世紀前半の製品である。6は焼塩壺で、板づくりのII類である。完形のため採拓できないが、内面には布目が認められる。外面には「泉州麻生」の刻印が認められ、口縁部の立ち上がりが断面方形で立ち上がる形態の特徴から、17世紀末～18世紀前半頃の製品と思われる。7は焼塩壺蓋で、内面に布目、上面に板状圧痕がみられる。

SK041（第72図）

E-5グリッドで検出された小規模な廃棄土坑で、長軸0.75m短軸0.5m+α、検出面からの最大深は約30cmである。SK028に切られている。埋土は炭化物を含む暗褐砂質土を基調とする。

出土遺物から18世紀前半代と推定される。

出土遺物（第74図7）

SX010第44図1およびSK052第44図6と同一の資料であるが接合しない。17世紀前半の初期伊万里の皿である。

SK044（第73図）

E-4グリッドで検出された廃棄土坑で、長軸1.1m短軸0.7mの橢円形状を呈し、検出面からの最大深は約40cmである。SK019・SK030に切られている。埋土は炭化物を含む暗灰褐色砂質土を基調とする。埋土中からはマダイの骨と鶏とみられる鳥骨が検出されており、食物残滓が廃棄されていたことを示す。

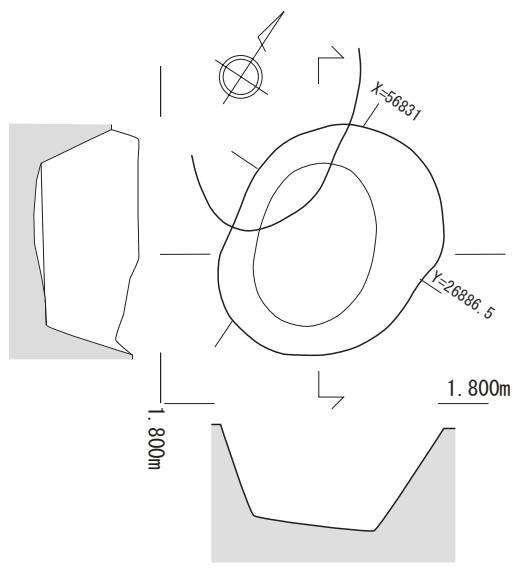
出土遺物から18世紀前半代と推定される。

出土遺物（第74図8～11）

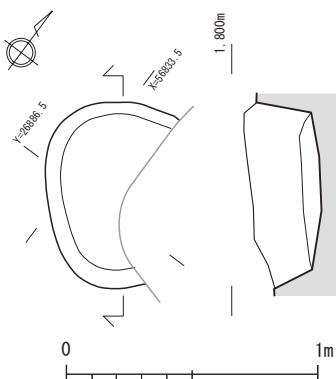
8は肥前染付碗で18世紀前半頃の製品である。9も同様の肥前染付碗である。10は「泉州麻生」の刻印を有する焼塩壺で、完形のため採拓していないが、内面に布目がみられる。口縁部立ち上がりは断面方形に立ち上がっており、17世紀末～18世紀前半代に位置づけられる。11は焼塩壺蓋である。

SK038

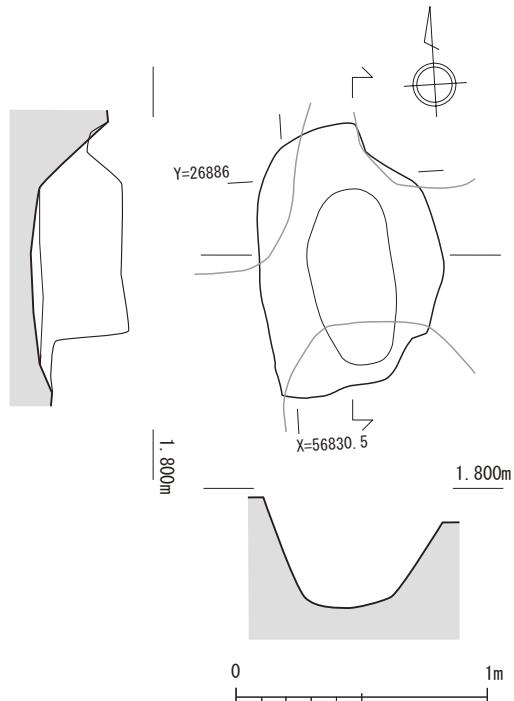
SK031・029・045の北側に隣接する遺構で、攪乱に切られたり、一部しか残存していないため、どのような形状かは不明である。暗褐色砂質土で埋積している。



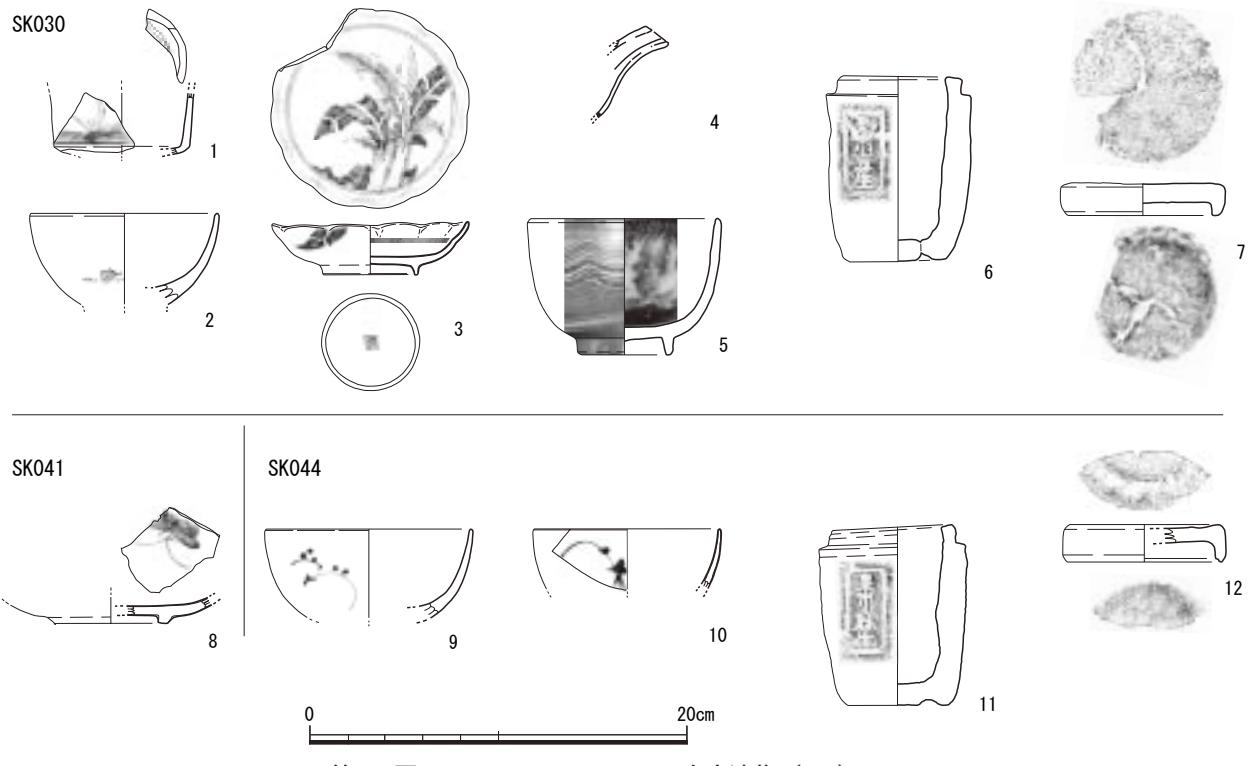
第71図 SK030 平面・断面図 (1/30)



第72図 SK041 平面・断面図 (1/30)



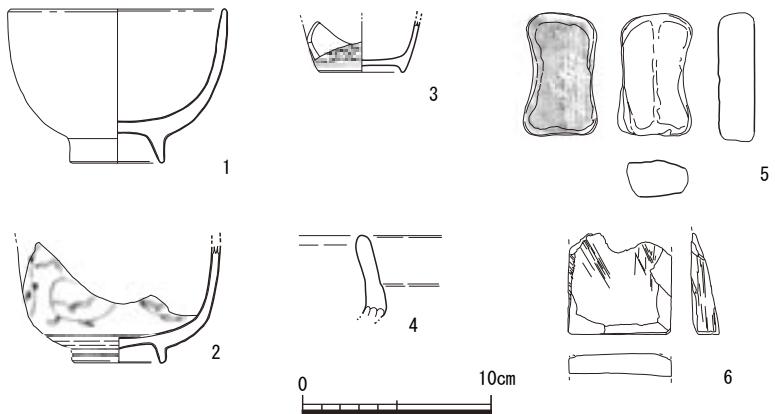
第73図 SK044 平面・断面図 (1/30)



第74図 SK030・SK041・SK044出土遺物 (1/4)

出土遺物（第75図）

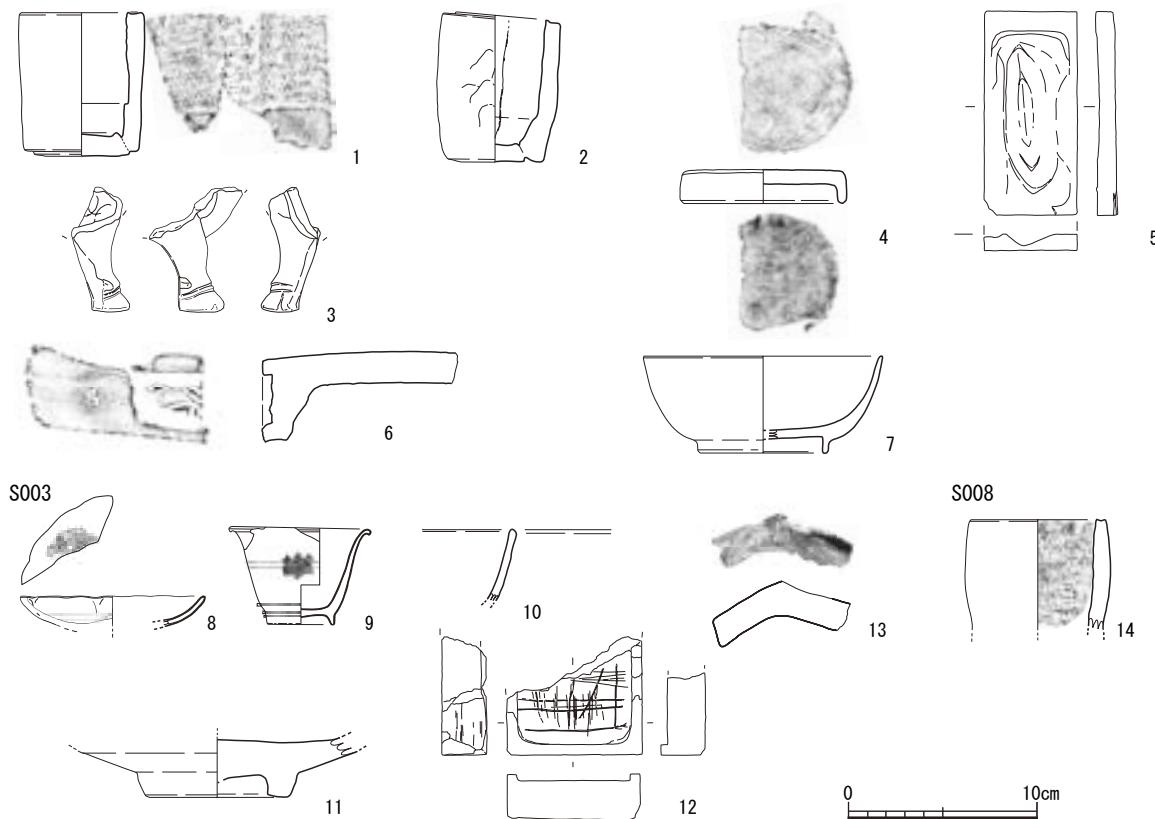
1は肥前陶器碗でいわゆる「御器手」である。2は肥前陶胎染付碗で18世紀前半に位置づけられる。3は肥前染付皿で18世紀前半。4は瓦質土器焙烙で、18世紀代の所産である。5は瓦片再加工品で、丸瓦の破片の周囲を打ち欠き、研磨して作成したと考えられる。6は頁岩製の砥石である。



第75図 SK038出土遺物(1/4)

その他の主要出土遺物（第76図）

1はS012出土の焼塙壺である。口縁部の立ち上がりはわずかに残るのみで退化している。内面には目の粗い布目が認められ、型作りの後底部を充填している痕跡が明瞭に窺える。金雲母を多量に含む特徴的な胎土を使用している。18世紀後半に比定されるものである。2は1とほぼ同型式の資料でほぼ完形の資料である。採拓できないが内面には目の粗い布目が認められる。3はS013出土の土人形である。先の割れた蹄が表現されており、牛と思われる。胎土は金雲母を含む緻密なもので、内面には滑石粉が多量に付着する。4は近代の廃棄土坑S016から出土した焼塙壺の蓋である。内面に布目は認められないが、外面には板状の圧痕がみられる。5は小土坑S046から出土した粘板岩製の硯である。上面が節理に沿って薄く剥がれ破損している。陸の部分が断面三角形状に著しく摩滅しており、あるいは砥石に転用されたものかもしれない。6はSV110検出時に出土した軒平瓦で、19世紀中頃の所産と思われる。「宮」の刻印が認められる。7は緑釉が畳付を除く全面に掛けられた陶器で、淡路の珉平焼と推定される資料である。胎土は黄白色で堅緻な焼成である。残念ながらF-3区の攪乱か



第 76 図その他近世遺構主要出土遺物 (1/4)

ら出土したものであるが、19世紀前半から中頃に比定されるものである。

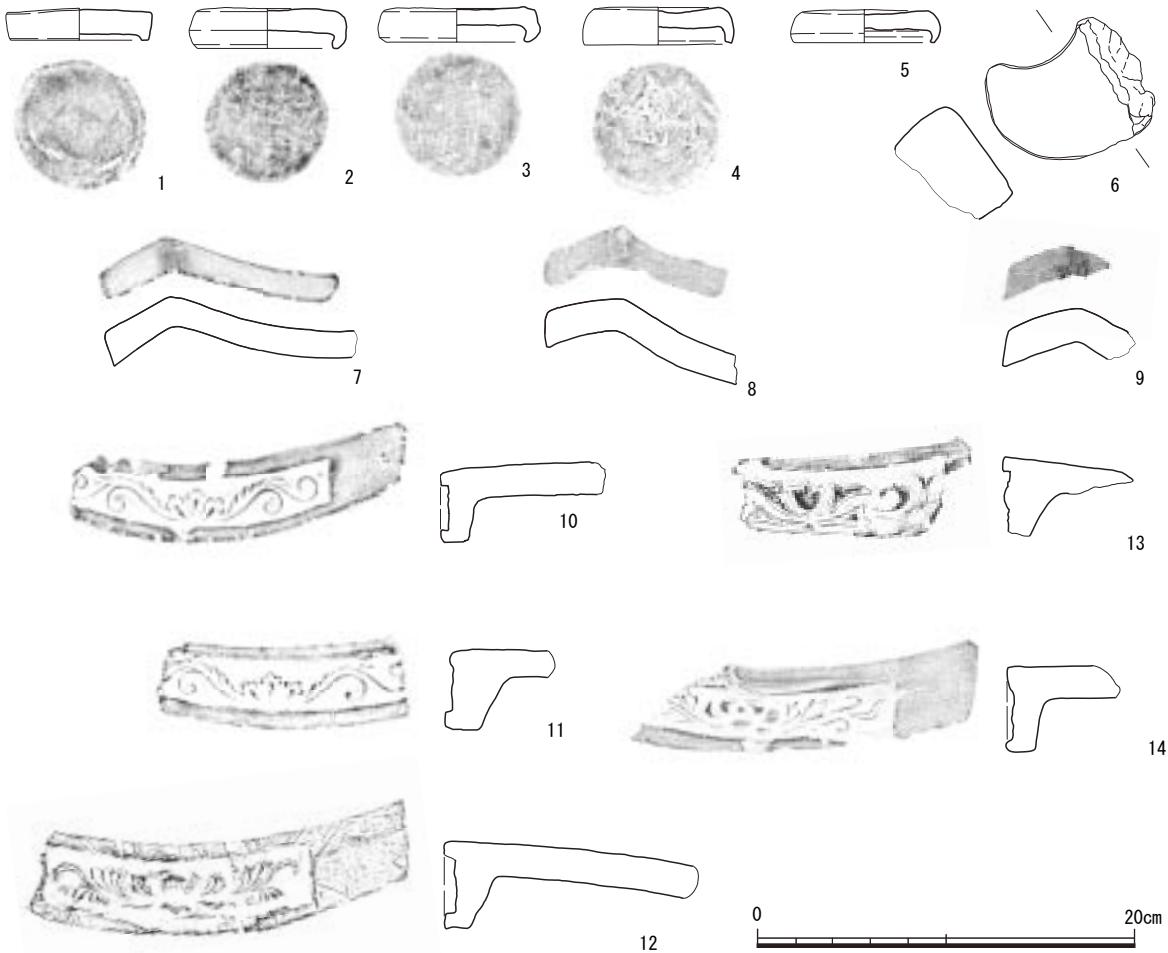
S003 は SV111 北側に位置する遺構であるが、周辺を後世の攪乱により破壊されているため、全体の形状は不明である。18世紀前半代に位置づけられる遺物が出土しているが、19世紀中頃の遺物も出土しているため、19世紀中頃以降の遺構もしくは整地層と思われる。8～13 は、S003 出土遺物である。8 は染付小皿で口縁部は輪花となる。9 は染付小杯で、外面にコンニャク印判による桐文を有する。3 は肥前陶器碗で 17 世紀初頭の製品と推定される。内外面には灰釉が掛けられる。4 は肥前陶器の鉢で、高台が面取りされておらず、17 世紀後半代の製品である。5 は流紋岩系の石材を用いた硯である。陸の部分に線刻が認められる。13 は「細和」の刻印を有する棧瓦である⁽⁷⁾。19世紀中頃に位置づけられる。

S008 は SX010 検出時に掘り下げた近世の整地層である。14 は 18 世紀後半に位置づけられる焼塙壺で II 類とされる、板づくりのものである。内面には粗い布目を有し、口縁部の立ち上がりはほとんど退化している。

S005 出土遺物 (第 77 図)

S005 は近代以降の遺物を含む整地層であり、機械掘削による表土剥ぎの後、人力による遺構検出の際に出土したものを S005 出土とした。このため、近代以降のものが多く含まれるが、ここでは近世の主要遺物を掲載する。

1～5 は焼塙壺の蓋で、いずれも内面には布目、上面には板状の圧痕が認められるものである。6 は鬼瓦で、18世紀代のものと思われる。7～9 は刻印を有する棧瓦である。7 は「半内⁽⁸⁾」、8 は「細弥」、9 は「細丸」の刻印がされている。10～14 は軒平瓦である。10・11 は「府内城系列」の瓦で 18 世紀前半代のものである。12 は府内城北口の調査で「細瓦師安太」の刻印が確認された資料⁽⁹⁾とほぼ同じ 6 葉の花卉状文を中心飾りとするもので、19 世紀中葉に位置づけられる。13 は橋状文を中心飾りとするもので、府内城三の丸における F-2 類に類似し、19 世紀代と推定されるものである。14 は 8 弁の花卉文を中心飾りとし、さらに 3 単位の葉文と 3



第 77 図 S005 出土遺物(1/4)

単位の唐草文が加わる。府内城・城下町跡第 12 次調査 SK057⁽¹⁰⁾でほぼ同じ文様の棟瓦が出土しており、共伴遺物から 18 世紀前半～中頃に比定される可能性が高い。また、府内城・城下町跡第 15 次調査 S001、S006⁽¹¹⁾でも 18 世紀前半代の遺物とともに極めて類似した瓦当の瓦が出土している。従って 18 世紀前半～中頃に比定される可能性が高い。左側が破損しているため確認できないが、棟瓦であった可能性も考えられる。

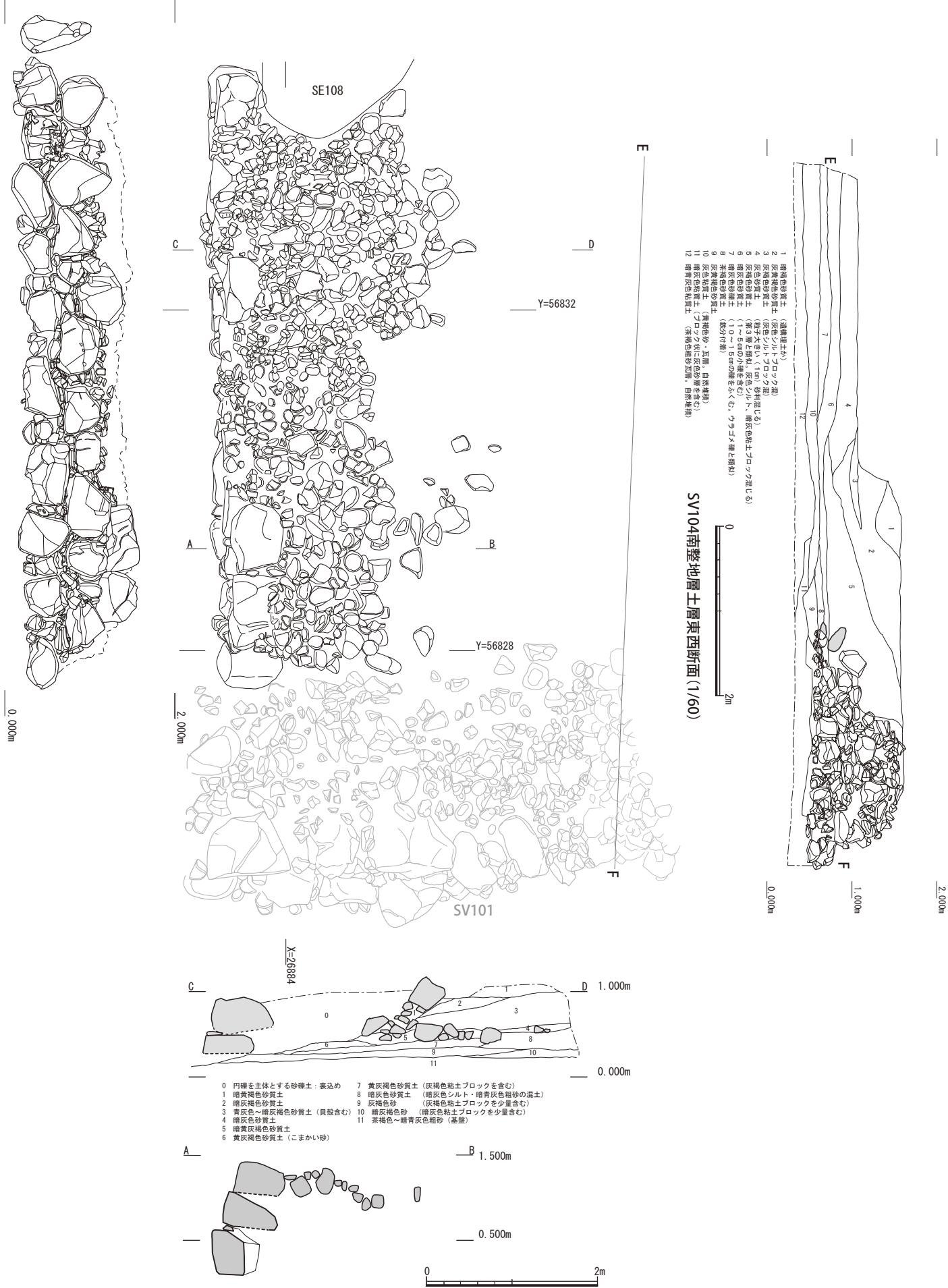
第 4 節 府内城築城直後の石垣および関連遺構と出土遺物

第 3 節で報告した、府内城北丸内部の遺構群の基盤層よりも下層で検出された石垣群である。また、第 2 節で報告した、北丸に伴う石垣 SV101 築造によって一部が撤去され、これに切られていることも確認されており、府内城を描いた現存する最古の絵図である「正保絵図」(1644 年) 以前の石垣で、一部については府内城築城直後にまで遡る可能性が高いと考えられる。

SV104 (第 78 図～第 83 図)

調査区西部 E-5 グリッドから E-7 グリッドにかけて検出された北側に面を向けた石垣遺構で、東西方向に長さ 7.3m にわたって検出された。

この石垣については、第 1 次本調査終了時の段階に、北丸内部の遺構床面や深い攢乱の底面において円礫（後



第78図 SV104平面・立面・土層断面図および南側整地層土層断面図 (1/60)



第 79 図 北丸内部遺構群完掘時の状況（東から）
北丸内部の遺構を完掘した時、土坑や深い攪乱の底には大形の角礫があることが確認されていた。



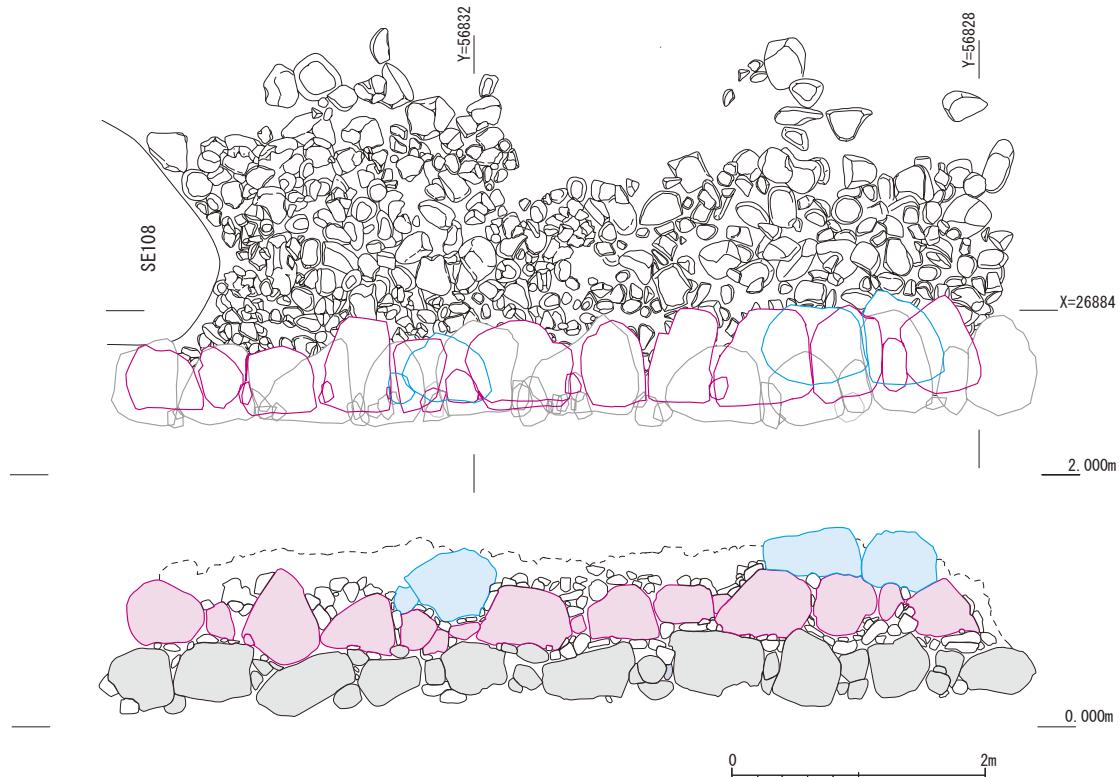
第 80 図 SV104 検出時の状況（北東から）
石垣の北側の砂層に向かって裏込めの礫が崩落し、流れ込んでいる状況が見られる。



第 81 図 SV104 北側整地層を掘下げた状況（北東から）



第 82 図 SV104 全体検出状況（北から）



第 83 図 SV104 の築石の重なり（1/60）

に裏込めと判明) や大形の角礫(石垣築石)が存在することが既に注意されており(第79図)、第2次本調査の際に石垣であることが確認されたものである。しかし、第2次本調査の当初にも、調査担当者は石垣との認識を十分持っておらず、自然堆積の砂層にある不明な集石と認識していたが、砂層の除去を進めていくと石垣であることが明らかとなった。北丸内部の遺構が掘り込まれた基盤層である砂層や砂質土層には遺物が含まれていなかったため自然堆積層と認識していたのであるが、これはSV104廃絶後にこれを埋め戻した砂を主体とする整地層であることが判明した。検出時には、石垣廃絶時に裏込めが石垣北側に流れ落ち込んでいる状況が観察されており(第80図)、石垣を取り壊しながら、砂によって埋められていったものと考えられる。さらにこの石垣取り壊し→埋め戻しと同時にSV104の北側にSV105・SV107の築造が行われたものと推定される(後述)。SV104の検出により絵図に描かれていない古い石垣の存在が明らかとなり、さらに5箇所において同様の石垣が検出されることにつながった。

SV104の遺存高は最大で1.45m(築石3段)で最高点は標高1.6mである。E-7グリッド東端部以東は医師会館西側基礎の築造によって破壊されており、これよりも東側で検出された石垣SV111はSV104と連続していた一体のものと考えられる(第101図)。西側については、SV101からSV104にかけての断面観察(第21図断面A-B)によりSV104西端を直接SV101裏込めが覆っていることが確認でき、SV101築造時に崩されたものと考えられる。また、裏込めの一部についてはSE108により切られている。

基底部の標高は、0.07m～0.2mである。

築石は凝灰角礫岩や安山岩が主体で、全て自然石の角礫からなる。最大のもので長辺0.8mで、SV101に比して小形である。しかし、SV101南端部の石とは石材や大きさが類似し、下底面の標高も類似していることから、SV101南端部はSV104の一部として築造された可能性が考えられる。間詰めは築石と同様な石材の小形の角礫を用いている。

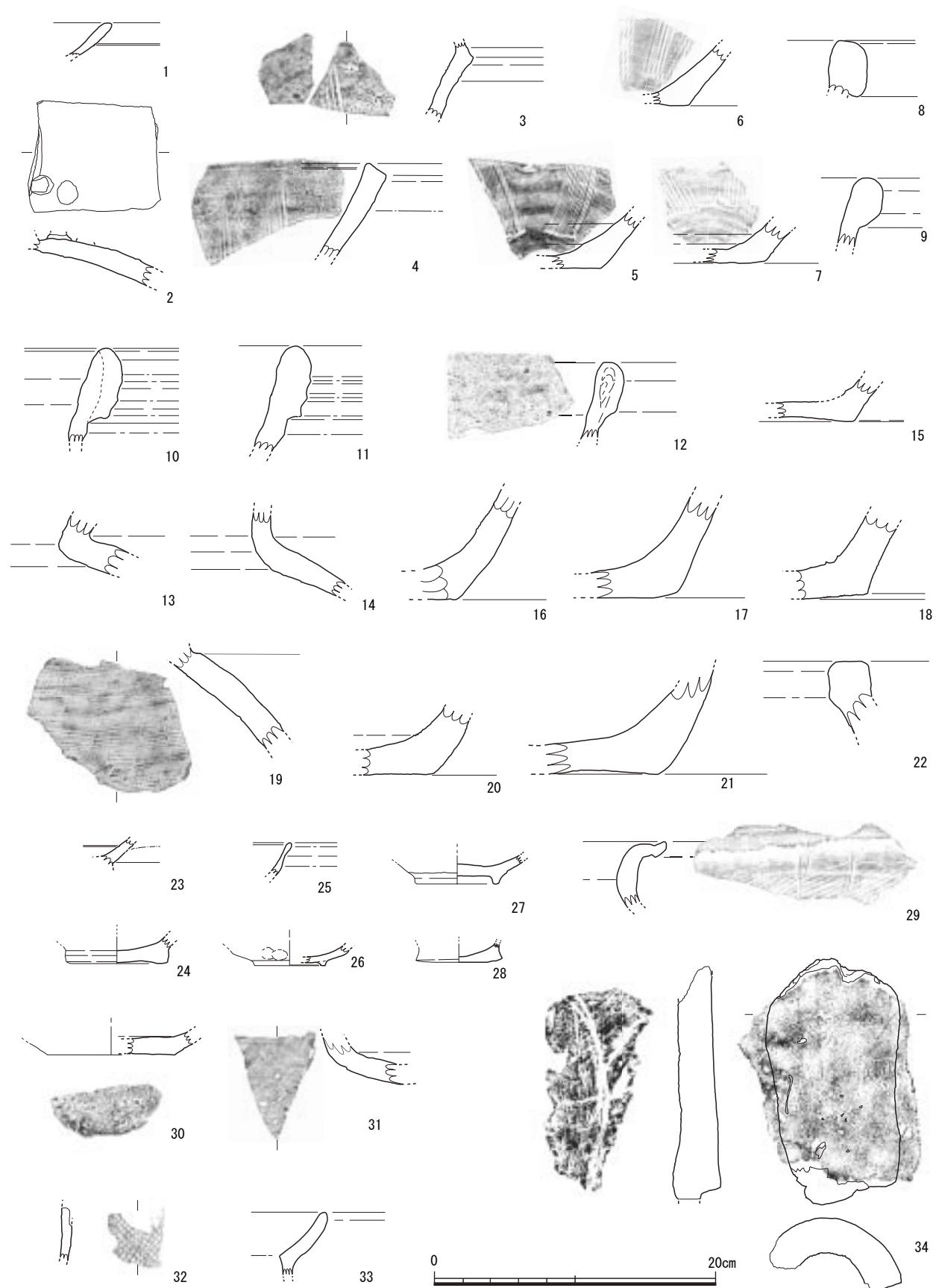
石積みは石材の長辺を南北に置いた小口積みが主体である。最下段の石は2段目に対して最大15cm全面に突き出しているものがみられる。自然堆積の砂層上に直接最下段の築石を置いており、胴木等の下部構造は認められなかった。裏込めは、最下段の築石後方から施されており、築石の南側に幅約2.0～2.2m認められる。礫が主体であり、意図的に粘質土等を混入するなどの痕跡は認められなかった。裏込めの直下に粘質土ブロックを含む土層がみられるが(7層)積極的に施工したものとは考えられない。裏込めの石材は長径30cm程度以下の円礫からなる。凝灰角礫岩・安山岩・礫岩など、大分川流域から採取したと推定される礫が主体であり、高崎山系の石材はみられない。

SV104南の南側にはより古いと考えられる東西方向の石垣SV110があり、SV104の裏込めはSV110を覆う土(整地層)と連続するものと判断でき、よって、SV110埋め戻し後に連続的にSV104が築造されたと推定される。ただ、調査時にはSV110の存在が予想できていなかったため、SV104からSV110にかけて南北に縦断する土層断面を提示して、築造状況を客観的に示すことができないことが悔やまれる。

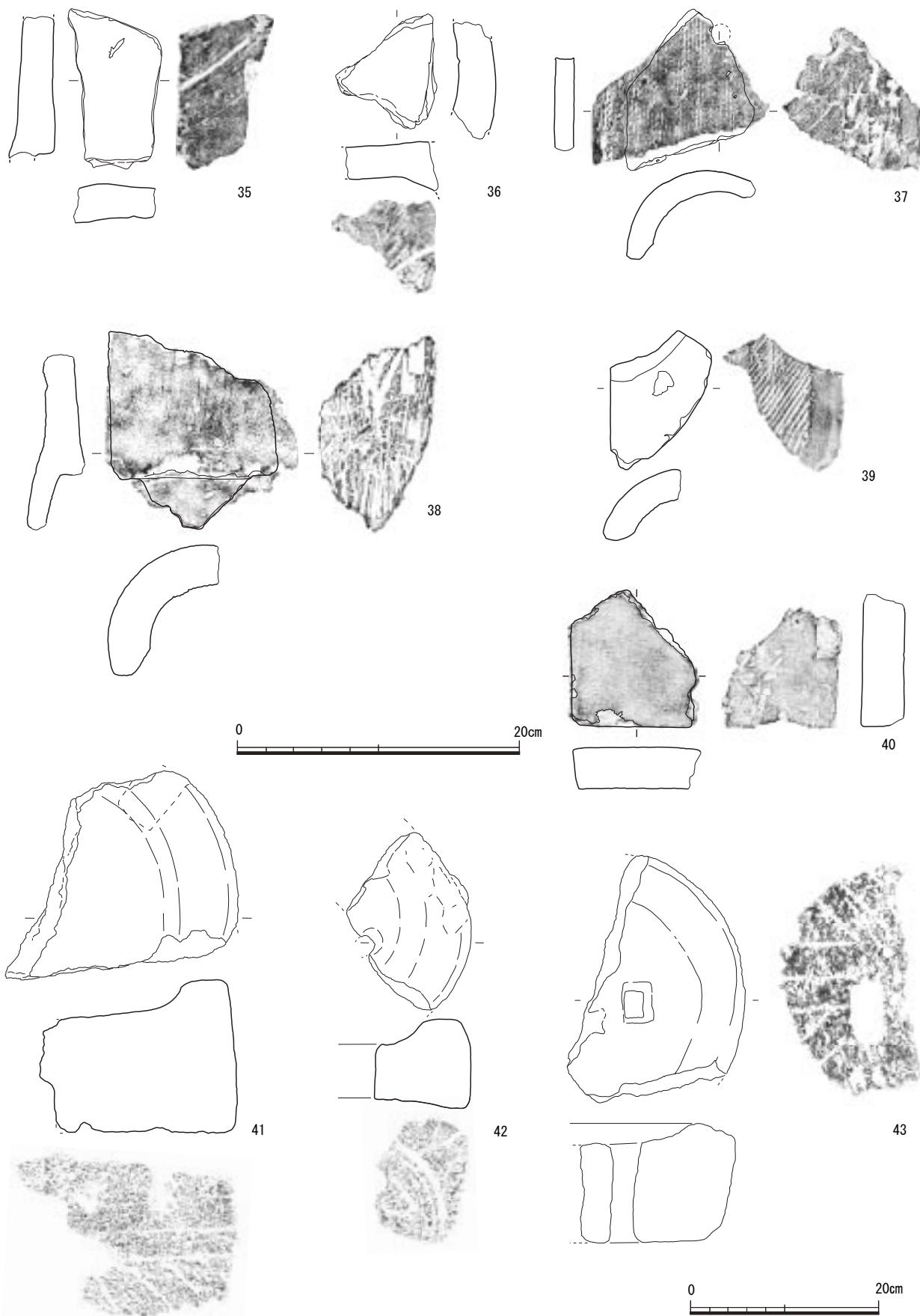
一方、この整地層の東西方向の土層断面観察では整地と層序が連続する裏込め状の円礫を多数含む土層が認められる(第78図の土層図)。これはSV101の裏込めと考えるよりもむしろSV104に伴う石垣裏込めと考えられる。つまり、SV104とほぼ並行してSV104に連続する南北方向の石垣があった可能性を示しているものと考える。

裏込め及びSV104南の整地層中からは16世紀末までに比定される遺物は存在するが、胎土目段階の肥前陶器(1590年～1610年)は全く出土しておらず、SV104の築造時期が17世紀初頭に遡る可能性を示している。SV104出土遺物(第84図～第86図)

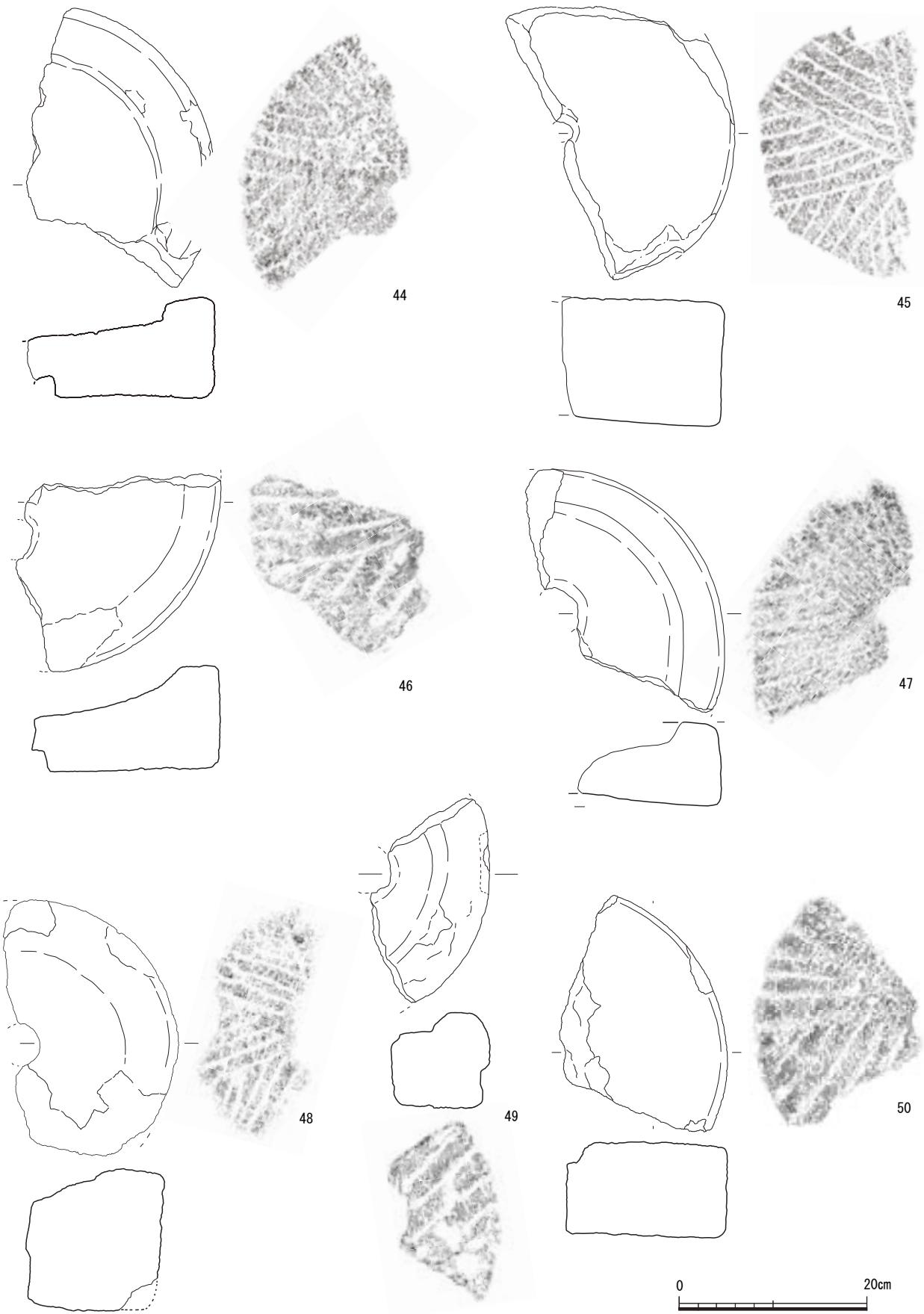
裏込めから出土した遺物である。1は手づくね成形の土師器で京都系土師器皿である。16世紀代のものとみられる。2～21は焼締陶器で、全て備前焼である。2は四耳壺、3～7が擂鉢、8～21は甕と考えられる。



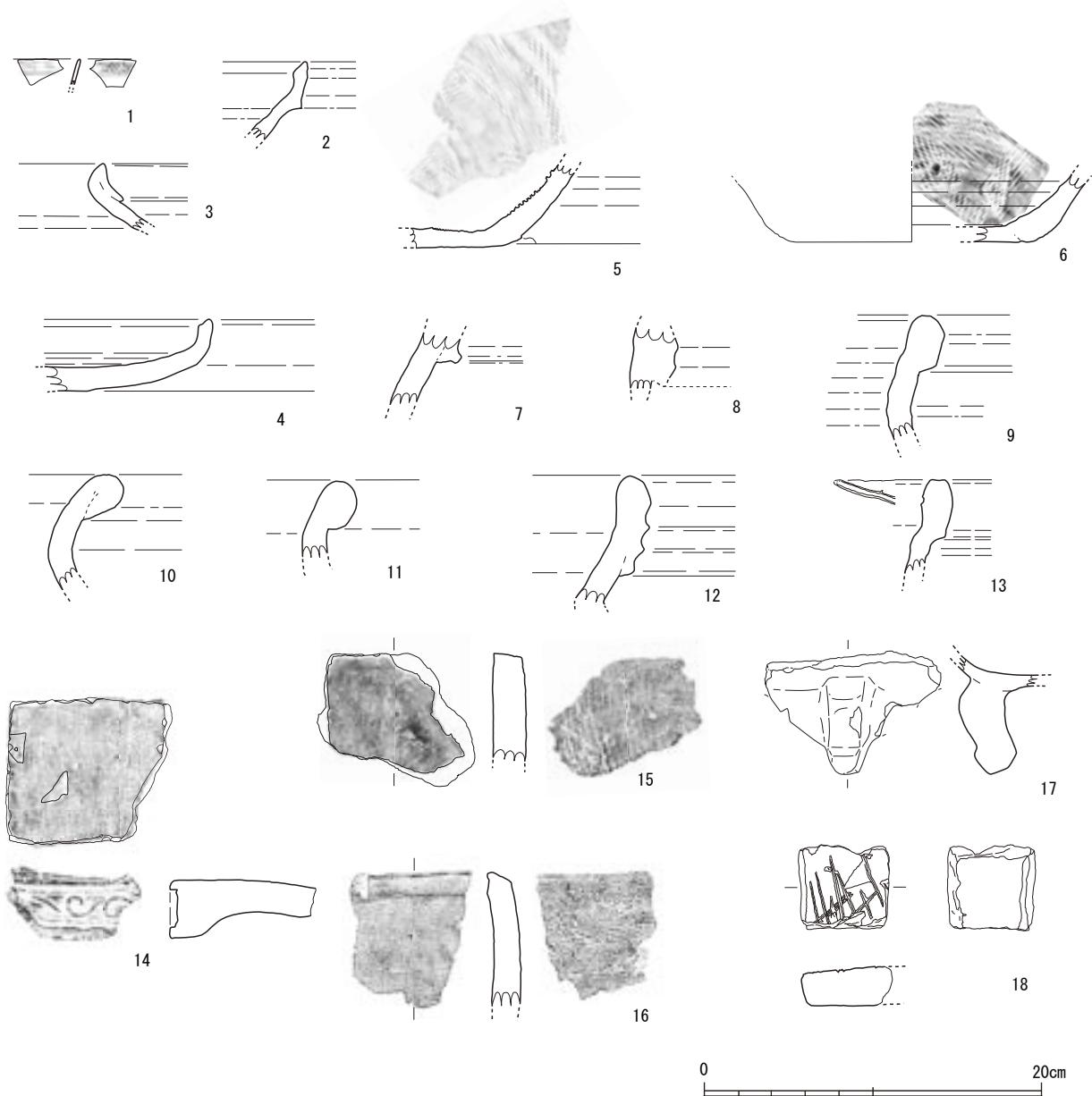
第84図 SV104出土遺物1 (1/4)



第85図 SV104出土遺物2 (1/4・1/6)



第86図 SV104出土遺物3(1/6)



第 87 図 SV104 南整地層出土遺物 (1/4)

10・11 のように 16 世紀末頃に比定され、府内城築城（1597 年築城開始）時期と一致するものもあるが、15 世紀頃のもの（4）も認められ、整地に伴って投入された土層に含まれていたものとみられる。22 は土師器甕の口縁部と考えられる。23～32 は中世前半期（12～14 世紀頃）のものと考えられる。23・24 は白磁碗で 12 世紀後半に位置づけられる。25・26 は和泉型瓦器碗で、12 世紀代のものとみられる。27 は瓦器碗で、豊前系のものとみられ、12 世紀代に位置づけられる。29 は瓦質土器の甕、30 は東播系鉢の可能性がある須恵質の鉢である。31 は瓦質土器の甕もしくは壺で、中世のものであろう。32 は胴部破片であるが格子目のタタキ痕を有し、亀山系の瓦質土器甕と思われる。33 は古墳時代のものと推定される土師器甕である。34～40 は瓦である。34・37～39 は丸瓦である。いずれも内面に糸切り痕を有するものである。37 は背面側に縄目タタキ痕を残しやや古いものと思われるが、34・38 は工具によるミガキが認められ、16 世紀以降の瓦と推定される。35・36 は棟瓦と推定される。内面には糸切り痕が残る。40 は平瓦で、一枚づくりの際の糸切り痕がわずかに

認められる。41～50は裏込めに転用されていた石臼で、いずれも安山岩系の石材を使用している。

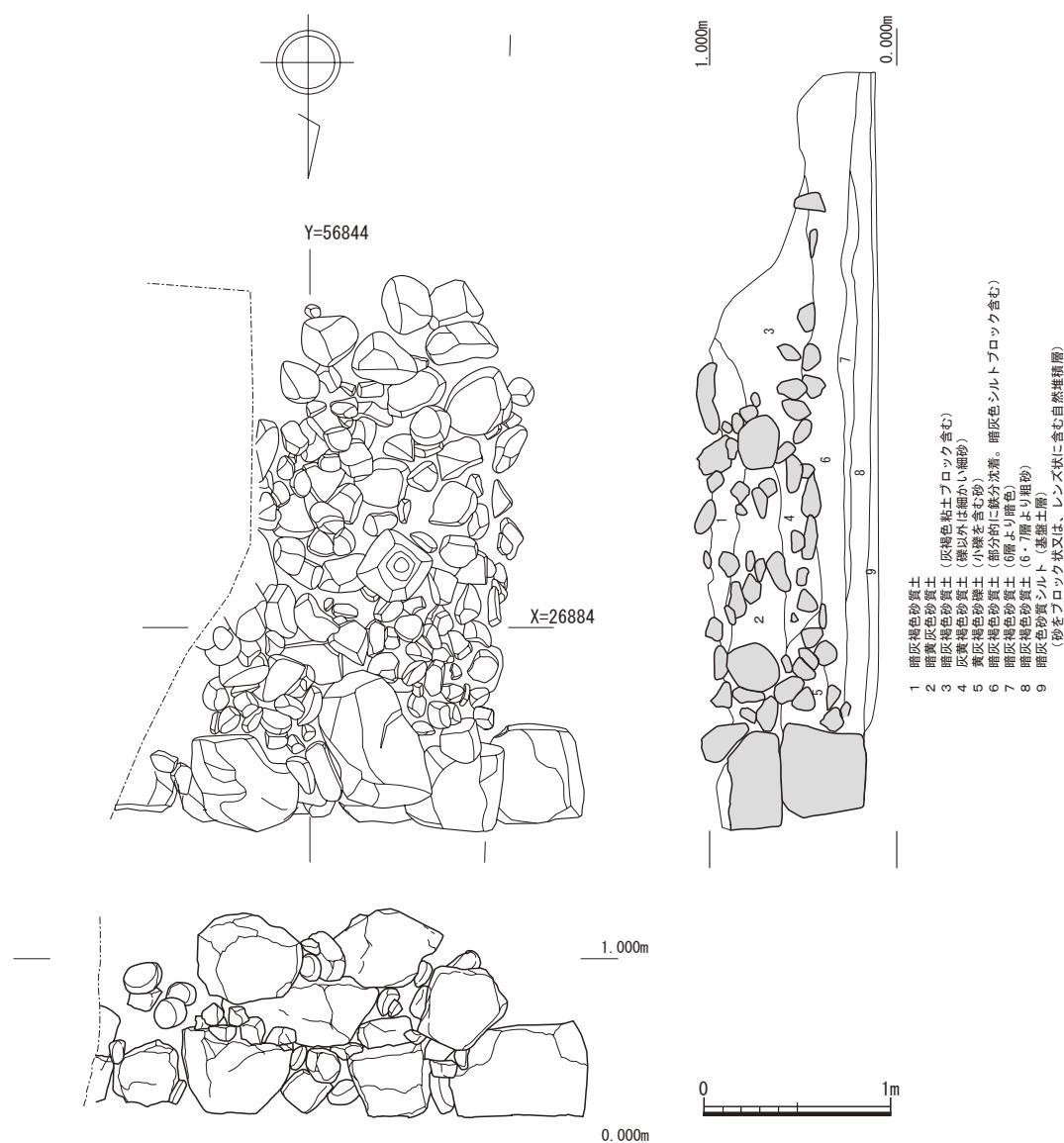
SV104 南整地層出土遺物（第87図）

SV104 裏込めと SV112との間の土層、すなわち SV112撤去・埋め戻し後に SV104 裏込めとほぼ同時に整地されたと考えられる土層から出土した遺物である。

1は青花碗と考えられるもので16世紀代に位置づけられる。3は中国南部産の壺の口縁部である。外面と内面の一部に鉄釉が掛かる。中世府内町においては、16世紀後半代の遺構を中心に多く検出されている遺物である。2・4～13は焼締陶器で、いずれも備前焼である。2・5・6が擂鉢、4は盤、7～13は甕である。14は軒平瓦である。中心飾りは不明であるが唐草2単位+飛び唐草という構成は府内城における17世紀代の瓦には認められず、16世紀代もしくはそれ以前の瓦と思われる。15・16は平瓦で、表面には糸切り痕が残る。17は瓦質火鉢、18は砂岩製の砥石である。

SV111（第88図）

SV104の東側に位置する東西方向の北面して築かれた石垣遺構である。SV111の検出位置では、第1次本調査の際に遺構が検出されず、自然堆積とみられる砂層が現れた時点でそれ以上の調査を行っていなかった。しか



第88図 SV111 平面・立面・土層断面図 (1/40)

し、SV104 が検出されたことから、その延長上であるため、石垣の存在が予想されることになり、砂層の掘り下げを行って検出されたものである。

長さ約 2.7m にわたって検出されたが、東側には旧建物のコンクリート基礎があり、これを撤去した場合隣接する敷地の地盤に悪影響を及ぼす恐れがあることから、撤去を断念し、これ以上の検出はできなかった。また、同じ理由から石垣の解体は行っていない。

遺存高は最大で 1.1m（築石 3 段）で最高点は標高 1.2m である。平面的な位置が SV104 と同一直線上にあることから同一の石垣と考えられ、旧医師会館建設に伴う攪乱により分断されたものである。基底部の標高は 0.15m であり、SV104 とほぼ同一である。自然堆積の砂層上に直接石を積んでいることが観察され、胴木等の下部構造は認められない。

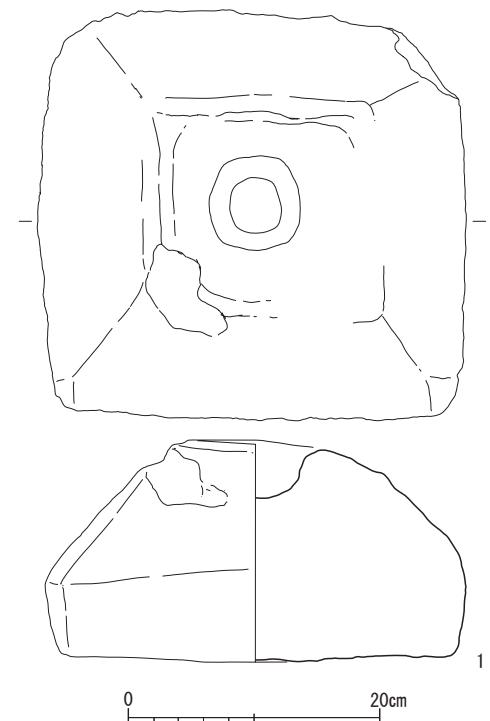
築石は最大のもので長辺 0.8m で、凝灰角礫岩もしくは安山岩が使用されており、石材は全て自然石の角礫である。石積みは小口積みがされている。裏込めは幅 2.2 ~ 2.5m で一部には五輪塔火輪も使用されている。築石 2 段、一部 3 段を残して解体され、ほぼ砂のみによって埋め戻されて整地されたと考えられるが、こうした状況は SV104 と全く一致している。なお、遺構検出の際、築石が北側に向かって崩落し、そのまま砂層で埋められている状況が観察された（第 87 図）。この砂層からは全く遺物が出土しなかった。

SV111 出土遺物（第 90 図）

裏込めから出土した遺物で、高崎山系の角閃石安山岩を使用した五輪塔の火輪である。



第 89 図 SV111 石垣崩落状況（北東から）



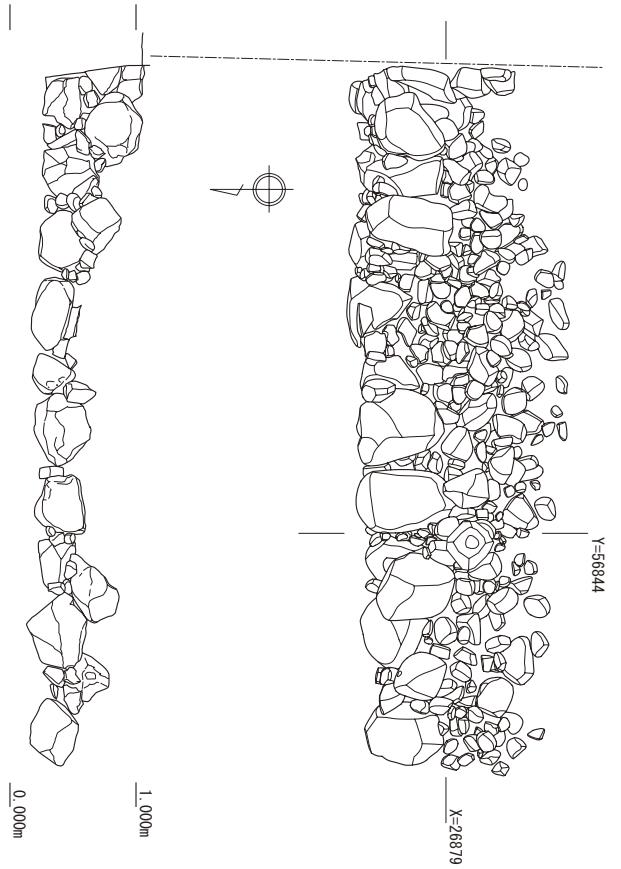
第 90 図 SV111 出土遺物（1/6）

SV110（第 91 図）

調査区南東端に位置する東西方向の石垣遺構で、長さ約 5.5m にわたって検出された。

SV110 の検出位置では、第 1 次本調査時には整地層のみで遺構が検出されなかった。しかし、壁面沿いにサブトレンチを入れて掘り下げたところ石列が存在することが確認されていた。調査期間の関係でさらなる確認は第 2 次本調査時に持ち越され、SV104 が発見された直後に石垣である可能性が高いと判断して付近の掘り下げを実施して全体の検出に至ったものである。

北面して築かれている石垣で、遺存高は最大で 0.8m（築石 2 段）、最高点は標高 1.1m である。基底部の標高はほぼ 0.2m である。SV112 および SV113 とは平面的な位置がほぼ同一直線上にあることから、同一の石垣であったと思われる。自然堆積の砂層上に直接石を積んでおり、胴木、杭等は認められない。築石は最大のもので長辺 0.8m で、凝灰角礫岩もしくは安山岩が使用されており、石材は全て自然石の角礫である。石積みは小口積みがされていることが観察できる。裏込めは幅 0.8 ~ 1.0m 程度であり、小規模である。五輪塔火輪も転用されていた。石垣は一部 2 段、多くの部分は 1 段のみを残して撤去された後、埋められ、整地されているよう



第91図 SV110 平面・立面・土層断面図 (1 / 60)

ある。整地層は砂質土であるが、SV104・111にみられるように「砂のみ」というわけではないが、SV110基盤面である自然堆積土層とも一見区別が付きにくい土層である。この整地層は、東側壁面の土層観察によれば22・23、25・26層がこれにあたる。さらに斜め方向に投入された整地土（13～21層）によって整地されている。その後、18世紀以降と考えられる10・11層は堅くしまっており、通路として機能していたことも考えられる。

SV110 出土遺物（第94図）

SV110北側を埋めている整地層及び、裏込めから出土した遺物である。
1は白磁皿で、16世紀の製品である。2は口縁部が玉縁となる白磁碗で、12世紀後半に位置づけられる。3は京都系土師器皿で、器壁が厚く16世紀末～17世紀初頭頃に位置づけられる。4・5はロクロ成形の土師器

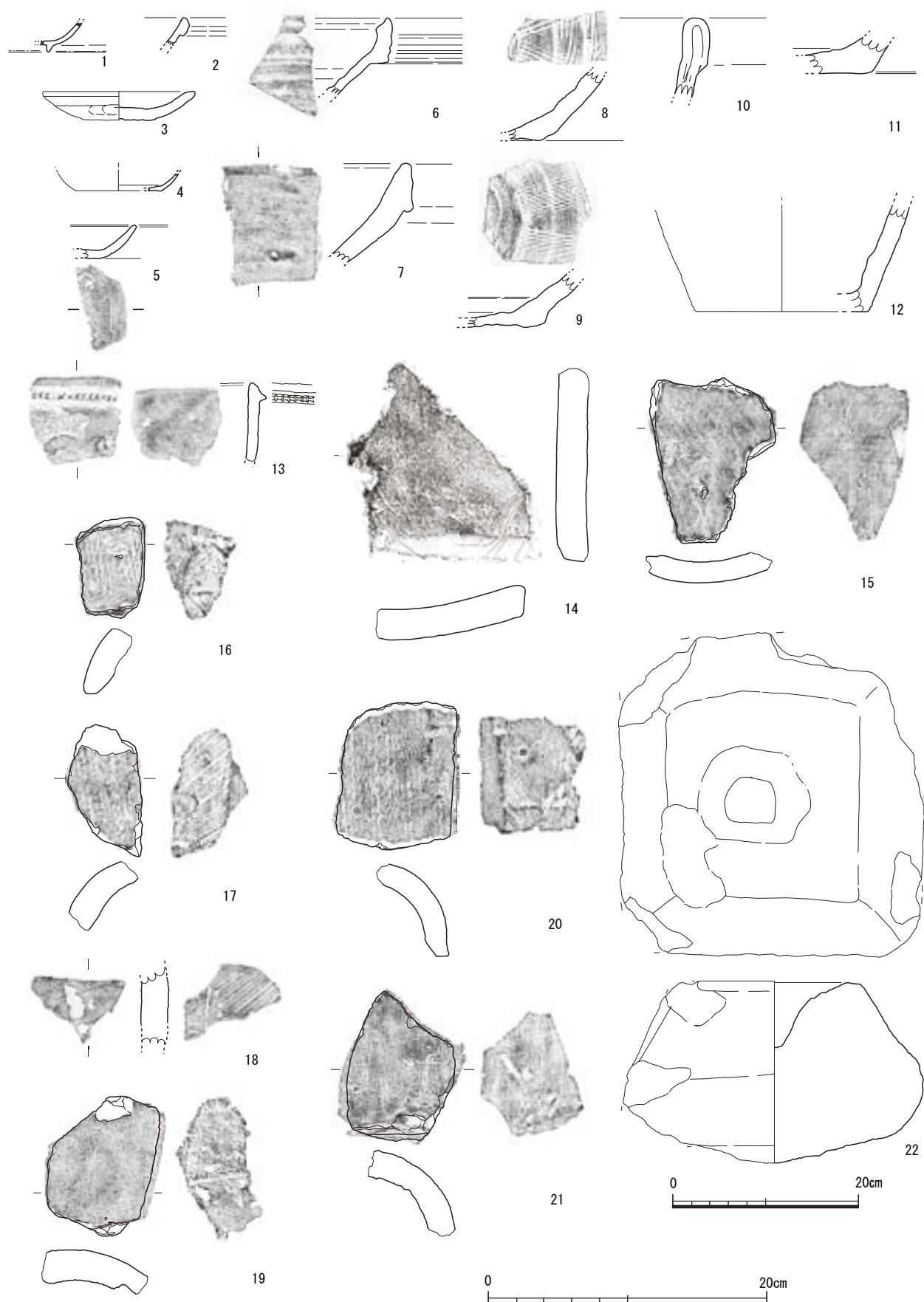


第92図 第1次本調査時石組み確認状況（北から）



第93図 SV110 崩落状況（西から）

A バラス	16 暗灰褐色シルト質土
B 黄褐色砂土	17 暗黄褐色粗砂
1 黒褐色砂質土	18 灰褐色シルト質土
2 黒褐色シルト質土	19 灰褐色シルト質土
3 暗褐色シルト質土	20 暗黄灰褐色粗砂
4 暗褐色砂質土	灰褐色粘土ブロック少量混じる
5 暗褐色土	21 暗褐色シルト質土
6 黒褐色砂質土	22 暗灰褐色粗砂（暗灰色粘土ブロック含む）
7 暗褐色砂質土	23 暗灰褐色（暗灰褐色粘土質土と粗砂の混土）
8 暗褐色シルト質土	24 暗灰色粘土質土（粗砂多）
9 暗茶褐色シルト質土	25 暗褐色粘土質土
10 暗褐色シルト質土	26 灰褐色粘土質土
11 黄褐色粘土質土ブロックを多く含む 暗茶褐色シルト質土	27 暗灰色粘土質土 (暗褐色シルト・茶褐色粗砂レンズ状に入る)
12 暗茶褐色土	28 暗灰色粗砂をブロック状に含む
13 暗黄褐色砂層	暗灰色粘土質土
14 暗茶褐色砂質土	29 砂混じり暗灰色粘土質シルト
15 暗褐色粘土質土	暗褐色粘土質土ブロック少量混じる



第94図 SV110出土遺物(1/4)・(1/6)

坏である。6～9は備前焼擂鉢で、6は16世紀末、7は15世紀後半頃に比定される。10・11は備前焼甕、12は備前焼の壺と思われる。13は弥生時代中期の甕で、刻目突帯文を有する。14・15は平瓦で、表面には糸切り痕が残る。16～20は丸瓦で、内面には糸切り痕がみられ、全てコビキAにより製作されたものである。16・17・20の背面側には縄目タタキ痕がみられる。21は丸瓦片であるが、内面には布目はみられるが、糸切り痕ではなく鉄線引きと考えられる平行した細線が認められ、コビキBにより製作されたと思われる。背面は工具による縦方向のナデがみられる。22は阿蘇溶結凝灰岩を用いた五輪塔の火輪で、裏込めに転用されていたものである。

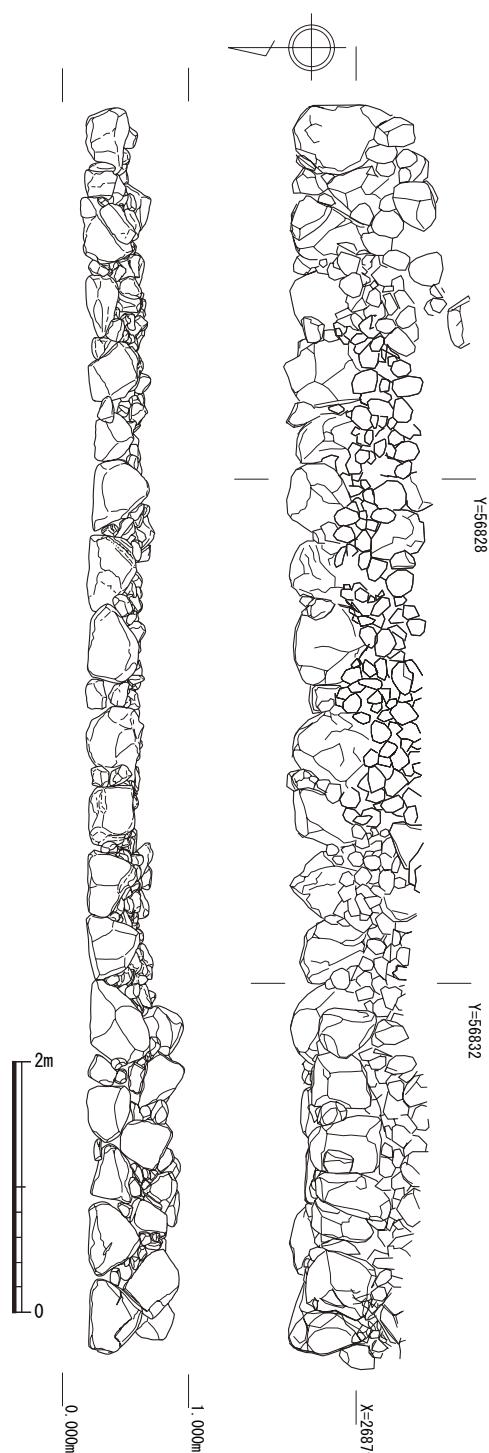
SV112（第96図）

SV110が検出され、その延長上に石垣が存在することが強く予想されたため、SV104南側の整地層を掘り下げた結果検出された。調査区南端に位置する東西方向の石垣遺構であり、長さ約11.2mにわたって検出された。北面して築かれている。遺存高は最大で0.9m（築石2段）で最高点は標高1.1mである。基底部の標高はほぼ0.2mである。平面的な位置関係から、SV112およびSV113と同一の石垣であったと思われる（第100図）。自然堆積の砂層上に直接石を置いており、胴木、杭等は認められない。築石は最大のもので長辺1.0mで、凝灰角礫岩もしくは安山岩が使用されており、石材は全て自然石の角礫もしくは亜角礫である。石積みは小口積みがされている。裏込めは最大でも長径30cm以下、概ね20cm以下の円礫が使用されており、幅0.6～0.8m程度で、狭く小規模で、SV110における裏込めの状況と全く同じである。石垣は一部2段、大部分は1段のみを残して撤去された後、埋められ、整地されたと考えられる。この整地層は、SV104裏込めと連続していると思われ、SV112の撤去・整地とSV104の築造が一連のものとして施工された可能性が高いと考えられる。出土遺物は僅少であるが、肥前陶器は全く出土しておらず、遺構の年代は17世紀初頭に遡る可能性が高いと推定される。

なお、検出位置が南側壁面際であり、危険が生じるため石垣の



第95図 SV112 検出状況（北から）



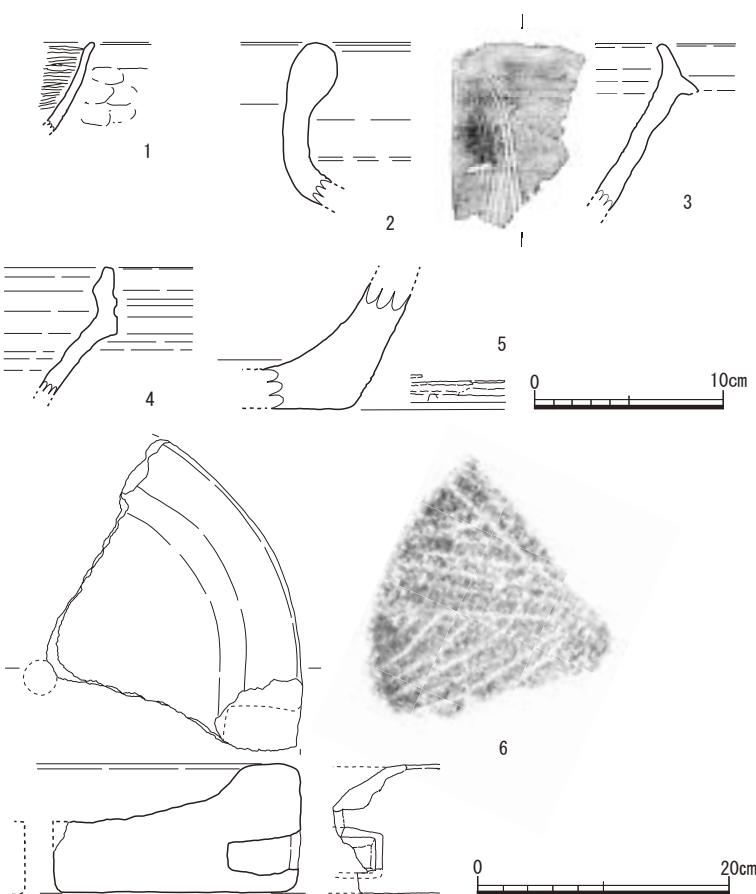
第96図 SV112 平面・断面図（1/60）

解体は行っていない。

SV112 出土遺物（第 97 図 4～9）

裏込め上面から出土した遺物である。

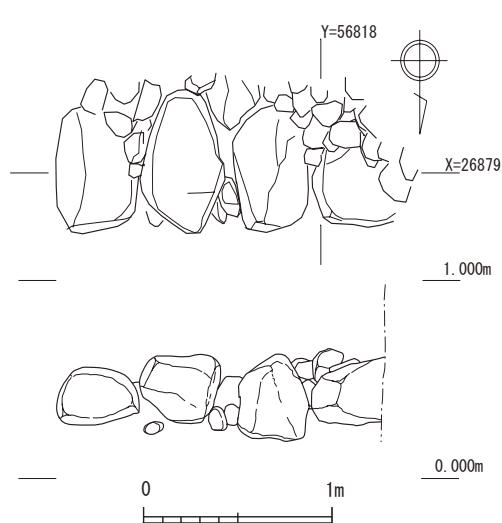
1 は瓦器椀で、内面は密に磨かれている。2～5 は備前焼で、2・5 は甕、3・4 は擂鉢である。6 は安山岩製の石臼で、裏込めに使用されていたものである。



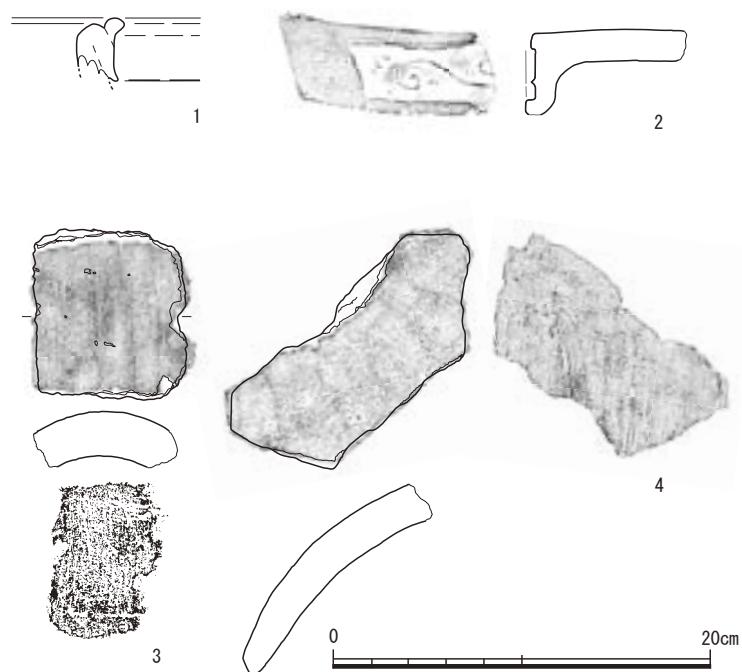
第 97 図 SV112 出土遺物(1/4)

SV113 出土遺物（第 99 図）

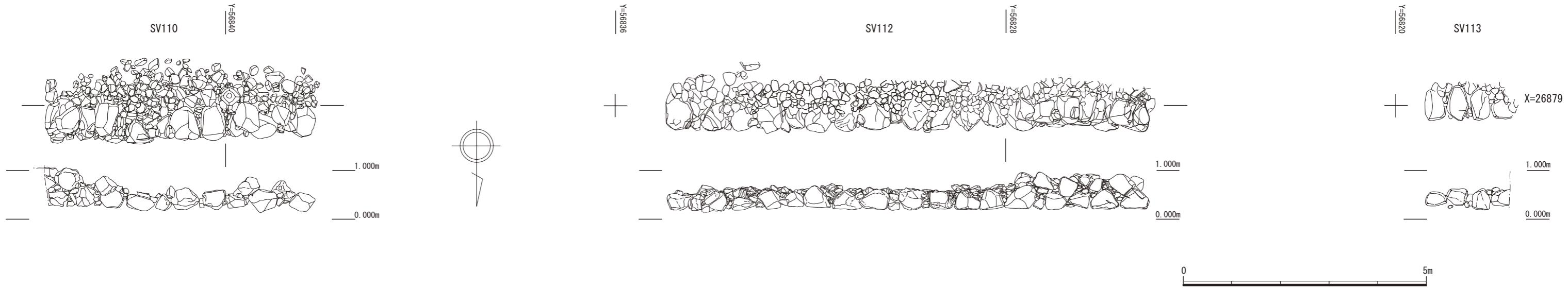
1 は常滑焼と思われる焼締陶器甕で、



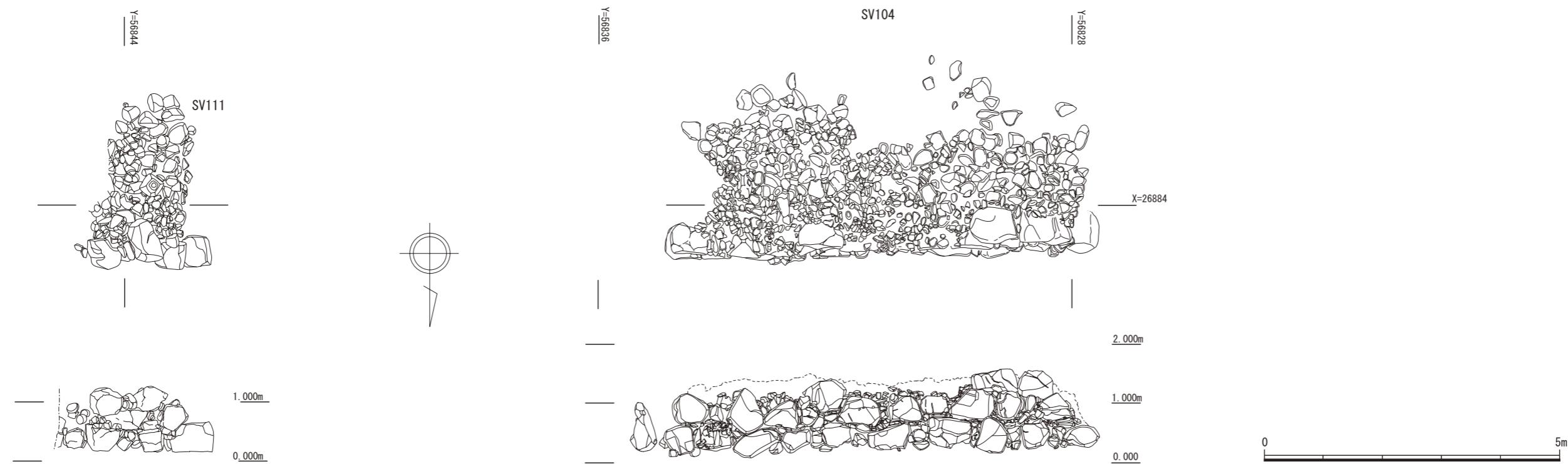
第 98 図 SV113 平面・断面図 (1/40)



第 99 図 SV113 出土遺物 (1/4)・(1/6)



第100図 SV111・SV112・SV113平面・立面図(1/80)



第101図 SV111・SV104平面・立面図(1/80)

16世紀の所産と思われる。2は軒平瓦で、3単位の唐草が認められることから、府内城・城下町出土の17世紀以降の資料に例がないため、16世紀代以前の資料と考えたい。3・4は丸瓦である。3は内面に鉄線引きによるとみられる平行する細線が認められ、コビキBによる製作と考えられる。背面は工具による縦方向のナデである。4は内面に糸切りが認められ、コビキAにより製作されたものである。

SV105・SV107（第103図）

SV105は調査区中央部D-3グリッド東端からD-5グリッドにかけて検出された遺構で、石垣の裏込めと考えられる遺構である。SV104が検出された後、周辺の砂層を掘り下げた際、東西方向に長さ8.1mにわたって検出された。最高点は標高約1.5mである。北側と東側は旧医師会館基礎の築造によって破壊されて残存していない。東端部は近代以降の井戸S106によって切られている。西端部はSV101の裏込めによって切られていることが東西方向の断面から認められる。

石積みの南北幅は最大2.1mで、最大厚は0.5m、長径30cm程度を最大とする円礫もしくは亜円礫が積まれている。南北断面の観察では、石積み底面のレベルは0.6～0.35mであるが、北側ほど低くなっていることが認められ、また石積みの厚さは北側ほど厚くなっている。このことから、SV105北側に北面して築かれた東西方向の石垣が存在し、SV105はその裏込めであったことを示唆していると考えられ、SV105は未発見の石垣の裏込めであると考えておきたい。

なお、SV101においては、先述したようにC-3・D-3グリッド境界付近において石垣基底面レベルに段差がみられ、この位置がSV105北側に想定される東西方向の石垣と概ね対応することからもこの付近に東西方向の石垣が存在したことの傍証になるのではないかと考えられる（第104図）。

使用石材は凝灰角礫岩や安山岩が主体であるが、高崎山系の角閃石安山岩も多く認められる。

SV107はSV105西端部に接続する石組み遺構である。南北2.4mにわたって長径20～40cm程度の亜円礫もしくは亜角礫を積み、溝状の施設を形成している。基底面の標高は0.5～0.45mで、SV104北側を埋めた整地層の下位に築造されている。SV105北に存在した石垣に伴う暗渠等の機能が想定される。

使用石材は高崎山系の角閃石安山岩の亜円礫・亜角礫である。

高崎山系石材がSV105・SV107に使用されていることは、これらに伴うと考えられる未知の石垣が同石材主体で築造されていることを暗示させる。

SV104からSV105にかけての南北方向の断面観察によれば、SV104の北側を埋めた砂およびわずかにシルトブロックを含む砂層の上に礫が積まれていることが観察される。また、SV107も同じ土層上につくられている。すなわち、SV104廃絶後にその北側を砂を主体として一定程度埋めた後にSV105・SV107が築造されて、さらにSV105・107自体も同様な砂層で埋められ、SV104を覆っていた砂層と連続している。従って、SV104廃絶・解体→SV104北側の一部埋め立て→SV105・107築造→SV104埋め立てが一連の工程として行われたことが考えられる。

SV104北側整地層からはわずかながら16世紀後半～末に比定される遺物が出土しているが、1590年代～1610年代に比定される肥前陶器は全く出土せず、整地の年代が17世紀初頭にまで遡ることを示している。

SV104北側整地層出土遺物（第105図）

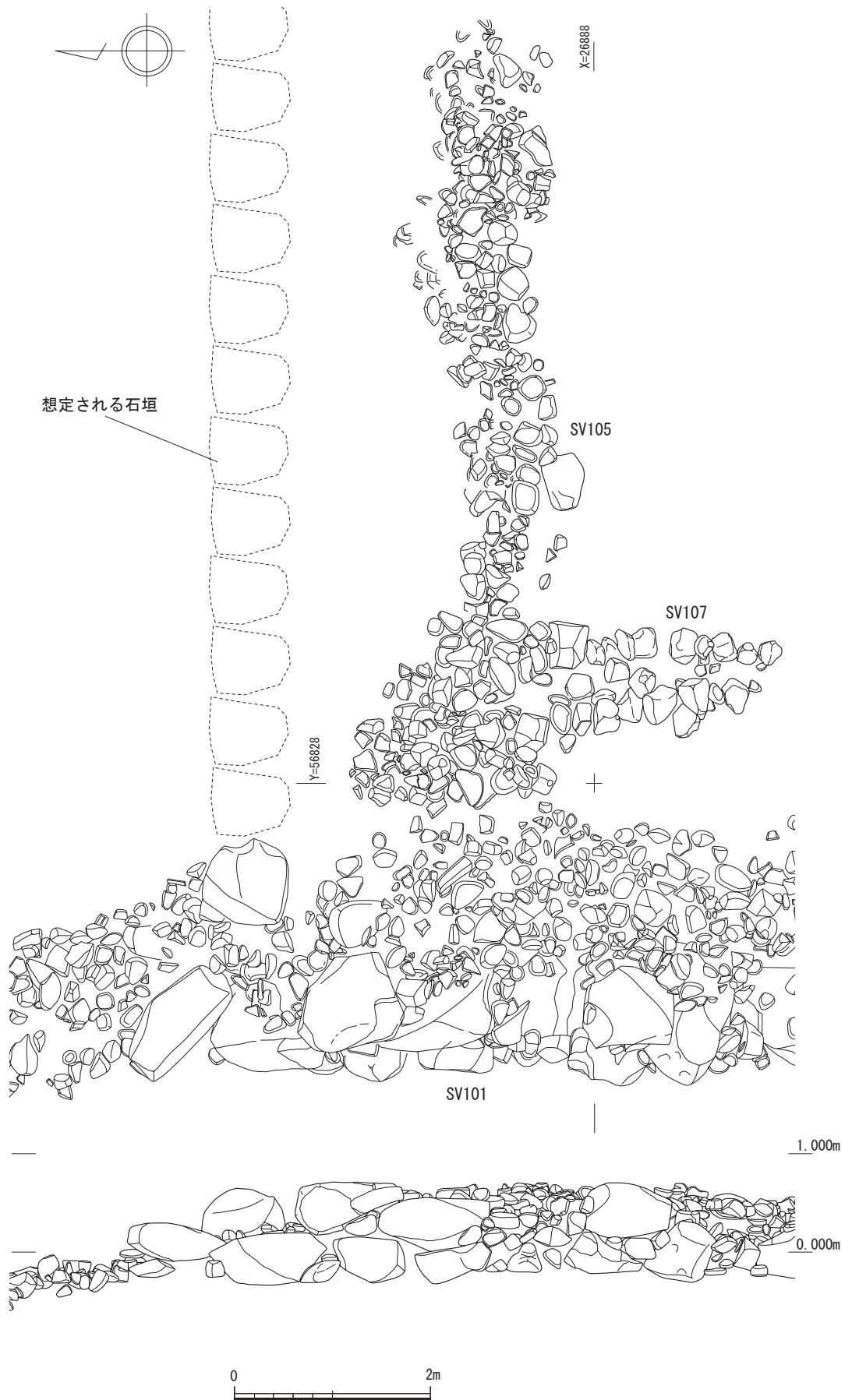
1・2は白磁碗で、12世紀代のものと推定される。3は瓦器椀で、12・13世紀代のものであろうか。4は古墳時代の土師器甕口縁部である。5は中国南部産と考え



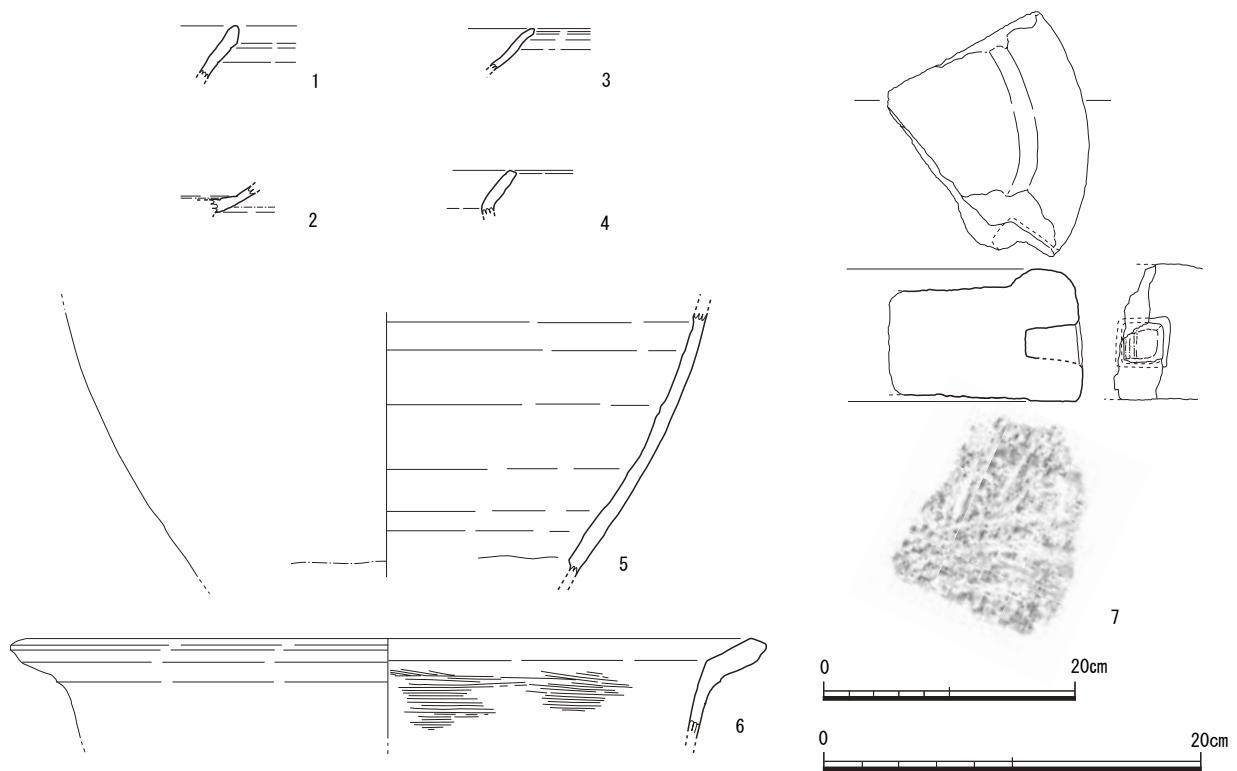
第102図 SV105・SV107検出状況（北から）



第103図 SV105・107平面・断面図 (1/60)



第104図 SV105 北石垣想定図 (1/60)



第 105 図 SV104 北整地層出土遺物 (1/4・1/6)

られる陶器壺である。外面には黄緑色に発色する釉が掛かるが底部付近は無釉と考えられる。内面はほぼ無釉である。中世府内町において 16 世紀後半を中心に多く出土しているもの一種と思われ、当該期に比定される。6 は土師質土器の鍋と考えられるもので、内面にはハケメによる調整が施される。7 は安山岩製の石臼である。

【註】

- (1) a 小川望1994 「「泉州麻生」の刻印をもつ焼塙壺に関する一考察」『日本考古学』1
b 江戸遺跡研究会 [編] 2001 『図説江戸考古学研究事典』柏書房
焼塙壺の分類・編年については、b の分類・編年による。
- (2) 古泉弘2001 「喫煙2 煙管」江戸遺跡研究会 [編] 『江戸考古学事典』所収。
- (3) 「宮」刻印を有する瓦は、これまでの発掘調査では知られていなかったが、今回5点出土している。このうちSV110検出時に攢乱より出土したもの（第76図6）は軒平瓦であるが、唐草文が吉田寛氏による分類における19世紀前半～中頃に位置づけられるG-2類もしくはG-3類に類似している。このため、同刻印を有する瓦については当該期に位置づけられる可能性が高いと推定される。

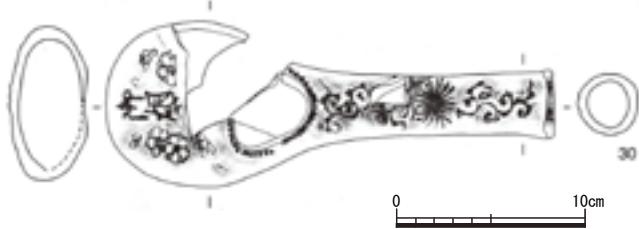
なお、以下の近世瓦の記述については、特に断りの無い場合は府内城三の丸遺跡もしくは府内城三の丸北口跡報告書における吉田寛氏の分類・編年を参考として用いる。

- (a) 大分県教育委員会1993 『府内城三ノ丸遺跡－大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- (b) 大分県教育委員会1996 『府内城三の丸北口跡-大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』

- (4) 吉田寛氏から、京都公家町での出土例があり、形状が分かるとのご教示をいただいた。

第106図がそれであり、上下型合わせにより製作されたも

ので、「御胡□」と陽刻されている。平面形が「しゃもじ」形を呈し、柄の部分は断面円形の中空である。火の当たる底部は無釉、上半部には透明釉が掛けられている。出土したF区土壙F1265は天明大火（1788年）に伴う廃棄土壙で18世紀後半を主体とする遺物が出土している。



第 106 図 京都公家町出土の胡麻煎り陶器 (1/4)

財団法人京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊』

- (5) 府内城三の丸北口跡で、同一刻印の平瓦が出土している。報告者の吉田氏は、豊後国分寺薬師堂の鬼瓦にみられるヘラ書き文字「瓦師姫路惣左右衛門尉藤原政長」、軒平瓦や平瓦にみられるヘラ書き「瓦や惣左衛門」と同一人物と推定し、これらの瓦に書かれた紀年銘元禄12年から、北口出土瓦もこれに近い年代と推定した。

註3文献 (b)

- (6) 森田克行1984「畿内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
(7) 「細瓦師和作」のことであり、幕末の安政4年（1857年）に府内藩の御用瓦師となった。なお、当時の細（現在の大分市大字細）は肥後細川領であった。

註3文献 (a) (b)

- (8) 府内城三の丸遺跡SX1から同じ刻印の瓦が出土している。註3文献 (a) 第173図21がこれにあたるが、SX1は出土遺物から19世紀後半の明治時代前期に比定されている。

- (9) 「細瓦師安太」は細瓦師和作とともに安政4年（1857年）に府内藩の御用瓦師となっている人物である。

註3文献 (a) (b)

- (7) 大分市教育委員会2003『府内城・城下町跡 第12次調査報告書』
第74図31・32がこれにあたる。

- (8) 大分市教育委員会2004『府内城・城下町遺跡-第15次調査報告書-』
第11図020・021 (S001)、第22図124・125 (S006) が該当する。

第5章 まとめ

1 検出された遺構の時間的変遷について

今回の発掘調査では、「伝慶長絵図」等の絵図に描かれた石垣や堀の他、整地層の下からより古い複数の石垣が検出されるなど、時間的な位置づけを異にする遺構群が平面的あるいは層位的に、多く検出された。そこで、まずこれらの遺構の変遷について、第4章で報告した事実をふまえ、想定される事象をも加えて時間軸に沿ってまとめてみたい（第107図・第108図）。

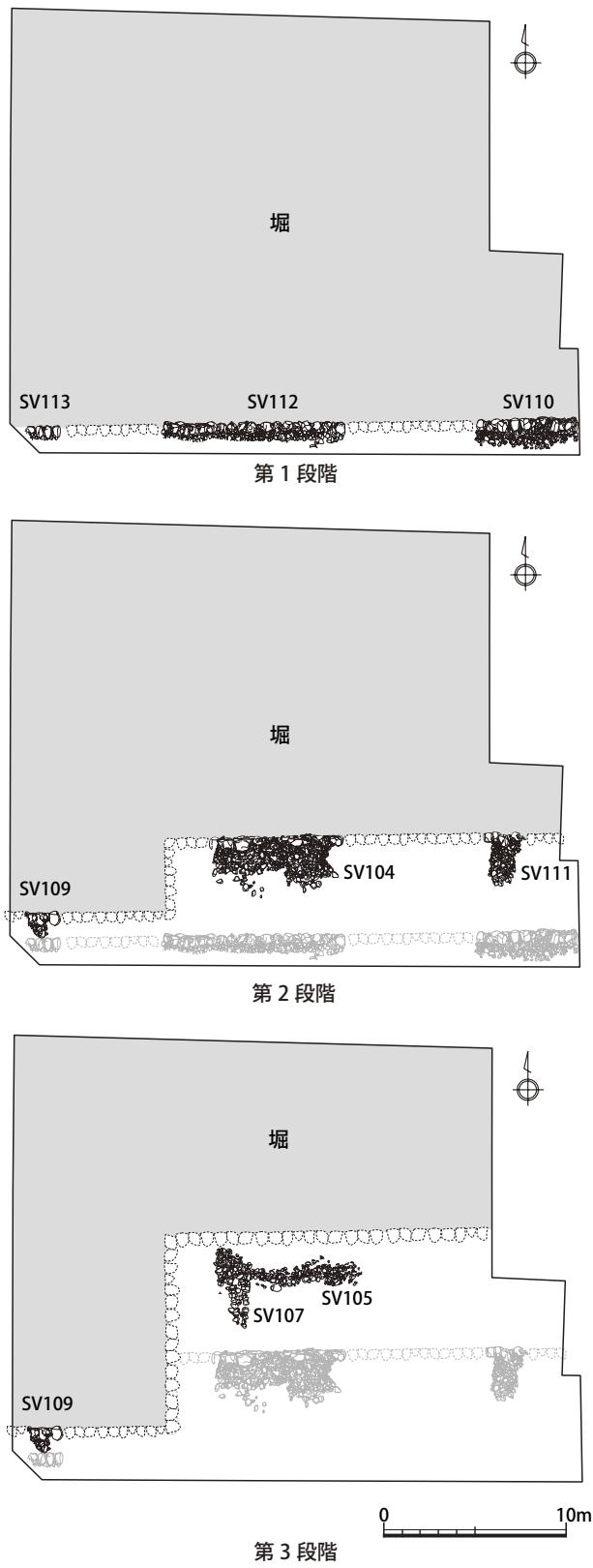
なお、府内城内各曲輪の呼称については、第2章で述べたように現在最古の絵図とされる「正保絵図」と「府内城下の復原図」における現地比定の元図となった「伝慶長絵図」とで違いがあり、「正保絵図」の方が古いことが既に明らかではある。特に本章で問題となる北丸と山里は伝慶長絵図での呼称であり、「山里」については日根野吉明治下の寛永18年（1640年）以降の呼称である。正保絵図において、これらはそれぞれ北ノ小丸、北ノ丸となっており極めて紛らわしい。そこで、ここでは第4章までと同じく、「府内城下の復原図」を発掘調査の基礎資料として使用していることに鑑み、あえて「伝慶長絵図」における呼称を採用して記述を進めたい。

第1段階

調査区最南端部に沿って、SV110・SV112・SV113が築かれる段階である。これらの石垣は、平面的位置関係からみて、同一の石垣と推定される。裏込めの幅が狭く、また築石も比較的小さいもので、推測ではあるが石垣の高さも高いものであったとは考えられない。築石には高崎山系の角閃石安山岩は使用されていない。石垣の北側一帯は堀であったと考えられる。石垣の解体を行っていないため出土遺物は少ないが、裏込めからは、肥前陶器が全く出土していないため、17世紀初頭に遡る可能性が高い。

第2段階

SV104・SV111が築かれる段階である。SV104・SV111築造にあたっては、SV110・SV112・SV113が、基底部1～2段のみを残して解体され、その北面の堀を埋め立てられる。築石の大きさはSV110・SV112・SV113よりもやや大きい程度であるが、裏込めの幅は



第107図 遺構変遷図1 (1/400)

明らかに規模が大きくなつており、より高い石垣が築かれていたものと考えられる。SV104 の西辺には南北方向の石垣 SV101 が後に築かれたため失われているが、SV101 とほぼ同じ場所に SV104 から続く南北方向の石垣が築かれていたものと考えられる。

SV113 の北側に築かれている SV109 についてはこの段階に既に築かれていた可能性もあるが、判断の決め手がない。また、SV109 をふくめてこれらの築石には高崎山系の角閃石安山岩は使用されていない。SV104・SV111 の裏込めや SV104 南側の整地からは肥前陶器が全く出土していないため、17世紀初頭に遡る可能性が高い。この段階以降、北丸が独立した曲輪として成長していくと考えられ、あわせて北丸西側に短冊形の堀が形成されていく。

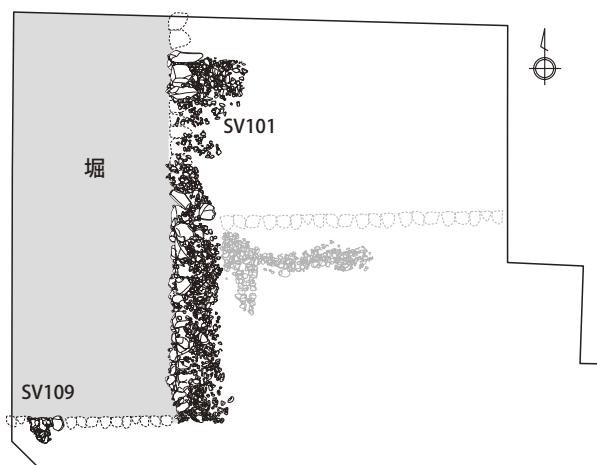
第3段階

SV105・SV107 が築かれる段階で、SV104・SV111 が解体され、その北側を砂を主体として整地を行いながら築かれたと考えられる。SV105 北側には、これを裏込めとする東西方向の石垣が築かれたと考えられる。これと対応する南北方向の石垣は不明であるが、D-3 グリッド以南の SV101 は、この段階で築かれた可能性が考えられる。これは、第4章で述べたように、SV101 基底部標高が D-3 グリッド以北で低くなっていることが認められ、この位置まで築かれていた段階が想定されるためである。また、暗渠的機能を有すると考えられる SV107 に、第2段階までの石垣と異なって、高崎山系の角閃石安山岩が多用されている。このため、想定される東西方向の石垣にも同じ石材が使用されていると考えられ、SV101 と似た石材構成と推定されることも傍証となろう。この段階では SV109 が対応すると思われるが、SV109 は石材構成が違い、他に判断する資料が得られないため証明できない。

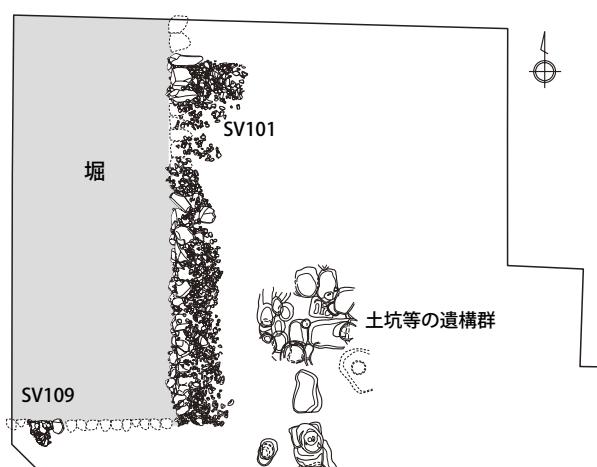
SV105・SV107 が築かれている SV104 北整地層からは、肥前陶器が全く出土していないため、第1・2段階と同様に 17世紀初頭に遡る可能性が高い。

第4段階

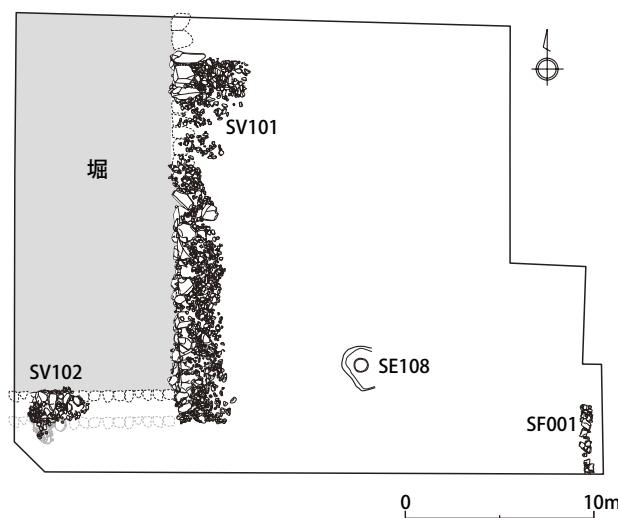
SV101 が築造される段階である。前段階で SV105・SV107 とともに一部築造されていた可能性も高いが、この段階までに「正保絵図」に描かれているようなかた



第4段階



第5段階



第6段階

第108図 遺構変遷図2(1/400)

ちで最終的に築造され、曲輪としての北丸が完成したと考えられる。それに伴い、西側には短冊形の堀が形成される。SV101は高崎山系角閃石安山岩の大型の築石を多用しており、石材的に第2段階までの石垣とは全く異なる。また、築造にあたってはSV104基底部よりも一段深く掘り下げ、裏込めは幅広く施工されて、石材の大きさとも相まって第1・2段階よりも高い石垣と思われる。大型の石材を使用することによる視覚効果も想定される。

裏込めから出土した遺物には胎土目段階の肥前陶器が認められるが、これよりも新しい遺物は出土していないため1610年代頃までに築造された可能性が考えられる。この段階ではSV109が対応する石垣と思われるが、判断の決め手に欠ける。後述するようにこの段階で、SV102の平面的位置に東西方向の石垣が築かれていた可能性もある。

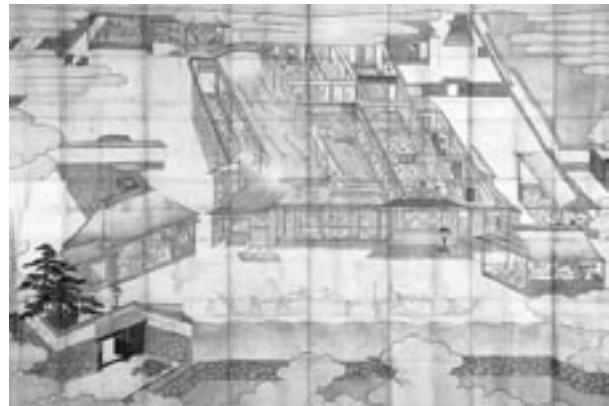
第5段階

北丸内部の廃棄土坑等の諸遺構が築造される段階である。概ね17世紀中頃から18世紀後半頃までと推定されるが、多くの廃棄土坑群は18世紀の中頃に集中している。北丸内部に生活の痕跡のある遺構群が展開する時期はこの時期にほぼ限定される。なお、SE108は廃絶時期が第6段階に下るが、築造時期はこの時期まで遡る可能性も考えられる。

第6段階

東西方向の石垣SV102が築造される段階であり、18世紀末～19世紀代にかけての時期と考えられる。SV102は他の石垣と異なり、明らかに新しい様相を呈する積み方であり、堀埋土の上に築造されている。これは当該期に積み直されたことを意味するが、後述するようこれ以前に同位置に築かれていた石垣があった可能性を排除するものではない。

SE108の廃絶年代は出土遺物から19世紀代に下るものである。北丸には幕末の安政4年（1857年）に藩校遊焉館が築造されている。絵図⁽¹⁾（第109図）によれば、内部に井戸が描かれているが、SE108はこの井戸にあたる可能性があり、年代的にも矛盾しない。



第109図 遊焉館絵図

以上のように、石垣の変遷を中心に段階的に整理したが、第1段階～第4段階にかけては17世紀初めのきわめて短い期間と考えられ、その間に北丸が独立した曲輪として次第に拡張されていった状況を窺うことができよう。中でも高崎山系の大型石材が使用されて大規模な石垣が築造される第4段階、もしくはその可能性が想定される第3段階は大きな画期ということができよう。

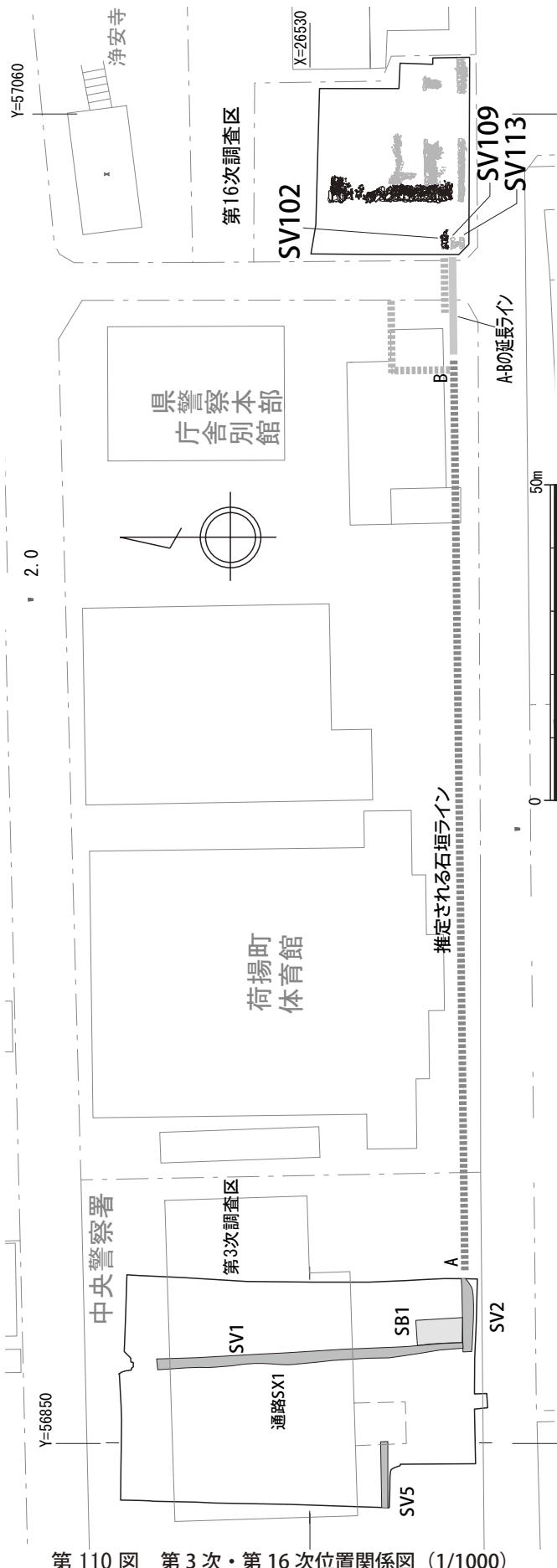
2 第3次調査地点石垣との位置関係の検討

さて、第16次調査の西側約170mの地点には、平成6年度に大分県教育委員会により発掘調査が行われた、第3次調査地点（府内城三ノ丸北口跡⁽²⁾）が所在する。第3次調査では、府内城三ノ丸北口の施設である二重櫓台SB1、門櫓石垣SV5、土橋（中堀を渡る通路）SX1、中堀SD1・SD2、石垣遺構SV2等が検出されている。このうちSV2は中堀南側、三の丸北辺の東西方向の石垣であり、今回第16次調査で検出された東西方向の石垣群の延長上にあるように思われる。ただし、第16次調査で検出された石垣群との位置関係を厳密に調べるた

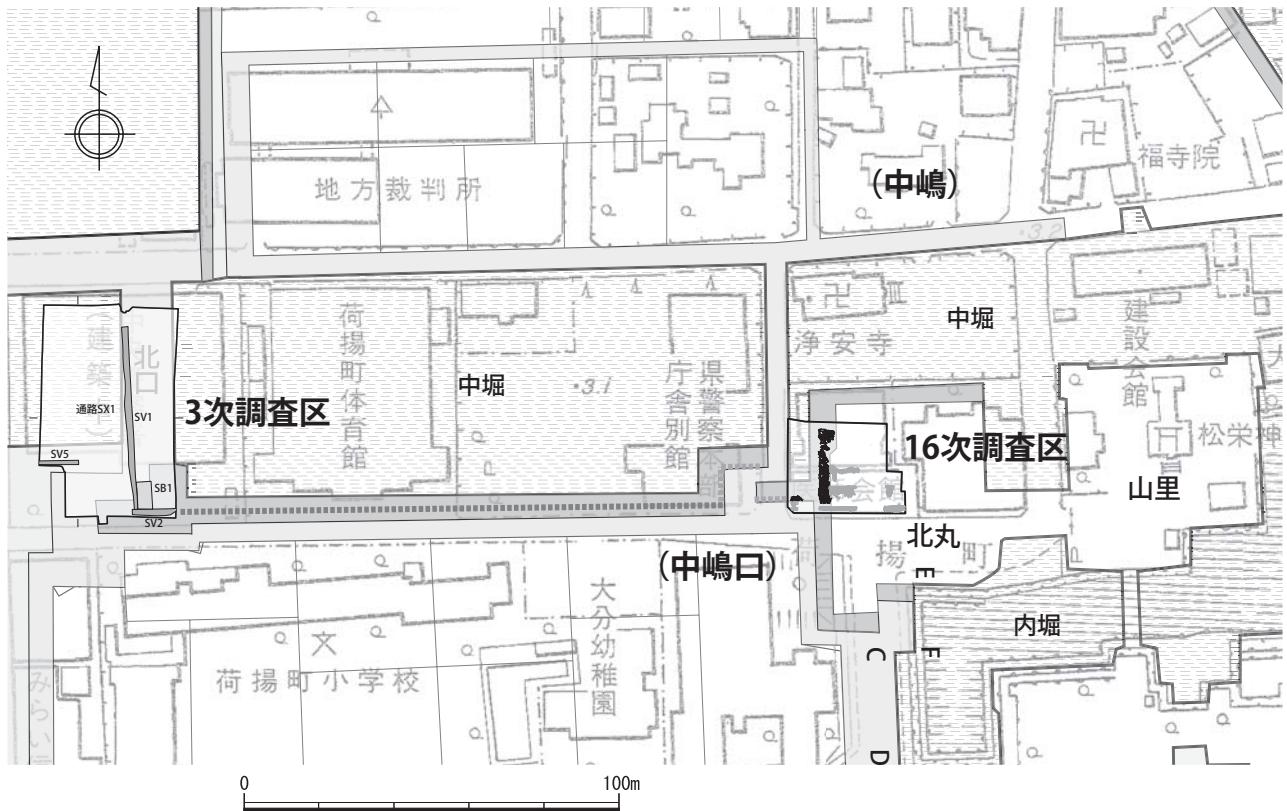
めには、国土座標を使用した厳密な作業が必要と予想される。

そこで、ここでは正確を期すために補正した上でベクトル化 (.DWG ファイル) した地図データを使用し、CAD ソフト上で正確な座標位置に調査図面を位置づける方法を使用した。これは梅田昭宏が「豊後府内における全体遺構配置図の検討⁽³⁾」で試みた方法とほぼ同じものである。なお、第 16 次調査の図面データは大分市遺跡測量システム及び、写真測量データであるため、あらかじめ DWG ファイルが得られていたが、基準座標が世界測地系の座標であったため、変換ソフトで旧日本測地系の座標値に変換した上で使用した。これは地図 DWG ファイルが旧日本測地系の座標を使用しているためである。第 3 次調査図面については報告書第 6 図をトレースしてベクトル変換した。

このようにして作成したものが、第 110 図である。これをみると、SV2 の延長線上に第 16 次調査区南端で検出された SV110-112-113 が一致するよう一見思われる。しかし、これらの石垣群は真北を基準として築造されており、座標北に対し約 0.7° 西偏した方向に対し、直角となっていることが実測値から判明している。従って、SV2 と第 16 次調査区石垣群との位置関係を知るためにはこの角度を念頭に置く必要があり、座標上の東西方向を左回り 0.7° 振ったラインが線分 A-B で、SV2 の延長線上になるように配置したものである。その結果、線分 A-B をそのまま延長したライン上には SV113 では無く、SV109 が位置することが判明した。「伝慶長絵図」やこれに基づく「府内城下の復元図」によれば、北丸西側の外升形（中嶋口）を構成する東西方向の石垣は、A-B 間に比定される三の丸北辺よりも若干北側に出ていることが表現されている。このため、線分 A-B の延長線上が SV109 であるとすれば、これに伴う中嶋口の東西方向石垣は、SV102 の位置に相当することになる。報告書によれば、第 3 次調査 SV2 は 3 段目以上は積み直されている可能性があると報告されている⁽⁴⁾。従って、18 世紀末以降に積み直された SV102 に対応するものとして理解できる可能性がある。あるいは



第 110 図 第 3 次・第 16 次位置関係図 (1/1000)



第 111 図 「府内城下の復原図」における調査地点の位置図 (1/1000)

は、SV102 は最終的に当該期に積み直されているもののそれ以前にも同位置で築造されていたことも考えられようか。SV2 については盛土保存を行っているため石垣の解体調査は実施されていない。従って、正確な時期が不明なばかりではなく、16 次調査結果にみられるように、SV2 の背後（南側）にこれより遡る石垣が埋蔵されている可能性さえ考えられよう。

3 府内城下の復元図との位置関係の検討

以上の方針で正確な位置関係が把握できたが、これを「府内城下の復元図」と重ねることも試みた。ただし、市史付図の図面は印刷時のゆがみが大きいため使用できず、まず現行の 1/2500 図に描き写し、これをスキャンしてソフトウェア上で補正し、座標を基準として第 108 図と重ねたものが第 111 図である。

これによれば、第 3 次調査区においては、SV1 西側に検出された土橋 SX1 は「復元図」よりも明らかに西に位置しており、さらに二重櫓台 SB1、門櫓石垣 SV5 の位置についても齟齬があることが分かる。これは、第 3 次調査の報告書において既に指摘されている通りである⁽⁵⁾。しかしながら、SV2 についてはほぼ正確な位置であることが分かる。

一方、第 16 次調査で検出された石垣群についてみると、SV101 および堀については、復元図とほぼ一致する。さらに東側の曲輪である「山里」との位置関係に目を転じると、山里と北丸を結ぶ土橋の北辺ラインが SV104-111 の延長とほぼ一致する。また、SV110 は北丸南側の三の丸東辺ライン（第 111 図 C-D）よりも東側へ延長しており、北丸入り口の第 111 図 E-F ライン近くまで伸びていることが注意される。SV110-112-113 は裏込めが狭く小規模な石垣であるため、このライン上が「復元図」に示されているよりも幅の狭い土橋の北辺石垣であったとも考えることができよう。

4 府内城縄張りの検討

以上の作業を踏まえ、第16次調査付近における府内城の縄張りの変遷について推定をまじえながら考えてみたい。

第1段階

北丸は曲輪でなく、SV110-112-113の延長線上にある山里・三の丸間を結ぶ土橋と、三の丸北東隅の虎口空間であったと考えられる。この段階では中嶋口⁽⁶⁾はおそらく無く、三の丸北辺はSV110-112-113の延長線上にあるシンプルな墨線であったと推定される。

第2段階

SV104-111が作られ、後の北丸が北側に若干拡張される。この契機としては、虎口空間の拡張による防御力の強化があろうが、この段階で中嶋口が設置された可能性が考えられよう。後者については第3段階で明確になる。

第3段階

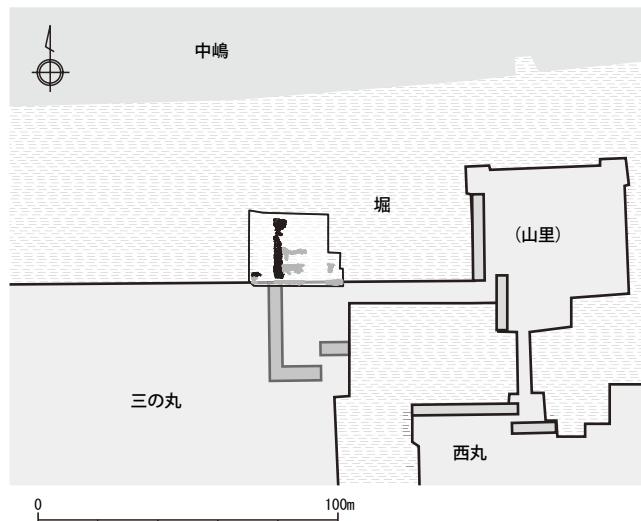
SV105とそれに伴う石垣及び可能性としてはSV101の一部により、北丸が拡張され、小さいながらも独立した曲輪化する。この段階では、堀を挟んで中嶋口を正面に臨むことができることが明らかであり、この拡張が中嶋口成立と密接な関係を有していることが強く疑われる。

第4段階

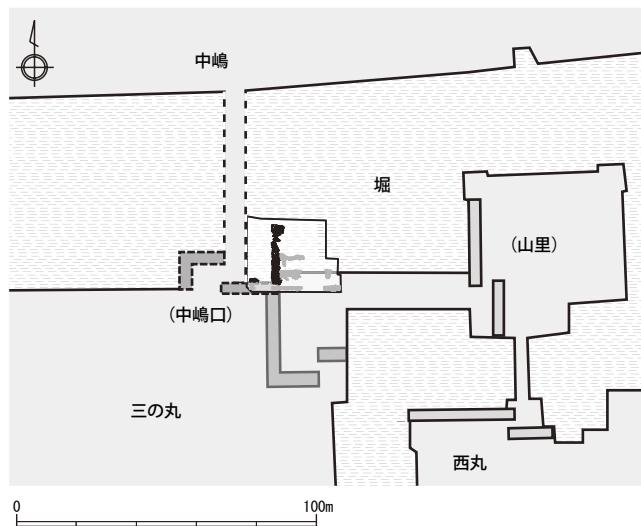
SV101が築造され、「正保絵図」「伝慶長絵図」にみられる縄張りが完成する。北丸は独立した曲輪となる。

以上のように、北丸の成立については、虎口空間の拡張による防御力の強化に加え、中嶋口の成立とこれの側面防御の2点の契機があると推定される。

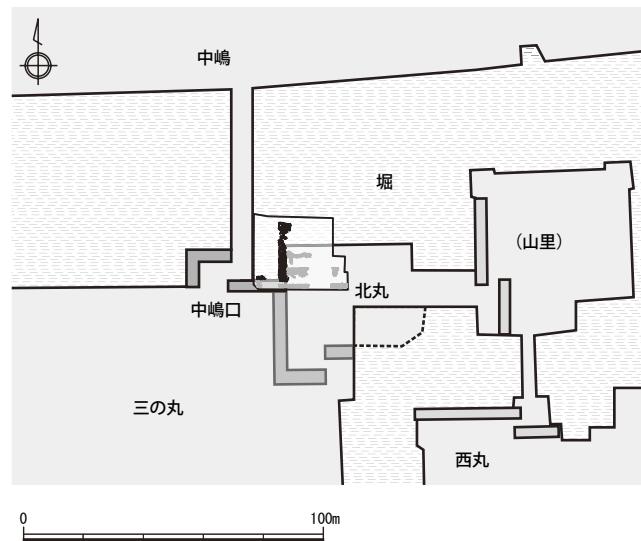
これらの築造・拡張作業については山里丸の築造が慶長7年（1602年）竹中重利のもとで行われているとされること、また、第4段階にあたるSV101の裏込めからも胎土目段階の肥前陶器しか出土しないこと、SV102以外の石垣が全て古相の



第112図 第1段階の推定縄張り (1/2000)



第113図 第2段階の推定縄張り (1/2000)



第114図 第3段階の推定縄張り (1/2000)

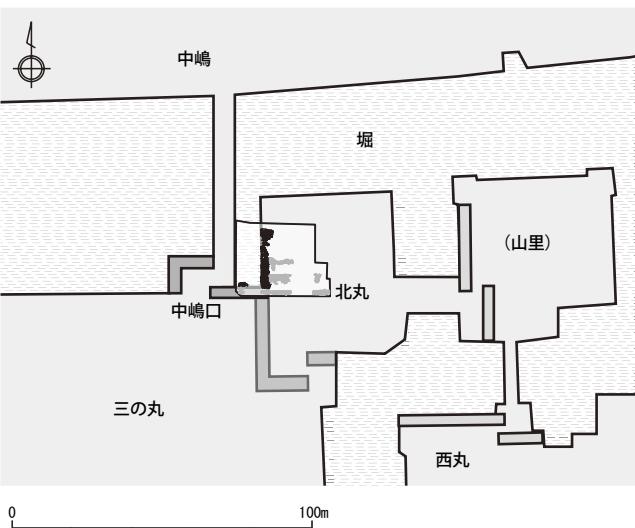
積み方によっていることから、全て竹中氏の段階に実施されたと考えても良いと思われる。慶長6年（1601年）に竹中重利が入部した当時は戦国時代が終わって間もなく、徳川氏の霸権は確立したとはいえ未だ大坂城には豊臣氏が勢力を有しており、戦乱が完全におさまったとは考えられていなかつと推定される。従って、築城当初の府内城が、その防御力の更なる強化を目指して頻繁に改修・拡張を繰り返したことは考えられることである。

しかしながら、発掘調査の結果によれば、第3段階（ないし第4段階）になって初めて高崎山系の大型の築石が使用されると考えられ、この時に中嶋口が整備されたことが考えられるなど、大きな画期をここに置くことができる。竹中氏は肥後の加藤氏配下の石工集団の協力を得て石垣普請を行ったとされており、ここに技術的な画期を想定することも可能である。従って、この集団を駆使して築造した石垣を第3段階ないし第4段階に想定される大型築石を使用した石垣普請と見ることも可能ではあるまい。この立場に立った場合、第1・第2段階、とりわけ第1段階が、前代の早川氏、さらには初めに築城事業を開始して城郭中心部を一応完成させる段階まで担った福原氏の段階に遡る可能性もあながち否定できないと思われる。府内城築城当初、福原氏から竹中氏、さらに日根野氏にかけての良好な一次史料は残されておらず、築城の状況は近世に編纂された文献から知られているのみであり、上記のような可能性も検討されて良いのではないかと考える。

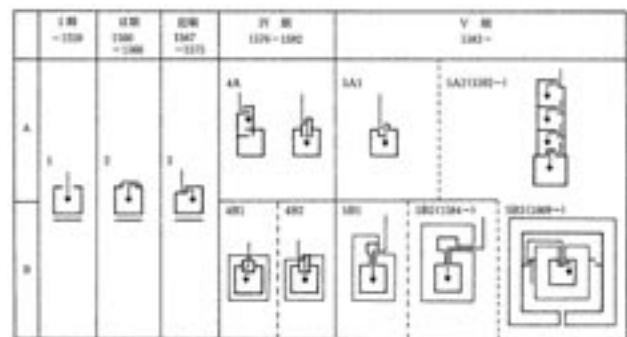
5 府内城の縄張りの評価について

府内城はいわゆる織豊系城郭の一種であるが、織豊系城郭の縄張りの変遷については、千田嘉博氏により虎口構造を指標として編年が行われている（第116図）⁽⁷⁾。府内城の縄張りについては、すでに木村・武富氏により千田氏の編年を元にして論じられており、府内城の二之丸を構成する西之丸、東之丸、出会い曲輪が独立した馬出ではなく、一体化して全体が虎口空間化していることを評価して、千田嘉弘氏の5B3系の一種とした⁽⁸⁾。しかし木村・武富氏は山里丸が広島城等にみられる独立した馬出であることに注意して、5B2系の特徴を残しながら5B3系の特徴を取り入れていると評価し、両系の中間形態と解釈することも可能であるとした。また、5B3系は丹波篠山城もしくは名古屋城築城を指標として、慶長14年（1609年）以降に位置づけられているのであるが⁽⁹⁾、竹中氏による慶長7年の完成以降の改修を考慮しないならば、二条城とともに先駆的に5B3系要素を取り入れた城と評価できるとしている。しかしながら、両氏は、府内城が慶長7年完成以降に改修された可能性を指摘しており、本丸・二之丸の発掘調査により問題の解決を行う必要があると述べている。

今回の発掘調査は、本丸・二之丸より外の北丸比定地において実施されたものであるが、両氏が可能性を指摘されたように、竹中氏段階と推定される時期に多くの改修が加えられていることが判明した。この結果から推定するならば、本丸・二之丸におい



第115図 第4段階の推定縄張り（1/2000）



第116図 織豊系城郭の編年

ても、築城直後の段階に大規模な改修が加えられていることは想像に難くないのであり、最終的に「5B2系の特徴を残しながら5B3系の特徴を取り入れている」⁽¹⁰⁾ プランとなる府内城の縄張りが、当初はより5B2系に近いものであったと想定する方が自然と考えられる。先項で述べたように、今回検出された第1段階の石垣が福原氏の段階に遡る可能性があり、そうした場合、それは木村・武富氏が指摘した独立した馬出である山里丸（北之砦）と三の丸を結ぶ土橋に伴うものと考えられ、5B2系プランを象徴する遺構ということになる。福原直高が築城した当初の府内城は、まさしく「豊臣の息のかかった」⁽¹¹⁾ 城であったと考えられ、当時の主流プランたる5B2系プランの城郭であったと思われる。またこの遺構が竹中氏の築造にかかるものであったとしても、築城当初の府内城が5B2系の特徴を色濃く残すプランであったと考えることができよう⁽¹²⁾。

6 おわりに

今回の発掘調査では、府内城築城当初に遡る可能性がある多数の石垣遺構が検出され、築城当初の府内城の姿が「伝慶長絵図」等をもとに知られていた姿とは異なっている可能性が高いことが判明した。築城後最初期のプランについては5B2系プランである可能性が高まったとはいえ、城郭の中心部については今後の発掘調査により解明される他はない。現在の報告者自身の知識では、想定されるその形を本書中で描き出すことは到底不可能であり、今後、研究者諸兄によって論じられることに委ねたい。

また、「府内藩日記」等、基本文献や「伝慶長絵図」、「正保絵図」以外の多くの近世絵図の検討は時間の制約および報告者の不勉強により全くできなかった。報告の中で、北丸内部には18世紀中頃を中心に廃棄土坑が残されること、出土遺物の中に焼塩壺が目立って多いことなど、北丸がどのように利用されていたのかを解明する重要な歴史事象と考えられる。これについては、文献史料の検討が不可欠であり、今後機会をみて検討してみたい。

今回の発掘調査は、全く想定していなかった石垣が次々姿を現すことに圧倒され、とにかく記録を残すことが精一杯の状態であった。しかし、第3章・第4章で報告したように、第1次発掘調査の終了時には下層石垣の存在は予見できる状態だったのである。調査の基本を忘れた不適切な対応があったことは反省しなければならない。また、今後、府内城・城下町の発掘調査の際には、石垣の改修が多数あることを前提とした試掘及び調査計画作成、プランを正確に記録する測量方法の導入を必須の前提として行っていく必要があろう。

本章を記すにあたっては、大分市教育委員会文化財課玉永光洋課長、ならびに大分県教育委員会文化財課吉田寛氏より、府内城縄張りの変遷についてご教示いただいた。

【註】

- (1) 「府内藩校遊焉館絵図」『大分市の文化財』大分市教育委員会 1997 より転載
- (2) 大分県教育委員会 1996『府内城三の丸北口跡 - 大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- (3) 梅田昭宏 2004「豊後府内における全体遺構配置図の検討」『大友府内 7』大分市教育委員会
梅田氏は、中世大友府内町跡及び大友館の全体遺構図の作成に関する問題を事例として論じているが、CAD等を使用した正確な遺構全体図作成の有効性の点では、遺跡範囲が広大でなおかつ規格性の強い近世城郭・城下町のプラン把握にはいっそう親和的な方法であろうと思われる。
- (4) 註2文献26ページ
- (5) 註2文献10ページ 約15m程度西にずれていることが指摘されている。
- (6) 「中嶋口」との呼称は「正保絵図」、「伝慶長絵図」いずれにも記載がないが、これに相当する門と外升形、土橋は描かれている。寛保3年（1743年）寛保の大火による被害を幕府に届け出た「豊後国府内城絵図」には「中嶋口」と記載されており、「伝慶長絵図」が成立した寛文7年（1667年）頃以降、寛保3年（1743年）までの間に呼称されるようになったのであろう。そのため、府内城築城直後の時期についてこの呼称を用いるのは不適当であろうが、他に適当な名称が無いため、

「中嶋口」の呼称を使用して記述する。

「豊後国府内城絵図」については、

木村幾多郎・武富雅宣 1995「豊後府内城」第 14 回特別展「城のある風景」図録 大分市歴史資料館 所収の図版による。

- (7) 千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
原典は、千田嘉博 1987「織豊系城郭の構造—虎口プランによる縄張り編年の試みー」『史林』第 70 卷 2 号
- (8) 註 6 文献。木村・武富氏は伊予今治城と比較して、類似点を論じている。
- (9) 註 7 文献。篠山城や名古屋城は西国大名を動員して築いた天下普請の城で、慶長 14 年（1609 年）に築城を開始した篠山城が初例である。
- (10) 註 6 文献。
- (11) 木村・武富氏は、慶長後半以降の縄張り改修を考慮しながらも、結論的には天下普請の城や藤堂高虎の城とのプランの類似をもって、「豊臣の息の掛かった福原直高の城というよりも、徳川家康の許可を取って増改築をした竹中重利の築城になる城ということができよう」とした。
- (12) そもそも竹中氏は、豊臣秀吉配下の大名であったのであり、慶長 7 年（1602 年）という築城時期からしても豊臣系の築城プランを用いると考えた方が自然であると思われる。

出土遺物観察表

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド 土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
						口径	器高	底径	最大径		
第22図	1	SD100	E-3	染付	皿	5.0	0.7	—	5.0	青花	13
第22図	2	SD100	F-1 上部砂質土	青磁	皿	14.6	4.7	12.0	14.6	龍泉窯系・漆継ぎ痕	31
第22図	3	SD100	A-1 検出時	染付	碗	10.0	4.7	—	10.2		4
第22図	4	SD100	D-1 上層砂質土P7	陶器	鉢	—	1.1	10.8	13.8	志野?	24
第22図	5	SD100	D-2 カクラン	肥前陶器	皿	16.4	3.9	5.0	16.4	胎土目	45
第22図	6	SD100	B-2 P32	肥前陶器	皿	16.0	4.1	5.1	16.0	絵唐津 胎土目積み	44
第22図	7	SD100	D-1 上層砂質土P6	肥前陶器	皿	15.2	5.0	6.0	15.2	砂目積み	30
第22図	8	SD100	A-2 暗灰色粘質土	肥前陶器	皿	15.8	5.0	5.4	15.8	砂目積み	43
第22図	9	SD100	D-1 上層砂質土P5	肥前陶器	皿	17.0	4.7	4.5	17.0	砂目積み	37
第22図	10	SD100	D-1 カクラン	肥前陶器	溝縁皿	13.6	3.5	5.0	13.6	胎土目積み	38
第22図	11	SD100	1トレ	肥前陶器	大皿	—	5.0	11.0	24.4	絵唐津	48
第22図	12	SD100	A-2	染付	鉢	23.7	10.1	9.0	23.7		28
第22図	13	SD100	E-1	京都系土師器	皿	11.0	2.4	—	11.0		10
第22図	14	SD100	A-2 砂質土P30	京都系土師器	皿	12.4	2.6	6.0	12.4		35
第22図	15	SD100	D-2 暗灰色粘質土P15	京都系土師器	皿	12.0	2.3	—	12.0		34
第22図	16	SD100	F-1 上部砂質土P2	京都系土師器	皿	11.4	2.9	—	11.4		33
第22図	17	SD100	B-2 砂質土	土師質土器	焼塙壺 蓋	8.0	1.7	—	8.0		207
第22図	18	SD100	1トレ	土師質土器	焼塙壺 蓋	7.8	1.75	—	8.0		208
第22図	19	SD100		土師質土器	焼塙壺	5.0	8.0	2.0	6.2		185
第22図	20	SD100	E-2 P20	土師質土器	焼塙壺	5.2	10.7	4.6	6.4		178
第22図	21	SD100	C-2 灰色砂質土	土師器	高杯	—	11.5	18.0	—		36
第22図	22	SD100	A-1 検出時	銅製品	キセル	長さ 5.7	—	—	—		144
第22図	23	SD100	1トレ	瓦	さん瓦						404
第22図	24	SD100	A-1	瓦	軒平瓦						329
第22図	25	SD100	E-2	瓦	軒平瓦						309
第22図	26	SD100	AB1-2 検出時	瓦	軒平瓦						337
第22図	27	SD100	B-1 暗灰色砂質土	瓦	軒平瓦						335
第22図	28	SD100	E-1 砂層	瓦	軒平瓦						352
第22図	29	SD100	A-1 砂層	瓦	軒平瓦						331
第22図	30	SD100	A-1	瓦	軒平瓦						355
第22図	31	SD100	D-2	瓦	軒平瓦						327
第23図	32	SD100	D-2 上部砂質土	瓦	軒平瓦						345
第23図	33	SD100	1トレ	瓦	軒平瓦						322
第23図	34	SD100	B-2 カクラン	瓦	軒平瓦						306
第23図	35	SD100	B-2 カクラン	瓦	軒平瓦						338
第23図	36	SD100	B-3 砂質土	瓦	軒平瓦						341
第23図	37	SD100	B-2	瓦	軒平瓦						317
第23図	38	SD100	B-2	瓦	軒平瓦						326
第23図	39	SD100	A-2	瓦	面戸瓦	長 11.0					290
第23図	40	SD100	B-2 砂層	瓦	面戸瓦	長 16.5	幅 12.5				296
第23図	41	SD100	E-1 P13	瓦	鬼瓦						280
第23図	42	SD100	E-1 P21	瓦	鬼瓦						281
第23図	43	S110	堀3・4層、砂層	瓦	丸瓦			瓦当径 18.0			430
第24図	44	SD100	E-1	瓦	軒丸瓦			瓦当径 18.0			417
第24図	45	SD100	A-3	瓦	軒丸瓦			瓦当径 14.5			384
第24図	46	SD100	B-2 砂質土	瓦	軒丸瓦			瓦当径 13.5			378
第24図	47	SD100	E-1	瓦	軒丸瓦			瓦当径 (18.0)			361
第24図	48			瓦	軒丸瓦			瓦当径 (15.3)			359
第24図	49	SD100	D-1 砂層	瓦	軒丸瓦			瓦当径 (17.5)			390
第24図	50	SD100	D-1	瓦	軒丸瓦						388
第24図	51	SD100	B-2	瓦	軒丸瓦						375
第24図	52	SD100	E-1	瓦	軒丸瓦						373
第24図	53			瓦	軒丸瓦						374
第24図	54	SD100	A-2	瓦	軒丸瓦			瓦当径 (14.0)			370
第24図	55	SD100	A-3・4 ラゴメ検出時	瓦	軒丸瓦						385
第24図	56	SD100	E-1	瓦	軒丸瓦			瓦当径 (16.5)			365
第24図	57			瓦	軒丸瓦						387
第25図	58	SD100	E-1 砂質土P29	木製品	漆器皿			(6.6)			005
第25図	59	SD100	E-1 暗灰色粘質土P26	木製品	漆器皿	(13.0)					009
第25図	60	SD100	D-2 上部砂質土P17	木製品	漆器皿						002
第25図	61	SD100	F-1	木製品	漆器皿	11.5	3.7	6.5			010
第25図	62	SD100	E-2 暗灰色粘質土	木製品	漆器蓋						003
第25図	63	SD100	E-1 砂質土P28	木製品	漆器蓋	(11.6)					004
第25図	64	SD100	D-1 上層砂質土P10	木製品	漆器蓋	(12.0)	3.9	5.4			006
第25図	65	SD100	E-1 砂層P19	木製品	漆器椀	(16.0)	10.2	(9.0)			007
第25図	66	SD100	E-1 暗灰色粘質土P34	木製品	漆器椀			7.5			012

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第25図	67	SD100			木製品	漆器椀			7.8			016
第25図	68	SD100			木製品	漆器椀			7.6			015
第25図	69	SD100	E-1	砂質土P28	木製品	漆器椀	14.0	9.8	8.0			011
第25図	70	SD100	D-1	暗褐色泥炭P1	木製品	漆器椀			(8.6)			013
第25図	71	SD100			木製品	独楽	長 5.2	幅 4.2				017
第25図	72	SD100			木製品	球形木製品	長 3.5	幅 3.5				008
第25図	73	SD100			木製品	曲げ物	5.0			11.0		
第25図	74	SD100	B-2	砂層P22	木製品	下駄	長 6.3	幅 7.5	高 3.7			001
第27図	1	SV101	A-3	ウラゴメ	京都系土師器	皿	13.0	2.9	-	13.0		147
第27図	2	SV101	F-3	ウラゴメ	陶器	鉢?					備前? 内・外面ナデ	471
第27図	3	SV101	F-3	ウラゴメ検出	備前焼	擂鉢	-	4.0	-	-		146
第27図	4	SV101	F-3	ウラゴメ	備前焼	甕					外面ナデ 内面ナデ	470
第27図	5	SV101	C-3	ウラゴメ検出	瓦	軒平瓦						356
第27図	6	SV101	F-3	ウラゴメ検出	瓦	軒平						408
第27図	7	SV101	B-3	ウラゴメ検出	瓦	丸瓦	長 28.6	幅 13.4	瓦当径 (17.4)			431
第27図	8	SV101	C-3	ウラゴメ検出	瓦	軒丸瓦						368
第27図	9	SV101	ウラゴメ		石製品	上臼	長 (23.3)	幅 (17.2)	厚 (6.5)		挽棒の差込口の痕跡 あり	469
第27図	10	SV101	E-4	ウラゴメ	石製品	石臼	長 (27.3)	幅 (13.4)	厚 12.7			458
第27図	11	SV101	ウラゴメ		石製品	茶臼、下臼	長 (18.3)	幅 (15.1)	厚 (11.0)			467
第27図	12	SV101	ウラゴメ		石製品	石臼、上臼	長 (25.0)	幅 (15.3)	厚 10.1			468
第28図	13	SV101	F-3	ウラゴメ	石製品	石臼			厚 6.6	最大径 (34.6)		472
第28図	14	SV101	ウラゴメ		石製品	五輪塔 水輪		高 28.0		最大径 33.0		449
第30図	1	SV102	ウラゴメ検出時		染付	皿			(9.3)			473
第30図	2	SV102	4層		染付	碗	12.0	4.0	-	12.0		117
第30図	3	SV102	石組内		肥前陶器	擂鉢						474
第30図	4	SV102	ウラゴメ		関西系陶器	胡麻煎り	-	-	-	-		163
第30図	5	SV102	ウラゴメ検出		関西系陶器	胡麻煎り					外面透明釉	475
第30図	6	SV102	ウラゴメ		瓦	軒平瓦						357
第30図	7	SV102	ウラゴメ		瓦	軒平瓦						311
第32図	1	SV109	G-1	ウラゴメ	京都系土師器	皿	(9.9)	2.1			内面ナデ 外面指オサエ・ナデ	508
第32図	2	SV109	G-1	ウラゴメ	白磁	碗					白磁碗IV類	509
第36図	1	S004			肥前陶器	皿	14.0	3.2	6.3	14.0		20
第36図	2	S004	整地検出時		肥前陶器	皿	14.0	3.5	4.0	14.0	胎土目積み	14
第36図	3	S004	8層		陶器	鉢	-	30.3	9.0	-		230
第36図	4	S004	8層		土師器	小皿	7.0	1.2	5.6	7.0		229
第36図	5	S004	3層10cm下げ		土師器	皿	11.2	1.0	-	11.2		231
第36図	6	S004	8層		土師器	焼塩壺 蓋	8.0	1.6	-	8.0	手づくね	203
第36図	7	S004			備前焼	擂鉢	34.0	5.6	-	35.2		22
第36図	8	S004	整地層下層		安山岩	石塔片		12.0		10.0		3
第36図	9	S004	8層		土人形	土製品	横幅 2.5	縦 3.0	-	-		161
第36図	10	S004	8層		瓦	平瓦						398
第36図	11	S004	8層		瓦	軒平瓦						350
第36図	12	S004	8層		瓦	軒平瓦						303
第36図	13	S004	8層		瓦	軒平瓦						353
第36図	14	S004	下層		瓦	軒平瓦						348
第36図	15	S004	下層		瓦	丸瓦	長 25.4	幅 12.3				442
第36図	16	S004			瓦	丸瓦	長 33.2	幅 16.0				441
第37図	1	S014			染付	碗	10.6	5.8	-	10.6		27
第37図	2	S014			陶器	鉢	-	-	-	-	志野	26
第37図	3	S014			肥前陶器	皿	-	2.1	2.5	5.0		25
第37図	4	S014	下層		京都系土師器	皿	6.0	3.7	-	6.0	手づくね	202
第37図	5	S014	下層		肥前陶器	皿	22.0	5.6	6.2	22.0	内ノ山系	21
第37図	6	S014			瓦	鰯瓦						279
第37図	7	S014	10cm下げ時		備前焼	大甕	52.0	25.0	-	-	刻印「二石入」	222
第37図	8	S014	西カラン		瓦	軒平瓦						330
第37図	9	S014			瓦	軒平瓦			瓦当幅 28.5			396・367
第39図	1	SE108	ウラゴメ		染付	碗	9.8	3.2	-	9.8		151
第39図	2	SE108	ウラゴメ		染付	皿	10.2	2.1	5.6	10.2		145
第39図	3	SE108			土師質土器	焼塩壺蓋	7.6	2.0	-	-		175
第39図	4	SE108	ウラゴメ		瓦質土器	火鉢	-	-	-	-		162
第39図	5	SE108	井筒内		染付	皿	13.8	3.5	8.0	13.8		214

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第39図	6	SE108	井筒内		瓦	平瓦(棧瓦)					「宮」刻印	403
第42図	1	SX10	3・4層		肥前陶器	皿	13.2	3.4	4.4	13.2		85
第42図	2	SX10			肥前陶器	皿	16.8	3.0	—	16.8	絵唐津	105
第42図	3	SX10			肥前陶器	碗	11.2	7.4	5.0		S031 S036と接合	90
第42図	4	SX010			肥前陶器	碗	13.4	7.7	5.6	13.4	S054 1・2層(接合)	84
第42図	5	SX10			陶胎染付	香炉	12.8	4.5	—	12.8	S018 S044と接合	70・104
第42図	6	SX010			やきしめ陶器	擂鉢	30.8	7.2	—	30.8		89
第42図	7	SX010			京都系土師器	皿	13.8	2.3	—	13.8		95
第42図	8	SX010			土師器	皿	17.6	2.3	14.0	17.6	手づくね S054 1・2層(接合)	92
第42図	9	SX010			瓦	軒平瓦						349
第42図	10	SX010			瓦	軒平瓦						351
第42図	11	SX010			瓦	軒平瓦	横 15.6	縦 13.2	厚 5.0	厚 1.8		135
第42図	12	SX010			瓦	丸瓦	長 27.6	幅 13.4				446
第42図	13	SX010			瓦	面戸瓦	長 11.6					293
第42図	14	SX010			瓦	面戸瓦	長 11.2	幅 14.6			S008(接合)	291
第43図	15	SX010			瓦	面戸瓦	長 10.6					292
第43図	16	SX010			瓦	面戸瓦	長 11.4					295
第43図	17	SX010			瓦	面戸瓦	長 9.6					297
第43図	18	SX010			瓦	面戸瓦	長 12.0					298
第43図	19	SX010			瓦	面戸瓦	長 12.6					288
第43図	20	SX010			土師質土器	大甕	70	95	19.7			
第44図	1	SX010			肥前染付	皿	13.6	3.3	5.8	13.6		93
第44図	2	SX010			肥前染付	碗	—	—	—	—		96
第44図	3	SX010			土師質土器	焼塩壺	4.8	10.0	4.4	6.2		179
第44図	4	SX010			土師器	皿	14.8	2.1	—	14.8	手づくね	101
第44図	5	SX010			粘板岩	硯	長 13.5	幅 7.2	厚 1.4	—		131
第44図	6	SK052			肥前染付	皿	—	1.95	2.5	5.7		108
第47図	1	SK021			肥前染付	蓋	—	—	—	—		125
第47図	2	SK021			肥前染付	皿	14.0	2.0	—	14.0	S027(接合)	128
第47図	3	SK021			陶胎染付	碗	12.4	4.8	—	12.4		234
第47図	4	SK021			京信楽系陶器	碗	—	7.2	5.0	—		73
第47図	5	SK021			ペトナム?焼 締陶器	瓶?	—	—	—	—		113
第47図	6	SK021 SK024			陶器	鉢	12.8	5.0	6.4	13.0	瀬戸・美濃 黒釉	54
第47図	7	SK021 SK024			土師器	皿	13.0	2.45	8.0	13.0	糸切り	243
第47図	8	SK024			白磁	十角皿						80-2
第47図	9	SK024			染付	碗	7.3	3.1	—	7.3	S031 上層(接合)	100
第47図	10	SK024			陶器	鉢	12.8	5.1	6.0	13.0	S033、S005 下層検 出時・瀬戸・美濃 黒	244
第47図	11	SK024			京信楽系陶器	碗	—	1.8	6.0	—		142
第47図	12	SK024			肥前陶器	大皿	—	4.1	14.6	—	ハケ目唐津	136
第47図	13	SK024			土師器	皿	11.0	2.4	7.4	11.0	糸切り S039(接合)	238
第47図	14	SK024			土師器	皿	13.2	2.0	8.0	13.2	糸切り S027、S039(接合)	242
第47図	15	SK024			瓦	軒丸瓦			瓦当径 (14.4)			371
第47図	16	SK024			瓦	軒平瓦						336
第48図	1	SK026			陶器	鉢	—	—	—	—	福岡産?	107
第48図	2	SK026			土師器	皿	11.0	2.12	—	11.0	手づくね	110
第48図	3	SK026			陶器	鉢?	20.0	2.3	—	20.0		109
第48図	4	SK026			陶器	香炉	—	—	—	—	ハケ目	111
第48図	5	SK026			肥前陶器	大皿	44.0	12.7	12.6			219
第48図	6	SK026			瓦	軒平瓦					「府内城系列」	321
第48図	7	SK026			瓦	丸瓦		幅 15.6				440
第48図	8	SK026			瓦	丸瓦	長 28.9	幅 12.7				445
第49図	9	SK026			瓦	丸瓦	長 27.3					443
第49図	10	SK026			土師質土器	大甕	—	49.5	24.0	—		221
第51図	1	SK028			肥前染付	猪口	7.6	5.4	4.6	7.6	「富貴長春」銘	57
第51図	2	SK028			肥前染付	蓋物(蓋)	13.6	3.0	—	13.6		63
第51図	3	SK028			肥前染付	皿	10.4	2.4	—	10.4		61
第51図	4	SK028			肥前陶器	大皿	—	—	—	—	ハケ目	140

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第51図	5	SK028	下底		肥前陶器	大皿	(43.5)	15.2	16.0	-	ハケ目 S038(接合)	218
第51図	6	SK028	下底		肥前陶器	大皿	(43.6)	12.2	-	-	ハケ目 S038(接合)	216
第51図	7	SK028			土師質土器	焼塙壺 蓋	7.8	1.65	-	7.9		194
第51図	8	SK028			京都系土師器	皿	13.0	3.5	-	13.0	S005 東拡張カクラン (接合)	233
第51図	9	SK028			土師器	皿	12.0	2.4	7.2	12.0	糸切り	247
第51図	10	SK038			瓦片再加工品	不明	長 8.5	幅 4.7	厚 1.6			277
第51図	11	SK028			瓦	軒平瓦						308
第51図	12	SK028			瓦	軒丸瓦						364
第51図	13	SK028			瓦	軒丸瓦			瓦当径 (14.8)			367
第52図	14	SK028			瓦	丸瓦		幅 14.0	瓦当径 (15.0)			429
第52図	15	SK028			瓦	丸瓦						428
第52図	16	SK028			瓦	軒丸瓦(瓦当なし)	長 28.6	幅 14.0			S010(接合)	283
第52図	17	SK028			瓦	面戸瓦	長 9.8					301
第54図	1	SK031	上層	中国産 芙蓉手染付		鉢	-	-	-	-		123
第54図	2	SK031	暗灰色土	肥前白磁		碗	-	-	-	-		121
第54図	3	SK031	壁暗灰色土	肥前染付		碗	7.2	3.4	-	7.2		77
第54図	4	SK031	上層	肥前染付		碗	6.4	2.4	-	6.4		120
第54図	5	SK031	上層	青磁染付		猪口	8.2	4.9	4.7	8.2	S039(接合)口銹	71
第54図	6	SK031	灰色土・上層	肥前白磁		猪口	8.0	5.6	4.6	8.0	口銹	18
第54図	7	SK031	暗灰色土・上層	染付		猪口	7.4	5.6	4.5	7.4	コンニャク印判	240
第54図	8	SK031	暗灰色土	染付		碗	10.4	3.05	-	10.4		119
第54図	9	SK031	灰色土	染付		碗	11.0	3.9	-	11.0		256
第54図	10	SK031	暗灰色土	染付		碗	10.0	4.3	-	10.0		264
第54図	11	SK031	壁暗灰色土	陶胎染付		碗	12.0	4.7	-	12.0		75
第54図	12	SK031	暗灰色土	陶胎染付		碗	11.4	7.5	-	11.4		90
第54図	13	SK031	暗灰色土	肥前陶器		碗	-	3.1	4.6	9.4		157
第54図	14	SK031	東カクラン・上層 暗灰色土	肥前陶器		碗	10.4	6.4	4.4	10.4	ハケ目	52
第54図	15	SK031	暗灰色土	京信樂系陶器		碗	11.0	5.1	-	11.0	色絵	258
第54図	16	S039	5cm下げ	陶胎染付		碗	-	2.9	4.8	-		69
第54図	17	SK031	上層・暗灰色土	肥前白磁		皿	14.0	4.4	7.4	14.0	S027、S039 5cm下 げ、S045(接合)	79
第54図	18	SK031	暗灰色土下底	色絵青磁		蓋	16.2	3.8	-	16.2		86
第54図	19	SK031	東カクラン・壁暗灰色 土	肥前陶器		鉢	16.8	4.7	-	16.8	ハケ目 S029(接合)	55
第54図	20	SK031	壁暗灰色土	焼締陶器		擂鉢	-	-	-	-	産地不明	143
第54図	21	SK031	上層	肥前陶器		擂鉢	30.0	9.5	-	30.0		133
第54図	22	SK031	暗灰色土	肥前陶器		大皿	38.0	9.3	13.0	-	ハケ目 S005 下層検出時、 S045(接合)	134
第54図	23	SK031		土師質土器		焼塙壺 蓋	7.7	1.8	-	7.7		201
第54図	24	SK031	上層	土師質土器		焼塙壺 蓋	7.5	1.65	-	7.5		192
第54図	25	SK031	暗灰色土下底	土師質土器		焼塙壺	6.4	10.0	5.0	7.8		174
第54図	26	SK031	暗灰色土	土師質土器		焼塙壺	5.8	6.5	-	6.6		188
第54図	27	SK031		京都系土師器		皿	11.2	1.7	-	11.2		102
第54図	28	S031		京都系土師器		皿	11.6	2.7	-	11.6	S005 5cm下げ時(接)	232
第55図	29	SK031	上層	土師器		皿	9.2	1.3	6.0	9.2	糸切り	246
第55図	30	SK031	暗灰色土	土師器		皿	14.0	2.3	6.5	14.0	糸切り	241
第55図	31	SK031	暗灰色土	土師器		皿	11.4	2.6	6.7	11.4	糸切り S005 S029(接合)	237
第55図	32	SK031	暗灰色土・上層	土師器		皿	11.6	2.7	6.8	11.6	糸切り	254
第55図	33	SK031	上層	土師器		皿	11.6	2.6	7.0	11.8	糸切り	248
第55図	34	SK031	暗灰色土	土師器		皿	11.2	2.9	6.0	11.2	糸切り	252
第55図	35	SK031	壁暗灰色土	土師器		皿	12.0	2.0	6.4	12.0	糸切り	261
第55図	36	SK031		土師質土器		壺	12.4	4.2	-	14.0		266
第55図	37	SK031		瓦		面戸瓦	長 9.6				S037 ハンサイ(接合)	285
第55図	38	SK031		瓦		丸瓦			瓦当径 (14.4)			432
第55図	39	SK031		瓦		軒丸瓦		幅 12.3				381
第56図	1	SK045		肥前染付		碗	10.4	5.8	4.0	10.4		19
第56図	2	SK045		肥前染付		碗	11.0	4.1	-	11.0		23
第56図	3	SK045		陶胎染付		香炉	12.0	6.2	-	6.0		65
第56図	4	SK045		肥前染付		碗	10.4	5.9	4.0	10.4	くらわんか碗	78
第56図	5	SK045		色絵青磁		蓋物	15.4	5.6	-	15.4	S038 検出、E-4・5(接合)	87
第56図	6	SK045		備前焼		鉢	13.4	7.7	13.4	13.4	S031 上層(接合)	129

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第56図	7	SK045			土師器	皿	9.4	1.7	6.0	9.4	糸切り	227
第56図	8	SK045			土師器	皿	9.2	2.0	4.6	9.2	糸切り	226
第56図	9	SK045			土師器	皿	13.0	2.6	6.8	13.0	糸切り	224
第56図	10	SK045			京信楽系陶器	水注	-	-	-	-	S031、S036(接合)	94
第56図	11	SK045			焼締陶器	鉢	13.8	4.0	-	14.6		99
第56図	12	SK029			瓦	面戸瓦	長 10.0					299
第59図	1	SK036			肥前染付	猪口	8.0	3.2	-	8.0		267
第59図	2	SK036			陶胎染付	碗	11.0	7.8	5.0	11.0		53
第59図	3	SK036			肥前陶器	大皿	32.0	4.1	-	32.0	ハケ目	138
第59図	4	SK036			土師器	皿	12.4	1.9	7.6	12.4	糸切り	260
第59図	5	SK036	検出時		土師質土器	焼塙壺 蓋	7.1	1.6	-	7.1		204
第59図	6	SK036			瓦	丸瓦		幅 13.0	瓦当径 (14.8)			437
第59図	7	SK036			瓦	軒丸瓦		幅 12.6	瓦当径 (14.4)			427
第59図	8	SK036			瓦	軒丸瓦			瓦当径 (15.0)			377
第59図	9	SK036			瓦	軒丸瓦						380
第59図	10	SK036			瓦	軒平瓦						339
第59図	11	SK036			瓦	軒平瓦						340
第59図	12	SK036			瓦	丸瓦	長 26.4	幅 12.4				447
第60図	1	SK037	1層		肥前染付	皿	8.2	2.65	3.4	8.2		114
第60図	2	SK037	5cm下げる		肥前染付	碗	-	4.0	-	-		62
第60図	3	SK037	1層		肥前染付	皿	13.0	1.6	-	13.0		116
第60図	4	SK037	半裁		肥前染付	碗	9.0	4.8	3.8	9.0		60
第60図	5	SK037	1層		肥前染付	碗	9.6	3.1	-	9.6	S036(接合)	58
第60図	6	SK037	下層		肥前白磁	十角皿	12.0	3.2	6.2	12.0	S024(接合)	80
第60図	7	SK037			肥前陶器	皿	-	2.5	4.8	-	絵唐津	137
第60図	8	SK037	下層		陶器	瓶	-	-	-	-		250
第60図	9	SK037	1層・下層・5cm下げる		肥前陶器	鉢	16.8	6.1	7.0	16.8	ハケ目 S039(接合)	51
第60図	10	SK037	1層・下層		肥前陶器	鉢	24.0	7.9	7.6	24.0	ハケ目 S005 下層、S031 灰色土(接合)	81
第60図	11	SK037	1層・下層・半裁		肥前陶器	大皿	32.4	6.6	-	32.4	ハケ目 S033(接合)	132
第60図	12	SK037	半裁		陶器	擂鉢	36.0	7.6	-	36.0		130
第60図	13	SK037	1層・半裁		陶器	擂鉢	36.0	13.1	13.0	36.0		220
第60図	14	SK037	1層		土師質土器	焼塙壺 蓋	7.8	1.6	-	-		177
第60図	15	SK037			土師器	皿	9.8	1.5	-	9.8	糸切り	225
第60図	16	SK037	下層・半裁		土師器	皿	13.6	2.2	-	13.6		265
第60図	17	SK037	半裁		土師器	皿	12.2	2.0	8.0	12.2	糸切り	223
第60図	18	SK037	下層		土師器	皿	-	2.0	8.8	-	糸切り	228
第60図	19	SK037	1層		瓦	軒平瓦						333
第60図	20	SK037	下層		瓦	軒平瓦						346
第61図	21	SK037	半裁		瓦	丸瓦	長 26.4	幅 13.4	瓦当径 (14.0)			436
第61図	22	SK037	半裁		瓦	丸瓦		幅 12.4	瓦当径 (13.0)			438
第61図	23	SK037	半裁		瓦	軒丸瓦						389
第61図	24	SK037			瓦	軒丸瓦						379
第61図	25	SK037	半裁		瓦	軒丸瓦			瓦当径 (14.0)			363
第61図	26	SK037	1層		瓦	丸瓦		幅 12.4	瓦当径 (13.8)			433
第61図	27	SK037	半裁		瓦	軒丸瓦	長 30.0	幅 13.4	瓦当径 (14.0)			434
第61図	28	SK037	下層・半裁		瓦	丸瓦		幅 12.4				435
第63図	1	SK039			青花	碗	-	-	-	-	C群	118
第63図	2	SK039	5cm下げる		肥前染付	皿	14.0	3.2	8.4	3.3		67
第63図	3	SK039			肥前陶器	碗	10.0	5.5	-	10.0	ハケ目	29
第63図	4	SK039			肥前陶器	大皿	40.0	-	-	40.0	ハケ目	141
第63図	5	SK039	5cm下げる		陶器	擂鉢	-	-	-	-		106
第63図	6	SK039			土師器	皿	15.0	2.05	5.5	15.0	糸切り	253
第63図	7	SK039	5cm下げる		土師器	皿	11.0	1.85	6.5	11.0	糸切り	249
第63図	8	SK039			土師質土器	火鉢	-	-	-	-		46
第63図	9	SK039			瓦	軒平瓦						332
第63図	10	SK039			貞岩	砥石	横 3.8	縦 4.5	厚 0.9			39
第67図	1	SK019			土師質土器	焼塙壺	6.4	7.9	5.5	6.2		181
第67図	2	SK019			土師質土器	焼塙壺	7.2	1.5	-	7.2		190
第67図	3	SK019			土師質土器	焜炉	24.6	6.2	22.0	25.0		47
第67図	4	SK020			肥前陶器	壺	26.0	11.9	-	31.5	S043、S005 5cm下げる・5層、S036、S030	245
第67図	5	SK022			肥前染付	猪口	7.4	5.3	4.2	7.4		68

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第67図	6	SK022			肥前陶器	擂鉢	-	-	-	-		127
第67図	7	SK022			土師質土器	焼塙壺 蓋	7.6	1.55	-	7.7		191
第67図	8	SK022			肥前陶器	大皿	-	8.5	13.0	-	ハケ目 S005 5cm下げ時	217
第70図	1	SK025			肥前染付	碗	10.8	4.5	-	10.8	S044(接合)	98
第70図	2	SK025			肥前染付	碗	10.0	3.3	-	10.0		76
第70図	3	SK025			肥前染付	碗	-	5.6	4.4	10.4	S046(接合)	239
第70図	4	SK025			肥前染付	碗	5.4	2.9	2.6	5.4		124
第70図	5	SK025 SK044			陶胎染付	碗	10.8	7.0	5.4	10.9	S044(接合)	83
第70図	6	SK025			肥前染付	鉢	-	3.5	16.6	-	S046、S031 上層(接合)	82
第70図	7	SK025			土師器	皿	11.0	2.1	6.0	11.0	糸切り S044(接合)	236
第70図	8	SK025			瓦	軒丸瓦			瓦当径 (13.87)			393
第70図	9	SK025			瓦	軒丸瓦						392
第70図	10	SK025			瓦	軒平瓦						328
第70図	11	SK025			瓦	軒平瓦						342
第74図	1	SK030			肥前染付	碗	8.0	3.0	6.6	8.0		115
第74図	2	SK030			色絵磁器	碗	9.8	4.3	-	9.8		59
第74図	3	SK030			肥前染付	皿	10.4	3.0	5.1	10.4		64
第74図	4	SK030			肥前磁器	水注	-	-	-	-		126
第74図	5	SK030			肥前陶器	碗	10.2	7.1	4.8	10.2	ハケ目 S044(接合)	50
第74図	6	SK030			土師質土器	焼塙壺	6.5	9.8	5.8	9.0		180
第74図	7	SK030			土師質土器	焼塙壺 蓋	8.5	2.1	-	8.5	S005 下層(接合)	199
第74図	8	SK041			肥前染付	皿	10.4	1.8	6.0	10.4		112
第74図	9	SK044			肥前染付	碗	10.8	4.5		10.8		97
第74図	10	SK044			肥前染付	碗	12.0	3.2	-	12.0		268
第74図	11	SK044			土師質土器	焼塙壺	6.4	9.6	5.4	7.8		176
第74図	12	SK044			土師質土器	焼塙壺蓋	1.9	4.2	-	4.2		186
第75図	1	SK038			肥前陶器	碗	11.2	8.1	5.0	11.2	御器手	72
第75図	2	SK038			陶胎染付	蓋物	-	6.3	5.0	10.8		88
第75図	3	SK038			染付	猪口	-	2.7	5.7	6.2		56
第75図	4	SK038			土師質土器	焙烙	-	4.1	-	-		259
第75図	5	SK038			瓦再加工品	不明	横 6.6	縦 3.1-3.9	厚 1.85			41
第75図	6	SK038			頁岩	砥石	横 5.6	縦 5.5	厚 2.0			42
第76図	1	S012 S005	検出時		土師質土器	焼塙壺	5.3	7.7	5.4	6.4		184
第76図	2	S018			土師質土器	焼塙壺	6.5	8.2	5.0	6.5		182
第76図	3	S013			土製品	土人形	-	6.4	-	-		139
第76図	4	S016 SK044			土師質土器	焼塙壺 蓋	7.6	2.0	-	7.7		196
第76図	5	S046			頁岩	硯	長 10.8	幅 4.9	厚 1.8			74
第76図	6	SV110	検出時F-7		瓦	軒平瓦						315
第76図	7	F-3-4	カクラン		陶器	碗	13.4	5.2	10.0	13.4	民平焼	32
第76図	8	S003			肥前染付	皿	12.0	1.4	-	12.0		6
第76図	9	S003			肥前染付	碗	7.2	5.1	3.1	7.2		17
第76図	10	S003			肥前陶器	碗	12.0	3.8	-	12.0		15
第76図	11	S003			肥前陶器	大皿	16.6	3.2	8.0	16.6	砂目積み	11
第76図	12	S003			頁岩	硯	長 6.3	幅 7.1	厚 2.4		線刻有り	12
第76図	13	S003			瓦	棟瓦						400
第76図	14	S008	検出時		土師質土器	焼塙壺	6.6	5.9	-	6.6		187
第77図	1	S005	検出時		土師質土器	焼塙壺 蓋	7.9	1.2	-	8.0		195
第77図	2	S005			土師質土器	焼塙壺 蓋	7.8	1.9	-	8.4		200
第77図	3	S005	5cm下げ時		土師質土器	焼塙壺 蓋	8.6	1.9	-	8.6		198
第77図	4	S005			土師質土器	焼塙壺 蓋	8.1	1.8	-	8.1		197
第77図	5	S005	検出時		土師質土器	焼塙壺 蓋	7.9	1.7	-	7.9		193
第77図	6	S005	検出		瓦	鬼瓦						278
第77図	7	S005			瓦	さん瓦						402
第77図	8	S005			瓦	さん瓦						394
第77図	9	S005			瓦	さん瓦						399
第77図	10	S005			瓦	軒平瓦						312
第77図	11	S005			瓦	軒平瓦						307
第77図	12	S005	検出時		瓦	軒平瓦						320
第77図	13	S005	検出時		瓦	軒平瓦						324
第77図	14	S005	5cm下げ時		瓦	軒平瓦						323
第84図	1	SV104	西ウラゴメ		土師器	皿					京都系?	490
第84図	2	SV104	F-4 石組検出		備前焼	壺						502
第84図	3	SV104	F-3 西ウラゴメ		備前焼	擂鉢						494
第84図	4	SV104	ウラゴメ8層		備前焼	擂鉢	31.4	6.5	-	31.4		166
第84図	5	SV104	西ウラゴメF-3		備前焼	擂鉢	-	5.4	-	-		169

図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第84図	6	SV104	ウラゴメ3層		備前焼	擂鉢	-	4.5	-	-		213
第84図	7	SV104	ウラゴメ4.5層		備前焼	擂鉢	-	3.0	13.0	-		149
第84図	8	SV104	ウラゴメ4.5層		備前焼	甕					内・外面ナデ	498
第84図	9	SV104	ウラゴメ4.5層		備前焼	甕	-	-	-	-		154
第84図	10	SV104	ウラゴメ東半1-3層		備前焼	大甕					内・外面ナデ	499
第84図	11	SV104	ウラゴメ4・5層		備前焼	大甕						507
第84図	12	SV104	ウラゴメ4.5層		備前焼	甕	-	-	-	-		165
第84図	13	SV104	F-4・5 ウラゴメ		備前焼	大甕						500
第84図	14	SV104	F-4 石組検出		備前焼	甕						503
第84図	15	SV104	F-3 西ウラゴメ		備前焼	甕						505
第84図	16	SV104	南整地層		備前焼	甕	-	7.5	-	-		170
第84図	17	SV104	ウラゴメ4.5層		備前焼	甕	-	6.2	-	-		171
第84図	18	SV104	ウラゴメ6・8		備前焼	大甕						506
第84図	19	SV104	ウラゴメ4・5層		備前焼	甕?					内面ハケ状工具ナデ	504
第84図	20	SV104	F-3 西ウラゴメ		備前焼	大甕					内・外面ナデ	501
第84図	21	SV104	ウラゴメ		備前焼	甕	-	7.5	-	-		172
第84図	22	SV104	ウラゴメ東半1-3層	土師質土器		甕	-	3.8	-	-		215
第84図	23	SV104	ウラゴメ・4・5下層	白磁	碗							489
第84図	24	SV104	ウラゴメ?1-3層	白磁	碗	-	1.9	6.8	7.6			160
第84図	25	SV104	ウラゴメ黄褐色砂	瓦器	碗						内・外面ナデ	491
第84図	26	SV104	ウラゴメ黄褐色砂	瓦器	碗			(5.0)			内面ナデ 外面ナデ・指才サエ	492
第84図	27	SV104	ウラゴメ6-8層	瓦器	椀	-	2.0	6.0	9.4			210
第84図	28	SV104	ウラゴメ6~8層	土師器	壺	6.2	1.4	-	-		糸切り	156
第84図	29	SV104	ウラゴメ東半1-3層	瓦質土器	甕	-	5.8	-	-			173
第84図	30	SV104	ウラゴメ6~8層	陶器	鉢			(9.0)			東播系?	496
第84図	31	SV104	ウラゴメ4~5層	瓦質土器	甕						内面ハケメ	497
第84図	32	SV104	ウラゴメ4・5層	瓦質土器	甕						龜山系? 内面剥落 外面格子目	493
第84図	33	SV104	ウラゴメ黄褐色砂	土師質土器	鍋	-	-	-	-			158
第84図	34	SV104	ウラゴメ 6~8層	瓦	丸瓦							412
第85図	35	SV104	ウラゴメ東半1~3	瓦	丸瓦							413
第85図	36	SV104	西ウラゴメ	瓦	丸瓦							411
第85図	37	SV104	ウラゴメ3層	瓦	丸瓦							424
第85図	38	SV104	ウラゴメ6~8層	瓦	丸瓦							410
第85図	39	SV104	ウラゴメ4・5層	瓦	丸瓦							415
第85図	40	SV104	ウラゴメ4層~5層	瓦	平瓦							405
第85図	41	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼、上臼	長 (22.3)	幅 (24.8)	厚 16.3				451
第85図	42	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼	長 (18.8)	幅 (13.2)	厚 9.4				450
第85図	43	SV104	ウラゴメ下層	石製品	石臼、上臼	長 (26.3)	幅 (19.0)	厚 12.7				465
第86図	44	SV104	ウラゴメ3層	石製品	粉挽臼、上臼	長 (29.5)	幅 (20.1)	厚 10.7				461
第86図	45	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼、下臼	長 (29.1)	幅 (24.4)	厚 13.6				462
第86図	46	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼	長 (21.1)	幅 (21.8)	厚 11.3				454
第86図	47	SV104	ウラゴメ6-8層	石製品	石臼、上臼	長 (25.9)	幅 (21.3)	厚 (8.9)				466
第86図	48	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼、上臼?白臼?	長 (27.3)	幅 (18.7)	厚 15.1				453
第86図	49	SV104	ウラゴメ	石製品	上臼	長 (21.7)	幅 (12.2)	厚 (10.1)				459
第86図	50	SV104	ウラゴメ	石製品	石臼、下臼?	長 (25.2)	幅 (17.9)	厚 10.2				455
第87図	1	SV104	南整地層G-5	青花	皿	9.0	1.5	-	9.0	青花		270
第87図	2	SV104	南整地層G-5	備前焼	擂鉢	23.4	4.6	-	23.4			271
第87図	3	F-5 G-5	整地層下層	褐釉陶器	壺	22.0	4.0	-	27.0	中国産		005
第87図	4	SV104	南整地層	備前焼	鉢	22.0	3.0	-	22.0			009
第87図	5	SV104	南整地層	備前焼	擂鉢							488
第87図	6	SV104	南整地層	備前焼	擂鉢	-	4.6	-	-			272
第87図	7	SV104	南整地層	備前焼	大甕					内・外面ナデ		484
第87図	8	SV104	南整地層	備前焼	甕							486
第87図	9	SV104	南整地層	備前焼	甕					内・外面ナデ		487
第87図	10	SV104	南整地層G-5	備前焼	壺	-	8.0	-	-	タイ産?		269
第87図	11	SV104	南整地層	備前焼	鉢	38.0	5.2	-	38.0			209
第87図	12	SV104	南整地層	備前焼	大甕	-	-	-	-			49
第87図	13	SV104	南整地層	備前焼	甕					内・外面ナデ		485
第87図	14	SV104	南整地層	瓦	軒平瓦							305
第87図	15	SV104	南整地層	瓦	軒平瓦							483
第87図	16	SV104	南整地層	瓦	平瓦							482
第87図	17	F-5 G-5	南整地層	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-			008

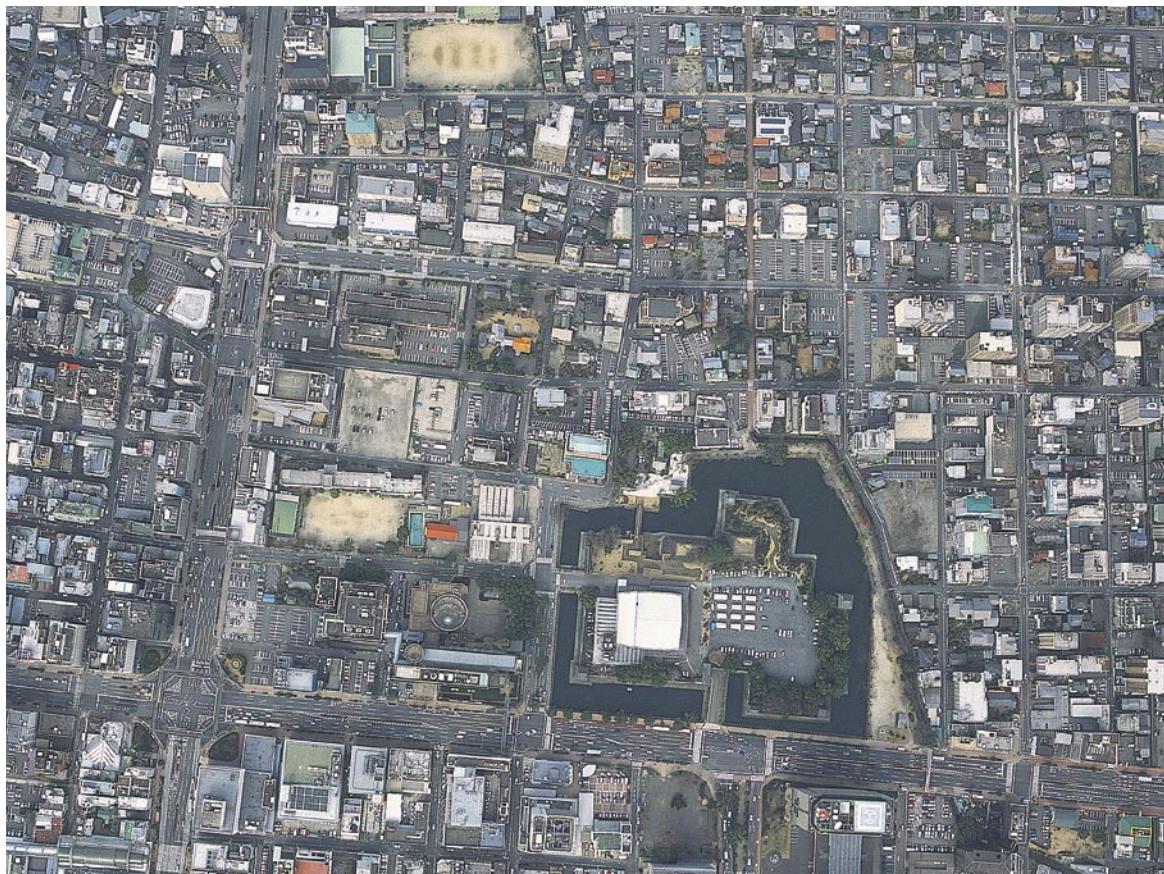
図版番号	掲載番号	遺構名	グリッド	土層	種別	器種	法量				備考	実測番号
							口径	器高	底径	最大径		
第87図	18	SV104	南整地層		石製品	砥石	長 4.8	幅 5.4	厚 2.3			481
第90図	1	SV111	ウラゴメ		石製品	五輪塔、火輪	長 32.9	幅 34.1	厚 17.7			448
第94図	1	SV110	ウラゴメ土		白磁	皿	-	-	-	-	中国産	164
第94図	2	SV110	北側整地土		白磁	碗					碗IV類	480
第94図	3	SV110	検出時		土師器	壺	(11.9)	2.05			内面指才サエ後ナデ 外面ヨコナデ・指才サ	512
第94図	4	SV110	検出		白磁	皿			(6.2)		口ハゲ皿?	510
第94図	5	SV110	検出時		土師器	壺					底部糸切? 内・外面ナデ	511
第94図	6	SV110	ウラゴメ土		備前焼	擂鉢	-	-	-	-	備前	153
第94図	7	SV110	検出時		備前焼	擂鉢						515
第94図	8	SV110	ウラゴメ		備前焼	擂鉢	-	-	-	-		159
第94図	9	SV110	ウラゴメ土		備前焼	擂鉢	-	3.6	-	-		155
第94図	10	SV104	ウラゴメ東半1-3層		備前焼	甕	-	5.8	-	-		168
第94図	11	SV110	検出時		備前焼	甕						516
第94図	12	SV110	ウラゴメ土		備前焼	壺	-	7.6	13.0	-		150
第94図	13	SV110	ウラゴメ土		弥生土器	甕					内・外面ナデ	513
第94図	14	SV110	ウラゴメ		瓦	平瓦						409
第94図	15	SV110	ウラゴメ		瓦	丸瓦						421
第94図	16	SV110	検出時		瓦	丸瓦						419
第94図	17	SV110	検出時		瓦	丸瓦						420
第94図	18	SV110	検出時		瓦	平瓦						514
第94図	19	SV110	ウラゴメ土		瓦	丸瓦						425
第94図	20	SV110	北側整地土		瓦	丸瓦						416
第94図	21	SV110	検出時		瓦	丸瓦						418
第94図	22	SV110	ウラゴメ		石製品	五輪塔、火輪	長 35.0	幅 33.0	厚 19.9			452
第97図	1	SV112	ウラゴメ		瓦器	碗					内面ミガキ 外面指才サエ・ナデ	517
第97図	2	SV112	ウラゴメ		備前焼	甕						519
第97図	3	SV112	検出時		備前焼	擂鉢						518
第97図	4	SV112	検出時		備前焼	擂鉢	-	6.3	-	-		167
第97図	5	SV112	ウラゴメ		備前焼	甕						520
第97図	6	SV112	ウラゴメ		石製品	石臼、上臼	長 (24.8)	幅 (20.4)	厚 10.3			464
第99図	1	SV113	検出時		焼締陶器	甕	-	3.3	-	-	常滑焼	16
第99図	2	SV113	埋土層		瓦	軒平瓦						344
第99図	3	SV113	検出時		瓦	丸瓦						423
第99図	4	SV113	検出時		瓦	丸瓦						407
第105図	1	SV104	北整地砂下層		陶器	鉢					東播系	477
第105図	2	SV104	北整地砂下層		白磁	皿						479
第105図	3	SV104	北整地砂下層		瓦器	碗					内・外面ナデ	478
第105図	4	SV104	北整地砂下層		土師器	甕					内・外面ナデ	476
第105図	5	E-4	整地砂		褐釉陶器	壺	-	-	-	-	中国産	235
第105図	6	SV104	北D-3 E-3整地砂		土師質	甕	40.0	5.0	-	40.0		212
第105図	7	SV104	D-4、E-4		石製品	石臼	長 (19.4)	幅 (16.0)	厚 10.4			457

写 真 図 版

※遺物写真キャプションの表記…本文中の第24図5ならば24-5と表記

図版中の番号を特定しない場合は図番号のみ（例：24）表記する

写真図版 1 調査区空中写真



府内城・城下町跡全景空中写真（撮影：2006年2月18日）



第16次調査区全景空中写真（撮影：2006年2月18日）

写真図版 2



堀 SD100 および石垣 SV101(北から)



SD100 および SV101,SV104,SV105(北西から)

写真図版 3



SV101 全景(南西から)



SV101 北端部(西から)



SV101 南端部(北西から)



SV101 築石解体状況(撮影:2006年2月24日)



SV101 築石1段目撤去後

写真図版 4



SV104-SV101 東西断面 (第 21 図に対応)



SD100 掘下げ状況



SD100 漆器蓋 (25-64) 出土状況



SD100 漆器椀 (25-66) 出土状況



SD100 漆器椀 (25-68) 出土状況



SD100 漆器椀 (25-69) 出土状況



SD100 肥前陶器 (22-6) 出土状況



SD100 焼塙壺 (22-20) 出土状況



SD100 鬼瓦 (23-42) 出土状況



SD100 下駄 (25-74) 出土状況



SD100 曲物 (25-73) 出土状況



SD100 独楽 (25-71) 出土状況



SD100 アワビ出土状況



SD100 イノシシ頭骨出土状況

写真図版 5



SV102(北から)



SV102 上面 (西から)



SV109(左)とSV102 基底部(右)



SV102(左) と SV109(右)(西上方から)



SF001(北から)



調査区南東隅整地検出状況(北から)



調査区南東隅整地 (S014) 掘下げ状況



SE108(東から)

写真図版 6



SX010 検出状況(南から)



SX010 蓋内完堀状況(北から)



SX010 下層遺物出土状況(南から)



SX010 下層遺物出土状況近景(西から)



SX010 下層硯出土状況(南西から)



SX010 完掘状況(南から)



SK054 完掘状況(東から)



SK021 遺物出土状況(南西から)

写真図版 7



SK024 遺物出土状況(南から)



SK026 遺物出土状況(南から)



SK028 遺物出土状況(北から)



廃棄土坑群掘下げ状況(東から)



SK031 検出状況(東から)



SK031 土層断面(北から)



SK031 遺物出土状況(東から)



SK031 完掘状況(東から)

写真図版 8



SK036 土層断面 (東から)



SK036 完掘状況 (北から)



SK037 土層断面 (東から)



SK037 遺物出土状況 (北から)



SK037 完掘状況 (西から)



SK045 完掘状況 (東から)



SK039 完掘状況 (南から)



SK039 土層断面 (西から)

写真図版 9



SK019 周辺遺構検出状況 (北から)



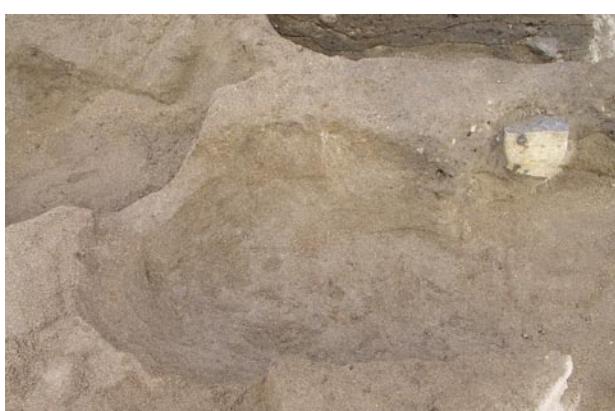
SK022 完掘状況 (南東から)



SK025 内石出土状況 (東から)



SK052 完掘状況 (東から)



SK044 完掘状況 (西から)



SK044 焼塙壺出土状況



廃棄土坑群完掘状況 (南から)



基礎解体工事中に検出された SV101 築石北端部 (西から)

写真図版 10



SV104(北から)



SV104 検出前 (北西から)



SV104 検出作業中 (北西から)



SV104 北整地層の掘下げ (北西から)



SV104 検出状況 (北西から)

写真図版 11



SV104 3段目解体後(北から)



SV104 1段目(北から)



SV104 土層断面(第78図:西から)



SV104 南整地土層断面(第78図:北から)



SV104 近景(北東から)

写真図版 12



SV110(上), SV111(下) 空中写真(上が南)



SV111(北から)

写真図版 13



SV111 検出作業 (南西から)



SV111 検出作業 (北東から)



SV111 築石崩落状況 (北から)



SV111 検出状況 (北から)



SV111 断面 (第 88 図 : 西から)

写真図版 14



SV110(北西から)



SV110(西から)



SV110 検出作業 (西から)



SV110 東側壁面土層 (第 35 図・第 91 図 : 西から)

写真図版 15



SV112 近景(北西から)



SV112 と SV113(東から)



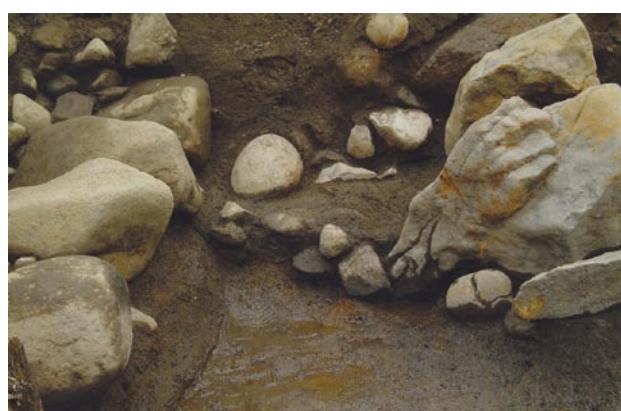
SV104 南整地の機械掘削(北東から)



SV112 検出状況(北東から)



SV113(北東から)



SV113-SV109 間の土層(第31図: 東から)

写真図版 16



SV105・107 検出状況(北から)



SV105(東から)



SV107 検出状況(東から)



SV107 完掘状況(北から)



SV107 完掘状況(東から)

写真図版 17 出土遺物写真 1



SD100 出土青磁皿 22-2



SD100 出土肥前陶器 22-5 ~ 11



SD100 出土志野 22-4



SD100 出土志野 22-4



SD100 出土染付鉢 22-12



焼継痕 22-12



SD100 出土焼塩壺 22-19・20



SD100 出土鬼瓦 23-41・42

写真図版 18 出土遺物写真 2



SD100 出土漆器皿 25-58



SD100 出土漆器皿 25-59



SD100 出土漆器皿 25-60



SD100 出土漆器皿 25-61



SD100 出土漆器蓋 25-64



25-64 内面



SD100 出土漆器蓋 25-62



SD100 出土漆器椀 25-65

写真図版 19 出土遺物写真 3



SD100 出土漆器椀 25-66



SD100 出土漆器椀 25-67



SD100 出土漆器椀 25-68



SD100 出土漆器椀 25-69



SD100 出土漆器椀 25-70



SD100 出土木製品 25-72・71



SD100 出土曲物 25-73

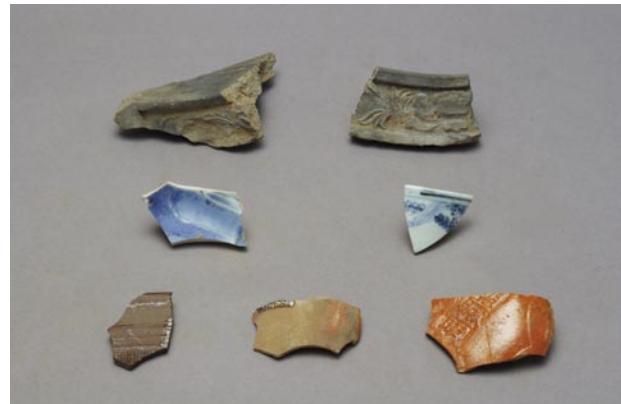


SD100 出土下駄 25-74

写真図版 20 出土遺物写真 4



SV101 出土石塔 28-14



SV102 出土遺物 30



SV102 出土胡麻煎 30-4・5



S004 出土石塔 36-8



S014 出土鰐瓦 37-6



S014 出土軒平瓦 37-8



S014 出土 37-7



SE108 出土遺物 39

写真図版 21 出土遺物写真 5



SX010 出土遺物 42



SX010 出土土師質大甕 43-20



SX010 下層・SX052 出土遺物 44



SK021 出土遺物 47-1 ~ 7



SK024 出土遺物 47-8 ~ 16



SK026 出土陶磁器 48-1 ~ 4



SK026 出土肥前陶器鉢 48-5



SK026 出土土師質大甕 49-10

写真図版 22 出土遺物写真 6



SK028 出土遺物 51-1 ~ 4,7 ~ 10



SK028 出土肥前陶器鉢 51-5・6



SK031 出土磁器 54



SK031 出土地絵青磁蓋 54-18



SK031 出土陶器 54



SK031 出土焼塙壺・土師器 54-23 ~ 28



SK031 出土土師器皿 55-29 ~ 35



SK045・SK029 出土遺物 56

写真図版 23 出土遺物写真 7



SK036 出土遺物 59



SK037 出土遺物 1 60



SK037 出土遺物 2 60



SK037 出土陶器擂鉢 52-13



SK039 出土遺物 63



SK019・SK020 出土遺物 67



SK019 出土土質焜爐 67-3



SK025 出土遺物 70

写真図版 24 出土遺物写真 8



SK030 出土遺物 74-1 ~ 7



SK044 出土遺物 74-9 ~ 12



SK038 出土遺物 75



S012・013・016 出土焼塙壺 76



S013 出土土人形 外面・内面 76-3



近代カクラン出土珉平焼 76-7



SV104 南整地層出土中国産陶器壺 87-3



SV104 北整地層出土中国産陶器壺 105-5

報告書抄録

ふりがな	ふないじょうじょうかまちあと
書名	府内城・城下町跡5
副書名	第16次調査報告 大分市保健所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第78集
編著者名	高畠 豊
編集機関	大分市教育委員会
所在地	大分市荷揚町2番31号
発行年月日	西暦2008年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
ふないじょうじょうかまちあと	おおいたにあげまち		44201	322041	33 14 27	131 36 35	050801～ 060311	649
府内城・城下町跡	大分市荷揚町							大分市保健所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町跡	城郭	近世	石垣 堀 土坑 井戸跡	瓦・陶磁器 木製品・漆器 陶磁器・焼塙壺	絵図に記録された17世紀前半期よりも遡る、府内城築城時と推定される石垣を発見。また、その後石垣が改築される変遷過程をたどることができた。

要約

府内城北丸に比定された地点の発掘調査を実施した。調査の結果、現地比定とほぼ一致する位置で北丸西辺の石垣及び堀が検出された。また、北丸内部においては18世紀を中心とする廃棄土坑群や井戸跡等が検出され、井戸跡については幕末の藩校「遊焉館」の絵図に描かれたものである可能性が考えられる。さらに、北丸内部の遺構群が掘り込まれた基盤の土層よりも下層において、絵図に描かれる以前、17世紀初頭にまで遡る可能性のある石垣および関連遺構が検出された。これらの石垣は短期間で次々と築かれたと考えられ、次第に北丸が拡張されて独立した曲輪になっていく過程を追うことができる。これによって、築城直後の府内城は絵図の段階とはかなり異なるプランであったこと、短期間で大きく作り替えられた可能性が高いことが判明した。

